
スワジク姫物語 善意の行方

トマトサンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スワジク姫物語 善意の行方

【Nコード】

N1323P

【作者名】

トマトサンド

【あらすじ】

とある王国のお姫様に、何故か突然現代っ子の「僕」が憑依してしまいました。

「あのー、外の人の立ち位置が分からないんですけど？」

右も左も分からぬ王宮^{せかい}で、なし崩し的にお姫様を演じる「僕」に襲い掛かる数々の試練。「僕」の味方はシスコン兄様とガチ百合変態しかないの？

でも「僕」は知らなかった。外の人が抱えていた「大問題」を。

ゆっくりと醸成される悪意。善意によって作られた陥穽。それはじ

わじわと、しかし確実に『僕』の周りの『幸せ』を侵食していったんだ。

笑いあり、ほろりありのファンタジーコメディ、お代は読んでからのお帰りで

1話「ここは何処？ ボクは誰？」（前書き）

> i 1 9 1 9 7 | 2 3 8 6 <

1話「ここは何処？ ボクは誰？」

真つ暗な闇の中、ふわふわと漂う自分の意識。

まるで光の届かない深海にいるようだ。

何も感じる事が出来ず、何にも聞こえない。

手や足を動かしてみるけど何にも手ごたえが無く、むしろ手足があるのかさえ疑わしかった。

声を出そうとしても、もちろん出ていかどうか分からない。

なのに自分がここに在るのだけは、しっかりと自覚できた。

いったいどれくらい闇の中を漂っていたらろう？

闇の中に何か違和感を覚えたので周囲を探ってみると、うっすらとした細い線の様な光とそこから零れ落ちてくる微かな音に気がついた。

なんだろう？

そう思って光へと近づこうと僕は手と足を必死に動かした。

もちろん何の感触も実感も感じないけれども。

それが功を奏したのか、じわりじわりと意識が光に向かって近づいてゆく。

少しずつ大きくなる胸の鼓動。

だけでも光に近づくにしたがって、自分の体が冷たくなっていくのが分かる。

あと息苦しい。

聞こえていた音もだんだんと騒音に近いレベルになってきて、正直頭の中でぐわんぐわんと木霊している。

うえ、吐きそう。

さらに意識が浮上する。

僕は、さっきから聞こえていた音が誰かの叫び声だという事にようやく気がついた。

「早くタオルと着替えをもつてこい！濡れたままじゃ体温が下がる一方だ」

「まだ息は吹き返さないのか？ 大分時間が経っているんだぞ！！」「うるさい！俺だって一生懸命やってるんだ！それよりも早く医者連れてきやがれ！！」

複数人の野太い声が聞こえる。

誰か倒れたのかな？それとも溺れた？でも、正直うるさい。

ああ、頭がガンガンする。

「くそつ、もう一回息を吹き込むぞ！」

そつという声とともに、僕の唇に生暖かい何かが押し付けられた。

一気に送り込まれる大量の空気。

送り込まれた空気が肺の中に入ったかと思うと、胸の奥から生暖かいものが逆流して喉を蹂躞する。

「うぼうえ」

一気に胸につつかえていた何かを吐き出したら、凄く咽てしまった。

涙も鼻水も止まらない。

廻りの声がいっそうやかましくなったが、もうそんな事に構って
いられるほどの余裕などなかった。

激しく繰り返す嘔吐と咳に横隔膜が痙攣を起こしかけ、死ぬほど
の苦しみにのた打ち回った拳句、僕はあっさりと意識を手放した。

どれ位闇の中を彷徨っただろうか。

再び僕の意識は闇の底から浮かび上がる。

今度は死ぬような苦しみとはまったく無縁の、穏やかな目覚めだ
った。

しばらく焦点の合わない画像に苦勞したけど、大人しく待ってい
ればすぐにピントが合ってきた。

「知らない天井だ」

そんなお約束な科白をはいてから、自分の現状を把握してみる。

まず、見知らぬ天井、綺麗なシャンデリアwith蠟燭、そして
割と離れたところにある大きな窓。

壁は真っ白でしみ一つ無いし、壁から突き出ているアンティーク
な燭台は高価そうだ。

ふかふかとした枕に、糊の効いたシーツ。

一流ホテルのベッドに寝かされている気分だ。

まだ少し頭がクラクラしているけれど、それでも最初の目覚めよ
りずっと気分がいい。

「喉、渴いたな……」

ぼそりと呟いた独り言に違和感を覚える。

あれ？ 僕の声ってこんなに高かったっけ？

そう思っ頭を掻こうとすると、挙げた手に絡みつくサラサラな何か。

「うわっ、すっげー綺麗な髪だなあ。銀色の髪なんて生まれて初めてみたよ」

もともと僕の声は女の子の様だとよく友達にからかわれたことがあったけど、いま聞こえた声は女の子そのものだった。

そつと喉を押さえながら声帯を震わせてみる。

「あー、あー。ううん、やっぱり僕が喋っているってことで間違いないのか」

とりあえず声の問題は後回しだ。

それよりも目の前でゆらゆらとゆれる銀の髪の方が気になる。

腰まであるまっすぐな髪を一房掬い取り、目の前まで持ってきてマジマジと観察する。

触り心地がとてもスベスベしていながら軟らかく、キューティクルが窓から入ってくる陽光をキラキラと反射していた。

それに凄く良い匂いがして、なんとというか急に恥ずかしくなった。で、さらにびっくりしたのが髪を珍しそうにいじっている僕の手だ。

正に白魚の様なほっそりと繊細そうな指に桜色の綺麗に整えられた爪。

少なくとも自分の指はこんなに綺麗な手ではないという事だけは確かである。

そして極めつけは、胸部に感じる今までに無い重み。

大きく動くたびにふるんと震えるその物体は、一見冷静そうに見える僕のSAN値をガリガリと削ってくれる。

それはもう情け容赦なく。

確認するまでも無く僕の男としての大事なものが無くなっているのも感じとれたし、何か異常な状況に陥っているという事は理解できた。

この状況に当てはまる言葉がひとつ、僕の頭の中に浮かび上がる。

「……TSかよ、勘弁してくれえ」

小説や漫画でお馴染みの性転換ってやつ。

いったい何をどうしてこうなったのか。

僕は頭を抱えてベッドに蹲るが、そこからもいわゆる女の子の匂いが追い討ちのように僕の鼻腔をくすぐった。

うん、なんか女の子の部屋の部屋に初めて入った時の事を思い出す。

ぼつと熱くなる両頬に戸惑いながらも、ひとしきりベッドの上で身悶えた。

と、部屋のドアが控えめにノックされるのが、ピンク色に染まった僕の脳に届く。

それはそうか。

誰かが僕をここに連れてきたのなら、当然その誰かが接触を持ってくる事だって考えられえるのだから。

ベッドの上で蹲りながら、じつと扉を見る。

誰が入ってきてもいいように警戒しながら見続けるが、一向に誰も入ってこようとしない。

しばらくするともう一度、同じようなリズムでノックが繰り返された。

「えっと、どうぞ？」

恐る恐る声をだす。

するとほとんど音もさせず、3mはありそうな扉がゆっくりと開かれた。

その扉の向こうに立っていたのは、こういったお話には付き物の『メイド』さんだった。

「失礼いたします、姫様」

エプロンドレスと呼ばれる服を身に纏ったくすんだ金髪の女性（たぶん18、9歳位だろうか）は、丁寧にお辞儀をするとゆっくりと僕に近づいてきて顔を覗き込んできた。

綺麗なエメララルドグリーン瞳がとても美しく、化粧をせずともシャープな顔立ちのメイドさんに僕は頬を赤らめたまま息を呑む。アゴ辺りで綺麗に切りそろえられた髪は、彼女の凜とした表情に凄く似合っている。

彼女に見とれていると、メイドさんの綺麗な手が僕の頬にそっと添えられる。

その指が頬を伝って顎の下にくると、つつと少し強引に上を向かされた。

キスをしますと突然言われても、ハイとしか答えられない空気と体勢に僕の心臓はバクバクである。

思わずきゅっと目を瞑る。

これが僕のファーストキスなのかと思うと、頭の中が混乱してきゅっとシーツを握り締めるしか出来なかった。

ふっと目の前のメイドさんの存在が遠のく。

肩透かしを食らったような感覚に、僕は意識せずに声を零す。

「あっ……」

「？　なんでしょうか、姫様」

「い、いえ、何でもありません」

「そうですか。大分お加減も良くなりましたが、念のためお医者様をお呼び致します。しばらくそのままでお待ちくださいませ」

慌てる僕を尻目に颯爽と身を翻したメイドさんだけでも、背を向ける一瞬、彼女の頬が赤く火照り瞳が潤んでいたように見えた。

まさか彼女も期待してたのかなと馬鹿なことを思いつつ、とりあえずは状況も分からないのでお医者さんが来るのを待った。

あるいは元の僕の姿に戻れるヒントなり解決方法を知っているかもしれないし。

さほど待たされずに扉が再びノックされた。

「は、はい、どうぞ」

「失礼いたします、姫様。ドクター、グエロをお連れいたしました」

「おはようございます、スワジク様」

恭しく頭を垂れるのは、漫画で見るとような中世の貴族が身に纏うような衣装だ。

ただ残念なことに中世貴族の衣装は衣装でも、かぼちゃズボンにボンボリのような肩周り、タートルネックの様な詰襟である。

白を基調とし所々に青のアクセントがはいっているんだけど、そのアクセントのつけ方がさらに悪目立ちしている。

志村 さんが白鳥の頭を股間につけてコントに出てきそうな格好だ、と言えば分かっていただけるだろうか。

そして頭にちょこんと乗った帽子。

あからさまに縮尺が違うだろうといたい。

で、そんな可哀想な格好をしているのが割とお年を召したご老人である。

笑ってはいけないと思いつつ、ぐつと下腹に力を入れて笑いを堪えた。

そんな私に気付く様子も無く、2人は手際よくベッドサイドに色々な道具を揃える。

「さて、スワジク様。お加減はどうでしょうか」

「えっと、別に大丈夫だと思います。時々脇がちくつと痛む位でしょうか」

「なるほど。眩暈、吐き気は？」

「起き掛けに少し眩暈があったくらいで、その後は別に大丈夫です」
「分かりました。ではお召し物をお脱ぎください」

「あ、はい」

言われるままに浴衣のような絹の上衣を肌蹴させた。
服の下に隠されていた真っ白な肌。

大きくも無く小さくも無い形の良い胸部（胸部ったら胸部だ）。さらにその下、下腹部が胸の間から見える。ああ髪が銀色だからかあ、などと馬鹿な事が頭をよぎる。そのすべてが初心な僕には刺激的過ぎて、鼻の奥がなにやら熱くなってしまう。

「っ！」

後ろで控えていた金髪メイドさんが、僕の顔を見て声にならない悲鳴を上げる。

なんか変なことをしただろうか？

などと考えていると、おじいさんが台の上にあつた白い布を手渡してきた。

12

「それでしばらく鼻を押さえてください」
「はえ？」

そう言われて、初めて自分が鼻血を垂らしていたことに気がつく。
どんだけ童貞野郎チエリーボーイなんだよ、僕は。

2話「ミーシャ視点」

昨日、私が傍仕えをしている姫が城壁より転落して湖に落ち、溺れたそうだ。

本当に私が非番のときでよかったと心の底から安堵する。

あの姫のことだ、目を覚ましたらそれこそ侍女の3人や4人は首を切られるだろう。

物理的な意味で。

そんな命の心配もあって主だった侍女達は泣き崩れるばかりでまったく役に立たず、とりあえず責任追及されないのであるう私が矢面に立たされた。

「まったく、とばっちりで私の首が飛んだらどう責任を取ってくれるのかしら」

ぶつぶつと同僚たちへの文句を小声で言いながら、私は北の塔舎の中を歩く。

ここはあの蛮行姫が領主様に強請って立てた小宮殿。

帝都にあるヴェルエル工宮殿を模した造りになっていて、外装も内装もこれでもかというくらい華美に裝飾されている。

私の実家の年貢租銭がこんなものに費やされているのかと思うと、正直唾を吐きかけたいという衝動に駆られる。

まあそんな衝動にも、もう慣れたのだけれど。

スワジク様の寝室が見えてくると、丁度扉の前に目を真っ赤にした同僚が立っていた。

彼女の名はアニス。

昨日姫様についていた侍女の一人であり、私の親友だ。

私が近づくと、くすんと鼻を鳴らしながら眼鏡を押し上げて目尻の涙なんか拭いたりする。

うん、なんか凄く小動物っぽくって守ってあげたい。

思わず彼女の短い赤毛をくしゃくしゃと弄ってしまう。

「ごめんね、ミーシャちゃん。私、もつとしっかりしなきゃって思うんだけど……」

「いいのよ、アニス。あの姫の扱いには慣れてるし大丈夫だとは思う。で、今はまだ起きてない？」

「ううん、さつき起きたみたい。なんかごそごそと音がしてたし」

「……で、何してんの？」

「待ってた、ミーシャちゃんが来るの」

恐る恐るといった風に私を上目遣いでみるアニス。

思わず砂糖を吐いてしまうほどの破壊力だが、目の前にある危機のために今いち萌えきれない。

目が覚めてすぐに朝の支度を始めないと、あの姫は暴れるのだ。

これはコブや痣の一つも覚悟しないといけないか。

深いため息をついて私はアニスを横へ押しやり、静かにドアをノックし壺行姫の言葉を待つ。

だがさつきまでごそごそと動いていた気配がなくなり、部屋の中がしんと静まりかえる。

怒声を覚悟していただけに、少し拍子抜けである。

しばらく待っても状況に変化が見られない。

仕方が無いのもう一度ノックをする。

「えっと、どうぞ？」

私は自分の耳を疑った。

ノックの返事は罵声ではなく、何かに脅えるような可憐な少女の声なのだ。

これはまったくの想定外。

がしかし、ここで泡を食って姫の不興を買うわけには行かない。

ここで取り乱そうものなら、それこそ24時間調教フルコースが待っている。

まあ、殺されないだけマシだろうけども。

気を取り直して、私はそっとドアノブを回して扉を押し開く。

「失礼いたします、姫様」

丁寧に辞儀をしてから部屋へと1歩進む。

目の前にあるのは真っ白な白亜の部屋に鎮座するキングサイズのベッド。

そのベッドの上に、姫が蹲りながら、こつちをじっと凝視していた。

なんとというか、花の蜜に誘われる蜂の様な気分で目の前の少女に引き寄せられる。

なんだろうこの姫、こんなに可愛かったっけ？

そんな馬鹿なことを考えていたからだろうか、私の悪い癖が出てしまった。

まるでジゴロのように少女を見つめ、頬を優しく撫でながら顎をついっと持ち上げる。

その間、私の瞳は目の前の少女に釘付けだ。

ふるふると揺れる睫毛の重さに耐えかねたのか、ゆっくりと少女

の瞼が下ろされる。

頬はうつすらと桃色に色付き、軽く開かれた瑞々しい唇からは甘い吐息が吐き出された。

何これ、喰っちゃっていいわけ？

そんな駄目思考に陥っていた私を、親友のアニスが扉の向こうから必死に声を掛けて制止してくれた。

「ミーシャちゃん、正気に戻って！ それ色んな意味で駄目だって！！」

その声に正気を取り戻した私は、今更ながら自分が仕出かそうとした事に恐怖を覚えた。

この私が蛮行姫に心を奪われるなんて、ありえない！
すつと背筋を正して、姫から1歩距離を置く。

目を閉じたままじっとしていた姫を見下ろすと、きゅつとシーツを掴んで震えている手が見えた。

くつ、どんだけ可愛い。

蛮行姫だからって侮っていたわ。

そうよね、黙っていればこの姫は超美少女なのだ。

だが、ここで本能に流されたら試合終了だ、私の人生的に。

また吹き飛びそうになる理性をかるうじて繋ぎ止めながら、深く深呼吸をする。

目の前の少女の口から漏れる微かな失望の声にも、もうたじろがない。

「あつ……」

「？ 难道でしょうか、姫様」

「い、いえ、何でもありません」

どこか残念そうな顔をしてこちらを見る姫。

何の罫なのだ。

侍女をからかうもしくは陥れる新しい方法でも開発したのか、この姫は。

一時は危うかったが、もう騙されません。

「そうですか。大分お加減も良くなられたご様子ですが、念のためお医者様をお呼び致します。しばらくそのままお待ちくださいませ」

そういつて私は上気した顔を隠す意味でも、すばやく姫に背を向けてこの部屋を後にした。

廊下に出ると、ぷうと頬を膨らませたアニスが待っていた。

「ミーシャちゃん、浮気はイヤです。ううん、浮気はもうミーシャちゃんだから仕方ないと諦めたけど、あの人とだけは絶対にイヤ」

「あ、あはは。馬鹿だなあ、アニスは。姫がなんか新しい嫌がらせの方法を開発したみたいだから、ちょっと試してただけじゃまいか」
「何言ってるのですか。ミーシャちゃん、頬が赤いです」

「いやいやいや、これはなんとか恐怖に耐えた結果といえますか」

「うそばっかり」

拗ねる親友の機嫌を取りながら、私はドクター・グエロの控え室へと向かったのだった。

3話「来たな、逆ハ―要員め」

僕は窓の外を見ながら、今日何度目かの深いため息をついた。

結局あの後、なんだかんだでドクターにいるんな事を聞きそびれてしまったし、自分の置かれている現状を把握しようにもメイドさんが外に出してくれない。

唯一僕に出来ることは、こうやって軟禁されている部屋の窓から外の風景を眺めるだけ。

とは言いつつも、これはこれで馬鹿にならなかった。

今いる部屋がどうやら結構高い位置にあるようで、この建物の周りや外壁らしきもの、さらにその向こうの町並みまで良く見える。

建物だけではなく、そこで生活しているであろう人々の姿も。

「これってやっぱり日本じゃないな。うん、TSで異世界か過去へのトリップ、しかも憑依ものか」

得られた風景や人の服装、行きかう馬車などから、この世界の文明レベルがおおよそ中世くらいだろうと予想する。

そして姫様と呼ばれ傳かれる外の人。

「これで軍事知識や内政知識が豊富にあれば、俺TUEEE出来たのかな？」

まあ一般的な学生でしかなかった僕が、そんな夢みても仕方ないんだけど。

元に戻れないとしても、なるべく平穩に暮らしていけたらいいなあ。

それに地位や権力があっても、どう振舞ったら良いかわかんないしねえ。

「とにかく！ 外の人と中の僕が違うってことを悟られてはいけないという事だね。それにはまず外の人がどんな人物だったのかってことを知らなきゃ話にならないか」

既に侍女たちには訝しがられているようだけれども、まだ大丈夫なはず。

会話は当たり障りの無い事しか言わなかったし、なるべく迷惑をかけないように大人しくしていたし。

とにかくお姫様なんだから、丁寧に、お淑やかにを基本にしていれば間違いはない！

……はず。

そうやって外の風景をぼんやり眺めていたら、扉をノックする音が聞こえる。

はいと返事をしながら振り返ると、そこには既に扉を背に佇む人の男性がいた。

「お目覚めかな、リトルプリンセス」

銀色の髪、紅と碧のオッドアイ、すらりとした鼻筋にきりりとし

た口元、目元は涼やかで背も高く、ジャニーズ」に居そうなイケメンだ。

しばらくぼかーんとしていたら、銀髪イケメンの後ろに立っていた黒髪イケメンが不機嫌そうに呟く。

「私は止めたほうが良いと忠告はいたしたのですが、申し訳ございませんでした」

「何を言う。貴様だってほいほい付いてきたではないか、レオ」

「付いていかなば、貴方は何処までも暴走するからです。妹君とはいえ、仮にもレディの部屋に無断で入るなど貴方には良心というものがないのですか？」

「そのおかげでいいものが見れたではないか」

「あのお、いいものって何が見れたのでしょうか？」

二人が僕をそっちのけでヒートアップしていきそうだったので、とりあえず会話に参加してみた。

っていつかこの部屋割と殺風景だし見て楽しそうなものって何もないはず。

レオって呼ばれた黒髪のイケメンは、口をつぐんでむっつりと黙り込む。

その代わりに銀髪イケメンが、すごく優しいな笑みを浮かべて僕の傍へと近づいてきた。

「分からないかな、私の可愛い小鳥ちゃん」

「え？ い、いえ私にはさっぱり」

小鳥ちゃんってどんだけサブイ科白を垂れ流すのか、この銀髪イケメンは。

見る、鳥肌が立ってしまったではないか。

そういえばレオが僕を妹君と言ってたから、このイケメンは兄貴になるんか。

兄妹ならこんなやり取りも有り……か？

などとクダクダ思考を横においておき、多少引き攣った微笑みながらも首を左右に振って答えて見せる。

銀髪イケメンはさりげなく僕の肩を抱きしめると、優しく僕の髪に口づけをした。

(え`え`え`え`え`？ それって兄妹で有りなのか？)

混乱する僕を何か面白そうな珍獣でも見るように観察されていたのだが、割とテンパっていたのでまるで気付けない。

「窓辺で黄昏れる美少女。これほど絵になるものはないとは思わな
いか？」

「ちよ、お兄様、耳元で囁かないでください。くすぐったすぎます」

こいつ絶対女泣かせだ、リア充にちがいない。

男だったころの僕であっても、こんなさりげなく女の子の肩なんか抱けなかったし、ましてや私の小鳥ちゃんだの黄昏れる美少女だのといった科白なんか素面で吐けるかつ！

多少の場違いな怒りを籠めて、リア充イケメン（銀髪イケメンからクラスチェンジ）の胸をやんわりと押し返す。

本当はキモイから突き飛ばしても良かったのだけど、お姫様らしくないからね。

けど意外にも押されるままに後ろに退がるリア充イケメン。もうちょっと抵抗されるかと思ったのに。

「そんな顔をしないでくれよ、私だって義理とはいえ可愛い妹に嫌われたくは無いからね」

「はあ、そうですか」

「それに今日はとても面白いものを見れたしね。そうは思わないか、レオ」

「貴方の悪ふざけには付いていけません、まあ同感とだけ言うっておきましようか」

「はあ……」

リア充イケメンはそのまま僕に背中を見せるとスタスタと扉へと向かってゆく。

「まあ、とりあえずお見舞いに来ただけだから今日はこれで失礼するよ」

「あ、はい。わざわざ有難うございました」

「……有難うございました、か」

「え？ ボク何か変なこといいました？」

「いやいや、綺麗なレディに感謝されるとドキドキするなと思っただけさ」

(駄目だこいつ、早くなんとかしないと……)

レオが扉を先に開け、リア充イケメンがさも当然といったふう
に扉をくぐる。

そこでぴたりと足を止め、僕に振り返って手を振って見せた。

「それじゃあね、スワジク。とりあえずは当面は大人しくしておい
で。近いうちにまた来るから」

「あ、はい。分かりました」

「うん、いい返事だ。それじゃあね、壘行姫」

無駄にいい笑顔を振りまくっていたリア充イケメンも、扉が閉ま
ると見えなくなる。

ようやくほっと一息つけた。

そんなに長い時間ではなかったけれども、やはり外の人の親類縁
者や知人なんかを訪ねてこられると気を使う。

こんな対応で本当によかったのだろうかと思うものの、圧倒的に
情報が足りないのだから仕方が無い。

今はやれることをやるだけだ。

「でもバンコウ姫ってどういう意味なんだろう？」

4話「あれ？もしかして怖がられてる？」

僕は相変わらず自分の寝室からじつと外の様子を眺めていた。

まあ実際それしかすること無かったし、本を読みたくてもラノベとかあるとも思えない。

文学書なんて持って持ってこられても読む気もしないし、大体字は読めるんだらうか？

とりあえず意思の疎通は完璧に出来ているみたいなんだけど。

自分でいろいろ調べてみたけど、僕は決して日本語を喋っている訳ではないみたいだ。

意識して文章を構築してみたら分かったんだけど、どうも僕が知らないまったく新しい文法に則ってるみたい。

なのに何故喋れるのか。

結論、僕に分かるわけがない。

もしかしたら文字もきっちり読めたりするのかもしれないけど、今はまだ試す気にもならない。

お腹が空いたなあと思ったころ、昼ごはん以来の来訪者がドアをノックしていた。

「はい、どうぞ」

「失礼します、姫様」

朝、ドクターと一緒に色々と身の回りの世話をしてくれたメイドさんが入ってきた。

名前はミーシャさんっていうらしい。

クールな表情にちよっとぶっきらぼうな口ぶりが凄く雰囲気ぴったりして、一言で言えば漢らしい？ 女性である。

「いらつしゃい、ミーシャさん。今度は何でしょうか？」

「はい、そろそろご夕食の時刻となりますが、お食事はどうなさいますか？ 皆様とご一緒されるようでしたらお召し変えさせていただきますが」

「あ、そうですね。……この部屋でって訳にはいかないでしょうか？」

苦笑いをしながら、ミーシャに尋ねてみる。

まあ駄目なら腹をくくって行かなきゃ仕方ないんだけど。

「分かりました。それではその様に手配させていただきます」

それだけを言うと、さつと踵を返して部屋から出てゆくミーシャ。かつこいいなあ、漢らしいなあとその後姿を見送る。そしてまた独りぼっちになった。

今日この部屋を訪れたのは、ドクター・グエロ、ミーシャ、フェイ兄様、レオの4人だ。

食事時になるとあと3人くらいメイドさんが増えるけど、おおむね壁の花。

喋ることもなければ、視線すら会わない。

みんな心持ち視線を下にして、じっと立っている。

食事が終われば一斉に動き出して、無駄口一つ叩かずに出て行ってしまう。

あれがメイドのプロ集団ってことなんだろうと、一人感心していた。

「今日一日ほとんど一人だし、さすがに暇だし寂しいなあ」

ベッドの上に寝転がって、ぼつりと本音が漏れてしまう。

立場が上の人は孤独だっというけど、こういう状況を言うのかな？
だったら偉い人なんかにならなくていいんだけどなあ。

枕を抱きながらごろごろしていると、ミーシャが数台のワゴンと共に部屋に入ってきた。

後ろには男性が数人がかりで少し大きめのテーブルを下げている。
次に入ってきたのは、豪華な布張りの食卓椅子が4つ。

その次が、テーブルクロスと燭台、花瓶、それに生け花を携えた
花師さん。

あれよあれよという間に殺風景な寝室にダイニングスペースが
来上がる。

そして最後は真っ白な制服に身を包んだ給仕さんが、ぴかぴかの
食器を並べてゆく。

僕はその手際の良さに圧倒され、ぽかんと見守るだけだった。

「姫様、ご用意が出来ましてございます」

「あ、ありがとうございます」

いつの間にか私の傍に来ていたミーシャが、恭しく頭を垂れてい
る。

こんな凄い人たちに頭を下げられる程、僕は凄い人間ではないの
でどうしても気後れしてしまう。

外の人はどう感じていたのかなあ。

僕はミーシャが誘導してくれるとおりに席に付き、近寄ってきたメイドさん達のされるがままになる。

二人寄ってきてきてボールの中にある水で手を拭かれ、別の二人が手際よくナプキンを首と膝にかけてくれる。

給仕がいい音をさせながら食前酒っぽいものをグラスに注ぎ、ミーシャがスープを入れてくれた。

「あ、あの有難うございます」
「……」

少し気後れしながらメイドさんや給仕さんたちにお礼を言つても、誰一人答えを返してくれなかった。

き、気まずい。

高貴な方とは直接お話も出来ないってやつか？

これは地味にきついで。

彼らの無反応振りにどうリアクションすべきか悩んでいると、ミーシャが耳元でそっと囁いてくれる。

「準備が整いました。どうぞお召しあがりくださいませ」

「あ、そうですね。それじゃあ、いただきます」

両手を揃えて“いただきます”をして、スープに手をつけた。

うん、パンプキンスープっぽい味が口にふわっと広がって、なんていうか幸せになる味だなあ。

あつという間に、皿の中のスープを全て平らげてしまう。

少しナプキンに垂れたりテーブルの上に雫が落ちたりしたけど、拭けば無問題。

「ごしごしと首もとのナプキンでテーブルを拭いてから、お代わりを頼もうと顔を上げた。」

と、壁の花のメイドさんと一瞬視線が合ってしまう。

あれ？　なんかびっくりしたような表情だよね？

よく見ると、なんか皆の視線がテーブルとかナプキンに突き刺さってるんだけど。

な、何か間違ったのかな？

ハッとなってミーシャに振り返る。

彼女なら何か適切なアドバイスをくれるのではと思ったが、彼女はまるで僕を視界に入れることを拒否するかのように首を背けていた。

くっ、ミーシャさんには頼れないか。

といって他に声を掛けれそうな人も居ないしどうしたものか。

そんなことを考えていると、空になったスープ皿を赤毛のメイドさんがそつと下げようとしていた。

何が駄目だったのかよく分からないけど、気にしても今は始まらない。

そう自分の中で開き直って、赤毛のメイドさんに声を掛けた。

「あの、お代わりいただけます？」

「……はあ？」

「いや、お代わり欲しいんですけど……。あ、もう無かったら別いいです」

「い、いえ、すこし暖める時間をいただけましたらお出し出来ますが」

「ああ、いいですよ、暖めなくて。そのままでもすごく美味し

たものですから」

「あ、え？ で、でも？」

「アニス、姫様の御所望です。すぐに用意を」

「は、はい！」

ミーシャの鋭い声に、アニスはびくつとなつて手にしていたスプ皿を床へ落としてしまう。

微かに残っていたスープの残滓がその衝撃で僕の着ていた浴衣（つばい寝巻き）に撥ねた。

それを見たアニスの顔がみるみる青ざめてゆく。

彼女の膝ががくがくと震えたかと思うと、ストンと床に崩れ落ちた。

「ももも、申し訳ございませんっ」

「ひいっ！」

凄い勢いで謝られている僕。

ちなみにひいってなつたのは僕だったりする。

そりや普通びっくりするでしょう。

でもそれ以上に普通じゃないのは目の前のアニス。

ガタガタと震えて土下座してるその姿を見て、この状況が異常であるといやでも理解できた。

固まる体に氷点下へと突入する場の空気。

そんな中頼れる漢、ミーシャが動いた。

「スヴィータ、アニスを連れて外へ。メイはお召し換えをお持ちし

て。男性は皆いつたん外へ出てください」

「すげえよ姐さん。」

この凍った空気の中、なんでそんなにテキパキと指示をだせるのか。

もうね、ミーシャは『漢女』^{おんな}というしかないよね。

一系乱れぬ動きでその場が收拾されていく。色々と驚いたけど、ようやくほっと一息つける気がした。

「あのミーシャさん」

「はい、何でございましょう?」

「アニスに気にしないように伝えてもらえないでしょうか。別にこれくらい拭けばいいんだし、着替えるのも大げさだと思えますし」「事を大げさにしてしまい申し訳ございませんでした。この責めはいかようにもお受けいたします」

「いえ、そんなに畏まらなくても。それにミーシャさんが良かれっ
て思っ
てしてく
れたこと
ですし。お
礼をいう
ことはあ
っても責
めるなん
て私には
出来ませ
ん」

「はい、ご寛恕を頂き返すお言葉も見つかりません。アニスには今後このような失態をせぬよう厳しく指導いたしておきます」

「あー、お手柔らかにしてあげてくださいね?」

「承知いたしました」

そういつてミーシャは深々と頭を下げた。

正直こんなことくらいで怒ったりしないのに、ちょっと周囲の過敏な反応に違和感を覚える。

っていうか、外の人いつたい今までどんな風に皆と接してきたの

40-1-1

5話「領主視点／フェイタール視点」

我が義理の娘、スワジク・ヴォルフ・ゴードイン。

盟主国であるブリュスノイエ帝国の四家ある選帝侯の一つ、ヴォルフ家の血を引くあの者ははつきり言つて我が国の癌である。

私の正妻はヴォルフ家の11女であった。

一言で言えばいけ好かない女で、何かといえば選帝侯の肩書きで無理を通す我侭ぶりは国内の州長達にも不評だ。

その評価は彼女が死した今も微塵も揺るがぬ。

そんな女に育てられた畏父娘が我侭でない筈が無かった。

気に入らぬといえ侍女を殺め、貧相な館だといつては莫大な国金を費やして盟主国の宮殿風に改築したり。

あの者の傍若無人振りに、一体何人の国民が隠忍を強いられたか。悪名だけでいうなら、スワジクは我が妻の数倍上をいく。

そんな無茶を強いられてなお甘んじて従わねばならぬのは、一重にわが国が帝国の庇護、いやヴォルフ家の庇護なくしては生き残れないが故。

だから、先日の落水事故にはずいぶんと肝を冷やされた。

あんな取るに足らぬ女でも、ヴォルフ家との姻戚関係を続ける上ではなくてはならない要因である。

息を吹き返したと聞いて腰が抜けるくらい安堵したものだ。

「父上、お呼びにより参りました」

「おお、フェイタールか。よくぞ参つた。して、あの女の様子はどうであつたか？」

私の私室に入ってきたのは、第3王子のフェイタールである。

蛮行姫が唯一気を許している存在、近衛のレオが言うにはフェイタールに懸想しておるとか。

だからあの女の動向を探るべく見舞いに出したのだ。

「はい。大分元気を取り戻したようで、昼ご飯もしつかりと食べたそうです。ドクター・グエロの話では肋骨に多少ヒビが入っているのと、記憶の混乱がみられるようですが概ね良好とのことです」
「ほお、記憶の混乱とな。だからか、こちらへ怒鳴り込んでこぬのは」

「はい。おそらく落水した経緯すらよく分かっている様子でした」

フェイタールのその話に、私は思わず会心の笑みを浮かべてしま
う。

そんな私を見て、フェイタールも苦笑いをしていた。

「そうかそうか、では問題の侍女はどうした」

「それも抜かりなくいたしております。とりあえず奴の傍仕えを外し、レオの屋敷にて匿っております。状況を見てですが、落ち着いてから帰郷をさせようと思っております」

「ま、姉を殺されて復讐心を抱くなどという方が無理な話だからの。今後は傍仕えの身辺調査は入念にせねばな」

「正直私も肝を冷やしましたが、その反面溜飲が下がったのも確かです」

王族の血縁に手を出せば死罪は当然であるが、まああの女なら法を曲げて誰も文句はいうまい。

それに本人は殺されかけたことすら自覚していないと来ている。笑うなという方が無理な相談であった。

「してヴォルフ家への使者はどうする？」

「その辺りはレオと内大臣が手配しております。とりあえず本人が覚えていないので、自己の過失による落水事故という報告にさせますがよろしいでしょうか？」

「そうか、良きに計らえ」

聞きたいことはすべて聞き終えたので、下がってよいと目で指示する。

が、フェイタールは少し考えるような仕草をして、立ち去ろうとはしなかった。

「何かあるのか？」

「いえ……、はい。奴が私に、『有難うございました』と言ったのです」

「……馬鹿な、あやつが他人に礼を述べるなどと」

「私も自分の耳を疑いました。それになんといっていいか、態度が豹変したように見えます」

自分で言っていることを確かめるように、噛むようにゆっくりと喋るフェイタール。

まるで自分の発言を疑っているかのような様子に、すこし不安になる。

「もしや、殺されかけたことで態度を改めたのか？」

「どうでしょうか？ それならば改めるどころか、肅清を始めるのがあの女です。もう少し様子を見てみますが、もしこの変化が好ましいものであれば、私はそれを伸ばしていこうと思います」

「済まぬな。お前には嫌な事ばかりを押し付けてしまう」

「何をおっしゃいますか、父上。あんな小娘にわが国を良いようにされては堪ったものではありませんからね。これも私の仕事の一つですよ」

「苦労をかけるが、蛮行姫をよろしく頼む」

「はっ、命に代えましても」

王の自室を出て、俺は蛮行姫の侍女たちの控え室へと向かった。

時間的に言えば食事が終わったころだろうか。

先ほどあつた報告では部屋で食事をするらしかったが、それに振り回された給仕や侍女たちに軽い同情を覚えた。

そんなことを考えながら歩いていると、廊下の真ん中で青い顔をしているアニスとスヴィータがいた。

なにか逼迫した様子に、胸騒ぎを感じる。

足早に2人も元へ近寄ると、驚かせないように声を掛けた。

「アニス、スヴィータ、何かあつたのか？」

「あ、これは殿下、お見苦しいところを」

「かまわぬ。何があつた？」

慌てて最敬礼を取ろうとするスウィータを止め、今だ泣き止まぬアニスに声を掛けた。

だがアニスは少々取り乱しており、話ができるような状況にはなさそうである。

仕方なしに、再度スウィータに視線を戻す。

「食事の給仕中アニスがお皿を取り落としてしまい、姫のナイトドレスに滴を掛けてしまったのです」

「まずいな。で、奴は怒りくるっているのか？」

「そ、それが……、特に怒った様子は無くむしろアニスに気遣うような感じを受けました」

「そうか、分かった。後は任せろ」

そういつて蛮行姫の部屋に入ろうとする俺に、スウィータが縋るように言葉を続ける。

「殿下、私たちの処罰はどうなるのでしょうか？ アニスもそれが気になって、それに上塗りをするような失敗をしまして。正直、私たちがいつ処刑されるのかと不安で仕方ないのです」

「すまぬな。だが、そんな事はさせんよ。安心しておいで」

悔しそうに涙目で俯くスウィータ。

その亜麻色の髪にそっと手を置いて慰撫し気休めの言葉をかける以外、今の俺に出来ることは無い。

自分の無力感に歯がゆい思いを感じながらも、俺は俺にしか出来

ないことをなさねばならないのだ。

「でんぐが、もうじばげ、あぐりまじえん……、ヒック」

「アニス、今日はもう下がりなさい。そんなに泣いたら干からびてしまつよ?」

「ずびばぜん……」

優しく声を掛けると、アニスは泣き止むどころかさらに収拾が付かない状態に陥った。

スヴィータの胸に顔を埋め無理やり声を殺しているのだが、あまり効果は発揮できていないようだ。

侍女たちの不安も一杯一杯のところまで来ているのか。

気付かなかった訳ではないけれども、彼女たちに安心出来るような情報を提供できなかったことが悔やまれる。

彼女たちの処遇については、もっと早くに蛮行姫に確認すべきだったのかもしれない。

そうすればいらぬ不安感を抱かせることもなかったのに。

とは言つもの、藪蛇になっては本末転倒である。

歯がゆい思いを奥歯で噛み殺し、扉の外で屯する給仕達を掻き分けて奴の居城へと足を踏み入れた。

気分はまるで絶望的な戦場に向かう騎士のようだった。

これは俺にしか出来ない戦い。

待っている蛮行姫、きつといつか俺なしではいられないようにしてやるからな。

6話「もつと兄様のこと知りたいの」

ミーシャが替えの浴衣つぽいのを持って来てくれた。

本当にこれ位なら着替えることも無いのにも思いつつ、染みになつたら大変だからかなあと考えてみたりする。

せつかく持つてきてくれたのだし、取り敢えずは着替えることにして浴衣つぽいのを脱いだ。

当然浴衣つぽいの下は全裸である。

こつちの人つて下着とか付けないのかなあ？

そんな変な事を考え妙にドキドキしながら新しい浴衣つぽいのに袖を通す。

あんまり変態チックな思考はやめよう、主に僕の精神衛生上の為に。

と突然予告もなしに廊下側のドアが開いて、変態が乱入して来た。あまりにもびっくりしすぎて僕とミーシャの時間が止まる。

そこにいたリア充イケメンは部屋の状況を把握したようで、なんとも微妙な笑顔で立ち尽くしている。

フェイ兄、なにやってんの？

丁度扉に向かって着替えていたから、彼からは僕のすべてが丸見えだと思う。

ここは悲鳴を上げるべきかどうすべきか考えて、とりあえず浴衣つぽいので前を隠す。

しばし見詰め合う男と女。

「いや、あの、食事中だと聞いて……」

「はあ、確かに食事中でしたね」

「な、なんで裸に??？」

「はあ、着替えているからですかね？」

「いや、その……」

「殿下、一旦廊下へ出られてはどうでしょうか？」

「す、すまん……！」

ミーシャがこめかみを押さえながら彼への最善策を提案し、それを承諾した変態はすぐさま廊下へと出て行った。

まあ、確かに女性の生着替えを見てしまったらそうなるのは理解できるね。

自慢じゃないが、僕ならもつと取り乱す自信がある。

そんな変なことを考えていたからだろうか、手の止まった僕にミーシャが近づいてきて丁寧に浴衣っぱいのを着付けてくれた。

すいませんミーシャ様、そんなに睨み付けないでください。

それに今のはあの変態兄が悪いよね？

あ、もしかしたら僕も毛の先ほどは悪かったかも？

あ、あの、本当に御免なさい、許してくれないと色々と漏れてはいけないものが漏れそうです。

「いや、本当にすまなかった。まさか着替えているとは思っても居なくて」

「もう良いです、フェイ兄様。私それほど怒っていませんから」

「本当かい？」

「本当です」

「アニスの失敗も？」

「ああ、お皿を落とした事ですか？ 誰だって失敗の一つや二つくらいするでしょうし、それも気にしていません」

「そうかい、良かった。流石は私の可愛い妹だよ」

そこでその科白がでるんかい、変態シスコン兄よ。

まあフェイ兄が再入場したときは、本当にまじめな顔で90度頭を下げてたもんなあ。

生まれて初めてされたよ、最敬礼で謝罪って。

怒っている真似してみたけど、あまりしつこいと嫌われたら大変なので程ほどにしておく。

この変態さんには後できちんと働いてもらわないといけないしね、フフフ。

ってというかそんなに真面目な顔が出来るなら、普段からそつちで居れば良いのに。

マジでもてると思う。

男の視点から見ても惚れ惚れするくらいかつこいいもんな。

変態性シスコン症候群さえ罹患してなければ、きつと国一番の人氣アイドルになれるんじゃないだろうか。

などと思ってマジマジとフェイ兄様の顔を見つめっていると、奴が極上スマイルと悩殺ウインクをセットで放射してきやがった。

キモいのとキモイのとキモイので思わず視線を逸らしてしまったよ、音速で。

そうそう、今この部屋にはミーシャとフェイ兄と僕の3人だけである。

まさか王子様が頭を下げているのを他の人に見せるわけにもいかないの、僕がミーシャに頼んで3人にしてもらったのだ。

まあ、本当はミーシャにもそんなところは見せない方がいいんだろうけど、それは僕の保身の為にゆずれねえ

一応これでもか弱き少女なのだから、変態シスコン兄と二人つきりとか全力でお断りなのである。

まあとにかくこれから食事が終わるまではこの3人きりなわけ。
一杯人がいるといろんな意味で落ち着かないしね。

実はこれには深い深い僕の思惑があったのだが、ミーシャもフェイ兄ももちろん気が付けるはずもない。

さて、フェイ兄は謝罪も済んで少し気を緩めているようだし、後ろのミーシャもさつきよりは動きが柔らかくなっているような気がする。

いいタイミングだな。

「あのお、フェイ兄様？ 一つお聞きしてよろしいでしょうか？」

「ん？ 何だい、僕の可愛い妹よ」

「さぶっ……。い、いえ、もう夕食は済まされたのですか？」

「ああ、そういえばバタバタしててまだだったかな」

そこで僕は会心の笑みを浮かべて、両手を胸元でパンと打つ。

「よろしかったら夕食と一緒にしませんか？」

「え？ しかしこれは君の夕食だろう？ それを私が頂くのはちょっと……」

「いいんです。どうせ全部は食べきれないと思っていたところですし。残すともつたいないでしょう？ 本当はミーシャさんにも手伝ってもらいたいくらいなんだけど、さすがにそれはミーシャさんが領いてくれないだろうし」

フェイ兄は困ったような半笑いの顔でミーシャに視線を移す。

ミーシャは相変わらずクールでビューティな感じで立っていて、

兄様の視線に軽く頭を下げる。

たぶんそれは「ご随意に」とかいう感じのゼスチャーなんだろうと思う。

フェイ兄様は仕方が無いなあといいつつ了承してくれた。

くくくく、罨に掛かったな。

僕はすかさず変態ロリ兄の為に椅子を引く。

ポジショニングを間違えると計画が狂ってしまうからね、ここは一番大事なところだ。

ほかんとするミーシャを尻目に、強引にフェイ兄の背中を押しして椅子に座らせる。

次にさつき給仕さんがしていたように、手早く食器を彼の前に並べてゆく。

そして仕上げに、僕が座る椅子と食器類をフェイ兄の隣に持ってきてセッティングした。

「な、何をしているんだい、スワジク？」

「いえ、一度フェイ兄様とこのように並んで食事をしたかったので。いけませんか？」

ピシッっていう何かが割れる音が背後でしたので何かなと思って振り返ると、ミーシャが無表情にお皿をダスターに放り込んでいるのが見えた。

落として割れたのかな？

まあ、とにかく準備は万全、あとはミーシャに給仕してもらおうだけだ。

「さあ、ミーシャさん、よろしく願いします！」

「……はい、承りました」

そうして僕の『テーブルマナー、見て盗んでやるぜ作戦』は、和やか(?)な雰囲気の中開始されたのだった。

ミーシャから時々放射される妙な威圧感はずっと気のせいだ。

それに今は作戦行動中、余計なことに気は散らせない。

僕はフェイ兄の食べ方を横目で必死に真似ながら、下品にならないように気をつける。

男と女で多少違う部分もあるかもしれないが、それは基本が出来てからでいいだろう。

他愛の無い会話の中にも色々と言はなければならぬことは意外と多い。

食材の名前、産地、食前酒に最適なお酒等々。

この作戦を何回か繰り返せば、テーブルマナーや食に関する知識はクリアできるんじゃないだろうか。

意外だったのはフェイ兄ってただの変態ではなく、結構広い範囲の蘊蓄をもってる変態だったということかな。

ま、当分は僕のために生き字引になってもらおうと密かに心に決めた。

7話「人生はすべからくミッションである」

「はふう、疲れたあ」

ベッドの上につつ伏せに倒れこみ、全身の力を抜いてだらける。今日一日変に気を使いながら過ごしたせいで、なにか妙に肩が凝っている気がするのは気のせいだろうか。

外の人のことが分からないので本当に行き当たりばったりに姫を演じたけど、大丈夫かなあと今更ながらの心配をする。

まあ最悪「記憶喪失ですの、おほほほっ」って惚けてしまえば大抵の事は誤魔化せるかも。

「ってというか、外の人の立ち位置が分からないんですけど？」

声に出して不平を唱えるも、僕の訴えは誰にも届かない。

立ち振る舞いはある程度大人しくしていることでクリアできても、知識まではいかんともしがたい。

いつも何をしていたのか。

どんな趣味があつたのか。

好きな色は？

犬派？ 猫派？

友人関係は？

好きな男性のタイプは？

好みの食事は？

公務とか、やりかけの仕事があつたりしたらどうしようとか。誰かに聞くにしても、誰に聞いて良いのかよく分からないし。

メイドさんたちは割とそっけないしなあ。

「ボクに外の人を真似るのは無理だよな、実際。知らないことだらけだしなあ」

ガシガシと乱暴に茹だった頭をかき回す。

暴れるのに疲れた僕は、部屋の天上にぶら下げられたシャンデリアを見つめながら無心になろうと努めた。

味方を作らなきゃ。

僕の窮状を理解してくれて、それでいて世話を焼いてくれそうな人。

やはり候補としてはミーシャかフェイ兄ぐらいの選択肢しかない。ほかのメイドさん目も合わせてくれないし。

なんかなあ、こうチート技能とか持ち合わせてないもんかね。

僕的にはサイコメトリーとかサトリのような相手の心を読むよくなやつ。

この世界に魔法は無いのかなあ。

ぐだぐだ考えているうちに、だんだん瞼が重くなって意識が遠のく。

そして僕のＴＳ憑依の初日は幕を閉じた。

「って、まだ寝ちゃ駄目だ！ 忘れてたよ、外の人のお物チェック！」

なんで今までそれに気付かなかったのか！

日記とかあつたら、凄くいい情報源になるよね。

しかしこの部屋にはベッドと鏡台、夕方に運び込まれたダイニングセットくらいしかない。

ならこの城のどこかに外の人の私室なんかあるんじゃないのか？

凄いや、僕！

賢いや、僕！

昼に気付いたところでメイドさん達が居てなかなか思うように行動出来なかっただろうから、今がベストタイミングだ。

だいぶ夜も更けてきただろうし、もしかしたらみんな寝てるかもしれない。

「ふふふ、ボクにも運が向いてきたあああ！」

本当に運が向いてきたかどうかは別として、とりあえずの行動指針が出来たのは単純に嬉しかった。

が、このまま外に出たのではすぐに誰かに見つかってしまう。

部屋の隅にあったワードローブに飛びついて、何か使えるものはないかと探しまくる。

出てきたのは、外出用の浴衣、ごついバージョン。

これは今来ている絹よりは分厚く、色も割りと暗めのブラウンだ。薄暗い夜の城の中ではきつと隠れ蓑になってくれることだろう。

ついでに鏡台の椅子にかかっている埃避けのカバー。

ちよつと工夫すればほっかむりをするのに丁度いい感じ。

夜といえども外の人のこの銀色の髪は目立ちすぎると思うから、これの中に髪を全部入れてしまおう。

髪が多くて全部入れると喉のところで紐を結べないので、仕方なしに鼻の下あたりで結んでみた。

気分はルパン3世だが、見た目は一昔前のこそドロである。

「探索エリアはこの部屋がある階を風潰しに行こうかな。といっても扉の外には誰か居るのかな？」

抜き足差し足忍び足でこの部屋唯一の扉へとへばりつく。

耳をつけて、じっと外の様子を伺う。

静かだ。

誰も居ないのかもしれない。

と、ごそりという堅い物が触れ合う音が聞こえた。

どうやら誰かが扉の前で立っているようだ。

まあ、それは正直予想できたから落胆はしない。

僕はそのままゆっくりと窓へと移動する。

昼に外を眺めていたとき、ここから隣の部屋のベランダが見えていたのだ。

しかも割りと近い。

僕はそつと音を立てないように窓を開け放ち、ゆっくりと窓枠に跨る。

パンツ履いてないから、直に石の冷たさが股間に伝わるのがなんとも言えず微妙な感じ。

こう何ていうか当たり加減とか、フィットしているみたいなの？

あ、ちよつと前かがみになった方がいいみたいだね。

……。
……っん。

「はっ、イカン、イカン。こんな所で変なことしてたら、本気で頭の中身を心配されてしまう」

気を取り直してベランダまでの距離を目測する。
丁度外の人の歩幅でぎりぎり一杯のところだろうか。
これくらいの距離なら飛び移ればなんとかなるかな？
そう思っ下を見てみた。
見なきや良かった。

「怖えええ」

3階くらいの高さはあるだろうか。
下を歩いている見回りの兵士さんが割り小さく見える。
余計な物音は立てられないなあ。
もう一度ベランダを見ると、さっきより大分遠く感じてしまう。
お、落ちたらさすがに死ぬよね？
ぶるりと体を震わせて、それでも腹を括って窓枠の外へと身を乗り出す。
窓の下にある出っ張りに辛うじて足をかけ、窓枠に両手でしっかりと掴まって足を一本だけ伸ばす。

「と、届かない……」

うん、ごめんへタレたよ。
ふうつと深呼吸して、片手を離す。
半身になって足を伸ばすと、なんとか足が向こうに付く。
窓を掴む手と伸ばしている足がプルプルと震え、落ちるのをなんとか我慢している状況。
そこで重大なことに気がつく。

「足が届いても、この体勢じゃ向こうに飛び移れないよね」

僕はいそいそと部屋の中にもどり、今度は窓枠に足をかけて立ち上がる。

これであっちへ飛び移ればミッションコンプリート。

飛び移れなければミッションフェイルド、ついでにバッドエンドその1である。

目を閉じて精神統一、飛べない距離じゃない。

大丈夫、僕ならやれる。

僕は心の中で掛け声をかけた。

(アイ、キャン、フラーーーーーーイ！)

思いつきり窓枠を蹴って、虚空へと羽ばたく僕。

ごうっという風切り音が聞こえたかと思うと、直ぐに強い衝撃を両足に受けた。

その衝撃を無理に受け止めず、ごろんと前転前受身でなんとか耐えた。

よかった、中学校のときにやった柔道の授業がこんなところで役に立つなんて夢にも思わなかったよ。

ありがとう、脳筋田辺先生。

冷や汗を袖で拭ってベランダに立ち上がる。

後ろを振り返ると、飛び出た窓は風のせいか自然に閉まっていた。これでは帰りはこのルートを選べない。

紐か何かで固定してこなかった自分の迂闊さを呪う。

その時ベランダの向こうから声がした。

「誰かそこに居るの？」

(ヒイヒイ！)

拙い、見つかってしまう！

ベランダから飛び降りる？

いや、出てきた相手を殴り倒すか？

はたまた置物に成りきるか！！

どうする？ どうするよ、僕！

7話「人生はすべてからくミッションである」(後書き)

一部描写加筆修正

8話「よおスネーク。ダンボールは何処だい？」

「誰かそこに居るの？」

窓の向こうから聞こえる女性の声。

ま、まずい！　ここで見つかる訳には行かない。

僕は周りを見回して隠れる場所が無いかを必死に探す。

ベランダからぶら下がってやり過ごす？

力尽きたら死ぬる。

急いで自分の部屋に飛び移る？

不可能ではないかもしれないけど、窓を突き破る事になるので血まみれになるのは必然。

そして最後に目に付く壁の窪み。

縦2m、横幅1.5m、奥行き30cmくらいのアーチ型の窪みだ。

ロマネスク様式がゴシック様式が知らないけれど、この城の設計士さんに惜しみない感謝を送ろう。

その窪みにさっと飛び乗り、べったりと壁に張り付く。

ベランダの曲がり角で丁度声のした窓からは死角になる。

奥まっているから、ぱっと見にはきつと僕がいるなんて分からない筈、……だといいな。

軽い金属音をさせてゆっくりと窓が押し開かれる。

「誰？　誰かいるの？　ミーシャちゃん？」

姿は見えないけどこの声はアニス！

なんかその声を聞いただけで、泣きそうな顔と引けた腰でベランダを覗いている彼女が容易に想像できる。

もしかしてアニスは不幸属性持ちのどじっ娘メイドか、……萌ゆる！

などと腐った思考に陥っていると、段々とアニスの声が近づいてきた。

くっ、まずい、見つかるかも。

「じ、冗談なら止めてよね、ミーシャちゃん。私、怖がりだっけいっつも言ってるのにい」

じわりじわりと近づいてくる声と足音。

怖いなら部屋に戻れと言いたいけど、怖いからきちんと確認して安心したいのかも。

くそっ、僕は壁だ、壁画だ。

心を無にするんだ、僕。

そう個にして全、全にして個、己を捨てて世界と同調すれば、自然と一体になれるんだ。

「あーん、誰でもいいから返事してよ。やっぱり殿下の言うとおり宿直なんてしないで帰ればよかったー、私の馬鹿あ」

アニスがぶつぶつと呟きながら、ベランダの曲がり角までやってきた。

メイド服をきちんと着込んだ上にガウンを羽織って、手には蝋燭が入った銅鐸のようなものを持っている。

普通のランタンなら周囲全体を照らすのでもしかしたら一発ではれたかもしれないけど、アニスの持っているのは懐中電灯みたいに直線的に照らすだけのものだ。

これなら壁にへばりついていて僕まで光がさほど届かない。

「誰も居ませんねえ？ ふう、よかったあ。本当に誰か居たら心臓が止まる所だったよ」

ようやく安心したのか、声にも少し明るさが戻っている。

彼女が居るのは丁度僕の目の前。

そう、そのまま外の方に向かって回れ左してくれたら何も問題はないから！

僕は必死に心の中でアニスをお願いをする。

こっち向いたら駄目だからね！

さらに念押し。

僕のテレパシーが彼女に届いたのか、大きく一つ頷いてくるりと体を回転させた。

右回りで。

「……………」

「……………」

丁度僕と向かい合う形になって固まったアニス。

銅鐸みたいな照明器具が、下から斜め45度の角度で僕を照らす。

しばらく口をぱくぱくとさせていたアニスは、突然糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた。

なんだろうっ凄い罪悪感。

倒れこんでいるアニスを肩を落として見下ろす僕。

このまま放っておいたら絶対風邪引くよね。

ちよつと彼女が出てきた部屋を見ると、いろんな道具とライディングデスク、ベッドが置いてある物置の様な部屋だった。

あのベッドの上にアニスを載せておけば、風邪引かないよね？

棚に有った少し厚めの綺麗な毛布を手に取り、アニスの元へと駆け戻る。

毛布を床に敷き、握れるだけの長さを残してアニスの背中と足を包み込めるように調整する。

これで簡易の布ソリの完成である。

非力な僕ではアニスを背負うとか出来ないから、これで引きずっていくしかない。

まあ毛布は一発で駄目になるだろうけど、いっぱいあったしいよね？

とまあ、そんなこんなで大量に汗をかいたけど、なんとかアニスをベッドに寝かせることが出来た。

そして部屋を見回すと、扉が2方向にあるのが見えた。

一つは質素な扉、もう一つは割りと豪華っぽい造りのやつ。

「これはきつと豪華な扉の方を先に調べるべきだよな」

そういつて僕はそつとドアノブを回して扉を開いた。

薄暗くて細部まではよく分からないけど、窓際にあるテーブルと椅子、暖炉まえに置かれているソファが見える。

壁際には小さい書棚があって、薄っぺらそうな本がいくつか並ん

でいた。

「へえ、凄いや。部屋の中にミニチュアの植物園まであるんだ」

ちよろちよると水の流れる音を聞きながら、部屋の奥にある少し大きめの机に向かった。

机には引き出しが左右合わせて6つある。

そのどれにも鍵などかかっておらず、取っ手を引けばするりと開く。

全部の引き出しを色々探ってみたら、週刊誌くらいの大きさの革の本を2冊見つける事ができた。

一つは錠付き、もう一つは錠無しだ。

錠無しの方の本を開けてみると、予想通り何か色々書き付けられている。

暗くて内容までよく読めないけれども、字の綺麗っぽさからいつて外の人のものじゃないかと推測する。

その時、隣の部屋から声が聞こえた。

アニスが目を覚ましたみたい。

「せ、センドリックさ〜ん。センドリックさああん」

泣きそうなアニスの声を聞きつけたそのセンドリックさんとやらが、隣の部屋に駆け込む音が聞こえた。

「どうなされました、アニス殿」

「べべべべ、ベランダ……、へへへ、変なひひひ人ががが」
「な、何ですと？ 賊か?!」

どうやらセンドリックさんは賊（実は僕のこと）を探しにベランダへと向かったようだ。

むふふ、チャーンズ。

きつとセンドリックさんは僕の部屋の前にいた人だろう。

さつきも扉の外には音が一つしかしなかったから、いまなら僕の寝室まで誰にも会わずに辿り着けるはず。

ナイスアシスト、アニス!!

僕はなるべく音を立てないように、今度はアニスのいる宿直室ではなく廊下へ続くであろう扉を押し開く。

案の定廊下には誰も居ない。

僕は胸に2冊の本を抱えて足早に寝室へと向かう。

予想通り、部屋の前には誰も居ない。

僕はすぐさまドアを開いて中へと滑り込んだ。

そのまま本をベッドの上に放り投げ、茶色の分厚い浴衣っぱいのを脱いでワードローブへ突っ込む。

頭に被っていた椅子のカバーもむしり取り、ベッドの枕の下に2冊の本と一緒に押し込んだ。

ほっと一息ついたところで、ドンドンとドアがノックされる。

「あ、は、はい、どうぞ！」

「失礼いたします姫様。衛士のセンドリックです。こちらにたった今、何者かが入り込んできませんでしたでしょうか？」

声を掛けると同時に、白い鎧に身を包んだ敵ついおっちゃんが入ってきた。

腰に下げている剣に手をかけて、いつでも抜き放てる体勢に鋭い目つき。

さすが衛士さん、なんかオーラが違うわ。

「さ、さあ？ 私は寝ていたのでよくわかりませんが」

「……さようでございますか？ して、あちらの窓は最初から開けっ放しでございましたか？」

「いえ、あそこは私がきちんと戸締りいたしました！」

僕がセンドリックさんの問いに答える前に、後ろから着いてきていたアニスがその問いに答える。

そういえば、就寝前の戸締りに彼女が来ていたっけ。

センドリックさんはすばやく窓に近づくと、さっと周囲を見回して不審な点が無いかを調べている。

「ふむ？ なにやら微かに窓枠に付着していますな……。なにかの粘液が乾いたのか、これは？」

「ままま、魔物ですかね？ お城の中まで魔物がはいってきたんでしょうかね？」

「いや、断定は出来ません。とにかくお二方はきっちり窓と扉を閉めて外へ出ぬようお願い申し上げます」

「は、はい、分かりました」

せ、センドリックさんがマジマジと見てたのってまさか……、くっ、この聡明な僕にして一生の不覚！ さっきちゃんと確認して拭いたときや良かった。

その晩は結局、お城中で居もしない賊探して一晩中てんやわんやしたそうである。

「ごめんよ、皆。」

*アニスが見たスワジクのポーズ 参考資料「古代エジプトの壁
画調マリオートシャツ」

9話「そういえば僕って肋骨にひびが入ってたよね」

「全治1週間といったところでしょうか」

サイドボードの上に置かれたボウルの中で、丁寧に手を洗うドクター・グエロ。

ここはいつもの僕の寝室で、僕はベッドの上で寝転がっていた。本当は起きたいんだけど、呼吸するたびに鋭い痛みがあるので大車をとって寝転んでいる。

「……姫様、なにか激しい運動のようなものでもされましたか？」

例えばダンスの練習などですが」

「い、いえ、特に激しい運動はしてないのですが」

「そうですか。とりあえず骨は折れてはいませんが、日常生活に特に支障があるわけではありません。が、患部に負担のかかるような行いは厳に慎まれたほうがよろしいかと。さもなければ……」

「さもなければ？」

「ぼきりと骨が折れてしまいますぞ？」

(ひいひい、それは嫌だ)

骨が折れるところを想像して引き攣る顔を、なんとか笑顔でごまかす。

昨日あれだけ無茶したのだから当然か。

気合入ってるときはあまり感じなかったけど、朝起きたらすっぴん痛いんだもんなあ。

仕方が無い、当分は大人しくしておこう。

といつても大きな動きや深呼吸をしない限り大丈夫そうだけどね。一人うんうんと頷いている僕を放置して、ドクター・グエロはさつさと廊下へ出て行く。

彼と入れ違いに、今度はフェイ兄とセンドリックさんが入ってくる。

「大丈夫かい？ あんまり無理をしてはいけないよ」

「はい、有難うございます、フェイ兄様」

「少しだけ部屋の中というか、窓の辺りを調べさせてもらおうよ」

「……は、はい、どうぞ」

そう、昨日の賊侵入事件がまだ未解決なのである。

犯人が目の前に居るのだから当然っちゃ当然なんだけどね。

だからって何もあの窓に執着しなくてもいいじゃないのかと。

これなんて羞恥プレイなの？

元男だから恥ずかしくないだろうって思ってたけど、もうねマジ死にそうなくらい恥ずかしいんですけど！！

「昨日私がベランダへ出たとき、丁度窓が閉じられるのを見ました。それで慌ててこちらの部屋に入ったところ、閉まったはずの窓が再び開いておりました」

「なるほど。賊が一度ここに入ったが、センドリックが気がついたので慌てて逃げたのか」

「恐らくは。そしてその物証として残していったのが恐らくこの窓枠に付着した粘液の跡です」

（センドリックさん、それ物証ちゃう！ ボクの……や、って言うるかああああー！！）

僕の心の突っ込みにもめげず、まじまじと窓枠を見つめる男が2人。

その時、僕は信じられないものを目撃してしまった！

フェイ兄が乾いたそれを爪で削り取り、指に付けてぱくつと口に啜えたのだ。

瞬間、僕の中の加速装置がフル稼働。

ベッドの上の枕を片手で掴むと、カー杯フェイ兄の頭に叩きつけた。

「くっつ！」

脇に走る激痛に思わずしゃがみ込んでしまう僕。

死にそうな恥ずかしさに衝動的に突き動かされたけど、これって結構やばい行動だよな。

叩かれたフェイ兄は不思議そうな顔をしてこちらを見下ろしている。

激痛に喘ぎながらも、僕は一応この変態に注意する。

「フェイ兄様、そ、そんなものを舐めるなど……」

「毒かどうか確認したかっただけなんだよ。飲み込むつもりは無かったんだけど、君が急に殴るもんだから飲み込んでしまったじゃないか」

「ふえ?!」

「まあ、毒だとしても即効性のものではないようで僕も安心したけどね」

「なるほど、確かに刺激はありませんな」

って、センドリックさんまで何しちゃってんの！！

顔を真っ赤にして蹲る僕を不思議そうに見つめる2人。

フェイ兄がぽんと手を打って、なんか感動したような顔をしている。

「もしかして、我が愛しのリトルプリンセスは私の身を案じてくれたのかな」

(違えよ、このロリ変態)

返事する気力もなく、がくりと頭を垂れてしまう。

それが無言の肯定と受け取られたのか、ますます間違った方向へ理解されてしまった。

「ありがとう、スワジク。君がそんなに私のことを心配してくれていただなんて、本当に嬉しいよ」

そういつて僕を軽く抱きしめて額に優しくキスされた。

欧米人ならこれは純粹な挨拶みたいなもんだ。

欧米人ならこれは挨拶なんだ。

このキスは握手みたいなもん。

鳥肌が浮いた手を必死に擦りながら現実逃避する僕。

悔し涙を浮かべながら、うーと唸って睨み付ける。

「殿下、これを！」

馬鹿なことをやっている、いつの間にもやらセンドリックさんが僕のベッドの枕元にたつて何かを指差していた。

フェイ兄もそれに興味を示してベッドに駆け寄る。

そして僕は一人、自分のしてしまった失敗に呆然としてしまう。

彼らが僕のベッドで見つけたもの、それは昨日苦勞して手に入れた外の人の日記。

「これは何だ？」

そういつてフェイ兄が錠無しの日記を手にとってパラパラと読み始めた。

あまりの事態の急展開（僕的に）についてゆけず、読むなど抗議することすら忘れてしまっていた。

フェイ兄の顔が段々と深刻なものに変わってゆく。

あ、マジモードだ。

何が書いてあったんだろう、あの日記に。

も、もしかしてフェイ兄の変態チックな所業が羅列してあったりとか。

うん、たぶん外の人もあのシスコン野郎に辟易してて、愚痴をあれに殴り書きしていたに違いない。

どうでしょう！

「スワジク、これらは君がここへ持ってきたのかい？」

そんなことを認めたら一連の騒動が僕の仕業だとばれてしまう。
だから僕は条件反射的に、カ一杯首を左右に振った。

「この本の中身を見たりはしたかい？」

「い、いいえ」

「そうか、よかった。センドリック！ 敵の狙いが分かったぞ。急いで衛士隊の幹部を招集しろ。ついでに侍女長と主だったスワジク付の侍女も集めろ」

自分の日記なのに思わず中身を見てないと言って大丈夫なのかと思っただけど、割とそこはスルーみたい。

っていうか、敵って何？ 狙いつて何？ な状況なのですが、誰か教えていただけませんか？

ばたばたと足早に出てゆくフェイ兄とセンドリックさん。

ふう、ようやく静かになったか。

散らかした枕をベッドに戻そうと立ち上がる僕の視界の隅にミーシャの姿が見えた。

なんの意識もせずそちらへ目を向けると、ミーシャはじっと窓枠についた僕の……を眺めている。

「えっと、ミーシャさん？ どうかしました？」

「いえ、別に……。ククッ」

（ななななんですか、その黒い笑い方は！ ま、ま、まさか、見破

られた？ まて落ち着け、ボク。仮にあれがそうだと見破られたとしても、その主がボクだって証拠は何処にもない。大丈夫だ、落ち着け！)

「私も何やら呼び出されるようですので、しばらく下がらせていただいでよろしいでしょうか？ あとで代わりのものを遣しますので」

恭しく膝を曲げ頭を垂れるミーシャの背後に、巨大なものの巢を張った女郎蜘蛛を僕は見たような気がした。

なんだろう、知られてはいけない人に知られてしまったような気がする。

掠れるような僕の返事を聞いてミーシャは優雅に部屋を出て行った。

その頃廊下を歩いているフェイタール殿下と衛士センドリック。

「スワジク姫ですが、大分雰囲気や素行が変わられましたですな、殿下」

「ああ、私の身を案じて泣いて怒るなど今までに無かったことだ。これは割りと早く落とせそうな感じだな」

「しかし蛮行姫とまで言われたあの方が、まさかの変わりようですね。」

満足そうに頷くフェイタールに、センドリックが苦笑いをしながら疑問を投げかけた。

その問いにフェイタールも少し唸りながら考える。
あまりに変わりすぎているスワジクの性格。
いっそ別人であると言ってもらった方が納得がいくほどである。

「ドクター・グエロも言っていたのだが、落水事故を起因とする記憶の欠落、幼児退行、不都合な記憶の封印など説明をつけようと思えばいくらでもできる。だが問題はそこじゃない。問題は、わが国にとってあの者が御しやすい人物か、そうでないかだけだ。中身など関係ない」

「ま、確かにそうですね。ですが下々の者はそうは思いますまい」

顎を扱きながらセンドリックが苦々しげに呟く。

フェイタールも彼の言うことに頷くしかなく、実際目の前にあるこの本の存在がそれを証明していた。

「侍女の報告書と極秘報告書を姫の枕元に隠し、侍女達の本音が彼女の目に留まるように謀るか」

「実に確実で嫌らしい手ですな」

「これを読めば、あの壘行姫が激昂するだろう事を賊は熟知していたということだからな。」

事が成れば、今居る侍女達全員の首が飛んでもおかしくない。打ち首にならなくても、ひどい罰が与えられるだろうな。そうなれば誰かがまた第2、第3の落水事故を計画しないと限らない。いや、高い確率でそうなるだろう」

「そしてそれは衛士には止めるすべが無いところで実行されるでしょうな」

「実に狡猾な策だ。くそっ、どっちが真の敵なのか、確証さえ掴め

ればな」

「中原のラムザスカ、帝国か。前門の虎、後門の狼つてところですか」

「鼠をもう少し潜らせるべきかもしれんな」

「それは私にはなく、ミザリーに申し付けてください」

「そうだな。とにかく今は見えざる敵に対して、隙を見せないようにするしかないな」

「まったくしんどいことですがね」

どんな嫌な人物であろうとスワジクというこの国の弱点は、死ぬ気で守っていかねばならない。

それが並大抵のことではないことを2人は熟知している。

何せ国内外にこの弱点は知れ渡っているのだから。

『ゴードイン王国を潰すのに兵はいらぬ、壘行姫をちよいとつづけばすぐ滅ぶ』

侍女や兵士の中に潜む反スワジク勢力をどうやって説得するか、

二人は深いため息をついて会議室へと入っていった。

10話「ちょっと待ってよ。今までの苦勞って一体……」

「ふう……」

怪我に響かないように、軽くため息をつく。

なんで気を使ってまでため息をつかなきゃいけないのかというと、結局振り出しに戻ったからだ。

折角の貴重な資料（？）を奪われ外の人の事を知る機会を失った。あんなに努力したのがすべて無駄になって、残ったのは肋骨のひびばかり。

そりゃため息の一つもつきたくなりますって。

それに扉の左右に立っているメイドと衛士君っぽい人が、こんなんでいうか凄いことになってるし。

「あ、あの、少し楽にされてはどうか？ そんなに何時間も立ちっぱなしは疲れませんか？」

「いえ、自分は慣れておりますので、お気遣い無用にお願いします」

「ひゃ、ひゃい！ わ、私もな、慣れておりますのでおおおおお気遣いなさりやないでくだしゃい」

いや、すっごい気になるんよ。

青い顔でカチコチに固まっている衛士君はなんかすっごい新人ほいし、同じくチワワが冷蔵庫に入っているみたいにブルブルと震えているメイドさんは正視に耐えないほど哀れだし。

よく見るとこの衛士さんってまだ結構若いみたいだねえ。

背は割りと低くて、栗色の髪を後ろで無造作に束ねている。

ソバカスがあるせいもあって、割と愛嬌があり幼い感じのする男の子だ。

15歳くらいかなあ？

装備も鞄もぴかぴかだから、もしかしたら衛士デビューしたての人なんだろうな。

対するメイドさんは、ミーシャやアニスとは色違いの服を着ていてちょっと新鮮かもしれない。

こっちはなんと緑色の髪をしていて、ミーシャと同じようにアゴのところで切りそろえている。

割と大きな瞳が印象的な可愛い子なんだけどね。

なんていうか彼女の脅えっぷりがアニスを髣髴とさせて無性にいちめたくなる。

(まあ、冗談はさておき、本当に3時間も立ちっぱなしは衛士君はともかく、あのチワワメイドさんには拷問だろうに)

仕方無しに僕は窓際からダイニングテーブルへと移動し、椅子を引きずり始める。

2人はまったく同じ挙動で私に注目しているのだが、手伝おうとかそういう気配は無い。

メイドがそれでどうかと思うけど、まあ下手に邪魔されるよかいい。

脇の痛みを庇いながら、椅子をメイドさんの横へ持っていく。

てかこれ割と重い。

昨日これを楽し々と持っていたミーシャって割と力持ちなのかもしれないなあ。

セッティングが完了したので、横に立つメイドさんに視線を移す。なんか凄い勢いで脂汗を垂らしてるんだけど……？

「あ、もしかしてトイレ我慢してる？」
「はひゃ？ い、いえ、そんなことは」
「我慢は体に毒だから、少し息抜きしてきてはいかがですか。疲れただしょうしね。ただし、10分休んだらすぐ戻ってくることにいいますか？」

椅子に座らせるよりも先に休憩をさせた方が良さそうなので、そういつて彼女を扉の外に放り出す。

僕の視界から外れたらさすがに彼女も息を抜けるだろうしね。ぼかんとした顔で僕をみる衛士君。

ふふふ、今度は君の番だよ？

メイドさん用に持ってきた椅子をずりずりと動かして衛士君の横に持っていく。

満面の笑みで彼を見上げ、椅子の座面をぼんぼんと叩いて座れと促す。

「い、いえ、私は大丈夫ですから」

「ええ、分かっています。でも見ている私も結構疲れるのですよ？それにそんなに緊張してはいざと言つ時に体が動きません。だから少し体を休めても誰も文句はいいませんよ」

しばらく衛士君は迷っていたみたいだけれども、椅子の誘惑には抗えなかったのか割と素直に座ってくれた。

そしてふうと大きいため息をついたりしている。

よっぽど緊張していたのだろう。

ま、要人警護になるんだから緊張は当然か。
それに賊が入り込んでいるという設定だしねえ。
もっともその賊は目の前にいたりするんだけど。

「はっ、も、申し訳ありません。みつともないところをお見せしま
して」

微笑ましげに衛士君をみていたら、何を勘違いしたのか焦って謝
ってくる。

僕は片手でそれを抑えてながら、これはもしかしてチャンスじゃ
ないのかと思った。

今までのメイドさん達じゃこんな隙なんて見せてくれなかったし、
喋ってもくれなかったしね。

そういった意味では、ここに臨時で派遣された衛士君とメイドち
ゃんは格好の餌食。

「失礼ですが、あなたのお名前は？」

「はっ、私はボーマン・マクレイニーと申します」

「どちらのご出身ですか？」

「はっ、リバーサイド州都出身であります」

「リバーサイドですか。あまり記憶にないのですがどんな所なのか
お話していただけませんか？」

「はあ。えつとですね、うちの州都はその名の通りターニス河沿岸
に栄える商業都市で……」

ふふふ、まず掴みはおっけー。

緊張と警戒心を解してから、欲しい情報を引き出す！

くくく、僕はもしかしたら優秀な尋問官になれる素質があるんじゃないかなろうか？

自分のお国自慢なら口も軽くなるんじゃないかと思っていたら、案の定乗ってきた衛士君の喋ること喋ること。

緊張の反動つてのもあるのかもしれないが、ここは笑顔で聞き役に徹する。

ずいぶんと調子よくお国自慢をしてくれていた彼が、突然はっとして立ち上がった。

何事かと思うと彼はダイニングテーブルへと向かい、椅子を片手に1脚づつ持って戻ってきた。

一つをメイドさんがいたところへ、そうしてもう一つをなんと私の立っている後ろへ置いてくれたのである。

なんとというか素直に感動。

ちよつと遅いけど、若いのに気遣いが出る人なんだねえ。

「自分だけ椅子に座って申し訳ありませんでした。レディを立たせておくなど、騎士としてあるまじき行為でした」

「いえ、気にしないでください。私が無理やりポーマンさんを座らせたのですから」

と当たり障りのない返答をしつつお互い笑い合う。

何これ、すっぱー好感触じゃん。

「でも正直以外でした。あんまり人の噂もあてにならないものですね」

「噂？ 噂とは私に関する噂ですか？」

「ええ、姫を傍で拝見する機会を得られて確信しました。あの噂はデマですね。きっと姫を妬む誰かが嫌がらせて流したのでしょう」「なるほど噂ですか。どんな噂なのでしょう？」

「いえ、姫様のお耳を汚すほどのものではありません。お氣になさらないほうがいいでしょう」

「でもやはり自分の噂は氣になるものです。あまりいい噂ではなさそうですが、それを知るのも姫としての私の役割かもしれません」

「つていつかそこが知りたいんじゃない、キリキリ話さんかい。」

笑顔でプレッシャーを与えると、迷いつつもこれは私が言った話ではないと前置きつきで話してくれた。

曰く、国一番の我侂者である。

曰く、人を人とも思わぬ所業に幾人もの宮仕えが涙に枕をぬらし
ているらしい。

曰く、氣に入らないという理由で侍女の首を切らせたことがある。

曰く、こんな田舎街の城は辛氣臭いので都の風を入れてやる、と
突然宣言して北の塔舎の全面改装をした。

ちなみにその費用は国費の1年分に相当したらしい。

曰く、フェイタール殿下を小姓のように扱う身の程知らずである。
等々。

えつと正直引いた。

これがすべて本当の話なら、外の人あんな人としてどうなのよ？

「これらはあくまで姫の姿を見たこともない者たちの間での噂です。
私のように姫様に直にお会い出来れば、そのようなデマなど一笑に
ふせましよう」

たかが椅子を勧めたくらいでそこまで持ち上げられてもこそばゆいだけであるけれども、まあ悪い気はしない。

ま、所詮噂だしね。

でも外の人の取っ掛かりが出来ただけでも大収穫である。

話が弾んでいると、恐る恐るといった感じで外に出したメイドさんが入ってきた。

「ちょうど良かった。話しつかれて喉が渴きましたし、みんなでお茶にしましょうか」

「ひゃ、ひゃいつ」

そういつて二人をダイニングテーブルまで引っ張っていき、3人で割りとおもしろいおしゃべりが出来た。

うん、憑依2日目にしてはいい感じ。

その茶話会は、専属のメイドさんが戻ってくるまでの間続いたのであった。

11話「若き2人の門出にて」

「で、お前は衛士であるにも関わらず、姫様と一緒にお茶を飲んでいたわけか？」

「はい」

「はあ？ 何を考えているんだ？ 相手はあの蛮行姫だと教えただろうが！ わざわざ足を掬われに行つてどうすんだ、馬鹿が」

割と広い部屋の中に、野太いだみ声が響き渡る。

近衛隊舎の隊長室に呼び出された俺は、さっきまで一緒にいた侍女のニーナと共に近衛隊長と侍女長の二人に睨まれ、怒鳴りまくられていた。

確かに着任前には扉の前から1歩も動くなとは言われたし、それを守れなかった自分も悪いと思う。

が、それが何故あのプリンセスの悪口に繋がるのかが分からない。それにあの人が誰かの揚げ足を取るような人には、俺には見えなかった。

俺のそんな態度にヒゲ面の隊長は心底うんざりしたような表情で、隣に佇む氷の様な雰囲気侍女長へと視線を送る。

「ニーナ、貴方もです。主と同じテーブルにてお茶を飲むなど、侍女としては許されざる行為なのは今更の話ですよ。貴方はもう少し賢い人物だと思っていたのですが、どうも違つたようです」

「じ、侍女長。でもですね、姫様が是非にと言われて」

「専属の侍女の方々は、全員こちらが満足できる仕事をしていただいております。彼女達に出来て、貴方に出来ない理由があるのですか？」

「い、いえ、それは、そうなんですけれども」

侍女長の刃の様な視線と声に、しなしなとニーナの声も背中も萎れてしまっている。

なんだろう、俺はぜんぜん納得いかない。

そりゃ、先週実家から上京したばかりだから右も左も分からないし、ましてや近衛の仕事なんて全然慣れていないから失敗も一杯している。

姫様の人となりだつて知らないし、他の王族の人のことだつてまったく知識が無い。

俺はそんな新米だから、自分のミスを怒られるのは分かる。

でも今回のこれは違うだろう？

姫様は明らかに会話を欲していたし、楽しそうに笑ってくれていた。

護衛としてすぐに動けないようなことをしていたのは駄目だけど、俺が怒られているのはそこじゃない。

あのお姫様と一緒に会話していたこと自体をなじられている。

何故だ？

「お前分かつているのか？ 不敬罪と言われて首を切られてもおかしくなかつたんだぞ！」

「そうはなりませんでしたっ！」

「それは現時点での結果論だ！ 明日になれば、ポーマンが不敬を働いたと言われて、お前抗弁出来るのか？ 不敬罪は軍法会議を経ずに即死刑だぞ。それはそこのお嬢ちゃんも一緒だ！！」

「ひいう、ご、ごめんなさい」

「謝ったつてもうどうにもならんわっ！！」

ヒゲ面隊長の怒声に涙と鼻水を垂らしながら、必死に頭を下げる
二ナ。

「ただ俺は下げない。」

蛮行姫の噂であの人の事を讒言するのなら、死んだって絶対下げてやるもんか。

その反抗的な態度が気に入らないのか、ヒゲ面隊長はふんつと鼻から息を噴出す。

ヒゲ面（もう隊長なんて呼んでやるかってんだ）の怒声が収まれば、今度は侍女長が言葉を継ぐ。

「本来であれば、始末書と王族への謝罪文、合わせて違反金の納付が妥当な処罰ですが……」

「それではお前ら2人を守ってやれねえんだ」

苦虫を噛み潰したような顔をするヒゲ面と、一切の感情を表さない能面侍女長。

俺は悔しい気持ち在必死で噛み殺し、視線で射殺すくらいの覚悟で目の前の2人を睨みつける。

そんな俺の態度に心底愛想が尽きたようなヒゲ面は、引き出しから手のひらよりも少し大きいくらいの布袋を2つ机の上に放り出した。

「お前達は今日付けでクビだ。何処へなりと行くがいい。これはせめてもの饞別だ」

「そうですかっ、よく分かりました！ こんな騎士団、こっちから願い下げだ！」

俺は支給された剣を机の上に叩き付けると、饑別とやらには一切手を付けずさつさと隊長室を後にする。

ニーナの号泣しながら謝る声が聞こえたが、それよりもこんな奴等と一緒に空気なんか吸いたくなかった。

隊舎にある自分の部屋から、皮袋1つ分の自分の荷物をもって外へ出る。

そこには木の下で人目を憚らず泣き続けるニーナがいた。

彼女には正直悪いことをしてしまったと思う。

お茶と一緒にという誘いにぐずる彼女の背を押したのは、紛れもなく自分だろうから。

ふうとため息を吐いて、ニーナに近づく。

「おい、ニーナ。何時までも泣いていたってどうにもならないぜ？」

「ぶえっ、ぶえっ、ひっぐ。だ、だっで、わだじ、いぐどこないぼん」

「はあ？ 実家は？ そう遠くないんだったら護衛ついでに送ってやるよ」

「ヴぁ、ヴぁたじ、いっ、いっ、ごじだもん」

「五時？」

「うん、いっ」

なんか意思の疎通に難があるように思えるのだが、泣いている女

の子を放っつては騎士の名折れ。

綺麗に手入れされた緑色の髪に手を載せて、がしがと左右に揺らしてやる。

「やゝくべくで〜」

「しょうがねえ、持ち合わせあるからしばらく面倒みてやるよ。城下町ならどっか働けるとこあんだろ？」

「……」

泣きながらもしばらく考えてから、ゆっくりと頷くニーナ。

はあ、なんか雨に濡れた小動物みたいで放つて置けないんだよなあ。

ぐずぐずと鼻をすすりながら、ニーナは木陰に隠してあつた荷物を引つ張り出してきた。

なんだろうね、泣きながらもこの準備の良さは。

「いぢがらどいぢくの？」

「そうだな。取りあえず町の北側へ行こうと思う」

「……びべざま？」

なんでそういうところだけ女つて勘が鋭いのかね。

確かに北側の町なら、場所によつたら姫様の部屋がみえるところがあるかもしれないと思つたのも確かなんだけど。

「ばーか、生意気いつてんじゃねーよ。面倒みてやんねーぞ？」

「おでえざん」

「は？ 何？」

「わだじのぼうが、おでえざん」

「え？ マジ？ もしかして年上？」

無言で頷くニーナに、信じられねえとつぶやく俺。

しかし、それでも主導権は渡さねえ。

「けつ、当面養ってもらうんだから、生意気いつなよ」

その俺の言葉にも、ニーナは首を横にふるふると振って否定の意を表す。

おもむろにカバンの中から皮袋を一つ出してきて、その中身をこちらに見せた。

新金貨がぎっしりと詰まっているのが見える。

よくよく観察すると、これってさつきヒゲ面が饒別だといってよこしたものじゃないのか？

首にした人間にこの金貨って、意味がわからん。

余計なことを喋るなってことなんだろうけどなあ。

でもやっぱりそのやり方は気にいらねえ。

ふと気になってニーナのカバンを覗いて見ると、同じような皮袋がもう一つ入っている。

「なあ、その皮袋って俺の分のじゃね？」

「またもや首を横にフルフルと振って否定する二一ナ。」

「いや、待てよ！ これあの時の袋だろ？ なら片一方は俺のじゃん！」

「ぢがう。ポーバン、ごでむじじでいった」

「なにがめついいこと言ってるの！ ちゃんと山分けしろよ。一緒に生活するんだろうがよ！」

「やだ」

「なんでだよ！ お前ずりいよ！」

そんなことを言いながら俺達はこの胸クソ悪い城を後にした。

途中北の塔舎の横を通るとき、なんとなくスワジク姫の姿を探してみる。

夕陽の中、寢室の窓から北の方を物悲しげに見つめる姫様の横顔が小さく見えて、無性に悲しくなった。

（すみません、姫様。俺、あなたの様な人の為に剣を捧げたかったのですが、もう無理なようです）

頭を大きく下げて姫に謝罪するけれども、それは彼女の視線には入らなかつたようで変わらず北の町並みをじっと見つめていた。とても悲しげに。

西日が差し込む窓から、近衛隊長のコワルスキーはこの城を去っていく2人の若者をじっと見つめていた。

「もう二人は行きましたか？」

部屋にある応接セットに腰掛けて侍女長のヴィヴィオは、琥珀色の液体を煽るように喉に流し込む。

綺麗にアップにしていた髪は無造作に下ろされ、細身の眼鏡は机の上に置いてある。

まだ定時には早いのだがなとコワルスキーは苦笑するしかない。もつとも彼とて気分はヴィヴィオと同じく、とつと飲んでウサを晴らしたがっているのだが。

「何が悲しくて前途有望な人材の首を切らなきゃならんのか」

「仕方ないでしょう？ レイチェルの二の舞は御免だわ」

「気持ちは分からんでもないさ。俺だって自分の部下がいわれの無い罪で刑死させられたら、何をするか分かったもんじゃないからな」

「あの子達、最後までこつちの気持ちなんて分かってくれなかったわね。報われないわ」

「言うなよ。それが俺たち上司の仕事であり、職責だ。恨まれようとも、そのときの最善を尽くさなきゃならないんだ」

「……そうね。……でも、報われないわね」

「まあな」

コワルスキーは苦笑いをしつつ、バーからグラスを取り出して自

ら酒を注ぐ。

彼の手にあるボトルを途中でヴィヴィオがひったくり、空になった自分のグラスに残りを勢い良く注いだ。

お互いのグラスをこつんと当てて、門出の祝辞を唱和する。

「若き二人の同胞に、豊穰なる未来が訪れんことを」

12話「そっだ、お風呂へ行こう！」

皆様、只今から僕ことスワジク姫は、お待ちかねのお風呂に入ります！

ヒヤッハー！ お湯だ、お湯だー！

などという世紀末的な脳内アナウンスは横において、真面目な話こっちの世界での始めてのお風呂なのです。

昨日お風呂入ってなかったし、割と体がべた付いて気持ち悪かったんだよな。

それに初めてこんなに長く寝室から離れられたよ。

純粹にそこが嬉しかったりするんだな、これが。

とは言うものの、お風呂って何処だ？

なんで皆僕の後ろを歩くわけ？

お陰で迷っちゃまったじゃねえか、団体で……。

「……」

少し涙目で後ろを振り返ると、文句を言うわけでもなく付いてきている2人のメイドさん。

スウィータというちよつと勝気そうなツインテールと、もう一人は名前知らないモブキャラっぽい人。

二人は僕の着替えやら何やらが入っている包みを、恭しく前で抱えながら黙って付いてきている。

ああ、もちろん視線なんて合わせてくれない。

ふ、フン！ 寂しくなんかないんだからねっ！

それはそれとして、どうやら新しい分岐点のようだ。

選択肢は4つ。

- 1、程なく行き止まりの壁が見えるけど、途中に扉が2つほどある廊下を直進する。
- 2、中庭の方に向かって続く廊下を進む。
- 3、なんかホールっぽいところへ続く廊下へ行ってみる。
- 4、来た道を戻る。
- 5、スウィータさんに泣き付く。

4つの選択肢なのに、1つ余分なのは最後のが隠しコマンドだから。

そして僕は躊躇せず最適の選択肢を選ぶ。

くるりと振り返り、にこにこ満面の笑みを浮かべてその名を口にする。

「あの、スウィータさん。ここってお城のどの辺りでしょうか？」

「はい、ここは政務館1階、来賓対応区画になります」

「来賓ですかあ」

「はい、来賓です」

分かったような振りをしてうんうんと頷く僕に、スウィータは無駄のないシャープな答えを返してくれる。

来賓って、お客様ってことだよねえ。

そんな区画を寝巻き姿でうろろろするのはさすがに失礼だよね、お客様がいたらさ。

答えるべきことは答えたと言わんばかりのスウィータの反応に、僕は苦笑いを浮かべるしかない。

これってあれだよ、イジメ？　だよね。

女のそれは陰湿だって聞いたことあるけど、なるほどこれがそう

なのか。

でもこの状況で苦勞するのは僕もだけど、スヴィータ達も同様に引つ張り廻されているのだからイジメって訳でもないのか？

ううむ、困った。

「これは姫殿下、いかがなされました？」

「ふえ？」

思わずへんな声を上げて振り返る僕の目の前に、いつぞやフェイ兄に付いてきていた黒髪イケメンが立っている。

確か名前はレオだったか。

んー、この人に聞いたなら教えてくれるかな？

あるいは案内してくれたら一番嬉しいんだけどなあ。

「ふむ、湯浴みに行かれるようにお見受けしますが、何故わざわざ正反対の政務館の方までこられたのですか？」

「え、えっと、ちょっとぼうつとしていて、道を間違えたようです」「なるほど」

顎に手をやってしばらく僕を見つめるレオ。

なんとなく落ち着かずに、そわそわと体を動かしてしまふ。

そんな僕を見てか、レオは優しく微笑みながら手を差し伸べてくれた。

比喩的な意味でも、文字通りの意味でもある。

「丁度私も仕事が終わって帰ろうと思っていたところです。よろしければ途中まで一緒にしましょつか？」

「えっと、よろしいのでしょうか？」

「お嫌でなければ、是非」

おおー！　なんて自然なフォロー。

うん、僕の中のレオに対する好感度を1つ上げておかないといかんね。

これがフェイ兄なら抱きついて頬ずりしながら風呂まで引きずられた挙句、一緒に風呂にまで入ると言うに決まっている。

悔りがたし変態ロリスコン兄め。

変な妄想の中でフェイ兄と戦っているうちに、レオが自然な感じで僕の隣に来て半歩前を歩き出してくれる。

これがいい男というものだろうか。

僕が女なら、マジ惚れるよ。

いや、体は女だけどさ、その辺りは勘弁なっことで。

兎に角これですよやく風呂に辿り着けるよ。

「そういえばフェイタール殿下が、姫殿下の怪我が治ったら遠乗りに誘いたいなどと申しておりましたよ？」

「はあ、そうなんですか？　フェイ兄様って何かと私に気を使ってくださいますよね？　何故なのでしょう？」

「自分の妹に気を使うのに、特別な理由などいりませうでしょうか？　それに殿下は貴女をたいそう溺愛されていますからね。いろいろと世話を焼きたいのですよ」

「……はあ」

レオの口から聞かされたトンでも情報に、ある程度覚悟はしていたとはいえ鬱になる。

やっぱり奴はシスコンか……。

これはもしかして外の人がブラコンだった可能性もあるのか？

そ、そ、そして二人の関係ってもしかや……。

『あははは、私の可愛いいちごちゃん　ほら、今日も一緒にお風呂に入るうか』

『いや〜ん、フェイ兄様あ。もうエッチなんだからあ。スワスワ恥ずかしいのお』

ピンク色の魔空間にふわふわと浮かぶ無数のシャボン玉。

全裸のフェイ兄が満面の笑みで外の人に向かって両手を広げている。

そんなフェイ兄に、外の人はいやんいやんと全裸を左右にねじって恥らってるのだが、二人の距離は無情にも縮まってゆく。

『何をいつてるんだい。もう毎日一緒に洗いつこしている仲じゃないか。でも、いつまでも初々しい私のいちごちゃんが、に、に兄様は大好きだよ』

『フェイ兄様、それほんと？』

鼻の穴を大きくしてぴすぴすさせているフェイ兄を、外の方は上気した頬と潤んだ瞳で見上げる。

その蠱惑的な視線にフェイ兄のボルテージはいきなりMAXへと

突入。

ぶわつと立ち上がって自分自身を曝け出す。

『ああ、もちろん本当だとも。見てごらん、私の × はもうだよー!』

『ふあああ、\$&@なってる。なんだか怖い。でもフェイ兄様のだから、私、我慢できるよ』

『なんて愛らしいんだ、マイルスイートハニー！ もう辛抱たまらん!』

『いやああん、兄様。優しくしてえ。スワスワのお・ね・が・い』

「ぐはあああ、ボクのSAN値ががが」

僕は思わず姫としてあるまじき声を上げながら、その場につっ伏してしまふ。

レオは一瞬びくうっとなって引き掛けたが、そこは大人の自制心で踏みとどまったようだ。

「ひ、姫殿下、いかがなされました？」

「い、いえ、持病の癩が突然……」

「は、はあ、そんな持病お持ちでしたか？」

「ええ、突然に」

心配そうにというか、若干引き攣った笑顔で僕を見つめるレオ。

大魔王もびっくりの魔空間からなんとか生還した僕は、震える膝

に活を入れながら立ち上がる。

もちろんBGMはアリスのチャンピオンか、サバイバーのアイ・オブ・ザ・タイガーだ。

くそう、いつか闇に葬り去ってやるわ、あの変態ロリ紳士（壊）め。

取り繕いようの無い空気を強引に何とか取り繕いながら、僕たちはようやく目的地の風呂場へと到着した。

脱衣場の扉の前で、ミーシャとアニスが待っている。

こちらの姿を確認すると、ミーシャが少し怪訝な顔をしてレオに話しかけた。

「閣下、何か問題でもございましたでしょうか？」

「いや、道中で姫殿下と行き合わせたので、こちらまでご案内したまで」

「ほんと、助かりました。有難うございます、レオ……閣下？」

「レオと呼び捨てでかまいません、姫殿下。それでは私はこれにて」

まあ取っ付きにくそうだけど、仲良くなれば割と世話を焼いてくれそうなタイプだ、レオって。

フェイ兄に頼るよりも彼と仲良くなった方が色んな意味で安全かもしれない。

僕の中のお助けキャラリストに早速書き込んでおこう。

「姫様、こちらまで時間が掛かったようですが、なにか問題がありましたでしょうか？」

「えっと……」

ミーシャが心配そうな表情で尋ねてくれるも、まさかスヴィータ達になんかイジメっぽいことされてましたって言えないしなあ。

それにあれがイジメだつて決まった訳でも無し。

大体目上の人の間違いを指摘するのって確かに勇氣いるもんねー。

ま、早計な判断はするべきじゃないって事にしておこう。

「ちょっと寄り道してただけですよ。心配いりません」

「そう、ですか。分かりました。それではこちらへ」

ま、結論として言える事は、二日ぶりのお風呂は気持ち良かったってことかな。

脱衣所も、浴室もビックリするくらい豪華だったけど、漫画でよくあるような向こうが見えないような風呂じゃなかった。

せいぜいがこじんまりとした銭湯くらいの広さである。

それにしたつて一人ではいるには贅沢すぎるんだけどね。

サウナ風呂だったらどうしようとか思ったけど、普通に入浴できるってことが分かったのは嬉しい。

これであと、自分で体を洗えたら言うことなかったんだけどね。

「ちょ、ちょ、ミーシャさん、そこ、そこは自分で洗いますから！」

「大丈夫です。力を抜いてお任せください。それにここは結構垢が溜まりやすいところですから綺麗にしておかないといけません」

「だ、だからそこはそんなに強くしちゃ……、ふうっ！」

「大丈夫です。力を抜いて身を任せてください」

「や、やーの。そっち違う！　そこは触っちゃ駄目えええ！」

誰かお願いします、この人を止めてください……。

13話「なんとなく状況が分かってきたかもっ！」（前編）

憑依3日目の朝。

今日も快晴で、窓から入ってくる陽の光と爽やかな風が朝の眠気を優しく取り去ってくれる。

うん、今日も元気だ、空気がうまい！

さて、2日の情報収集活動(?)を経て、いろいろと分かったことがある。

ここいらで一旦僕の置かれている状況を頭の中で整理する必要があるだろう。

そんなことを考えながら、鏡台の前に座るとアニスがブラシを片手に寄って来た。

朝の身だしなみは彼女たちメイドがやってくれるので、色々と楽をさせてもらっている。

自分でやれって言われても、まあ無理だしね。

まず僕が憑依している外の人、スワジク姫は嫌われ者っぽい。

ボーマンが教えてくれたあの噂と、自分の周りにいるメイドさん達の雰囲気、そして昨日のスヴィータ。

これだけの情報で決め付けるのはどうかと思うけど、なんとなくそうなんだろうなあって感じる。

まあでも救いはあるわけで、変態だけどフェイ兄は色々と気を掛けてくれるし、レオだって優しかった。

女性陣はおおむね僕を無視しているようだけど、一人ミーシャは隔意なく接してくれる貴重な存在だ。

こうやって見ると僕の味方ってレオを除くと変態しかいないのではないかと疑ってしまう。

変態性シスコン病のフェイ兄、狙った獲物は逃さないガチ百合、

ミーシャ。

もしかしてレオも僕が知らないだけで変態なのかな？

身近な味方にこれだけ高確率で変態が多いなら、その可能性も捨て切れねえ。

ポーマンとニーナは、この中で数少ない普通の人材だ。

ただし、ポーマンは施設警備隊、ニーナは政務館付侍女に所属しているらしいので、前回の様なイレギュラーが無い限り顔を合わせる機会がない。

まあ、もつとも向こうが来れないならこっちから訪ねに行けば良いわけで。

機会を見てこっそりと会いに行くのもありだな。

とまあ、割と僕の周りの環境はよろしくない状況のように見受けられる。

それに依然として、外の人の公務とか人間関係は五里霧中なわけだし。

だが、それでも今出来ることは少ないながらもあるじゃないか！
と言っ事で……

『第1回 友達百人出来るかな？大作戦 - いじめなんかには負けないで』

ぱふぱふ、どんどん！

くっくっく、完璧だ、完璧すぎるよ、僕。

これならば諸葛孔明（男）も裸足でサンバを踊りだすだろうよ。
くっくっく、あーっはっはっは。

「み、ミーシャちゃん、なんか姫様からどす黒いオーラが……」

「ん、そつとして置いていいと思う」
「わ、分かったよ」

さて、作戦名をつけたは良いが実際誰から攻めようか。

フェイ兄、ミーシャ、レオは既に友好状態にあるとして、一番ハイドルの高いのが、スヴェータ、その次がモブっぽいメイドさんのライラか。

ちなみにライラは僕付き侍女達の責任者らしい。

次にアニスだが、彼女はなんかどうにでも出来そうな気がするし、それ以外の人となると衛士や給仕さんだから今は無視していい。

楽な方から友好を固めるか、難易度の高い方から失敗覚悟で状況の改善をするか。

んー、身の危険や貞操の危機を感じるけれども、まずはフェイ兄やレオの男性陣から攻める事にしよう。

腐っても僕は美少女だし、少し健気に接したらイチコロに違いない。

元男が言うんだからこれは間違いないな。

ふふふ、善は急げというし、早速作戦開始と行こうじゃないか。

フェイタール執務室

一昨日の晩に起こった謀略工作に関して、私達は手詰まりに近い状態だった。

敵の謀略員がスワジクの部屋に入って出て行った経路は比較的簡

単に分かったのだが、それ以前、もしくは以降の足取りが全く見つかからない。

まるでそんな者は存在しないと言わんばかりの完璧な手際である。

「くそつ、そつちの線も手詰まりか。そつちはどうだ」

「はっ。城壁、城門、勝手門、水路に井戸、地下通路まで調べ上げましたが、不審な形跡は何一つ見つかりませんでした」

たった今報告を終えたセンドリックを押しつけて、ごつい体格の近衛指揮官コワルスキーが前に出て報告書を読み上げる。

期待はしていなかったが、否定的な報告に肩を落としてしまう。

私は無言でその後立っている侍女長ヴィヴィオに目を移す。

その意を汲み取った彼女は、首を左右に振りながら告げる。

「私の方は出入り業者、来城者、使用人から各州都の雇用文官、武官まで洗いざらい調べました。今のところ不審な者、忽然と居なくなつた者、あるいは招かれざる客などは見つかっておりません」

「そうかご苦労だった。……そういえば、コワルスキーとお前の部署は昨日欠員が1名づつ出たんだっただか？」

「はい。スワジク姫のことを知らぬものを敢えて選任したのですが、それが裏目に出てしまいました。これは私の判断ミスです。申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げるヴィヴィオに対し、少し罪悪感を覚える。

レイチエルの事件から一時も休まず働きづめの彼女の姿が、とても痛々しくて見ていられない。

が、それを面と向かってヴィヴィオにいう気にもなれず、深いため息をつくしかなかった。

「近衛の施設守備隊と政務館付侍女だったな。レオ、早急に手配するよう内大臣に助言しておいてくれ」

「了解した」

「そうだ、レオ、お前の方の調べはどうなった？」

私の机の斜め前にある秘書用の机に腰を掛けた、幼馴染の相棒に声を掛ける。

レオは記録を取っていた手を休め、椅子に背を預けお手上げのポーズをとった。

「城下にある各有力者の館、反帝国派勢力、あるいは現在確認出来ている他国の謀略員に動きはありません。特に反帝国派について重点的に調査しましたが、結果はグレーです」

「詰まるところ、わからんということか」

「ですね。正直、そこまで我々を手玉に取れるような工作員が存在するかどうか、私は非常に疑わしいと思っています」

「どづい事だ、レオ」

机に置いてあったカップを手に取り口をつけようとして、中身がないことに気がつく。

柄にも無く緊張しているのか、私は。

いや、むしろレオの口からその可能性を聞きたくは無いかもしれない。

もし、レオの懸念していることが当たりだったら……。

「私はこう考えています。外部の犯行に見せかけた内部の者の犯行である」と

「っ！ それでは閣下は私が調べた調査結果をお疑いになられているのでしょうか？」

レオの仮定を聞いて、間髪入れずに反発するヴィヴィオ。

一瞬にして場の空気が険悪なもの化する。

だがその反発を鷹揚に片手で制したレオは、ゆっくりと一同を見回す。

「おかしいとは思いませんか？」

「何がだ、レオ」

「ここにいる人材は、身贖いと言われるかもしれませんが、それぞれの担当分野において非常に優秀な実績を持っています」

ぐるりと一同を見回すレオの視線に、それぞれが当然とばかりに胸を張る。

そんな様子をレオは満足げに見て、視線を私に固定した。

レオも緊張しているのか、次の一言を紡ぐ前に唇を軽く舐める。

「そんな優秀な人材全てを出し抜けるような鼠が、果たして存在しているのでしょうか？　もしかして、我々は大きな勘違いをしているのではないのでしょうか？　例えば、限りなく黒に近い存在であるに

もかわらず、事件当初から白だと断定されている人物について、とか

「……」

しんと静まり返る室内。

ここ2日ほど記憶の混乱があり、常とは違う行動をとっていた彼女。

センドリックの状況報告から一旦は捜査線上から外したのだが、レオはその彼女こそが犯人ではないのかと言ったのだ。

目を閉じてこの2日間のことを思い返す。

あの傍若無人だったスワジクが、借りてきた猫のように大人しくなったこの2日間のことを。

「しかし、閣下。私はベランダからあの窓が開いたり、閉まったりするのを見ていました。それにわざわざ隠してあった報告書を我々に見つけさせた意味も分かりかねます。別に彼女を擁護するわけはありませんが、整合性が取れなくは無いですか？」

「その辺りの動機付けはともかく、姿の見えない賊の正体が彼女であるとするならば色々辻褄は合います」

レオは眉間に人差し指を当てて、軽くコツコツと叩きながら喋り続ける。

あれはあいつの脳がフル回転しているときによく見られる仕草だ。

「知っていますか？ 件の窓の立付けが割りと緩かったということ。鍵を掛けていないと少々の風で開いたり閉まったりするのです」

「ではアニスの見た賊は？」

「恐らく彼女でしょう。茶色の外套着は、彼女のクローゼットにも存在していたことは確認しています。そしてそれが衣掛けから落ちていたことも。さらに、センドリック卿も覚えていませんでしょう。」

本来椅子の上は無ければならない埃避けが彼女の枕の下にあったことを。何より、あの窓からなら弱い女性でも隣のベランダまでは飛び移れます」

「しかし最初のアニスの悲鳴を聞いてからベランダに行くまで、または私がベランダから彼女の寝室に行くまでの間には誰も居ませんでした」

センドリックが当時を思い出しながら、カウンターオピニオンを提示する。

それに慌てることも無くレオは自分の推論を続けた。

彼の話聞きながら、恐らくはレオが正しいのであるということ事を理解し、自分の甘さに辟易した。

たった数日従順な様子を見せていたからといって、何故こうも簡単に彼女を関係ないと信じてしまったのか。

「彼女が悲鳴を上げたのは、賊を見て気絶した後のことだと報告書には記載されています。であれば、犯人がどこか別のところに身を隠すことも出来たでしょう。例えば、施錠することがなかった侍女達の作業部屋とか。実際、あの報告書はその部屋に保管されていたものですし、経路としても理にかないます」

「なるほど、でアニスの悲鳴を聞いた私がベランダで調査している間に部屋に戻って体裁を整えたというわけですか」

レオは満足げな表情でセンドリックに振り返った。

彼女の犯行時の行動としては、確かに筋は怖いほどに通るし無理がどこにも無い。

だが一つだけ、やっぱり分からないことがある。

当初もそれが分からなかったから、私達は彼女を白だと断定したのだ。

「レオ、では聞こう。スワジクの狙いは、なんだ？」

14話「なんとなく状況が分かってきたかもっ！」（後編）

しんと静まり返った執務室の中、レオがまさに私の問いに答えようとしたその時、突然ドアがノックされた。

会議中ということとは各部署に通達済みなので、よほどの緊急事態でないかぎりここへは誰も寄ってこないはず。

私はヴィヴィオに目配せをして、対応するよう促す。

彼女はすぐさま表情を切り替え、洗礼された動きで来訪者が待っているであろう扉へと向かった。

「誰か？」

「はい。スワジク姫殿下付の侍女、アニスでございます。姫殿下が是非フェイタル殿下にお会いしたいとお申しになられました……」
「しばらく待て」

問答無用に会話を切り上げ、ヴィヴィオがこちらを振り向いてどうするかを指示を待っている。

私は傍まで来ていたレオを見上げて、彼の意見を聞くことにした。

「先ほどのお尋ねの件ですが、私にも姫殿下の狙いがまだ絞りきれておりません。が、向こうから出向いてきてくれているのであれば、ここは相手の行動を見てから考えてもよいかもしれません」

「女狐と狸の化かしあい……か」

「女狐は女狐でも、あれは妖狐の類です。しっかりと気を張って臨むべきでしょう」

「……わかった」

私はゆっくりとヴィヴィオに背いて、スワジクを執務室に招き入れた。

時間は少し遡って、城の厨房。

さすがに城に詰めている人たちの食事を作るだけあって、半端じゃない広さだ。

かまども30位はあるんじゃないだろうか。

今は昼食後ということもあって調理場にはほとんど人がおらず、洗い場で食器やら道具を洗っている人が10人くらいいる。

その調理場の一角を、スワジクとミーシャ、アニスは占拠していた。

「さてと、材料はこんなものですね。道具も一通りそろっているし、窯はどうでしょうか？」

「は、はい。今火を入れましたけど、昼前にも使っていたみたいなのでそんなに時間は掛からないと思います」

鼻の頭を真っ黒にしたアニスが振り返って報告してくれた。

なら窯がいこるまでの間に、生地を作ってしまったおうか。

妹に無理やり作らされたクッキー作りが、まさかこんな所で活躍しようとは。

なんでもやっておくものだなあとしみじみ思う。

ま、そんな回想よりもクッキーを焼くの方が先なんだけどな。

出来ました。

え？ 途中経過？ なにそれ、美味しいの？

ぶっちゃんけ、そんなレシピここで言ってもねえ。

だいたい普通のバタークッキーだし、慣れてたしね。

出来栄え？ あーた、そりゃ完璧だよ。

伊達にあの鬼妹に2年間も強制的に仕込まれたわけじゃない。

っていうか、ミーシャさん、アニスさん、なんでそんなに驚いた顔してんの？

女の子ならこれくらい当然の嗜みでしょうが。

「い、いえ、それはそうかもかもしれませんが、まさか姫様がここまで上手に焼かれるとは予想もしていませんでしたので」

「ですよね。なんかすごい手馴れてた。もしかしたらミーシャちゃんや私より上手いかも」

「ふふふん。ま、人間誰にでも一芸はあるということです。さあ、お茶の用意をしてフェイ兄様のところへいきましよう。きつとびっくりするでしょうね」

「本気で腰を抜かすくらいびっくりすると思います」

そんな大げさなミーシャさんのお世辞に気をよくした僕は、女の子ばく見えるように飾り付けをしてワゴンに乗せた。

ぐふふふ、ここまで完璧にしないと許してくれなかったからな、うちの鬼妹。

っていうか、ボーイフレンドへのプレゼントくらい自分で作りやがれ！

さて、今必殺の手作りクッキーを持って行ってやるからな、変態シスコン兄め！

これで悶え死ぬがいいわ。

で、今フェイ兄の執務室。

意気揚々と乗り込んだまではよかったんだけど、あれ？ 何？

空気悪くない？

「やあ、スワジク。急にどうしたんだい。こっちの方まで来るなんて珍しいじゃないか」

「あ、いえ、フェイ兄様は今日はお忙しいとお聞きしていたので、3時のおやつに甘いものなどいいのではと思って焼いてきたのですが……」

「え、君が焼いたのかい？」

「はい。フェイ兄様の為に一生懸命作りました。よかったら皆様も摘んでくださいな」

ぴしっという音が部屋の中に響いたような気がするくらい、僕とミーシャ、アニス以外の皆が固まってる。

なんだよ、そのありえないっていう表情での反応は。

なんでミーシャ声を殺して笑ってるの？

……ってあれ？ もしかしてスワジク姫ってお菓子も料理も出来なかった……のか？

あるうえ、リサーチ不足？

てかその件についてはリサーチすらしてなかったけどね。

「一つお聞きしてよろしいでしょうか、姫殿下。それはお一人でお

作りになられたのでしょうか？」

頬を引き皺らせたレオが、恐る恐るといった感じで話しかけてきた。

「はあ、さてはあれだな、食べない代物を持ってきたって思っているんだな。」

愚か者め、一口食して己が不明を猛省せよ。

「ミーシャさんとアニスさんにも手伝ってもらいましたが、おおむね私一人で作りました」

「なるほど。お一人で、ですか」

「それでは私が毒見をさせていただきましようかな」

なんか初めて見るごつい人がぬっと出てきて、ワゴンの上にあつたクッキーを一つ摘んだ。

しかし、でかいなこの人。

僕の1.5倍くらいはありそうじゃん。

焼いたクッキーが、なんかの欠片かと思うくらい小さく見えるよ。で、ひょいとクッキーを口に入れ、傍に入れてあつたあつあつの紅茶を一気に飲み干す。

ってそんな勢いで飲んだら、喉を火傷するんじゃないのか？

「ふむ。なるほど。これは……なんとも」

執務室にいた一同の視線が、その木偶の坊さん（勝手に命名した）

に集中する。

そんなことを気にもせず、彼はさらに別の形のクッキーに手を伸ばし口に放り込む。

繰り返すこと5度目にして、フェイ兄が痺れを切らしたようだ。

「コワルスキー、どうなんだ？」

「は？ 何がでしょうか？」

「お前、毒見してたんじゃないのか？」

「おお、これはすいません。あまりに美味しかったもので、ついつい失念しておりました」

がこんと机の上にアゴを落としたフェイ兄に、豪快にがははと笑ってもとの場所へと戻ってゆく木偶の坊改めコワルスキーさん。

ロッテンマイヤーさんばい人とミーシャ、アニスが皆にクッキーと紅茶を振舞っているうちに、僕もフェイ兄の分をトレイに乗せて持ってゆく。

「お仕事お疲れ様です、フェイ兄様。疲れたときは糖分を取るといいといえますから、たくさん食べてくださいね」

「あ、ああ、すまないね。しかし君がお菓子を焼けたなんて僕は初耳だったよ。いや、本当にびっくりしたよ、スワジク」

トレイで口元を隠しながらはにかんで見せる。

僕の予想では、破壊力ばつぐんの視覚効果があるはずだ。

寝る前に、ちよと何度か鏡の前で遊んでたから間違いない。

自分の笑顔に悶えるって言うのも痛いけど、まあ、もとが違う人

間だしOKだよな。

ま、ロリ変態にここまでする必要はないかもしれないが、他の人もいたしレオもいたから「可愛く健気な妹」のアピールが出来てよかったかもしれないな。

とりあえず、クッキー焼いて好感度UP作戦は成功したといっても過言ではなからう。

うわっはっはっは。

スワジク達が出て行った後の扉を、部屋の中にいた全員がじっと凝視していた。

目の前にある食べ残したクッキーと、可愛いレースの布とりボンに包まれた手付かずのクッキー。

今あったことだけを素直に受け止めるのであれば、甲斐甲斐しい妹の兄への気遣いという話でいいのだが、相手はあの壻行姫である。この出来事を素直に受け止めていいものかどうか。

「ヴィヴィオ殿」

「はい、なんででしょうか閣下」

「私は今まで姫殿下が厨房に入って料理の真似事などをしたといった報告は一度も受けたことが無いのですが？」

「はい。私もそのような報告は閣下にした覚えはありません」

二人がふうと大きなため息をついて肩を落とす。

優秀であると自負する二人が、自分達が一番注視していた人物において知らないことが存在した。

さぞ二人の矜持を傷つけただろうな。

何を隠そうこの私ですら少なくともショックを受けたのだから。

あの者については他の誰よりもむしろ本人よりも熟知しているつもりだったのだが、どうやらそれは慢心であつたようだ。

「レオ、それでスワジクの狙いをどう見る」

「……彼女の行動は、それほど複雑でも難解でもありません。が、彼女の目的なり考えが読めません。上辺だけを見るのなら、これ以上ないくらい我々にとつてはいい変化ではあるのですが」

「ま、これだけ方向性が違えば、何を信じていいかわからんですわな。まったく、ポーマンの奴が誑かされるのも分からんでもないな」

あきれたようにソファアにふんぞり返って笑うコワルスキーに、

眉間にしわを寄せて不機嫌にしているヴィヴィオ。

センドリックは既に思考を放棄しているようだし、私にいたつては何をどう考えていいのかすら分からなくなっている。

暴れても、大人しくなつても、人を悩ませ翻弄することだけは人一倍の能力を見せるスワジクに、今は脱帽するしかなかった。

「この変化が本当であれば、皆が幸せになれるのにな」

誰に聞かせるでもなく私はそう呟いた。

15話「ん、バレちゃったかな？」

さてさて現在進行中のイメージアップキャンペーンだが、次の夕
ーゲットをライラさんかスウィータにしようと思ったんだ。

……うん、ごめん。

なんか怖いんだよ、彼女達の空気が。

あれは地雷だ、間違いない。

だってスウィータに焼いたクッキー持って行っても、笑顔で断ら
れたんだよ。

おほほほ、下賤な私の様な者にはとても恐れ多くて口にも出来ま
せんって。

笑いながらライラを連れて逃げていったんだよな。

くそう、見事なATフィールド張りやがって。

仕方が無いのでアニスにあげたら、顔右半分が嬉しそうで、反対
側の顔が困ったような感じだった。

お前はアシユラ男爵かよ……。

しかし、思っていたよりスウィータ達のハードルは高そうだな。

何がそんなに彼女達を頑なにしてるんだろう。

……やっぱ外の人だよなあ、どう考えても。

でも原因が分からないことには、対策も立てられない訳で。

そんな僕は困ってしまった訳で。

「食べ物で釣るのはなんか無理っぽいなあ。といって少年誌よろし
く殴り合って友情を育むわけにもいかないしなあ。女ってどうやっ
て友情を深めるんだ？」

「ふざけないでっ！」

「はい、ごめんなさいっ……！」

突然聞こえた怒声に、条件反射的に頭を下げた僕。
恐る恐る頭を上げてみるとそこには誰も居ない。

あれ？ いま怒られたよね？

きよるきよると部屋の中を見回すが、やっぱり今は誰も居ない。

と、窓際からなにやら言い争う声が聞こえる。

あの声はスウィータ？

窓に近寄ってそつと様子を伺ってみると、侍女達の作業部屋と呼ばれる部屋のベランダ（以前僕が隠れてた辺り）で、侍女達4人が固まってなにやら言い争っている。

どうやらスウィータとライラが結託して、ミーシャに文句を言っているみたいだ。

アニスは、……なんだろう、ミーシャとスウィータの間でおおるとしているだけみたい。

少し距離があるので何を言い争っているのかまでよく聞こえない。漏れ聞こえる単語は、「信じられない」、「忘れたのか」、「売女」、「あんな女の何処が」というようなもの。

ふむ、これは友情というよりは痴情の纏れ？

ミーシャ、手が早そうだしなあ。

そこで僕は閃いた！

スウィータとミーシャの仲を取り持てば、少しは今の状況を改善できるかも！

まあ、ちよつとお節介っばいけど、そこはくどくならないように気をつければ大丈夫。

うん、僕は空気を読める子、やれば出来る子だもんな。

二人のためにいつちよ一肌脱いでみようか！

で、早速その日のお茶の時間。
微妙にギスギスしているメイドさんたちを尻目に、僕は必死に取っ掛かりを探っている。
当たり前な話、いきなりさつき喧嘩していたでしょう？　なんて切り出せるほど僕は豪胆ではない。
で、その取っ掛かりは意外とあっさり見つかった。

「スヴィータさん、その手、どうされたのですか？」
「はい。仕事中に少し挫いてしまいました。ですが姫様がお気になさるほどの事ではございません」

木で鼻をくくったような答えとは、今のスヴィータの返事のような事をいうんだろうなあ。

だがっ！　いつもならそこで引き下がる僕だが今は一味違うんだよ？

僕はそつとスヴィータの手を掴むと、座っている自分の太ももの上に載せ逃げないように軽く押さえた。
もちろんスヴィータも最初は少し抵抗したが、さすがに手を振り払うというような失礼な行動には出ない。

くくく、育ちの良さが仇になったな、スヴィータ。
恨むなら君の父上か母上を恨むのだな。
などと心の中で勝ち誇りつつ、不器用に巻かれた包帯をそつと解く。

あー、やっぱり腫れ上がってる。
無理やり固定してたものだから、指先も少し鬱血気味だし。
だが、これくらいの捻挫なら我がテーピング秘術を持ってすれば、赤子の手を捻るも同然。

たちどころに普通に働けるようになるだろう。

ま、本当は動かしちゃ駄目だし、捻っちゃ駄目なんだけどね。

このテーピング術は剣道部の主将直伝の奥義で、なんでも知り合いのとても怪しげな接骨院の先生に伝授されたらしい。

実際僕も捻挫したときにこのテーピングをしてもらったら凄く楽になったので、内緒で僕だけ教えてもらったんだよね。

誰も居ない放課後、二人きりで包帯の巻きあいっこをしてさ。

んー、いま思うとなんか主将の鼻息が荒かったのはなんでだろう？
なんか嫌な記憶に辿り着きそうで、慌てて目の前の現実に僕は没頭する。

「少しだけ痛くするけど、我慢してくださいね」

「……」

無言で頷くスヴェータ。

んー、ツンデレって感じじゃないなあ。

しかしこの積み重ねがツンには必要で、それをおろそかにしてはデレは来ない！

「これでよし。どうですか？ 締め付けがきつかったりしませんか？」

「……はい、大丈夫だと思います」

「それじゃあ少し動かしてみてください。多分大分痛みが和らいでいるはずです」

僕の言葉に、半信半疑で手を動かすスヴェータ。

胡散臭げな表情が、一変して驚きの表情に変わる。

我が秘技にかかれればこれくらい当然だよ、スヴィータ君。

なんて考えながらニコニコとスヴィータを見つめていると、それに気付いた彼女は何故か凄く悔しそうな顔をして立ち上がった。

「私の様な者にもつたいたない施しを頂き、誠に恐縮でございます」
「いいですよ。あ、でも痛みがましになったからってムチャをしてはいけません。なるべく患部は冷やして安静にした方がいいですよ」

「はい、ご忠告感謝いたします」

スヴィータはスカートを掴み足を後ろに引いて頭を下げ、そのま
ま目を合わさずに仕事にもどった。

うん、彼女にはこれくらいで今はいいだろう。

あんまり親切の押し売りはよろしくないからね。

で、だ。

本命は、頬を腫らしたミーシャだ。

彼女からは何があったかも聞きたいから、お茶の時間が終わって
からじっくり攻めた方がいいな。

んー、貞操的に危険な気もするけど、さすがにそこまで黙ってわ
けでもないだろう。

……と信じたい。

お茶の時間が終わってメイドさん達が引き上げる中、僕はミーシ
ヤを引きとめる。

二人きりになるまで待つてから、僕はミーシャに椅子を勧めた。

「凄いことになっていきますよ？ 気付いてますか、ミーシャ」

「申し訳ございません。少し作業中に転んでしまいました」

お茶会ときはさほどでも無かったけど、今は大分腫れ上がった彼女の切れ長の左目をしたから押し上げていた。

まさか顔にテーピングするわけにもいかないの、さつき用意させたボウルの水に手ぬぐいを浸してそつと優しく押さえる。

少し体を堅くしたミーシャだが、すぐにその緊張も解け椅子の背もたれに体を預けた。

「姫様、ひとつお聞きしてよろしいでしょうか？」

「はい、なんでしょう？」

「どこで……何処でお菓子の焼き方を覚えられましたか？」

「え？ あー、そのー、本で……。そう、本で覚えたのです！」

「なるほど。では、先ほどのスウィータに施したあれは？ あの様な処置の仕方、私も医術を多少嗜んでいますが初めて見ました。あれは何処で覚えられたのですか？」

「あ、あれは、その、ドクターに……」

「なるほど。ドクター・グエロに教わったのですか？」

「えと、まあ、そんな感じだったかなあ？」

やヴあい、僕の目が凄い勢いで泳いでるよ。

さっきの事を聞きだそうと思ったら、逆に何か尋問されてるんですけど？

これって割と拙いんじゃないだろうか。

ミーシャが濡れタオルを押さえている僕の手を、優しくだがしっかりと掴んだ。

まるで手錠のように感じた僕は思わずミーシャから距離を置こうと後ずさる。

だけど手を掴まれている以上、そんなに距離が取れるわけも無い。

「では、最後にお聞きします」

「はひっ」

「姫様は、……貴方は私たちにした事を何処まで覚えていらっしやるのですか？ 貴方は本当にあのスワジク・ヴォルフ・ゴードインなのですか？」

ミーシャの問いは、僕の、僕という存在の核心を突いてきたものだった。

彼女の白刃の様な気迫に、僕は思わず怯んでしまい答えることが出来ない。

当然僕の動揺は僕の体の震えや表情からミーシャには筒抜けだろう。

なんといつて答えるべきか、僕はとっさに反応できずにミーシャに捕まったまま動けずにいた。

侍女作業部屋の横にある宿直室にスウィータはいた。手に巻かれ堅く結ばれた包帯をいらただしげに解く。

「あんな女に施しを受けるなんて、屈辱以外の何ものでもありませんわ」

包帯を丸めてゴミ箱に放り入れると、棚から新しい包帯を出して自分で巻きなおす。

そこへライラが入ってくる。

「スヴィータ……」

「あの2人は何をしているのかしら？」

「あ、えと、椅子の上で恋人のように抱き合ってた。何か話し合っているようだったけど、そこまではさすがに聞こえなかったよ」

「あの売女、そこまでしてヴォルフ家の威光を傘に着たいのかしら」
「そ、それは流石に無いんじゃないかな？ 第一ミーシャってそんな感じの人じゃないし」

ライラが反論を唱えると、射殺さんばかりにキツと睨みつけるスヴィータ。

その眼光に、開きかけた口を閉じてしまう。

もともとスヴィータとライラでは家格が天と地ほどの差があるので、この力関係は仕方が無い。

寧ろそれでも責任者たろうとしているライラは褒められてしかるべきかもしれないし、だからこそ責任者足りえていたのだろう。

「貴方はもう忘れたの？ レイチェルが何故殺されたのか」

「それは、それは忘れないけど」

「なんでルナが城を追われるように逃げ出さなきゃならなかったのか、もう忘れちゃったの？」

「忘れてない」

「誰が悪いの？ レイチエル？ ルナ？ それとも私たち？」

「それは、絶対に違う」

「じゃあ、誰が悪いの？ 誰が悪人なの？」

「あの女よ」

「そうよ、ライラ。あの女が諸悪の根源。あの女こそが悪魔なのよ」

暗い瞳で自分の呪詛を復唱するライラの姿に、満足そうに目を細めるスヴィータ。

窓辺によってベランダ越しに見えるスワジクの寝室を覗く。

そこにはミーシャの頬を押さえたスワジクとその手を愛おしそうに押さえているミーシャの姿。

スヴィータからは、2人が愛の抱擁と熱い口付けを交わしているようにしか見えなかった。

「ふっ、貴方にも同じ絶望を味あわせてあげるわ。裏切り者にもそれなりの罰が必要だしね。ほんと、これからが楽しみだわ」

16話「ボクとミーシャの秘め事」

「なるほど。それでは貴方は姫様ではなく、別の世界から来た人だと?」

「うん! そうそう」

「……」

「……」

あれ? なんか凄く可哀想な人を見る目で見つめられているんですけど?

今は午前の深夜。

ミーシャに突っ込まれ固まってしまった僕は、洗いざらい吐くことになってしまいました。

流星に誰が来るか分からない状況で色々説明しにくかったので、夜に全部説明するってことで開放してもらって今に至る。

うん、分かっていたんだよ、こういう反応が返ってくるんじゃないかなって。

そりゃ考えてみれば、僕の友達でも突然そんな事を言い出したら頭の中身を疑うよ?

きつと色々辛いことがあったのかな、とか。

人生諦めたらそこで試合終了だよ、とか。

「もしかして哀れまれてる?」

「ええ、少し」

あーと唸りながらベッドに突っ伏す。

やっぱり、記憶が無いことを理解してくれても、魂まで変わってしまっただってというのは納得できないよね。

大体僕自身なんでそうだったかの説明なんて出来ないし。非常識だし、意味不明だし、可愛いし。

「ですが、なんとなく姫様の状況は把握いたしました。信じがたい話ですが、人格が他の誰かと入れ替わってしまったという話も一応理解しました」

「ほんと？ 可哀想だからって話合わせてるんじゃないの？」

「例えそうであったとしても、今の貴方にはその話を合わせてくれる協力者が必要ではないですか？」

「そりゃそうなんだけど」

僕はぼりぼりと後頭部を掻きながら、突っ伏した姿勢のままミーシャを見上げる。

腕組をして顎に手を当て、僕を見つめながら何かを一心に考えているようだ。

「でもさ、なんでミーシャは他の人みたいにボクに冷たくないの？」
「ん？」

「ほら、スヴィータなんかさ、たまに目が合うと絶対零度の視線を向けて来たりするし、他の皆も喋ってくれないし。でもミーシャだけはボクとちゃんと向き合って喋ってくれるよね？ なんで？」

「ああ、なるほど。私とて貴方に隔意がないわけではありません。ですが、それ以上に興味があるのも確かです」

「興味？」

目が猛禽のようになっていているんですけど。
舌なめずりしないでください、ミーシャさん。
なんか身の危険をひしひしと感ずるので、主に貞操とか精神の安寧とかの面で。

「私が医術を学んでいることはお話いたしましたよね？」
「ああ、はい」

「だから、外的要因からくる記憶の欠落なり人格の変化という心理的な怪我というか、そういった事例には非常に興味があるのです」
「……それってボクが可哀想な子だから興味があるってことだよな？」

「むしろ残念な子だから？」

なにげにきついと言いますよね、ミーシャさん。
もう僕の心のHPは0だよ、ほんと。

「まあ、本音はともかく」

「本音なんだ！」

「貴方の置かれている状況は、貴方が思っているほど易くは無いです」

「そう、……だよな、やっぱり」

「貴方の記憶がないという事が知れたら、様々な形で利用しようとする者があらわれるかもしれません。あるいは直接害そうとする者もいるでしょう。そして貴方はそういった『敵』に対して、自分自身を守る術を持たない。これは死活問題です」

「敵ってまた大げさな」

「暢気にしていられるのは今のうちですよ。身内にも貴方を敵視する人など掃いて捨てるほど存在するのですよ」

それは嫌だなあ。

知っている人がある日突然襲い掛かってくるなんて、それなんてホラーだよ。

それだったらまだゾンビがうまーって襲ってきてくれる方が数倍安心できる。

本当に襲ってこられても困るんだけどね。

「今ある時間内でなんとか姫様らしく振舞えるように、いろいろと覚えていただかないといけないでしょう」

「そうだろうね」

「具体的には、女性らしさや立ち振る舞いからでしょうか」

「気をつけてやっているつもりだったけど、駄目かな？」

「ええ、どこの世界に足を開いて椅子に座る王女が居るといいます?」

「え! ボク、そんなことしてたっけ?」

「あなた自身が気付いていないだけで、それはもうボロボロと一言で言えば憤みが足りないのです。それでは萌えきれません」

「……いまなんかさらっと変な言葉が聞こえたのですが?」

一緒にベッドの上に座っていたミーシャが、すくつと立ち上がる。つられて上を向く僕に、にこりとイイ笑顔を魅せる彼女。うん、やっぱりミーシャはカッコイイな。

「大丈夫です。明日からはみっちり教育していきますから。あと女らしさについては、これは強制的に引き出してあげましょう。心配ありません。私に掛ければ女らしさのひとつやふたつ、無くて無理やり植えつけて差し上げます」

「なんか凄く嫌な予感しかしないのですが？」

「気のせいですよ。大船に乗った気で居てください。悪いようにはしませんから」

で、その次の夜から僕の深夜レッスンが開始されたのでございます。

「引く足が逆です！ 何故そんなにフラフラしているのですか？」

「や、だって……」

「だってもロツテもありません！ 挨拶の一つも満足に出来無ければ社交パーティーにすら出席できません」

「いや、なんかさ、今日は疲れちゃったっていうか……ねえ？」

僕は鬼教官に向かってへらへらと愛想笑いをしながら慈悲を請う。与えられる可能性などないとは分かっているけど、万分の一の可能性に掛けてしまうヘタレな僕。

だってもう夜も大分遅いっていうか、後少ししたら夜が明けるんじゃないのかというくらい時間だよ？

そりゃフラフラにもなるって。

「そうですか。疲れましたか。分かりました。ではベッドで語り合
いましょうか……心ゆくまでゆつくりと」

「ひいひい、ごめんなさい、ごめんなさい。頑張ります、頑張ります
からそれだけは堪忍してえええ」

「分かればよろしいのです。何も眠いのは姫様だけではないのです
から、頑張っていただかないと。……まあ、私的には頑張って頂か
なくてもいいのですけれども」

何さ、その本音駄々漏れのコメントは！

ミーシャの黒い笑みに背筋を凍らせながら、すぐさまレッスンに
戻る。

えっと確か、まず相手の前に立ち、につこり微笑みつつ軽く右手
を相手の右手に向かって差し出す。

次に左足に重心を置きつつ右足を軽く斜め後ろに引いて、相手に
差し出された右手に軽く触れつつ膝を曲げて頭を垂れる。

そしてゆつくりと姿勢を戻して挨拶の完了だ。

「相手に向かってそんなに勢い良く手を出してどうしますか！ 姿
勢が悪い！ 笑顔が堅い、ぎこちない！ 目は逸らさず見つめず口
元を！」

「ふにゃあああ、もう無理いいい」

昨日ミーシャが宣言したとおり、僕はただいま宮廷一般常識を勉
強中です。

皆が寝静まってからの訓練だから、もうきつくてきつくて。

それに失敗したり上手く出来なかつたら鬼教官のきもちい……、
んんっ、キツイお仕置きがまっているのです。

睡眠不足で死ねるのですよ！

「3日や4日の寝不足で死んだ人間はいません！ きりきりしないならお仕置きです！」

「ちょ、待つて。ミーシャさん、待ってください。頑張りますから、ちょ、そんな抱きしめたらっ！ ボタン外しちゃ駄目だってば！ あっ、あう、ら、らめえええええ」

「ううう、太陽が黄色い……」

「おはようございます、姫様」

「お、おはよう、アニス」

なんとかベッドから抜け出して、鏡台の前に着席する。
いつものように顔の手入れから始まって、身だしなみを整えてゆく。

んー、女の人って毎朝これしなきゃいけないんだから、ほんつと大変だよなー。

アニスが毎日頑張ってくれるから、僕はなんの努力もしないでいから助かるよなあ。

髪も梳いたし着替えも済んで、僕は眠い目を擦りながらテーブルに着く。

ほほう、今日は朝から餃子ですかあ。

久しぶりだよな、中華って。

ふわあああ、眠いけどいただきますーすう。

「こ、こらっ、すすすす、スワジク！ 何をするんだっ」
「はむっ、はむっ」
「や、やめないか、こら！ それは食べるもんじゃないぞ！」
「餃子じゃないですねえ、もしやミニガーですかあ。なるほど、」
「リコリして美味しいのです」
「いい加減目を覚ましてください」
「ぎゃふんっ！」

い、い、今日の中で星が飛んだ！
星がピカって光った！
っていうか、頭割れそうなくらい痛いんですけど。

「何事？」
「おはようございます、姫様」
「ミーシャさん、頭が頭痛で痛いのですが？」
「そうですか。後でアニスに薬をお持ちするように言っておきましょう」
「ううう、ミーシャの意地悪。……で、フェイ兄様はなんで床に座ってるんです？」

床にへたり込んでいたフェイ兄が全力でため息をつき、遣る瀬無さ気にテーブルの上にあるナプキンをとって濡れて光っている耳を拭いている。

気のせいかなフェイ兄の顔が赤いような気がするんだけど。
ん？ 僕が何かしたのかな？

「我が愛しの姫君は最近寝不足のようだね。夜な夜な何かしているのかい？」

「おほほほ、何故か最近寝つきが悪くて」

中途半端な笑みを浮かべて、適当な理由をつけてみる。

フエイ兄はそんな僕の顔を見て、また一つ大きいため息をついた。幸せが逃げるよ？

17話「借金大魔王女だったという畏」

「それではこちらのドレスなどは如何でございますでしょうか。こちらは王都が誇る針職人ゼツベル氏の作でございます。ご覧になれば分かると思いますが……」

目の前に広がるザ・見本市みたいな空間に、ジャ ネットタカタ 張りにしゃべり倒す繊維ギルドの職員さん。

何が起きているのかといえば、どうやら外の人々が以前に発注していたドレスが出来上がったので、商品のお披露目と試着会が急遽催されたのだ。

いやね、ほら、これでも僕は男であるわけだから、なかなか女物の服を着るのに抵抗があったりするんだよ。

うん、ごめん。今更の話だよね……。

「しかし、多いですね。こんなにたくさん衣装があると見て回るだけで陽がくれそうですね」

「ええ、今回はこの半分程度しかご用意出来ませんでした。姫様から品揃えが薄いとのご叱責を頂きましたゆえ、今回はギルドの総力を挙げて汚名を返上すべく参った次第でございます」

うん、なんか頬が引き攣ってきた。

どんだけ買わないといけないのかな？

まさか要りませんのでお帰りくださいって言ったら、ぶち切れられるかな？

ちよっと探りをいれてみようか。

「ところで、前回はいかほど頂きましたでしょうか？」
「はい、先回の折には、お持ちした商品全部お買い上げいただきました！」
「え？？」

ちよつと待て。

見るだけで優に半日は潰れそうなくらいの商品を、外の人全部
買い取った……だと？

くらりと揺れる頭を必死に支えながら、後ろについてきていたミ
ーシャに小声で訪ねる。

「服ってもう足りているんだよね？」

「はい。すべての衣装に袖を通そうと思うと、一日一着ペースで2
年くらいはかかるかと」

「帰ってもらうことは出来る？」

「まさか。王宮まで出向かせて一着も買い取らなかつたとなれば、
彼のギルドは対外的にもギルドメンバーからも信用を失うでしょう」
「ぼ、ボクのお小遣いはいくら？」

「すみません、侍女如きではそこまで知る権利がございません」

深いため息をついたら、なにやら不安そうな顔をしたギルド長さ
んがこつちの顔色を伺っている。

そんなつぶらな瞳でこつちを見られたら、余計罪悪感が募るじゃ
ないか。

ここは時間を稼いで、レオさんにも詳細を聞きに行かなければ！

「あ、あの、ギルド長さん？」

「はい、なんでございましょうか、姫殿下」

「そろそろお昼ですし、ここらで昼食の時間といたしませんか？」

「おお、これは気付きませんでした。それならば、我らも昼食といたしましょう」

「ええ、そういたしましたよう。それではまた後ほど」

軽く膝を曲げて別れの挨拶をし、ミーシャの後を追ってそそくさとその場を後にする。

もちろん行く先は昼食などではなくてレオの執務室。

さすがに自分が自由に出来る金額をきちんと把握しないで買い物なんて、怖くてしかたがない。

「なるほど。ご自身が自由に出来る予算の残を知りたいというわけですね？」

「は、はい、そうなんです。レオさんに聞けば分かるかなと思いついて」

「その判断は賢明です。もちろん把握しておりますので、帳簿を見ればすぐに返事が出来ます。が、今までそのような事をあまりお気になされていなかったように思うのですが？」

「あ、その、なんとというか、やっぱり無駄遣いは良くないかなと思いますし……」

僕の言い訳を背中であ聞きながら、レオさんは棚の中から分厚い書類の束を一つ引つ張り出してきた。

それを無造作に開けて、ページを凄いい勢いで捲ってゆく。

「ああ、ありました。姫殿下のご自由に出来る資金ですが、ざっと見積もって新金貨五千六百枚……」

「ええ？ そんなにあるんですか！」

ちよつとほつとした。

五千六百枚の金貨がお小遣いだといわれてもピンと来ないけど、これだけあるのであればあの服を全部買い占めてもお釣りがきそつだ。

もちろんそんな馬鹿な買い方はするつもりないけどね。

と思つていたら、レオが笑顔で首を横に振っている。

ん、僕、なんか勘違いしてるのかな。

「新金貨五千六百枚のマイナスでございます。ですので、現在姫殿下の判断で決済できるものは何一つございません」

「……」

あれ？ 何をいつてるのかな？

良く聞こえなかったよ。

ちよつと耳を穿つて風通しを良くしてから、もう一度聞きなおそう。

「えっと、レオさん。私……」

「新金貨五千六百枚の負債でございます。現在姫殿下は飴玉一つ自分の意思では購入できる状況にはございません」

「ボク、借金もちですか！」

「正確には姫殿下の借金ではございませんが、予算自体はそれだけの額を超過しております。これをどうにかしない限り、正常な予算執行は無理でございます」

「どーすんのさ、この状況。」

今まで慎ましかな生活を営んできて、爪に火を灯すとまでは言わないけど、節約しながら生きて来たのに。

何が悲しくていきなり国家予算規模の借金を抱えなきゃいけないんだろう。

それよりも何よりも、あの服をどうするのさっ！！

「あの、レオさん？ 実はですね……」

「ええ、分かっております。本日招かれている繊維ギルドの件ですね。本日の招待に掛かった費用はまだ計上されておりませんので、先の額にさらに昼食代、警備費用、招待会用の人員費用、その他雑費で金貨五十枚ほどが上乘せされますね。もちろん衣服購入代金は含んでおりません」

「あうあう……」

「何かご質問は？」

「あ、ありません」

なに爽やかな笑顔でこっちみてるのさ。

あれだよ、レオって割といぢめっ子だよな？

涙目になっている僕を見て楽しんでいるのが、何となく分かるもの。

進退窮まるとはこのことか！

慌ててミーシャを振り返っても、彼女も苦笑いを返すのみ。当たり前だよな。

たかが一メイドに国家予算をどうこう出来る力がある筈もなし、とはいうものの、このままではギルド長以下繊維ギルドの皆さんが困るわけで。

「あのお、レオさん？」

「はい、なんでございましょう、姫殿下」

「そのですね、今日来られたギルドの人たちがある程度満足できる程度の買物が出るだけのお金ですね、要るのですが……」

「なるほど。分かりました。金貨でいかほど用意させましょうか？」

「よ、用意出来るんですか?!」

「必要であれば用意せねばならないでしょう。ギルドが王宮に呼ばれて何も買ってもらえずに追い返されたでは、最悪死人が出る騒ぎになりますし」

よかったー。

レオさんが話のわかる人でよかったですよー。

もうね、抱きつきたいくらい嬉しいんだけど、とりあえずそれは堪えてミーシャに金貨何枚必要か尋ねようと後ろを振り返る。

「ま、相当額を住民から徴税すれば済む話なので、それほど心を痛める必要もありませんまい」

「……?」

えっと、それって臨時徴税するってことなのかな？
もう一度、レオの方へと向き直る。

当のレオは嬉しそうな顔で、「どこから徴税しようかな？ そういえばあの地区はまだ貯め込んでいる筈だから、徴税隊を編成して」などと物騒なことを仰っておいでです。

「あの、レオさん？」

「はい、なんでしょうか、姫殿下」

「徴税するのですか？」

「ええ。無い袖は振れませんので、無理からでも袖を作って見せないと鼻血もでません。何せ新金貨五千六百五十枚の借金ですから」

あう、さりげなく50枚追加されてる。

拙いよね。

なんか最終的にはどこかの国の人みたいに市民に恨まれてギロチン台送りになるんじゃないのかと。

うわぁ、やなフラグが立ちそうだ。

「ちょ、徴税や徴税隊はやめませんか？」

「おや？ ですが一番手っ取り早い方法なのですが。まあいいでしょう。じゃあ、貧民区の再開発に割り当てていた費用が確か金貨千枚ほど執行待ちで倉庫においてあった筈。それを使い込みましょう！」

「使い込みません！」

「金を溜め込んでいる商家に難癖をつけて罰金として、金貨を巻き

上げる」

「どこのヤクザですかっ！」

「ふむ。ならば、適当な理由をつけて王宮に詰める者たちの給料を2ヶ月ほど50%カットすれば、金貨3千枚は浮いてきます。それを購入費とマイナス予算の補填に当てましょう」

「もつとマシな案はないんですかっ！」

むむむと唸って眉間に皺を寄せるレオさん。

同じくむむむと唸る僕。

しばらく睨みあっていた僕たちだけど、レオさんがため息をついて首を左右に振る。

「分かりました。仕方ないので私の私財を売り払えば、金貨百枚はあるかもしれません。とりあえず、今はどこから金貨を持ってきて支払いに充て、後日私財を売却した金貨で穴を補填しましょう」

「あ、そっか。私財を売り払えばいいんだ」

「私の屋敷を売り払えば割といい値段になるはずです」

「いや、そうじゃなくて。売り払うものなら、北の塔社にも一杯あるんじゃないですか？ 例えば廊下においてある壺とか。使っていない部屋に飾ってある絵画とか。本末転倒だけど、着ていないドレスを誰かに売るとか」

なんだ、簡単じゃないか。

借金苦に身を削るような方法になるのは仕方ないけど、もともと必要以上にある装飾品なのだからこれらを売ればいいお金になるはず。

これなら誰からも文句は出ないだろうし借金も少しは減るかな。

となればあとは売却方法をどうするか、誰かに考えてもらえばいいのだけでも。

「姫殿下、正気ですか？ 北の塔舎にあるものはすべて貴方が絶対に必要なものだと言い張って購入なされたものなのですが。それらを売却するより、徴税するほうがずっと楽だと思うのですが」

「いえ、自分の買い物をする為だけに誰かが犠牲になるのは、あまりいい氣がしません。ですが自分の身を切る分については自分が我慢すればいい話なので、これが一番私に取って気楽な方法なのです」

レオさんがじつと私の目を覗き込むように見つめている。

今まで散々使いたい放題をしていた外の人が、突然僕のようなことを言えばそりや変に思われても仕方ない。

ギロチン台に送り込まれないように平穩無事に生きていくためには、今までの外の人のやり方を変えていく必要があるわけで。

これもスワジク姫イメーリアップ作戦の一環として作用してくれたらいいなあと思ったりする。

「なるほど。本気のようにですね。了解しました。本日の買い物が決まったら、ギルド長をこちらへ遣してください。その時に代金を清算いたしますので」

「はい、ありがとうございます。それじゃあ、近いうちに売却する品の目録を作っておきます」

「わかりました。そちらは私を呼びつけて頂ければ、いつでもお手伝いさせていただきます」

ようやく支払いのあてが出来てほっとした僕は、ミーシャを連れて先ほどの見本会場と化した部屋へと戻っていった。

しかし金貨五千六百五十枚の借金か。

これもいずれどうにかしないといけないかなあ。

あ、そうそう、結局今日の買い物合計額は新金貨百枚となりました。

全部買わないと宣言したらギルド長はびっくりしていたけど、それでも相当数の買い物をしたので機嫌よく城を後に出来たんじゃないかな。

もっとも僕の胃は結構なダメージを受けたけどね。

さて、次は何処に手を入れるべきか、またミーシャと相談しないといけないや。

18話「売り払えっ！（某姫殿下風に）」

暖かな陽の光、柔らかな風、そして匂い立つ色とりどりの花達。

目を閉じればすぐにでも夢の世界へ旅立ってそうな昼下がりに、僕を含む総勢十五人の人間がこの広場に集まっていた。

メンバーは僕を筆頭に、フェイ兄、レオさん、センドリックさんに初めて見る男の騎士さんが3人。

女性陣は僕付の侍女であるミーシャ、スウィータ、アニスにライラの四人に、いつか見た侍女長のヴィヴィオさんと彼女が従える3人の政務館付の侍女達。

皆、動きやすい服装にエプロンやら手袋やら掃除道具を持っているが、顔つきは戦場に出る戦士のように引き締まっている。

やっぱりヴィヴィオさんとレオさんがいると、場の空気が締まるんだね。

フェイ兄ではなかなかこうは行かないに違いない。

11人がびしっと整列している前に、僕を始めフェイ兄、レオさん、そしてヴィヴィオさんが立っている。

そしてレオさんがゆっくりと前へと出て、11人の掃除人達に向かって説明を開始した。

「本日、ただいまから北の塔舎にある不要になった調度品や衣類、家具などの搬出、処分、そしてその後の簡単な清掃を行う。主な指示は侍女長か私が出すので、不明な点等があれば逐次相談に来る」と

「はいっ！」

歯切れのいい皆の返事が綺麗にハモって、なんか凄くカッコイイ

なあ。

いつもの3割り増しでかつこよく見えるな。

特にアニスとか。……いや、別に普段がだらしなないとかいう意味じゃないよ？

しかし、今日の僕もいつもとは一味違うんだ。

見よ！ この動きやすさを追求したブラウスを！ さらにいつもはスカートを履いているのだが今日は掃除もあるからパンツを履いてみた。

もつとも、外の人にはパンツルツクが嫌いだったのかズボンが1枚も無いから、フェイ兄に頼んでズボンを1本頂いたのだけれども。

ちゃんと手袋とタオルも用意したし、三角巾も頭に装着している。1分の間もないこの僕を見て、何故か誰もコメントをくれないのは何故だろう？

「それでは各自、割り当て場所へ行って作業を開始してください」

レオさんの号令と共に、さっと散ってゆく11人。

僕もミーシャの後を追って塔舎に入ろうとしたら、後ろから肩を誰かに掴まれた。

何かなと思つて振り返ると、フェイ兄が笑顔で立っている。

「えと、フェイ兄様？」

「うん、スワジクはこっちだよ」

「なるほど、担当場所が違つたんですね」

素直にフェイ兄の後ろについてゆくと、中庭の中ほどに設置され

たテーブルの上にお茶や一口ケーキなんかが置かれている。

そこへフェイ兄が近寄って、椅子を引いて僕に座るよう促す。
「っていうか、それじゃあ手伝えないのではないのだろうか。」

「あのフェイ兄様、皆の手伝いは……」

「大丈夫だよ。みんながきちんと綺麗にしてくれるから。その間私たちはここでゆっくりと皆が終わるのを待ってればいい」

「折角手伝うつもりで服装も整えましたのに」

「僕達が出て行ったら、逆に皆が働きにくくなるんだよ。上に立つものが率先して何事もこなすのもいいんだけど、時と場合によりけりなんじゃないかな」

「そうでしょうか……」

「でも、そういう気持ちがあるっていうのはとてもいい事だと僕は思うよ」

そういつて不満気になっている私の頭を撫でるフェイ兄。

とは言つもの、みんなが一生懸命働いているのに横で、それを見ているだけというのは結構落ち着かないものなんだけど。

そわそわしながら塔舎とテーブルの上を行き来する僕の視線を、フェイ兄は生暖かい目で見ている。

変な奴と思われているんだろうなと思いつつも、やっぱりなんか落ち着かない。

例えるなら、全校生徒が清掃時間に清掃しているのに僕だけが手伝わなくていいからと教室の自分の席に座っているような感じ、といえは伝わるかな？

「変わったね」

「何がです？」

「君の物の考え方が、だよ」

「そ、そうですね。やはり今までは問題が色々であったと思いますし、私も変わるべきかなと思ったんです」

僕は用意していた答えをフェイ兄に言う。

ミーシャと二人で考えた無難な答えなのだが、果たしてこんな苦しい言い逃れで納得してもらえるかどうか。

だって平気で五千七百五十枚もの借金を作れる人だったんだからねえ、外の人は。

といって僕が外の人みたいに振舞えるかといわれれば、間違いなく無理だし。

「そうかい。何にせよ、変わるといっつのはいい事だと思うよ」

「はい、有難うございます」

にっこりと笑顔で返事をする、フェイ兄は慌てて咳払いをして塔舎へと視線を逸らす。

釣られて僕も塔舎を見たら、3階の窓からレオさんがこっちに向かって手を振っているのが見えた。

僕達に上がって来いということみたいだ。

どうやら僕にも出来ることがあるみたいだと思ったら、なんとなく嬉しくなる。

苦笑するフェイ兄の背中を押しながら、僕達はレオさんの待つ3階へと向かった。

「なるほど、私の私室のものだから触れなかったという訳ですね」
「はい。申し訳ありませんが、要る物と要らない物の指示だけ頂けたら、搬出はこちらでいたします」
「しかし、久しく入った事が無かったが、……凄いな」
「ははは、本当に」

頬を引き攣らせながら、フェイ兄の呆れ顔のコメントに同意する。目の前の部屋は30畳はあろうかという位の広さがある筈なのに、所狭しと置かれた置物や家具などで床が見えないくらいに占領されていた。

なんていうか、雑な古物商屋さんの倉庫みたいな感じ。

こんな所で日々の作業やなんやと外の人がしていたのかと思うと、呆れを通り越して尊敬の念が沸く。

僕なら5分と居たくない部屋だよ、これは。

「どうしますか、姫殿下」

「とりあえず手前ものから全部外に出していきましょう」

そういつて手近にあった額を手に廊下へ出ると、外で待機していた人たちが順番に中へと入っていく。

レオさんに促されて僕はもう一度部屋の中に入り、荷物の運び出していいかどうかの判断をしてゆく。

段々と部屋が空いてくるにつれて自由に動けるようになったので、皆の作業の邪魔にならないように家具や調度品の水拭きなんかを始める。

最初こそ皆僕に気を使っていたようだけど、鼻歌まじりに掃除をしている姿を見て何も言わなくなった。

やっぱり何か作業をしているっていうのは良い事だねえ。

「ん？ なんだろう、この引出し」

窓際にあつた多分自分の執務用の机を整理していたら、鍵が掛かっている引出しがあつた。

そういえば、さっき上の段の引出しの中にこれの鍵っぱいのがあつたな。

すぐ上の引出しを引き出して真鍮製の鍵を取り出す。

鍵穴にぴったりとはまるので、恐らくこの引出しの鍵なんだろう。鍵を回すとかすかな抵抗の後、かちりと音がして鍵が開いた。

何故かドキドキしながら引出しを引くと、中には豪華なカバーの本が1冊入っている。

「へえ、綺麗な本？ いや、中が白紙だからノートのようなもんか。何が書いてあるんだろう」

「姫殿下、こちらの箱の中身はいかがいたしましたしょう？」

「あ、はい。少し待ってください、ヴィヴィオさん」

慌てて引出しを閉めて、僕はヴィヴィオさん達が困んでいる大きな葛籠っぱい箱へと向かった。

ここはどうせ自分の私室なのだから、あのノートみたいなやつは時間のあるときにまた来て読めばいいよね？

その日の夜。

僕は一人、スワジク姫の部屋へと来ていた。

昼間見た本が凄く気になっていたし、もしかしてあれが日記とかだったらもつと外の人のことが分かるかもしれないと思ったから。

蒼い月夜に照らされた部屋は思ったよりも明るく、特に窓を背にした机は火を灯さずとも文字が読めるほどだった。

昼間開けた引出しをそつと開け、中にあつたノートを取り出す。

表紙を捲ると最初の書き出しに、「愛しの娘へ」と綴つてあつた。

次を捲ると日付らしきものが書いてあり、綺麗で几帳面な字が整然と綴られている。

ウルガの年、ミレニアの月、赤の7

今日、お母様は旅立ってしまった……。

私は真正正銘、この世で一人ぼっちになってしまった。

その日記の書き出しは、とても冷たくて悲しそうに僕には見えた。何か他人の秘密を覗き込んでいるようで居た堪れない気持ちになつたけど、多分これは僕が読み進めていかなきゃいけないものだと思う。

ゴードイン家の奴らは、お母様の葬儀で皆ほつとした表情で笑いあつていた。

もちろん私の目の前でそんな事を露骨にはしなかったが、誰も悲しんでなど居ないことくらい12歳の私でも分かる。

でも私は泣きません。

ちゃんとお母様の言いつけを守って、一人でも強く生きてゆくと誓ったのだから。

それに私にはあの子がいるから大丈夫。

あの子だけはお母様のことを本気で悲しんでくれた、たった一人の親友だもの。

僕はゆっくりと次のページを捲ろうとして、その手を止めた。

日記の間に何か挟まっているみたいだ。

なんだろうと思って引き出してみると、赤い封蝋をした真っ白な封筒で表に宛名が書かれていた。

「親愛なる兄様と、一度も愛してくれなかった義父様へ」

僕はゆっくりと封を破ると手紙を取り出して、月明かりの下でゆっくりと読み始めた。

19話「何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからな

「おはようございます、姫様」

「ふぁ。おはよう、アニス」

眠たそうな目を擦りながら姫様がベッドの中からもそもそと出て来られるのを、暖かい手ぬぐいを持って眺める私。

これだけを見たら朝に弱い妹がベッドの上でもたついている絵なんですけど、相手があのスワジク姫だから微笑むことすら躊躇われるのですけれども。

もそもそと出てきた姫様に暖かいタオルで顔を拭ってもらってから、ベッドから出てくるのをじっと待つ。

姫様の行動をおなじように見つめているミーシャちゃんの視線が、なんか普段と違っていて妙な胸騒ぎを感じる。

何と言われても上手くいえないけど、二人だけの空気みたいなものがあつて嫌だなと思う。

まあ、今はそんな私情にかまけているわけにも行かないので、ベッドから降りた姫様にゆっくりと近づいて拭き終わったタオルを受け取って始末する。

それから自分でも分かる微妙な笑顔を無理やり作って、姫様の手を取り鏡台の前へと手を取って連れてゆく。

それだけで一仕事終えたくらいに神経を使ってしまったので、姫様に気付かれぬようそっとため息をつく。

と、すぐにくいくいっと袖を誰かに引かれた。

引く手の主を見ると、姫様が鏡台の鏡越しに笑いながら喋りかけてくる。

「ため息付くと幸せが逃げますよ。アニスは可愛いのだから、笑顔でいる方がいいです」

「ひゃ、ひゃい」

突然の姫様の言葉に私は噤んでしまった。

姫様からこんなこと言われたのは初めてだから、本当にびっくりした。

いつも彼女から私に向けて出る言葉は「グズ、ノロマ、でか乳」がほとんど。

落水事故以前なら、名前すら呼んでもらった記憶が無い。

スヴィータが言うように背筋が寒くなる気持ちも分かる。

なんていうかあるべき物があるべき所に無いような、そんな落ち着かない感じ。

なんでミーシャちゃんは平気なんだろう。

考え事をしながら手を動かしていると、後ろから当のミーシャちゃんに声を掛けられる。

「アニス。それはそれで良いとは思っただけど、考え事しながら髪を結うのはやめた方がいいよ」

「え？ 私なんか変な事した？」

「姫様の髪、えらい事になってる」

なんだろうと思って前を見ると、うず高く巻き上がる銀色の髪。いわゆる盛り髪というやつが目の前に燦然と輝いていた。

わわわ、私なんて事を！

「うう、重い……」

「ひ、姫様、申し訳ありません。ただいますぐに元にもどします」

ああ、考え事なんかしなきゃ良かったよ、私の馬鹿。

もともと一つの事にしか気が回らない人間なのに、ああ、数分前の自分を殴りたい。

涙目になりつつ姫様の髪を解いていると、鏡越しに姫様が苦笑しているのが見えた。

「ドジっ娘だねえ、アニスは」

「すすす、すみませーん！」

うん、いつもなら怒鳴り散らされるような失敗だったけど、やっぱり優しくなった姫様。

顔を真っ赤にしながらいつもとより20分も余計に時間がかかり、朝食の担当だったスヴェータに睨まれてさらに涙目になったのは余談である。

朝食も滞りなく終わりフェイタル殿下も執務に戻られ、今は少しゆっくり出来る時間帯。

といっても侍女である私たちはそんなにゆっくりも出来ない。

姫様が食後に外へ出たいと言われたので、その準備に右往左往しているのだ。

怪我也良くなった事もあるのか、姫様は最近いつもにも増して行動的になられている。

内向きな正確だった姫様がここまで積極的に外界と関わりを持つうとしていたのも、事故後の大きな変化の一つ。

他の大きな変化は何かといえば、例えば怒鳴り散らさなくなったとか、失敗するたびに鞭で殴らなくなったとか。

鞭といっても堅くて平べったくてしなる棒ですが。

あれが空気を裂く音を聞くと、本当に怖くて仕方が無かった。

あと、先日の装飾品とか姫様のコレクションの処分なんていうのも、大きな変化といえるかな。

高価な物に囲まれているのが幸せというような姫様が、執着せず
にそれらを処分していく姿は本当に別人のよう。

「アニス。外出の用意出来ました？」

「あ、はい姫様。こちらのお召し物で今日はどうでしょうか」

「アニスがいいと思うならそれでお願いします」

「はい、畏まりました。ではこちらへどうぞ」

姿見の前で部屋着を脱いでもらい、用意した服を手早く着せてゆく。

服装の好みも180度方向が変わった。

以前の様な贅を凝らしたような衣装は見向きもせず、選ぶものといえは大人しい地味なもの。

急激な好みの変化に、最初は何度も寝室と衣裳部屋を行き来したものでした。

姫様は着替え終わると、にこにこ笑いながら私たちに振り返る。何やら企んでいそうな笑みに、私は思わず一歩後ずさってしまふ。

「さて皆さん、今日は少し忙しくなりますので覚悟しててください」

いね？」

「え？ 何か急なご予定がおりなのでしょうか？」

「ええ、今から政務館へ行き、ちよっと挨拶廻りをしたいのです。そうそう、その前に厨房に行つてクッキーも作るので皆さん協力してくださいね」

いたずらっぽく微笑みながら今日のスケジュールを説明する姫様に、その場に居たミーシャちゃんや私を含め侍女全員があっけに取られた。

つていつかミーシャちゃんも知らなかったって事は、これって姫様一人で決められたことなのかな。

なんか嫌な予感しかしないんですけど……。

昨日の大掃除の際に出た処分品の処理についての報告書に目を通している、レオが珍しく慌てた様子で部屋に入ってきた。

私は手にしていた書類から目を離し、肩で息をしている彼を何事かと思つて見る。

「ノックもなしにどうしたんだ、レオ」

「は、はい。殿下に早急にお知らせしたいことがあります。す、スワジク姫ですが……、姫殿下が……」

「事故か！ 事件か！」

脳裏に先日の落水事故の恐怖がよみがえる。

くそっ、レナの単独犯行だとばかり思っていたが、やはり背後にどこかの派閥が動いていたか。

椅子を蹴倒して、ソファーにもたれ掛かっているレオに駆け寄った。

レオはそれを片手で制しつつ、首を横に振る。

事故や事件ではないのかという安堵感に、思わず長いため息をつく。

「では、なんだというのだ。びっくりするではないか」

「姫様が政務館で、今まで悶着のあった部署の視察に廻られているのです」

「な、なんだと！」

「いままでの経緯を考えると、以前のムチヤな要求の催促か、成果が上がっていないことへの糾弾にいったのではないでしょうか？

最近北の塔舎から出られなかったので安心していただけなのですが……」

ここ数日の彼女の行動を見る限り、以前の様々な事案について忘れていたような節があったので私もレオも安心しきっていた。

あのまま大人しいお姫様を演じてくれているならそれもいいと思っていたのだが、どうやら我々は裏をかかれたようだ。

これ以上内政に口を出されては、官僚達の不満が一気に噴出する可能性もある。

王家に対する不満や不信をこれ以上助長させるわけにはいかない。私はすぐさま現状の把握と事態の沈静化に向うため、レオの襟首を掴んで政務館へと向かった。

政務館3階にある財務室。

レオの話では、スワジクはまずこの部屋を目指したらしい。

私は逸る気を抑えつつ目の前の扉を押し開く。

部屋の中にいた官僚達が、血相を変えて飛び込んできた私に驚きの視線を向けてきた。

一同が凍り付いている中、奥のデスクに座っていた財務長官が口を開く。

「これは殿下。このようなむさ苦しい場所に何か御用でございませうか？」

「スワジクがこちらに来たと聞いたのだが？」

「はい、小一時間ほど前に来られ、私と少々話をされて出て行かれました」

深いため息をついて肩を落とす長官。

その眉間には深い皺が刻まれている。

今度はいつたいどんな無理難題を吹っかけてきたのやら。

私は恐る恐る長官に事情を尋ねた。

「突然の訪問でしたので、こちらも大分警戒はしていたのです。姫殿下が買った物の債権放棄などというふざけた法令を成立させると、つい最近までしつこく言われていたのですから」

長官は机の上にあった紙を数枚取り上げて、私の前まで持つてくる。

それを受け取り軽く斜め読みをしたが、書いてある内容がよく理

解できずに何度も読み直すことになった。

「殿下が何度も読み直すのも当然です。私だって本人を目の前に10回問い直したのですから」

「あ、有り得ん」

次に続く紙に目を通すと、そこには一面にびっしりと埋めつくされた数字の山。

縦軸と横軸の項目を見て、数字の意味するところを把握した。

「へ、返済計画表だと?」

「返済計画表というよりは、向こう30年間の予算執行計画表というべきでしょうか」

私の手の中にある表をレオに渡して、私はもう一度1枚目の誓約書と書かれた紙に目を通す。

要約すれば、来年度からの姫の生活予算から少しづつ債務返済を行っていくとの宣誓書だ。

「こ、こんなもの意味がありません。だいたい当の債務には既に割当てている財源がありますし、30年もこの城に結婚もせず居座るつもりかと。急にこんな話をされても現場が混乱するだけで……」

「閣下の言とおりでです。私もまたなんていうムチャをいうのかと思っただけです。でも本人が返したいと言っているのであれば、来年度の予算設計がずいぶんと楽になるのも確かです。例え雀の涙程度

の額とはいえ、債務が減っていくのですから。さらにこれ以上意味の無い債務を増やさないという約束までしてもらっています。結婚されるされないは私どもの感知するところではないので無視するとして、財務長官の立場としては全面的に姫殿下の意見に賛同いたしております」

狐につままれた様な顔をして呆然と立ち尽くすレオと私。

そんな所に慌しく数名の文官達が駆け込んできた。

みな手に手に何かの書類を持っている。

「レオ閣下！　こんなところで何をされているのですか！　大至急

この事案の決済をお願いします」

「閣下！　こちらもお願ひします」

その人ごみに押されて壁に押し付けられるレオ。

目の前で振り回される紙を一部引つたくり、私はさっと目を通した。

書かれている内容は、様々なギルドに発注していたスワジクの身の回り品の発注取り消しについての命令書だった。

その次にひつたくった文書には、スワジク専用をストックしていた高級食材の流用許可と再仕入れの禁止がうたわれている。

なんなのだ。一体何が起こっているというんだ。

頭をガシガシと掻き毟りながら、書類の山に埋もれてゆくレオを見た。

「殿下、こちらでしたか。」

野太い声に呼びかけられて、なんとも気乗りしないのだが一応振り返る。

そこに立っていたのは、罪人の収監、処罰を監督する刑務督（刑事罰専門の法務省大臣みたいなもの）が立っていた。

「おお、リディル卿。貴方も何か？」

「この混雑を見る限り、恐らく同様の用件かと思われませう」

「卿が来られたということは、スワジク姫がらみの受刑者についてですか？」

「はい、左様でございます。こちらに目を通していただき、陛下に恩赦の号令を頂きたいのですが……」

「待て、待てくれ。一体何が起きているんだ？」

「先ほど姫殿下が来られて、収監されている侍女や政務官達の恩赦ないしは訴訟自体の取り下げを訴えてこられました。こちらとしても特に問題はないと思えますので、早急に本件を片付けたいと思うのです」

頭痛がしてきた。

喜ぶべき事なのだろうけれども、一度にこつも押し寄せられるとレオも私もパンクしてしまう。

ま、まさか、これは新手の嫌がらせか？！

「と、とにかくここでは財務室の邪魔になる。皆一旦ここを出て私の執務室の方へ来てくれ。レオ、行くぞ」

「は、はい、殿下」

結局、私とレオは次から次へと現れる官僚達に忙殺され、今日1日を執務室で働かされる羽目になった。

20話「おでこのキスはノーカンだからねっ」

ここはスワジク姫こと僕専用の私室。

机の上に置いたメモ書きをじつと眺めて、僕は一行一行チェックを入れてゆく。

なんのメモかというのと、日記から書き出したスワジク姫の駄目出しリストである。

あの日記、読み進めていくとだんだん行動が過激になっていくもんだから、結構読んでいて背筋が寒くなった。

日記の勢いでいったら絶対いつか背中から刺されるなあと思うわけ。

「これでおおよそ迷惑な命令やお願ひなんかは粗方片付いたかなあ。個人との感情のもつれは徐々に改善していくとして、王様との関係も改善したいなあ。ギスギスした家族なんていやだもんな」

といいつつも、いまだ一度も王様に会ったこともない。

でも正直、義理とはいえ娘が溺れたんだから見舞いに来いよと言いたいんだけどね。

相手が来ないならこちらから歩み寄るのみ。

といいつつも、王様がどんな人か知らないのでどうアプローチすべきか悩むところ。

この辺りはミーシャに聞くよりか、フェイ兄にさりげなく聞くのがいいかな。

物思いにふけていると、ドアが静かにノックされる。

「はい、どうぞ」

「やあ、僕の可愛いお姫様、ご機嫌はいかがですか？」

「お仕事はいかがなされたのですか、フェイ兄様」

最近ではフェイ兄様の気色の悪い科白にも大分耐性が付いてきた、
と言っか慣れた。

だから部屋へ入ってきた変態ロリスキーを笑顔で迎え入れること
も出来るようになったんだ。

これって凄い進歩じゃね？

と、益体も無いことを考えている場合ではなく、これは渡りに船
鴨が葱を背負ってやってきたのです。

「仕事かい？ 君が昨日盛大に増やしてくれたお陰で寝不足気味だ
けど、大体片付いたよ」

「あ、あはは。それはご迷惑をおかけいたしました」

「いや、かまわないよ。昨日のような事ならいつでも大歓迎だよ。
っていうか、何故今になって？」

机を迂回して僕の背中側にある窓の棧に腰を掛けるフェイ兄。

フェイ兄は笑顔を崩さないけど目が笑っていないので、なんだか
怖い印象を受ける。

あれ？ フェイ兄ってこんな腹黒キャラだっけ？

確かに昨日一気以外の人の行動修正をしたから、以前を知る人で
あれば疑問に思うのも当然だろうね。

「そう、ですね。私は以前から周囲に色々と無茶なことばかり言っ

ていました。それは自分でも薄々感じていたことなんです。今回自分が死に掛けているんな人が必死になって助けてくれたという事を聞いたとき、こんな我侭一杯の自分じゃいけないんじゃないかなっという思いが生まれたのです」

「なるほど。それでいままでの行動を振り返って、自分で駄目だと思つところをやり直しているっていう事かな」

「はい、その通りです。以前の私は他人が変わらないから自分も変わってやらないって意固地になってました。でも人に変わって欲しければ、まずは自分から変わらないと駄目だつて思つたんです」

椅子をくるりと回して、横に立つフェイ兄を見上げる。

僕の言葉にびっくりしているのか、ぽかんとした表情でこっちを見下ろしているフェイ兄。

イケメンの間抜けな表情っていうのもなかなか可愛いものですねえ。

……つて、今僕は何を考えた！

男の顔を可愛いと思うなんてありえない。

こ、こ、これは何かの間違いです、やり直しを要求するのです！顔を真っ赤にして体を前に向ける僕。

やべえ、恥ずかしすぎて耳まで熱くなってしまった。

これはあれか、精神が体に引きずられているってことなのかな。

つてことはいずれ僕は可愛い女の子を見ても何とも思わずに、どこかの男に欲情するとかそういうことですか？

それはそれで色々キツイですよ、僕の男としてのプライド的に！

ちらりとフェイ兄を横目で伺つと、何やら物凄い生暖かい目で見つめられているような気がする。

うわあ、絶対何か勘違いされた！

萌えられたとかだつたら軽く死ぬる。

っていつか、シスコンロリ変態は死ねばいいんだ、そうだ抹殺しよう！

などといい加減思考が暴走状態になったときに、ぼんと頭の上に手を置かれた。

茹で上がった僕の頭には、置かれたフェイ兄の手はとてもひんやりとして気持ち良かった。

お陰で少し冷静になることが出来たことは感謝したいけど、そう何度も撫でないで欲しい。恥ずかしいじゃないか。

「それ、自分ひとりで考えたのかい？ その、誰か他にそう教えてくれた人がいるのかな？」

「……いえ、基本的には自分一人の考えです。色々冷静になれば廻りが見えてきたというか、そんなところだと思っていただければいいかなと思います」

「一人でその考えに辿り着いたというのならそれは凄いことだと思うし、その為に何か行動を起こせたのは尊敬に値するよ」

「いえ、そんなに褒めてもらうほどの事では……」
「ただね……」

ゆっくりと僕の頭を撫でていた手がぴたりと止まる。

何かなと思つて見上げてみると、そこには笑顔で黒いオーラを放っているフェイ兄がいた。

うわぁ、何んでそんなに怒ってるのさ！

良い事したと思ってるなら、褒めるだけにしてくださいよー。

「何かをするなら、僕にちゃんと相談してからにして欲しかったなあと。徹夜で仕事させられるとか、どんな嫌がらせかと思つたじゃ

ないか」

「ひいい、す、すいませーん、フェイ兄様。てか、頭が痛いです！
ぐりぐりするのやめてください〜」

暫くの間涙目になって抗議する僕を無視して、フェイ兄は黒い笑顔のまま頭をぐりぐりしつづけた。

「フェイ兄様、お聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」

「ん？ 何かな」

「あの、私、事故があつて以降一度も父上とお会いしていないのですが、どのタイミングで挨拶に行けばいいのか……」

ぐりぐりされた頭を撫でながら、目尻に涙をためたまま困った顔でフェイ兄を見上げる。

僕としては親なら娘の快気祝いくらいさっさと来ればいいのになんて感じなんだけれども。

フェイ兄はさっきの黒い笑顔から一転、僕の顔を真剣な表情で見つめている。

ちよ、恥ずかしいからやめて欲しい。

こんなにまじまじと他人から見つめられるのって経験が無いしどう反応していいのかわからないじゃないか。

しかし僕には困ったときの日本人魂というか、最終奥義がある。

そう、日本人が追い詰められた時や反応に困った時に発動するという 伝説の秘技、『愛想笑い』である。

自分で言うのもなんだけど、鏡を見ていないから分からないけど結構不気味かもしれん。

頭の中でへらと笑う美少女を想像して、少し頭が痛くなるがそこは無視。

おや？ フェイ兄視線を逸らしたね。

くくく、自然界では視線を逸らした方が負け犬という掟があつてだな。

「そうだね。父上もそろそろ会わないといけないとも言っておられたみたいだし。今日の夕食、たまには3人揃って食べようか」

「……はい、私に異存はありません」

アホな思考を中断されたけど、フェイ兄からの提案はまさに望んでいたこと。

二つ返事で頷くと、フェイ兄も眼を細めて笑ってくれた。

「では、後でスヴィータにその旨を伝えておかないといけませんね」

「ああ、そうだね。細かいことは後で私から伝えるから、後でスヴィータに私のところへ来るように伝えておいて欲しいな」

「はい、分かりました」

素直に頷く僕の額にフェイ兄は手の平をそつと押し当てる。

すつと前髪をその手で掬い上げ無防備に晒された額に、流れるような極自然な感じで軽く押し当てられたフェイ兄の唇。

数秒間フリーズする僕の脳と体。

ナニヲシテオイデスカ？

「それじゃあね、僕の可愛いお姫様。夕食会は精一杯おめかしして来るといい。きつと父上も腰を抜かすだろうね」

脂汗をだらだら垂れ流す僕を置いて、フェイ兄はさっさと部屋から出て行ってしまおう。

いや、出て行ってくれた方がいいんだけどね。

額とはいえ男にキスをされたシヨックと、その感触をぼんやりと受け入れている自分自身がいるという2重のシヨックに立ち直れずにいる。

うわー、うわー、これはあれだよ、外の人の気持ちを体が引き摺っているに違いない。

僕が男にドキドキするなんて、死んだって有り得ないんだからなっ！

「ボ、ボ、ボ、ボクはホモじゃねええええ！」

『BLはホモじゃないんだよ、兄貴』という日本の鬼妹（ガンオタ腐女子）の声が出たのは、きつと僕の脳が壊れてしまったからだと思っただ。

っていうか、僕は今は女だからBLでもないけどねっ！

うん、負け惜しみだよ、悪いかコンチキショー！

一步部屋の外に出て、自分自身の行動に嫌気がさした。いや、それは無垢なる人を欺いているという罪悪感といつてもいいかもしれない。

蛮行姫を無垢な人と感じた自分の感性に驚くが、だが彼女の行動や反応は邪気の無い、もつとストレートに言えば他愛無いものだ。そこらにいる下級貴族の娘達となんら変わらないのではないかも思えるほどに。

「嫌なものだな、人を信じる事が出来ないというのも……」

スワジクは自分から変わらないといけないと言った。

そしてそれを実行している。

対して自分はどうなのかと問いただす。

彼女が変わったことを認識し実感してもなお、以前のスワジクが暗い目をして私を見つめる。

それは非難の眼差しだろうか、それとも怨恨か。

自身の感情を持って余しながら報告のために陛下の執務室へと急ぐ私の前に、一人の男が立ちはだかった。

私よりも頭一つ分高いはずの男を、目の前で恭しく膝を付いている為に見下ろす形になっている。

浅黒い肌に深い色の赤毛、対照的にコバルトブルーに輝く瞳。

鍛え抜かれた体軀は服の下からでもその存在感を訴えている。

深いワインレッドの衣装に身を包んだその男は親帝国派の軸をなす巨魁。

「これはフェイタール殿下。お久しゅうございます」

「……久しいな、トスカーナ卿。何か私に用か？」

「いえ、姫殿下のご機嫌伺いをと思い参上した次第で。そろそろ体調も回復されたという噂を聞き及びましたゆえ」

「まだ、許可出来ぬ。あと数日は待たれよ」

「さて、先日も同じような事を御使者から言われた気がするのですが、あと数日とは具体的にいつになりましょうぞ」

「おつてドクターから連絡をいれさせよう」

「ご配慮いただき、まことに有難うございます」

「かまわぬ。それでは私は急ぐのでこれにて失礼する」

跪いている彼の横をすり抜けたと思った時、背後からトスカーナ卿が再度声を掛けてきた。

その声色は先ほどの慇懃な感じではなく、どこか挑発的なものを感じさせる。

「そうそう、そういえば昨日姫殿下はまた色々と政務館をお騒がせになったとか」

「それがどうした」

「いえ、朝令暮改な姫殿下の行動に少し疑問を持ったものですから……。まさかとは思いますが何者かが姫殿下を誘導しているのかと」

彼の言葉に思わず足を止めてしまう。

ここは乗ってはいけない所だと思いつつも、無視して去るには聞き捨てならぬ発言でもある。

「ほう、何を思ってそのような事を？」

「はい。実は侍女の一人からそのような噂を聞きまして。何やら落水事故後、姫殿下には記憶を失っていたような時期があったとか」「ドクター・グエロが言うには記憶の混乱があるというのは聞いています。だが記憶喪失になっていれば、昨日の様なことは出来ぬであろうに」

「そうかもしれませんが、だからこそ、何者かが姫様を操っているのではないかと……」

私は我慢できずに振り返って、トスカーナ卿の背中を睨みつける。言いたいことは分かっている。

この男は私達こそがスワジクを誘導し、彼女の望まない方向へと導いていると言外に煽っているのだ。

「卿は何が言いたいのだ」

「いえ、侍女の一人がここ数日、夜な夜な姫様と密会しているとか。如何にも怪しげな事ではありませんか、殿下」

「ほう、それは私も初耳だな。そういう事情を私よりも先に知っている卿も、私からすれば十二分に怪しげではあるのだが？」

「これはお戯れを。私はただ風聞を殿下にお伝えしたまで。しかしこの話を聞いて疑心暗鬼に陥る有象無象もいるのではないかと、老婆心ながらのご忠告を」

「そうか、それはご苦勞なことだ。忠告感謝する。それでは」

有象無象の筆頭が何を言うのかという思いを押し殺しつつ、私はこの場を少しでも早く去ろうと思った。

自分自身を変えようと考えたというスワジク。

その彼女の願いを聞きつつ、どう彼女の心に入り込もうかと考え

ている自分。

スワジクを擁護するといいつつ政争の手段としているトスカーナ卿。

「なんだ、私もトスカーナも同じ穴の貉ではないか、ハハハ」

私の乾いた笑い声が、暗くて長い廊下に静かに沈んでいった。

21話「お願い、誰かしゃべってよ」

蝋燭の光で幻想的にライトアップされた食堂で、僕達というか外の人の家族が集まって夕ご飯を食べている。

30人は入れそうな部屋の中央にでんと置かれた長いテーブル。上座に座るのは当然ながらこの国の王様で、王様からみて右側に座るのはフェイ兄、そして左側、フェイ兄の真正面に座るのが僕。王様とは大体2mくらい離れている。

正面のフェイ兄とも大体同じくらい離れている。

蝋燭の灯で琥珀色に染め上げられた料理は何故かいつもより味気なく、水代わりのワインにも酔えなかった。

「……」
「……」
「……」

何、この沈黙のトライアングル。

美味しく無いじゃん、ご飯がさ。

もっとうち話とかあってもいいんじゃないの？

うちだったら、鬼妹が聞きたくも無い馬鹿話を延々と垂れ流すんだよ。

それがどれだけ苦行だったか！

でもそれはそれで食卓に潤いがあったんだと今なら思える。

大体聞こえてくるのが衣擦れの音と偶に聞こえる食器の音だけってどういうことよ。

そりゃ、外の人もグレるわっ！

メインディッシュが出てきたあたりで、ついに僕の忍耐力は限界

を迎えた。

「ばじつと一言いってやらねば！」

「あ、あのお……」

「……」

切れた割に弱気なのは僕のデフォルトだから気にしないで欲しい。僕の声を聞くと、王様はこちらを見ずに横に立つメイドさん目配せをし、そのメイドさんが僕の傍へとやってきた。

「何か不手際がございましたでしょうか？」

「あ、いえ、そういうんじゃないですね、こつ親子の会話といっかなんというか」

「はい。何かございましたらお伝えしますが」

あくまで優しく微笑みかけてくれるメイドさん。

綺麗なお姉さんの笑顔は見ていて癒されるけど、だがしかしここはそんな事で誤魔化されるわけにはいかない。

そう決心した僕は、メイドさんの反対側にいるミーシャを手招きする。

澄ました表情で傍へ寄ってきたミーシャに僕は聞いた。

「食事中の会話ってマナー違反ですか？」

「まあ概ねそうですね、料理が出てくる合間かデザートの時であれば直接の会話はそう嫌われるものではありません」

「なるほど。あ、すみません。ということで次の機会まで待ちます」

反対側に困った笑みを浮かべながら佇むメイドさんにそう言っただけで元の位置にお帰りいただく。

同じく元の位置に戻ろうとしたミーシャを引き止めて、小声でアドバイスをお願いする。

「ミーシャ、王様ってどんな話が……」

「ゴホンッ」

「……失礼しました」

王様の怒りの籠った咳払いにびびった僕は、大人しくご飯を口に詰め込む作業に戻った。

うつつ、怒んなくなっただけでいいと思うんだ。

ただ黙々と皿の上のものを片付けて、運ばれてきたデザートフルーツも平らげる。

よし、これで食後の団欒タイムに突入だ！

僕は冷やした水で口の中をすっきりさせてから、王様が座る席へと顔を向けた。

「あれ？ 誰も居ないよ？」

「ああ、父上はデザートを食べないからね。スワジクが一心不乱にデザートを食べているうちに部屋に帰ったようだよ」

(……何このすっぱー敗北感)

こうやって初めてのゴードイン一家団欒の時間は終わったのだ
た。

納得いくかあ！

僕は勢い良く立ち上がり、じろりとフェイ兄を睨みつける。

いやフェイ兄が悪い訳じゃないんだけど、このやり場の無い怒り
を誰かにぶつけないと収まらないんだよ。

当のフェイ兄は締まらない笑みを浮かべて僕を見ている。

「フェイ兄様。明日も夕食皆で食べますよ」

「決定なのかい？」

「ええ、決定事項です。父上にもよろしくお伝えください」

僕はそういつてミーシャを従えて自室へと戻った。

2日目の夕食。

昨日と同じように蝋燭の紅い炎にライトアップされた食卓。

そして昨日と同じ無言のトライアングルが形成されていた。

黙々と食事をしている王様。

僕と王様を澄ました顔して観察しているフェイ兄様。

背中に燃える炎を負った僕。

君達にも見えるだろうか、僕のこの迸るパッションがっ！

今日は燃え滾るパッションだけじゃなく、きちんと昨日の反省に
基づいて料理の合間で会話を試みることも忘れない。

王様と同じペースでスープを飲み終わる。

よし、今だ！

「あの、父上。私、この間お城の湖に落ちてしましまして……」
「知っておる」

「で、ですよ。それですね……」

「姫殿下、前を失礼いたします」

僕の左側から給仕さんがサラダをそつと目の前に置いてくれた。
何もそのタイミングで置かなくてもいいじゃん。

罪の無いサラダを睨み倒し、親の敵の様な勢いで噛み倒す。

うん、目が三角になっているのは分かるけど今は許して欲しいの
さ。

あまりにじっくり噛みすぎたから、僕がサラダを食べ終わった時
点で父上はパスタに入っている。

むむむ、仕方ない。

メインディッシュ前を狙うか、それが駄目ならデザートを食べず
に父上に話しかける。

今日残されたチャンスはこれだけだ。

そうして運ばれてきたパスタは、ブルーチーズのクリームソース
が掛かった海鮮パスタ。

僕の体が一瞬にして硬直した。

(ななな、なんだこの強烈な臭いはっ。シェフが1ヶ月履いた靴下
と一緒に鍋に入れてソースを作ったのか?)

鼻が直角に曲がりそうな臭いに、僕は目の前の料理とどう対峙し
ていいのか迷っていた。

基本出されたものは全部食べる。

これが僕の家の家訓だから、当然目の前にある意味不明な料理で

も完食せねばならない。

だが果たしてこれを食べ物とっていいのか？

冷や汗と脂汗が一緒になって額を伝う。

ごくりと生唾を飲み込みつつ、他の二人の様子を伺った。

(た、食べてる。……ということは嫌がらせではないということか)

フォークでパスタを1本絡めとり、恐る恐る口に近づける。

っていうか無理！ これは無理！ 初心者にはハードルが高すぎるって！！

脂汗に冷や汗さらには目尻に涙まで浮かべつつ、僕は眼前のモンスターとにらみ合った。

(ええい、ままよ！)

目を瞑って、謎の物体Xを口に放り込んだ。

思ったよりもクリーミーな舌触り、少しきつめの塩味が太目のパスタに程よく絡まっている。

そして同時に口腔内、鼻腔内に広がる無限の臭気。

今度こそ本当に僕はエターナルフォースブリザードを喰らったかのように氷付けになってしまう。

幸いだっただのはアニスが僕の異常に気がついたようで、目立たないように外へと連れ出してくれたので大事には至らなかった。

ブルーチーズ、恐るべし……。

こうして家族団欒計画第2弾は失敗に終わった。

「とうとうような事がありまして、今日の夜の訓練はお休みさせて欲しいのです」
「……はあ」

ベッドの中に青い顔をして横たわる僕を、ミーシャは呆れたように見下ろしている。

ミーシャはブルーチーズ大好き人間らしくて、今日のメニューなんて垂涎物だったそう。

ちなみに今日はアニスが付き添いだったから、ミーシャは晚餐には来ていなかったんだけどね。

ふうと大きなため息をついて苦笑するミーシャ。

「仕方ありませんね。それでは今日の歴史の勉強はお休みとしましょうか」

「ありがと、ミーシャ」

「いいえ、そんなに青い顔をされては流石に無理も言えませんし。また体調が回復してからにしましょう」

「ごめんね」

わざわざ深夜に起きてくれたのに申し訳ないという気持ちで一杯だ。

そんな僕の顔を見て、ミーシャは微笑みながら僕の頬を優しく撫でてくれる。

えっちい事しないミーシャは優しくていいんだけどなあ。

っていつかミーシャとも大分仲良くなれたよなあ、僕。
「ごろごろと喉を鳴らしながら、ミーシャの手に顔を押し付ける。

「父上攻略はさ、別方面から立てることにするよ」

「そうですね。私もどんな方法が良いか考えておきますね」

「ありがとう。ミーシャは僕の4番目のお助けキャラだね」

ぴたりと止まるミーシャの優しい愛撫。

ん？ と思って見上げると、真っ黒なオーラを纏ったディアブロがそこに居た。

「ちよー、な、な、なんで黒くなってるのさ」

「聞き捨てなりませんね」

「何も変なこと言っていないじゃん！」

「何故私が4番目なのですか！ っていつか他の3人は誰なのですかっ！」

「痛い、痛いって。ほっぺた抓るなあ」

ぎゅーっ と頬を抓るミーシャの手を両の手で外そうともがくけど、全力を出しても尚ミーシャの力には遠く及ばない。

蹴られるままになる僕は、目幅の涙を流しながら許しを請う。

「何かわかんないけど、ごめんなさい。もうしません」

「誰ですか！ 他の3人のお助けキャラって誰なんですか！」

「言います！ 言いますから手を離してください、ミーシャ様」

僕の必死のお願いが彼女に届いたのか、ようやく手を離してくれるミーシャ。

抓られていた頬は燃えるように熱い。

ほんと勘弁してほしいよ。

「で、誰なんですか？」

「ひつ。え、えと、1番目がボーマンで2番目がニーナ、3番目がレオ。4番がミーシャで、番外にフェイ兄かな」

「殿下が番外ですか……」

「え？　なんか駄目だった？」

「いえ、別に駄目というわけではありません。ただ、世の無常を感じたというかなんというか」

そんな馬鹿話を暫くしてから、ミーシャは僕の部屋から出て行った。

そういえばボーマン達と久しく会ってないなあ。

明日、近衛の方に行ってみようかな。

あ、ついでにラスクかクッキーでも焼いて持って行ったら喜ぶかも。

父上攻略はうまく行かなかったから、ここらで初々しいボーマンたちで和むのが吉に違いない。

我ながらいいアイデアだと思いつつ、僕は毛布に包まって深い眠りについたのだった。

22話「うーん、なんかタイミング悪いよね」

私こと、フェイタール・リブロイア・ゴードインの朝はまずトイレに行くことから始まる。

いきなり何を言うのかと思われるかもしれないが、毎朝の習慣というものは中々に馬鹿に出来ないものがある。

これをしてないと今日という日が順調良く始まった気がしない、という事があなた方にも何かあるはずである。

私の場合、それがトイレに行く事だったというだけの話だ。

何をそんなにトイレに拘るといふか朝の滑り出しの話に拘っているかと言うと、今現在その行為が阻害されているからに他ならない。

「で、何故私は起きてすぐに、しかもトイレにまで押しかけられねばならんのか、具体的に論理的且つ私の感情が収まるような説明をもらえると思っただけなのか？ レオ」

「はい、こちらまで押しかけた理由は、姫殿下が朝一番から行動を起こしているという報告とそれに対する対応の協議の為です」

「それくらいの話ならば、もう少し待つてからでも良かったのではないか？ 具体的には私がトイレから出るまでの間とか！」

「先ほども申し上げましたように、すでに姫殿下は行動を起こされています。そしてその目的とは、近衛隊舎への視察だそうであります」

「行きたいなら行かせればいいではないか！」

何をしに近衛までいくのかは知らないが、行きたいというのなら行かせて問題のあるような場所でもないだろうと思っ、ついイライラした口調で突き放す。

私の反応もレオはある程度予測していたのか、恐縮する様子も無く、むしろ教え諭すような口調で言葉を続けた。

「姫殿下付きの侍女からの報告では、どうも以前首にした近衛隊士と侍女に会いに行きたいといっているようです」

「何を馬鹿なことを。首にしたのなら近衛に行っても仕方ないだろうに」

「殿下、冷静になってください。我々は姫殿下にそのような話は一切しておりません。彼女ははまだ彼らが城内で働いていると思っ
ているのです」

レオのその一言に、私の寝ぼけた頭は一気に覚醒した。

ほんの一時、警護と身の回りの世話をさせただけの人物にスワジクが興味を持ち続けるとも思っていなかったのだ。

慌ててトイレから出ると、目の前にレオとコワルスキーが立っ
て居た。

「今の姫殿下にあの二人への処置の事が発覚すれば、折角の彼女の融和ムードが元に戻ってしまう可能性も否定できません。ここは何としてでも近衛訪問を阻止しなければなりません」

「二人の行方は？」

レオが危険視する未来を現実になせない最良の方法は二人を呼び戻すことだ。

そう思って隣に立っているコワルスキーに視線を移して、彼らのその後を問いただす。

だが、コワルスキーはごつい体を小さくし力なくかぶりを振る。

「も、申し訳ありません。レイチエルの二の舞にさせない為に、あえて彼らの行く先を聞いていませんでした。その時は最良の手段だと思っただのですが、こうしてみれば最悪手でした」

「彼らの実家に早馬を出して事情を説明し呼び戻せ」

「ボーマン・マクレイニーに関しては既に早馬を出しています。ガリバーサイドまでは往復で1週間は掛かります。あと、ニーナという侍女の方ですが、厄介なことに身寄りがないそうで、探しようがないのです」

「ヴィヴィオは？」

「はい。現在件の侍女だった女の行方を調査するために各貴族に最近雇った侍女の有無を聞いて廻っていますが、有効な手がかりが得られるかどうか……」

「……」

なんとも厄介な話である。

コワルスキーとヴィヴィオの彼らに対する処置については、私もよしと判断したことだ。

むしろ、スワジクがここまで態度を改めていたという事実をもう少し早く受け入れることが出来たら、いや、こうなる事を予想して早く二人を呼び戻す算段を立てていれば……。

「殿下、今は悔いている場合ではありません。兎に角、姫殿下を最低でも1週間、彼らの事に気付かせないような何らかの方策を練らねばなりません」

「そうは言っても、何か良策でもあるのか？」

執務室に向かいながら、私はどうやってスワジクの気を引くか真剣に悩む。

例えば今日の午後だけでいいのならまだやりようもあったのだが、1週間も彼女の気を引くなどというのは無理ではなかるうか。

朝から何故こんなに頭を悩ませないといけないのか。

思わず黒い感情がスワジクに対して向きそうになって、そしてそれがお門違いだということに気がつく。

自然な流れで彼女を悪者に仕立て上げようとした自分の思考に、私は心の中だけで愕然とした。

これではどちらが悪人か分かったものではない。

その自戒ですら矛盾しているという事に、私は言いようのない苛立ちを覚えた。

「ふむふむ、中々みんな手馴れてきましたね」

「毎日これだけクッキーやら何やら作れば慣れもします」

「あはは、それはそうですね」

額に汗を浮かせて石窯の中から鉄板を取り出すアニスが、苦笑混じりにそう答えた。

うん、最近メイドの皆もおしゃべりしてくれるようになったから、これくらいの軽口は言い合えるようになったのさ。

あれだね、共同作業で連帯感を培った成果かな。

小学校や中学校では何の気なしにやっていた事だけど、人間関係

の形成には一番の方法なのかもしれないと感心したものだ。

「あ、スヴィータ、今包み幾つ出来ましたか？」

「はい。アニスが出してくれたのを包めば、予定していた個数に達します」

「そう、じゃあライラさん、残ってる生地を全部まとめて焼いてしましましょう。ミーシャとアニスは片付けに廻ってくださいな」

「はい、姫様」

スヴィータとライラはまだ何処と無くぎこちない感じもあるけれど、それでも以前と比べればずっといい感じになってきた。

やっぱり長く一緒に過ごす人達と仲良くなってきたつてのは、僕の精神衛生上にも凄くいいことだと思う。

王様とは仲良く成りそびれたけど、時間はまだたっぷりあるんだから気長にいくしかないよね。

「や、やあ、スワジク。何をしているんだい？」

「あ、フェイ兄様。こんなところまで何をしにいらしたのですか？」

妙に堅い笑顔のフェイ兄が厨房の入り口に立っている。

王族の人がこっちまで来るのは非常に珍しいんだけど、どうしたんだろう。

そう思っていると、フェイ兄は凄い説明口調で言い訳を始める。

「いや、朝起きて暫くしたら何か甘い匂いがしたものだから、

なんだろうと不思議に思っただけの元を探し回っていただけなんだよ。ほら、この間スワジクが作ってくれたクッキーが美味しかったから、甘いものに目覚めたというか、そんな感じかな」
「なんでそんなに言い訳がましい説明なんですかね？」
「そんな訳ないじゃないか。本当に君の作ってくれたクッキーが美味しくて忘れられなかっただけだよ」

うつむ、にこりと笑う奴の歯の光具合が弱い。

何を企んでいるのやら……。

色々と勘ぐっていると、先日のフェイ兄とのやり取りを急に思い出してしまった僕。

ま、ま、まさか、こやつ……。

自分のにあり得ないことを想像してしまい、自分の意思とは無関係に真っ赤に染まる顔。

いやいやいや、なんで照れたみたいな顔になるんだよ！

くそつ、自分の反応が気持ち悪いんだってばさ。

「つ、摘み食いは駄目ですからね。もう少ししたらあまりのクッキーとラスクが焼けるのでそれまで待つてください」

「あ、ああ、ありがとう」

真っ赤になった顔を見られるわけには行かないので、くるりと後ろを向いてキッチンの上の小道具たちを次々と片付けて行く。

これじゃあ、まるで恋する乙女みたいじゃないかっての。

高揚した気分を落ち着けるため、洗い場の中の水桶に手を浸してクールダウンを図る。

あー、冷たくて気持ちいいなあ、この井戸水。

「ところでスワジク。こんなにお菓子を焼いてどうするんだい？」
「ええ、今日ちよつと近衛隊の隊舎に挨拶に行こうかと思うんです。
この間も塔舎の片づけを手伝ってもらったままですし、それにこの
間あつた新人君が頑張ってるかどうか見に行こうかなと思ってるん
です」

「あー、そうなんだ。あー、でもそれは残念だったなあ。さっきコ
ウルスキーが、今日は近衛隊の教練に出かけるといつていたぞ？」

「多分行つても居ないんじゃないのかなあ」

「えー、そうなんですか？ コウルスキーさんにスケジュール聞い
ておけばよかつたですねえ」

なんか妙に変なトーンでしゃべるフェイ兄に少し違和感を感じな
がらも、近衛隊の皆が訓練で不在という残念なニュースの方に気を
取られる。

朝一番から頑張つて作ったのになあ。

ビニールやタッパーがあればしけらないんだけど、包んでいるの
がハンカチじゃあなあ。

「弱りましたね。折角作ったのに、もつて行き場が無くなってしま
いました」

「あ、姫様、だったら政務館のほうを先に行かれてはどうでしょう
か……ひいっ！」

「？ アニスどうしたの」

「いいいい、いえ、なななな、なんでもございませぬ！！」

急に顔を真っ青にしてチワワのように震えるアニス。
どうしたのかな？

不思議に思っただけで彼女の視線の先へと振り返って見る。
そこには穏やかに笑っているフェイ兄がいるだけで他には誰も居ない。

幽霊でも見たのか？ そうだったら嫌だなあ。

「スワジク、政務館の方は今日は行かない方がいい。帝国からの使者が来て何やら今日1日は色々と忙しいらしいぞ？」

「えー、そうなんですか、フェイ兄様？ 困ったなあ。本気でこのクッキー達をどうしよう」

本気でクッキーの処分に困った。

政務館や近衛の人たちに行き渡るようにと思っただけで、正直店が開けるほどの量があるんだけど。

そう思っただけでいると、厨房の勝手口の扉が開いて数人のシスターっぽい人たちと料理長が入ってきた。

シスター達は私やフェイ兄を見て凄くびっくりしていたが、慌てず騒がず私たちの前まで来て挨拶し、そのまま厨房の奥へと去っていった。

「珍しい組み合わせですね、料理長とシスターって」

「ああ、あれかい。あのシスター達は王都にある孤児施設から来ている人たちだよ。多分孤児たちの食事について料理長と打ち合わせをしに来たんじゃないかな」

「へえ、孤児施設は国営なんですかあ」

「ああ、たった1つだけど由緒ある施設なんだ。王宮に仕える者に

も、その孤児院出身が何人かいるんだ」

僕の疑問にすばやく解説を入れてくれるフェイ兄。

うん、今日のフェイ兄、なんか魁！！ 塾の雷電みたいだな。

もちろんあんな暑苦しくは無いけど。

そっかー、孤児院かぁ……。

僕はふと良いことを思いついて、厨房の片隅で何やら話し合っているシスターと料理長の元へ向かう。

僕が近づいてい来るのが見えたのか、料理長が帽子を脱いでぺこりと挨拶をしてくれる。

「あの、少しお邪魔してよろしいでしょうか？」

「は、はい、なんでしょうか、姫殿下」

少しオドオドとした感じで料理長が返事をくれる。

もう大分厨房にも出入りしているんだから、もう少し慣れてくれてもいいと思うんだけどな。

まあ、身分の差ってやつに疎い僕には分からない何かがあるのかもしれないけどさ。

シスター達も少し不安な表情で僕を見ている。

そんな彼等の不安を和らげるために、僕は自分が表現出来る最大限の優しい微笑みというやつを作ってみせた。

「折り入って皆様にお願ひがあるのですが」

「はぁ、なんでもございましょう」

「実はさっきまで近衛と政務館の皆様にとまって作っていたお菓子

があるのですが、どうも今日は日が悪いらしくて持っていけなくなつてしまったのです」

「……はあ」

「そこですね、差し出がましいかもしれませんが、皆様の施設に是非これらを寄付させて頂きたいと思うのですがどうでしょうか」

そういつて僕は振り返つてミーシャを見る。

ミーシャは既に僕が考えていることを見抜いていたのか、クッキーとラスクの包みを一つずつ持つてこちらに来てくれていた。

既にリボンは解かれてすぐにつまめる状態だ。

「どうぞ、ご試食してみてください」

その一言に、恐る恐るシスターの一人がクッキーに手を伸ばした。口にクッキーの欠片を入れると、とたんにシスターの顔が驚きの表情になる。

「お、美味しいですわ。こんなクッキー食べたことありません！
も、もう一つ頂いてよろしいでしょうか」

「ちよ、シスター・アンジェラ、独り占めとははしたないですわ
「私も一つ頂かせてもらいます」

シスター・アンジェラを押しつけて、ミーシャに殺到するシスター達。

どうやら厨房に漂っていた甘い匂いに最初からやられていたよう

だ。

口々に美味しい、美味しいと喜んで食べてくれるその姿に満足した僕は、料理長に向かってお願いした。

「料理長、すいませんがこちらにあるクッキー、全部こちらの施設にもって行くようにお願いしてよろしいでしょうか？」

「はい、畏まりましたでございます」

当初の予定とはまったく違った結果になっちゃったけど、まあこれはこれでよしとしよう。

皆の笑顔に満足して僕は厨房を後にする。

笑顔が溢れるっていうのは良い事に違いないから、巡り廻って外の人のいい評判になったらいいなあと思う。

しかしあれだな、最近立てた予定が全て思うような結果に結びついていないや、タイミングが悪いのかな？

それにフェイ兄、いい加減真面目に仕事しないとレオに怒られると思うんだ。

23話「王子と王女と昔話」

ここ数日、フェイ兄やレオ達の動きが妙に怪しい。

事ある毎に僕のこと干渉してくるといふか、タイミングよく邪魔しに来るんだ。

特にボーマンたちに会いに行こうと思ったりあてもなく城の庭を散歩していたりすると、必ずと言って良いほど誰かが妙な用事を引っさげて現れる。

嫌がらせをされるような事に思い当たる節があるわけでもなく、今までは見ない振りをしてそのままにしていたんだけど……。

「やあ、僕の可愛いお姫様。今日はいい天気だねえ」

「……」

性懲りもなく現れたフェイ兄。

こつも行く先々に待ち伏せされていたら、僕じゃなくても機嫌が悪くなるはず。

口にバラでも啜えて現れたなら、間違いなく幻の右が火を噴いていたと思うんだ。

引き攣る頬をそれでもなんとか理性で押さえ込んで、平静を装って微笑んでみせる。

僕の静かな怒りを感じたのか、フェイ兄の顔も若干引き攣っていた。

「こつ、これからどこへ行くんだい？」

「……」

笑顔のままフェイ兄の前を素通りして、僕は一路目的地へと真っ直ぐに進んでゆく。

無視されて流石に居心地が悪くなったのか、冷や汗を流しながら僕の後を付いてくる。

これはあれかな？ 監視されているんだねえ。

だとしても僕の何をフェイ兄達は警戒しているのかなあ？ そんな変なことしていないと思うんだけど。

自分の過去の行動を振り返って見るも、やっぱり心当たりには辿りつかない。

色々と考えながら歩いていたら、あっという間に目的地へと着いてしまった。

扉の前で、僕は肩越しにちらりとフェイ兄を振り返って見る。

うん、あの顔はここが何処か分かっていないね。

仕方が無い、ちょっと懲らしめてやろうか。

「フェイ兄様もここに御用があるのですか？」

「あ、ああ、そうだね。私も調度ここに用事があつたんだよ」

その科白に同行していたアニスが声なき悲鳴を上げて、フェイ兄から慌てて距離をとる。

相変わらず気がついていないフェイ兄に、僕は満面の笑みを浮かべて振り返った。

「ご一緒に入られますか？」

「ああ、そうだな……」

ようやくフェイ兄が僕の背中にある扉へと目を向けた。

フェイ兄はその場所の意味を知ると、面白いくらい劇的に顔が青ざめてゆく。

何を考えながら後ろを付いてきたのか知らないけれど、深く考えずに生返事をするからそのようなのっぴきならない事態に陥るんだよ。

「わかりました。フェイ兄様がそう仰るなら、恥ずかしいですが一緒に入っても私はかまいません」

「いやいやいやいや、ち、違うんだ、スワジク！　ここ、これは間違っているか、勘違いなんだ！」

「最近ずっと私の後を追いかけておられたのは、この為だったんですね。大好きなお兄様のお願いですから、私死ぬほど恥ずかしいけど我慢できます」

調子に乗って、目尻に涙を溜めて見せつつフェイ兄の手をしっかりと握り込む。

この変態ロリスキーめ、社会的に死ぬがいいわ！

手を握られたフェイ兄といえば、まるで熱湯に手を突っ込んだような勢いで腕を引く。

目が凄い勢いで泳いでいて、なおかつ顔が真っ赤だ。

止めの一撃を食らわせてやろう。

「フェイ兄様、優しくしてくださいね？」

「すまん、スワジク！　急用を思い出した。失礼する！！」

「あ、フェイ兄様！」

僕の縋る手を振り払う勢いで、フェイ兄が足早にその場を去ってゆく。

ちなみに横に控えていたアニスは考えることを放棄したのか、ただ呆然と立ち尽くしていた。

うまく追いついたのは良いけど、逆にこれを契機に積極的になられたらどうしよう。

一瞬の嫌な未来図を、頭を振って追い出す。

とりあえずはここへ来た本来の目的を遂行せねば。

そういつて僕はトイレのドアを開けて中に入った。

窓から麗らかな陽光が差し込む昼下がり。

僕は一人、自分の部屋でうつつと唸りながら日記帳を凝視していた。

何をそんなに唸っているかというと、色々と行き詰っているからだ。

最初は割りと順調に行けてたと思ったんだけどなあ。

ここ数日で僕がした事って、結局政務館に行って外の人が言ったとんでも命令を撤回しただけ。

官僚の人達の反応が最初訪問した時より随分とマシになったのが、現状での唯一の成果だろう。

それ以外の状況改善策は割りと黒星続きである。

義理の父親へのアプローチは失敗したし、ボーマンやニーナとも結局会えずじまい。

ミーシャとはずいぶん仲良くなれたけど、逆にアニスが微妙に僕との距離を置き始めたように感じる。

アニスはミーシャっ子だったから、取られたと思っただけ嫉妬してたりして。

スヴィータやライラは変わらずクールな反応のままだし、レオに至っては訪ねて来ることすら珍しい。

唯一、フェイ兄が最初から今までスタンスを崩すことなく接してくれている唯一の存在ではあるのだが……。

「シスコンロリ変態でなければ、あるいは力強い味方と思っただけ頼れたのかもしれないのになあ。フェイ兄って本気で残念なんだよ」

現状を整理しつつ、自分の置かれている状況に僕は深いため息をつく。

一体何をどうしたら、環境の改善に繋がるんだろう。

こっちがいくら歩み寄っても、相手は離れていく一方の様な気がする。

明確な悪意が見えない分、逆切れする切欠すらも掴めない。

まあ切れる予定はないんだけどね。

ああ、ポーマンやニーナのあの初々しさが懐かしい。

会いたいなあ、会って弄って遊んだら癒されるのになあ。

「はああ、ポーマンどうしてるのかなあ……」

僕は椅子をくるりと回して後ろを向き、そこから見える外の町並みをぼんやり眺めて午後を過ごした。

扉越しに深いため息が聞こえ、その後が続いた言葉に驚愕する。私はノックしようとした姿勢のまま、じつと中の様子を伺う。だがそれ以上の変化はなく、ただ静寂が時と共に流れてゆく。

（なんだ今の科白は。もしかしてスワジクはボーマンとかいうあの騎士見習いに惚れているのか？）

正直に白状すると結構ショックを受けている。

以前からスワジクが私に好意を持っている事には気付いていたので、彼女が私以外の者に気を許すところなど想像もしていなかった。それだけに今のスワジクの独り言は、私のプライドをいたく傷つける。

今まであった絶対的な自信が、まったくの根拠の無いものだったという衝撃の事実を突きつけられたのだから。

自分でも訳の分からない感情に振り回されつつ、そつとその場を離れる。

さっきのトイレの件は、また日を改めて謝るとしよう。

少し昔話をしよう。

あれはまだ私が7歳になったばかりの春。

桜の花が舞い落ちる王宮の庭園で、私とスワジクは初めて出会っ

た昔話を。

その当時、上の二人の兄は成人の儀を終え、長兄は前線近くの領地の管理者として、次兄は王国の精鋭騎士団の団長として前線へ行つたばかり。

いままで仲良く遊んでいた兄弟が突然居なくなり、私は退屈な毎日をどう過ごしているか分からぬまま日がな一日ぶらぶらと城内を彷徨っていた。

次兄と水切りをして楽しんだ庭園にある池のほとり、長兄と追いかけてここをして遊んだ薔薇園の中。

過ぎ去った楽しい日々を、無意識に私は辿り続けていたのだと思う。

「ん？ なんだろう、あれは」

桜林の一角に、人目を忍ぶように置かれているガラクタ。

古びたバケツや城壁の欠片、錆びた蝶番などで作られた意味不明のオブジェがあり、そのすぐ脇にはなにやら猫が横になれるほどの穴が掘られていた。

ここは私たち兄弟のお気に入りの遊び場だったので、何かひどく思い出を穢された気がしてムカムカしたのを覚えている。

「誰だよ、こんなところにゴミを捨てたのは」

ちよつとイラツとして置いてあったバケツを蹴り上げる。

もともと軽い木で出来ているものだから、子供の蹴りでも数mほど先まで飛んでいって桜の幹に辺り砕け散った。

思い出を穢す悪党をやっつけた気分になって、ちよっとスカツとして久しぶりに笑みがこぼれる。

うん、残りのガラクタも壊してしまおう。

そう思って奇怪なオブジェを踏みつけた。

何度も、何度も。

多分、私は楽しくて声を上げて笑っていたと思う。

今思えば何がそんなに楽しかったのかとも思うが、それは多分自分ではどうにもなら無い事や寂しさへの憂さ晴らしだったのかも知れない。

「あははは、こんなゴミなんかっ！」

ガラクタの上で飛び跳ねていたら、突然後ろで何か落ちて水の零れる音が聞こえた。

なんだろうと思っ振り返ると、そこには銀色の髪と赤い目をした妖精が居た。

真っ白なドレスは、だけでもドロであちこち汚れて、スカートの一部は水でぼとぼとに濡れている。

足元に転がる木のバケツと零れた水、愕然とこっちを見るその少女の目に浮かぶ涙を見て、彼女がこのガラクタのオブジェを作った張本人だと悟った。

どう言葉を掛けていいのかとっさに思いつかず、私はただ彼女が作ったであろうオブジェの上で立ち尽くす。

その少女はただ無言で私の元までやってくると、力一杯私を突き飛ばした。

私の突き飛ばされた先は運悪くというか、落とし穴のように掘ら

れた猫の大きさほどの穴が待ち受けている。

私は穴に足を取られて、受身もろくに取れず仰向けにひっくり返ってしまった。

後頭部に走る衝撃に鼻の奥に広がる硫黄臭。

その痛みに悶えていると、さらに少女が私の上に飛びかかってきて髪を引つ張ってきた。

私は少女の追撃にパニックになり、掴みかかってくる手を払いのけて突き飛ばし返す。

思ったより軽かった少女は、私の力に抗することが出来ずガラクタの中にひっくり返った。

でも彼女はすぐに起き上がって泣きながら殴りかかってくる。

私もまだ子供だとはいえ、日々剣の稽古をしている身。

冷静になれば少女の出鱈目な攻撃を捌くことなど朝飯前だ。

「おい、いい加減やめろ」

何度あしらわれても挑んでくる少女に、辟易しながらも止めるように訴えてみる。

だが頭に血の上ったままの彼女にそんな言葉など届くはずも無く、何度倒されようとも何度殴られようとも向かってくるのだ。

彼女のその行動には子供心ながらに薄ら寒いものを覚える。

そうこうしていると、その喧嘩を見た近衛がやってきて少女を無言で取り押さえた。

「放せ！ 放さぬかつ！ たかがゴードイン家のものがヴォルフ家に楯突いてただで済むと思うのかっ！」

彼女の科白で、ようやく私はこの少女が父上の正妻の子であることに気がついた。

確か名前はスワジクとかいったか。

ゴードイン家の血を一滴たりとも流さぬ赤の他人で、義理の妹。父上や父上の側近達が毛嫌いしている女の娘。

「お、お嬢様っ！！」

突然現れた同い年くらいの侍女が、組み伏せられている少女をみて血相を変えて走って来る。

彼女は躊躇いもせず私の前に跪くと、地面に額を付ける勢いで平伏した。

「殿下、申し訳ありません。何卒、何卒姫様のご無礼をお許しくださいませ」

「レイチエルっ！ 何故そんな奴に頭を下げるのだ！ 悪いのはそいつなんだぞ！ あうう、痛っ」

「……」

スワジクの私に対する暴言を封じるためだろう、衛士は少女の背中に載せた膝へ体重を乗せる。

土と砂と血と涙に汚れた顔を、苦痛で歪める妖精の顔。声を震わせて平伏する侍女。

スワジクに言われるまでも無く、誰が一番悪いのかなど理解できる。

私の胸の中は罪悪感で一杯だった。

「放してやれ」

「はっ」

衛士は少し迷いながらもスワジクの拘束を解く。

直ぐにでも私に向かってくるかと思っただが、彼女はただ悔し涙を流しながら蹲っているだけ。

スワジク付きの侍女だろう黒髪の少女が、そっと彼女に寄り添い助け起こす。

取り出したハンカチで顔の汚れを拭い、口の端から流れる血を拭く。

私は震える膝を必死で隠しつつ、二人に向かって声を掛けた。

「……すまなかった」

その言葉にスワジクは欠片も反応を示さず、付き添っている侍女はただ黙って頭を垂れる。

暫くじっとしていた二人だが無言で起き上がると、何も言わずにこの場を去り始めた

侍女の肩を借りながら、ヒョコンヒョコンと片足を引き摺りながら去っていく少女を見て、私は死ぬほどの後悔に苛まれたのだった。

24話「王子と王女と夢の欠片」

次の日、私は浮かぬ顔をして昨日の桜林へと向かった。

自分の胸の中にくすぶる漠然としたもやを、昨日のあの場所に行けば晴らせるのではないか。

なんの根拠も無い自分勝手な妄想を抱いて、ただ黙々と歩いた。程なくして昨日の場所について、僕は自分の淡い期待が裏切られたことを知る。

崩れたガラクタは既に無く、掘られた穴も誰かによって埋め立てられていた。

他の地面と若干色が違うということだけが、昨日の出来事の名残だ。

恐らく昨日のうちに庭師が片付けたのだろう。

「くそっ」

誰に対して吐いた悪態だったのか。

私は下唇を噛んでその場を後にしようと踵を返し、数歩歩いてから立ち止まる。

肩越しに振り返って、もう一度色が変わった地面を見つめた。

今日という日がゆっくり終わろうとしている時刻に、ようやく私は作業を終えることが出来た。

城壁に使うはずだった煉瓦に底に穴の開いたバケツ。

庭園で使う杭に古ぼけた立て板、そして穴を掘るためのスコップ。

昨日のオブジェよりはかつこよく出来たんじゃないかと思う。
自分の城の周りに堀のように掘った穴に、運んできた水をなみなみと注ぐ。

近くの噴水から汲んで持ってくるだけでも重労働だ。

それをスワジクは昨日一人で頑張ってここまで持ってきていたのだと思うと、本当に可哀想なことをしたんだと実感できた。

「ふふん、昨日の変な寄せ集めよりずっとカツコイイじゃないか」

負け惜しみのようにそう呟いてから慌てて周囲を見回す。

誰にも聞かれていないことにほっとしつつも、あの少女が結局現れなかった事に少しだけ落胆する。

私は手に付いた泥もそのままに、自分の部屋へと戻ることにした。

また次の日の夕方、私は自分に色々と言いつつながら、桜林のあの場所へと足を向けた。

私が集めたガラクタは、昨日とは違い捨てられもせずその場にある。

ただ1点違うのは、まるで嵐が過ぎ去ったあとのようにめっちゃくちゃに壊されていたという事だけ。

恐らくスワジクが昼の間にここを通った時にでも、壊していったんだろう。

私は何故か急にニヤリとして、今度は簡単には壊れないように石材を多めに使って城の補強を始める。

堀も昨日より倍は深く掘って幅も広げてみたし、城の天辺にはゴ―ディン家の旗を立てたりもした。

これを見たスワジクが、怒りに我を忘れてこのガラクタの城に突

撃してくる姿を想像する。

多分あの娘だと壊すのに一苦労するだろうな。久しぶりに感じる意味不明な高揚感を感じつつ、私はにやにやしなから部屋に帰った。

あの城を汗水垂らしながら壊しているスワジクの姿を見て笑ってやろうと思い、私は昼食をすばやく掻き込んで慌てて桜林へと向かった。

あそここの場所は城壁の陰に隠れていればこっそりと観察出来るはず。

少しでも早く現場につかないと、肝心のスワジクの奮闘振りが見れない。

私はすれ違う侍女や衛士を無視して、一目散に目的の場所へと走り続けた。

上がる息を抑えながら城壁に背を預け、そっと桜林を覗いて見る。少し遠いがあのガラクタの城が見えた。

よく目を凝らして見ると、どうやら既に壊されているようだ。

私は肩透かしを食ったような気分で、城の修復に掛かる。

午後一番で間に合わなかったことは、あいつは朝のうちに壊しに来ているんだろう。

午前はスワジクも家庭教師の授業があるはずだが、相手はそれをどうにかクリアして壊しに来ているんだろうと推測する。

ならば私も午前中にここへ来るだけだ。

そして次の日、私は予定されていた家庭教師を仮病で休み、自分の部屋の窓からそっと外へと抜け出した。

この時間ならきつとスワジクはまだ奮闘中かも知れない。

そう思って、私は一路城壁の影を目指してひた走る。

程なくして城壁の影についた私は、そっと顔をだして桜林を見た。そこには、私が昨日作った城の面影は既に無い。

私は深いため息をついてガラクタの城へと向かう。
巻き散らかされたゴミの上に投げ捨てられているゴードイン家の旗。

「あり得ないだろう？ 今の時間で壊されてるって、まさか夜中でも来て壊しているのか？」

負けっぱなしは性に合わない。

私はそう思ってる3度目の築城に取り掛かる。

その晩侍女たちが去った後、私は朝と同じように窓からそっと抜け出した

両の手には毛布と水筒、パンを1本。

まさかとは思いつつも私はただ桜林を目指す。

闇に包まれた王宮はしんと静まり返って、昼間の喧騒を欠片も感じさせない。

遠くのががり火の僅かな光で照らされた足元を、おっかなびつきり前へと進む。

闇の中、ぼんやりと見える桜色の林の中、私の作った城の前で何かが動いている。

まさかと思いつつも足音を殺しながら近づく。

まさかは、もしやになり、やっぱり変わった。

「こんな時間に何やってるんだよ……」

「っ！」

私の声に、ガラクタの前に蹲っていた少女は肩を跳ね上げて振り返った。

信じられないといった顔で、その銀色の少女は私を見つめる。

多分、私も同じような顔で彼女の紅い瞳を見つめていたのだろう。

無言のまましばらく見つめあい、そしてスワジクは5歳の子供とは思えないため息をつく。

「ふう、何か用か、下衆」

「べ、別にお前になんか用は無いさ。私はそのガラクタを毎回丁寧に解体している馬鹿を見に来ただけだ」

「ふんっ！ こんなものをほったらかしにして、躰のなっていない下衆だこと」

「そのガラクタに執着する馬鹿も、道化のようで見物だな」

お互いがお互いを罵り合う。

だけどその言葉に険はなく、その仕草に拒絶は無い。

私は兄達が居なくなつて寂しかったのだらうと思う。

月の光に照らされた銀色の天使は、暗く冷たい孤独な夜に微かな温もりを求めてここに居たのだらう。

スワジクを見ると厚手のカーディガンを羽織っただけで、その下は薄いネグリジェだけだ。

もう春とはいえ夜はまだ冷える。

あまつさえネグリジェの裾は泥水でボトボトだ。

私は持っていた毛布を、彼女の彼女の肩にそつと掛けてやる。

その間スワジクはそっぽを向いていたけれども、逃げはしなかった。

ふとガラクタの城を見ると、その横に猫が横たわれるくらいの穴が掘られている。

スコップなどなく、陶器の器を代わりに掘っていた様子。その傍には噴水から汲んできたのであろう水桶があった。

「なんだよ、その穴。また落とし穴でも作ろうとしたのか？」

「な！ 落とし穴なんか誰が掘るかっ！ これはリユナス湖だ！」

「はあ？」

スワジクはどこか誇らしげに胸を張って、そのリユナス湖と言っ名の穴ぼこを解説し始める。

ヴォルフ家の本城の直ぐ西側に広がると言う大きな街が3つくらいは入る湖。

その透明度は10mの深さの湖底ですら微かに見えると言っ。

スワジクの母親のお気に入り湖らしい。

「この王宮の北東側にも湖ならあるぞ？」

「あれは駄目だそうだ。もーっと透き通っていて冷たいんだって」

「へえ。で、なんでそれをここに掘ろうと？」

「べ、別に。ただ何となく」

何故か悔しそうな顔をしてそっぽを向くスワジク。

その瞬間、くきゅるるるという可愛い音が聞こえた。

「お腹、減ったのか？」

「……」

顔を真っ赤にして躊躇いがちに頷く。

彼女の仕草に思わずくすくすと笑いながら、私は持ってきたパンと水筒を差し出した。

「……あ、あり……」

消え入りそうな声で何かを呟いたみたいだが、残念ながら私はその言葉を聞き取れなかった。

何故かスワジクは急に不貞腐れたように近くの桜の木の下へ行って座りこむ。

渡したパンを膝の上に水筒を傍らに置いて、私の夜食を少しづつ上品に口へ運ぶ。

私も一人立っているのも馬鹿らしいので、スワジクが座る横に腰掛けた。

「おい、下衆」

「なんだ、馬鹿」

「お前は誰だ？」

「ぶつ、そこからなのか?!」

「私は！……私はこの王宮のことは良く知らない。お前が誰かなんてのも知らない。だから誰だと聞いているのだ。すこしは光栄に
思え」

「私は、お前の兄だ」

「私に兄などいない」

自己紹介の初っ端から全否定された。

こめかみを押さえつつ、私は基本的なことを一から説明する。

ゴードイン一族のこと、ヴォルフ家との婚姻関係、そしてスワジクが私の義理の妹だということも。

「そうか。私は何も知らないのだな……」

5歳とは思えない口振りと仕草で、空に浮かぶ銀色の月を見上げる。

その姿は闇に溶けてしまいそうで、とても儂げだった。

「お前の母上は何も教えてくれないのか？」

「母上は……、ヴォルフ家のことさえ覚えていけばいいって。ヴォルフ家の領地のことを知っていればいいって。それ以外のことは、私は覚えなくていいんだって」

「それって酷くないか？」

「……よく、分からない。でも母上がそう言うのなら、私はそれでいい。母上が笑ってくれるなら、それが嬉しい。だから、その他の事は別に知らなくていいと思ってた」

見上げていた視線をゆっくりと落として、私の顔に固定した。スワジクは、そして確かに笑っていた。

「この王宮の奴らは皆嫌いだ。お前も嫌いだ。顔も体も足も、本当に痛かったし」

「そ、それは謝る。ごめん」

「仕方ない、許してつかわす」

「なんだかなあ」

くすくすと笑いあいながら、二人で夜空の月を見た。

それはとてもとても美しい思い出。

二度と戻らない、二度と帰れない、二人だけの秘密の時間。

「さて、私はもう帰らないとレイチエルに怒られてしまう」

「あの侍女の子、いい子だね」

「うん。レイチエルは怒ると怖いけど、でも優しいから大好きだ。

なんといってもレイチエルと私は、しんゆうというやつだからな！」

「それはうらやましい限りだよ」

「まあ、お前も嫌いから、普通くらいにはしてやってもいい」

「それは光栄の極みでございます、マイフェアレディ」

スワジクがすくつと立ち上がり、肩に掛けていた毛布と水筒を無造作に突っ返してくる。

私がそれを恭しく受け取ると、わけも分からず二人して大笑いした。

ひとしきり笑い終わると、目尻に浮かぶ涙を拭きながら見詰め合う。

にこりとスワジクは微笑むと小さく手を振る。

「それじゃあ、またね。えと、フェイタール兄様」

「ああ、またね、スワジク。それとその呼び方、長つたらしいならフェイ兄でいいよ」

「そか。じゃあ、フェイ兄様。おやすみなさい」

次の日の昼過ぎ、私は鼻歌交じりに桜林に向かって歩いてゆく。

昨日の出来損ないの湖、もうちょっとちゃんとしてやらないと駄目だな、などと考えていた。

桜の花びらはもう殆ど散ってしまっていて、明るい緑色の葉が所々に見えている。

昨日の夜のことを思い出しながら、それこそスキップを踏むくらいの勢いでガラクタの城を目指した。

「……な、なんで？」

目の前にあるのは、昨日の晩二人で座った桜の木。

ここに無ければならないものが、見当たらない。

二人で作ろうとした、ガラクタの城とスワジクが一度は見てみたりといっていたリユナス湖を模した穴ぼこ。

それらはまるで最初から無かったかのように綺麗に片付けられている。

私はただ呆然とその場に立ち尽くすだけしか出来ない。

スワジクがこの王宮を離れ離宮に移ったという話を聞いたのは、それから間もなくしてからのこと。

そして彼女と再会したのは、それから5年後、スワジクの母親が自殺した後のことだった。

25話「PAで売ってる串とかって、やたらと美味しそうだよね」

突き抜けるような青い空の下、僕とフェイ兄、ミーシャにセンドリックさんの4人で城下町を歩いてた。

フェイ兄とセンドリックさんは、近衛の白い制服を着ていて腰に長剣を下げている。

ミーシャはいつもと変わらぬエプロンドレス姿、ただしいつもの色と違って薄緑色のドレスの上に白いエプロンだ。

これが王宮に勤める一般侍女の制服なんだそう。

で、僕はというと、良家の子女のようなフリフリのドレスを着せられて、髪はアップにして帽子で隠す。

銀色の髪の人というのはこの世界では結構珍しく、見る人間が見ればこちらの身分がばれるらしい。

フェイ兄の銀色の髪も隠さないといけないので、センドリックさんと二人、普段被ることのない略式礼帽を被っている。

本当は警備の面やらで城外へ出るのは駄目だって言われたのだが、トイレの一件を匂わせて強引にフェイ兄に承諾させたのだ。

だってさ、こっち来てからずーと自分の部屋か中庭か政務館しか見てないんだもん。

最初はすげーって思ってたけれど、さすがに飽きがくる。

それに監視されている視線とか、距離を置かれてる雰囲気とか、割と精神的に來てたりもしたしね。

ここらで心身ともにリフレッシュしても、誰にも文句なんか言わさない。

「うわぁ、この通り全部露店なんですか？」

「ええ、ここは王都にある市場の中でも一番有名な所です。北部と南部にもそれぞれのマーケットがあるのですが、ここほど賑やかで

はないですね」

目を輝かせながらした質問に、センドリックさんが丁寧に答えてくれた。

東京や大阪の繁華街とは比べ物にはならないけれど、地元の流行っている商店街並みには人がいる。

うん、うるちよろしたらきつと迷子になるな。

傍に立っていたセンドリックさんの袖を、迷子対策とばかりにしっかりと掴む。

手前に見える屋台では色とりどりの野菜が並べてあり、その横には藁や竹つばいもので編んだ民芸品つばいもの、草履とか小箱等が地面に所狭しと積み上げられている。

反対側ではいろんな服が山積みになって今にも崩れそうだし、ちよつと古ぼけた壺屋なんかも見えた。

「うはあ、異国情緒たつぷりだよ！ おろ？ この籠ってなんに使うんだろ？」

「ああ、いらつしやいませ、お嬢様。その籠はロンポを入れる蒸し籠でございますよ」

「ろんぽ？」

「ロンポはね、ふわつとしたパン皮に包まれた肉饅頭のことだよ」

籠を手にとつて開けたり閉じたりしながら、フェイ兄の説明を聞く。

肉まんみたいなものか。

どっかに売ってるなら食べてみてもいいかしらんね。

「お嬢さん！ こっちの瓜はどうでしょうか！ 甘くて美味しいですよ」

「おお、おっきいー！」

竹籠屋の横の野菜売り場のおばちゃんが、手にした深緑1色のスイカの様なものを威勢のいい声と共に掲げている。

景気良くその瓜を叩くと、実がぎっしり詰まっているのか凄くいい音がした。

僕は目を輝かしながらその西瓜もどきに近づく。

その瞬間、おばちゃんは背中に隠してあった鉈の様な刃物を振りかぶる。

後ろに居たセンドリックさんとフェイ兄があつと叫ぶ間もなく、おばちゃんの鉈は目の前の獲物を真っ二つに引き裂いた。

「どうぞだい！ この熟れ具合、この濃厚なパジイの甘い香り。こいつは今日の一押しの商品だよー！」

「ほおおおお」

目の前に差し出された瓜の半分をじつと見つめる。

西瓜のように赤いのかとおもったけど、中身は黄色だった。

離れていてもこのパジイって果物が甘いつてのは、匂いで十分理解できる。

実演販売や試食用に目の前で焼かれるお肉とか、普段より美味しいそうに見えるのは何故だろう？

知らず知らずのうちにごくりと唾を飲み込む僕。

それを見たおばちゃんがにやりと笑う。

「食べてみますかい、貴族のお嬢様？」

「い、いいの？」

「ああ、いいですとも。うちの果物は王宮にも収めてる極上品だからね！ あの銀色の貴公子、フェイタール殿下さまも垂涎もの一品ときた！ お嬢様も殿下さまを虜にしたいなら、これをお土産に持っていったらイチコロだよ！」

「うわあ、それは地味に嫌だけど、一口もらいます」

「あいよっ！」

気風のいい返事で返してくれたおばちゃんは、器用にも手の上で瓜の片割れを食べやすく切り刻んでくれた。

差し出されたパジイを、僕は指で摘んで口に放り込む。

「おいひい！」

「でしよう？ どうだい、後ろの騎士の旦那達も！ これを食べたらフェイタール殿下さまのように強くなれるかもしれないよ？」

おばちゃんが屋台の中から手を伸ばすのが辛そうだったので、僕がその瓜をもってフェイ兄たちのところへ行く。

にこにこそれとそれを差し出して、「美味しいよ、食べれば？」と笑いかける。

センドリックさんは笑顔で、フェイ兄とミーシャはふうつとため息をついてからパジイに手を伸ばした。

「ふむ、なかなか甘いすな」

「いつも食べているものより美味しいじゃないか」

「本当ですね。これはなかなか」

「おばちゃん、これ3つください！」

皆が舌鼓を打っているのを見て、今日始めての買い物をする。

おばちゃんは大きく頷いて、積み上げられているパジイの中から美味しそうなものを3つ選んでくれた。

「これを持って歩くのですか？」

ミーシャがジト目で僕を見つめてくる。

あう、そうだよね、今から町を見て歩くって言うのに、この荷物はないな。

ふとフェイ兄を見上げると、分かったといった風に頷いておばちゃんの下へ向かう。

「すまない。これを後で近衛隊のコワルスキー隊長へ届けておいてくれ。代金もそこで貰ってくれてかまわない。もう3つ追加して、半分はヒューイから王女への贈り物だと言えば大丈夫だ」

「はいよ。でも騎士様も大変だねえ、いろんな所に気を遣わにゃいけないなんてねえ」

「いらぬ世話だ」

「おお、おつかない、おつかない。すいませんね」

フエイ兄に睨まれたおばちゃんは、肩をすくめて露店の中へと引っ込んだ。

まあ、ある程度分かったことなので、僕は特に気分を害することもなく次の面白そうな店を探して露店街を突き進む。

5歩ほど歩いたところで、今度は服を山積みになっている露店から声を掛けられる。

なにやらモフモフとした毛皮を出してきて、しきりに今なら半額とあって盛んにアピール。

僕は珍しい毛皮だったこともあり、足を止めて熱心に説明するおっちゃんの話聞く。

次に4歩進めば、斜向かいの干物屋が魚の干物なんかを振り回して、僕の注意を引こうと必死になっていた。

「はあ、凄い客引き合戦だね。いつもこんな感じなのかなあ？」

「いいえ、それは違います、お嬢様。彼らは貴方がどこかの貴族の子女だとして声を掛けてきているのです」

「あー、なるほど。金のなる木に見えているわけか」

「そういうことです」

ミーシャが小声で僕の疑問に答えてくれる。

でもあれだね、小説とかマンガで読んでみると、平民は皆貴族を怖がって這いつくばるものだと思っていたけど、それって僕のステレオタイプだったのかな？

僕としては身分の差に物怖じしない人達がこんなに居ると思ったら、王宮内とのギャップにとても新鮮に感じる。

詰まる所、どこまで行っても僕は小市民ってことなんだろう。

「その美しい貴族のお嬢様、フィシャーズ通り名物のカニスー
プはいかがですか！ 美味しいですよ！！」

「カツコイイ騎士様！ うちの剣は頑丈だよ！ 剣と剣を力一杯ぶ
ち当てても、欠けもしなけりや曲がりもしないよ」

「あはは、それつてもう剣じゃなくていいんじゃないの？」

「私はカニ嫌いだと言っているんだ。頼むから近づけてくるなっ」

「ヒューイ様、好き嫌いは良くありませんなあ」

「ああ、お嬢様走って行ったら迷子になりますからっ！ 落ち着い
てくださいっ！！」

「そこのお兄サン達、良いニセモノありますよ！ 安いデスヨ、今
なら安くで売ってアゲマス！」

「「胡散癖ええ！！」」

「ミーシャ、ミーシャ、これこれ、豚の睾丸だつて。きしよい、誰
が食べるんだらう」

「だからお嬢様、はしやぎすぎですっ！！」

「ああ、豚のは割りと美味しいですよ。訓練の後、みんなでよく臓
物屋に食べに行くんですけどね」

「うわあ、センドリックさん勇者だねえ」

取り留めの無い会話を繰り広げながら、僕はこの時間を十二分に
満喫する。

多少はしやぎすぎな気もするけど、人間楽しむときは一生懸命楽
しまないとだし。

そうこうしていると商店街の反対側の端まで来て、ようやくカオ
スな時間が終わりを告げる。

僕の手には数本の串焼きに、腕にぶら下げた可愛いお土産達。

このお土産は今日の外出についてこれなかった3人のメイドさん
用だ。

フェイ兄とセンドリックさんは、なにやらケバブっぽいものを食

べている。

ミーシャだけは何も買わずじまいだったみたい。

「ミーシャも何か買えばよかったのに」

「特段、今欲しいものが無かっただけです」

「この串、美味しいよ？」

「はあ、姫様、口の周りベトベトになってます」

だって仕方が無い、この串の具、僕の口よりずっと大きいんだよ。ミーシャがあきれながらハンカチを取り出して、僕の口の周りを拭き上げる。

その横をガラガラと音を立てながら、大八車っぽいものが通り過ぎてゆく。

なにやら封をされた巨大な瓶を運んでいるみたいだ。

「あれって、何？」

「ああ、あれは町で出たゴミを回収しているんだよ。郊外まで持って行って肥料を作る基にするらしい」

「へえ、どつりで町が綺麗なんだね」

大八車を目で追い素朴な感想を話していたら、ミーシャが袖を引っ張って僕の口調を嗜める。

ああ、商店街を見て歩いたときのテンションのままだったから、知らず知らずに素に戻ってたみたい。

ちらりとフェイ兄の方を横目で盗み見たけど、特に気にしている様子は無いようだ。

と背後で大きな音がする。

振り返って見たら、通り過ぎた大八車から瓶が一つ振動で揺れて落ちていた。

中身が道の端にぶちまけられて、運んでいた人が天を仰いで自分の失敗に悪態をつく。

ゴミなんて見ていたら串が美味しくなくなるので、僕は視線を外そうとして、でも外せなかった。

いろんなゴミに紛れて、つい最近どこかで見たようなものが混じっていたのを見つけてしまったのだ。

(あれって、確かこの間僕達で作ったクッキーだよな?)

ゴミの中に混ざっていたのは、先日孤児院に寄付したはずの大量のクッキー。

その殆どは未開封のまま廃棄されているように見えた。

(えっと、なんで?)

その理由はなんとなく想像できそうかも。

嫌な想像をして動けなくなってしまった僕に気がついたミーシャが、訝しげに近づいてくる。

傍まで来てようやく僕の視線の先にあるものに気がついた彼女は、少し強引に僕を振り向かせ、先を歩くフェイ兄たちの下まで連れて行かれた。

「姫様、あまり気になさらずに」

「う、うん。そうだよ。食べ切れなかったのかもしれないし、口に合わなかったのかもしれないしね」

「後日、さりげなくその辺りを調べて見ます。何か事情があったと思いますし」

「い、いいよ、別に。ほら、元はといえば僕が相手に押し付けたよ
うなものだし。孤児院の人達も断るに断れなかったのかもしれない
し……」

「姫様……」

楽しくて舞い上がっていた今の僕は、まるで冷や水を掛けられた
犬のよう。

こんなことは日常茶飯事に起こっても可笑しくないんだと、日記
を読んだときから覚悟を決めていたはず。

だけどその事実を目の当たりにすると、やはり気分は凹むしかな
くて。

何か別のことを考えようと思っても、思い出すのはネガティブな
ことばかり。

王様の冷めた視線。

どんなに仲良くなるうとしても、見えない壁を作って相手にして
くれない侍女達。

うそ臭いフエイ兄の笑顔。

『私はこの王宮^{セカイ}を憎む。母上を死に追いやった心無いこの世^{セカイ}の中を、
ずっと憎み続けてやる』

脳裏に過ぎるのは、日記の一文。

外の人の、『敵意』。

そんなことは無いんだよ、セカイはもっと優しく出来ているんだよ。

それを証明してあげたくて、僕は頑張るんじゃないのかなかったのか？

本当は皆優しい人達なんだって、そう思うから。

なんだよ、僕が負かされてどうするんだよ……。

「ん？　どうかしたのかい、スワジク？」

「い、いえ、何でもありません、フェイ兄様」

「そうか。ところで今日はちゃんと楽しめたか？」

「え、ええ。とても楽しかったです。有難うございます」

なんで目頭がこんなに熱くなってるんだろう？

このくらいのことでも目を潤ますなんて、男らしくないじゃないか。

自慢じゃないが、僕は滅多な事では泣いたりしないし泣いた記憶もそれほどない。

恐らくはこの体に僕らの精神が引きずられているので、涙腺が緩くなっているのだろう。

我慢すればするほど込上げて来る何か。

程なくして、僕の目尻から溢れ落ちた。

「っ？！」

流れ落ちる涙を見たフェイ兄とセンドリックさんが凍りつく。

そりゃそつだ。

僕だって突然女の子が泣き出したら固まるしかないもんな。

だから早くこれを止めないと、折角の楽しかった時間が台無しになる。

「どうか、……したのか？」

「い、いえ、何でもないんです。目、目にゴミが……」

「……」

「や、やだな。止まんないや。何でだよ。止まってくれよ……」

そつと差し出されたハンカチで、流れ落ちる雫を受け止める。

僕は肩を抱かれるようにして、目の前に止められた馬車にのって

王宮へと帰る。

王宮が近づくにつれ、僕の気分は反比例に落ちてゆく。

ああ、僕は馬鹿だ。

本当に馬鹿だ。

こんな出来事なんて、これから起こる事に比べればほんの些細なアクシデントのようなものだったのに。

それでもその時の僕は、今まで我慢してきた感情を抑え切れなかったんだ。

26話「セクハラで訴えるって同性同士でも有効ですか？」

「ぬうおおおおおおお」

のっけから何を叫んでいるかというところ、昼間の事を思い出して恥ずかしさに一人ベッドの上でのた打ち回っているわけで。

無いわ、間違いなくあれは無いわ。

何処の清純派ヒロインですか？ あれですか？ 弱い自分をアピールですか？

もうね恥ずかしすぎて、そこの窓から自由の空へと飛び立てそうです。

「くう、このボク、一生の不覚っ」

枕とベッドの間に頭を突っ込んで、うぐぐぐと唸る僕。

多分傍から見たら、随分と滑稽な格好なんだろうな。

確かにいろいろとプラスチックシヨンが溜まっていたのは確かだけど、それにしただって泣くこたあないだろうに。

この美少女ボディがお風呂のとき以外で憎いと感じたのは、まったくもってこれが初めてだ。

……うん、ちょっと落ち着いてきたかな？

息を整えながら、すぽんと枕の下から頭を抜く。

くしゃくしゃになった髪を手櫛で梳きながら、周りに誰も居ないことを再確認する。

当たり前な話、こんな挙動不審な行為を人前でするほど僕は恥知らずではないし、露出プレイ大好きなDMでもない。

消灯後のこの時間だから、思う存分はっちゃけていたわけなのだけれども。

「いつからそこに居るのかな、ミーシャさん？」

「そうですね、姫様がベッドの上で奇声を上げてのた打ち回り、枕の下に頭を突っ込んで唸っていた辺りからでしょうか？」

「最初っからじゃねえか！」

「そうともいいいます」

にやりと腹黒い笑みを浮かべるミーシャの視線に、兎のごとき僕の心臓が耐えられる訳も無く。

「うわあああん！ 死んでやるううー！」

泣きながら窓へと走ろうとする僕を、ミーシャは笑いながら羽交い絞めにする。

どんなに足掻いても外せないミーシャの拘束は、いつも思うんだけど女の人とは思えないくらい力だ。

いつもなら頼もしく感じるその力強さも、いまは単なる磔台の皮ベルトくらいの意味しかなく、非常に忌々しい。

「死ぬう！ 恥ずかしすぎてマジ死ぬるうう！」

「まあまあ、姫様落ち着いて。可愛かったですよ？ 小動物みたいな動きで」

「それ、褒めてないよね？ 褒め言葉になっていないよね!？」

「もっ、しょうがないですねえ。……ん、分かりました。その恥ずかしさを直ぐにたくして見せますが、どうします?」

「……殴って記憶消去とかじゃないだろうね?」

「まさか。幾らなんでもそこまではいたしません。仮にも貴方の体は姫様の物なのですよ?」

爽やかな笑顔でそう断言するミーシャ。

うー、ここは素直に信じていいものか。

肩越しに振り返ってミーシャの顔を確認しようとしたら、向こうもこちらを覗き込むようにしてキスされました。

しかもディープ。

「ちょ、……ミイ……、駄目っ……だつてば!」

どんなに逃げ回っても追いかけてくるミーシャの舌は、まさにハイエナ状態。

あれですね、礫台の皮ベルトどころか、礫台そのものだったんですね。

違う意味での涙目になりつつ、必死に首を振って獣から逃げる。

「ちょ、なに急に発情してるんですか!」

「いえ、多少の恥ずかしさならそれ以上の恥ずかしさで上塗りしてしまえば、まったく気にならなくなるのではないかと」

「そんな記憶の除去方法はいやだああ!」

「まあまあ、せっかく盛り上がったことだし……」

「お、おま、ちょっ、勝手に盛り上がったって何いっ……。に、に、

にぎやあああああ、……あっ」

乱れたベッドの上、乱れた服のまま横たわる僕とミーシャ。

さっきとは違う意味での自己嫌悪。

余裕綽々の態度で寝転ぶミーシャに腹が立つので、復讐の意味も籠めて彼女の頬を抓る。

「ひひやいれふ、ひへさは」

「当たり前だよ、痛いように抓っているんだから」

「まったく、仕方ないツンデレさんですねえ」

「うがああ！ 誰がツンデレか！ 要らない単語だけ凄い勢いで学習しないで！」

なんだ、やっぱりこのケダモノには勝てる気がしない。

「で、こんなことをしに来たわけじゃないんでしょっ？」

「はい。昼間の件について少し話をしに来ました」

昼間の件、クッキーが捨てられていたこと、僕が意図せず泣いてしまった理由。

ミーシャの荒療治が効いているのか、今は心がざわめくことも無い。

僕は無言で話の催促をする。

「孤児院ですが、王宮から少し離れたところにあるので、業務の合間に尋ねに行くという訳にも行きません。ですが、明後日丁度私が非番の日がありますので、その日にそれとなく様子を伺いにいけるかなと思うのです」

「悪いよ、折角の休みなのに」

「いえ、孤児院の近くには私の行きつけの服屋もあるので、買い物ついでに事情を聞いてこようかと」

「うーん、なんか気が進まないなあ」

ぼりぼりと頬をかく僕を見て、ミーシャは苦笑しながら僕の頭を撫でる。

まるで出来の悪い妹か弟を見守る姉の様な雰囲気だなあ。

「私も幾度かシスター達にお会いしていますが、好き嫌いだけで昼間の様なことをする人達ではなかったと思うのです。自分の中の気持ち悪さもスツキリさせたいですね。あながち姫様の為という訳でもなさそうです」

「ははは、なんかミーシャらしいね」

ま、確かに気持ち悪いまま過ごすのも嫌だしな、ここはミーシャにお願いするべきだろうか。

ま、駄目と言っても自分から進んで行きそうだけどな、ミーシャの場合。

それに結果がどっちに転んでも、これ以上精神的な被害は被るこ

とも無いだろうし、良くも悪くもはつきりさせるべきか。

もって帰ってくる話次第では、また僕の取るべき方針が変わるかもしれないしな。

僕はそう考えて、ミーシャに調査をお願いすることにした。

同時刻、王都内のある料理屋の一室。

私は一人手酌で酒を楽しんでいた。

ふと羽戸の向こうに人の気配を感じて目をやると、店員に案内されて一人の女がやってくる。

待ち人来たれり。

薄い笑みを浮かべながら、来訪者を歓迎する。

「お待たせして申し訳ありません、トスカーナ様」

「かまわぬ。で、どんな感じだ？」

「はい、殿下とあの女との距離は、私からみて縮まっているとは思えません。むしろ遠ざかっているかと」

「ほほう、しかし、そうであれば尚のこと、小娘が荒れぬのが解せんのだがな」

温くなったエールを喉に流し込み、目の前の女を観察する。

拳動不審なところは無いので、相手側に取り込まれているという心配はなさそうだ。

が、小心者なのは相変わらずではあるようだが。

私が疑問を持っていることを正確に読み取った女は、慌てて追加

の情報を並べる。

「落水事故前まではまるつきり人を寄せ付けないう囂気だったのですが、ここ最近はまだで人が変わったかのように友好的で」

「情に絆されたか？」

「滅相もございません。私は常に貴方様と共にあります」

「まあ、よい。ではやはりあの端女がレイチエルとかいう馬鹿者の代わりを務めているということか」

「はい。最近は頻繁に同衾している様子。あの女も大分ミーシャを鼻屑にしています」

「そうか。では、さぞかし懐いているのであろうなあ」

「はい。二人は上手く隠していると思うようですが、時折まるで恋人同士のような雰囲気になることもしばしば」

女同士が戯れるのは良く聞く話。

戦場に行けば男同士であろうと行為に走るのだから、別段不思議でも、忌諱されるべき行為でもない。

そんなゴシップに1gの価値も無いが、二人の関係は今の私にとつては黄金の如き価値がある。

私は満足げに頷いて、会話は終わりだと無言で相手に告げた。

が、いつもと違い直ぐに去ろうとしない女を不審に思っで見上げると、なにやら懐に手をつ突っ込んだまま何かを躊躇っている様子。

「あの、それで今日はこの手紙をルナにお渡しただきたいのですが……」

決心が付いたのか、そう言って女が机の上に封筒を差し出す。ルナとは確か、レイチエルという皇族に不義を働いた端目の妹だったか。

つい最近までは、あのいけ好かないレオとかいうカスパールの小倅めの所に匿われていたのだが、当面の危険は去ったとの事で里に返したのだ。

が、一度復讐に狂った人間が、そう簡単に諦めるはずも無い。今は王都内のラムザス派の隠れ家に身を寄せている。

あれも言われもせずに良い感じに踊ってくれるので、わりと重宝する駒だ。

「分かった。必ず渡しておこう」

「はい、有難うございます」

笑った顔が早くに死に別れた愛妾のものにそっくりで、思わず眉をしかめてしまう。

そんな感情に振り回されるなど、我ながら情けないことだ。

女は私の表情の変化を見て勝手に何かを想像し、勝手に萎れていく。

手間の掛からぬのだけが取り柄だ。

「今日はもう下がってよい」

「は、申し訳ありません、お父様」

少しさびしそうな顔をして、個室から出てゆく妾の娘、スウィータ。

もう少し知恵の回る女であれば使い勝手は良かったのだが、と益体も無い愚痴を一人こぼす。

入れ替わりに一人の男が、さりげなく部屋に入ってくる。

どこにでも居そうで、どこにも居ない影の様な雰囲気を持った男だ。

私はその男に、今渡された封筒を投げ渡す。

「ルナとやらにだ」

「はっ。内容は如何いたしますか？」

「別に手を加えるまでもあるまい。既にこれ以上無いくらいに燃え盛っているのだ。何か行動を起こしたいというのであれば、そろそろ手を貸してやってもいい頃だな」

「は、御意に」

「カスパールの小倅に嗅ぎ付かれるなよ？ あれでいて奴は鼻が利くからな」

「お任せください」

来たときと同様、至極自然にこの場から消えていなくなる。

さて、以前のお膳立ては失敗に終わったが、今度はちゃんと踊って欲しいものだ。

私は帝国の世継ぎ争いなどで、この国を失いたくなどはない。

ヴォルフ家も、厄介な女共を押し付けてくれたものだ。

皇帝のご落胤などという噂付きの小娘など、この国には毒にしかならない。

帝国と正しく付き合っていくには、気の毒ではあるがスワジク姫には早々に舞台を降りていただかねばな。

私は残ったエールを一息にあおって、料理屋を後にした。

26・5話「とある王子と侍女のお話」(2/21加筆)

「殿下、少し姫様についてお話があるのですが、よろしいでしょうか？」

外出から帰ってきて暫くしてから、珍しくミーシャが私の執務室を訪ねてやってきた。

なにやら思いつめた表情だったので、普段は噂が立つのを気にしてやらないのだが、人払いをして部屋に二人きりとなる。

それに対してミーシャは無言で頭を下げて謝意を示す。

「で、話とはなんだ？」

「はい。実は姫様の事なのです」

「ふむ。昼間、急に取り乱した事について何か心当たりがあるのだな？」

「はい。ですが事は昼間の件というよりも、姫様自身の秘密についてでしょうか」

「スワジクの秘密、だと？」

私はいぶかしげに目の前のミーシャを見据えた。

ミーシャは私の視線に臆することもなく、ゆっくりと首肯する。

少なくとも今現在、スワジクの事で我々が把握していないことなど何一つない筈である。

その交友関係（もともと交友関係すら存在しないが）、取引のあ

る業者や、彼女に睨まれている貴族や官僚たち、食事の状況から健康状態まで、完全に管理しているはず。

そのスワジクに秘密があるというのなら、彼女自身の内面の話が、彼女が画策しているなにか、か。

私は居住まいを正して、ミーシャに向き直る。

「よし、話を聞こう」

「はい。実はあのスワジク姫様は、本当のスワジク姫ではない、と本人は言っております」

「……はあ？」

のっけから意味の分からないことを言われて、私は思わず間拔けな声を上げてしまった。

そんな私を見ても、ミーシャは特に気分を害することもなく、むしろ私の反応に理解を示しているようだ。

「では、あのスワジクは替え玉で、本物はどこかに連れ去られたとでも？」

「いえ、そうではありません。確かにあの姫様は、本物の姫様ですが、中身がどうも違うようなのです」

「中身が違うだと？」

「はい。これは本人の話ですが、中の人である自分はおそらくイジゲンの世界にあるチキュウという星から来たミライ人らしいです」

「……全くもって意味が分からないのだが？」

「実は私も完璧には理解をしております」

頬をぱりぱりと指で搔きながら、ミーシャは苦笑する。

私は大きいため息をついて、椅子にもたれかかった。

正直、目の前の侍女の配置換え、もしくは解雇も視野に入れて考えなければいけないかもしれない。

「まあ、そのイジゲンのチキュウという所のミライ人が何をしに、我々の王国にきたのだ？」

「姫様の話では、おそらく向こう側で事故か何かで肉体を離れた魂が、何かの拍子で、たとえば魔法で召喚した等ですが、こちらの世界に呼ばれて姫様の体に宿ったということらしいです」

「……その魔法は誰が使ったというのだ？ この王国に魔法を使えるものなど、数える程しかないのだぞ？ ましてや、ドクターを超える導師など帝都に行かなければ見つからないのではないか？」

「それはおっしゃる通りです。実際姫様も、自分の仮説には自信がない様子でした。ですが、手段の証明は出来ないけれども、結果の証明なら出来るということで先ほどの話を聞かされたのです」

「にしてもだ、そんな与太話、誰が信じる？」

苦笑いをするミーシャ。

まあ、自分の話がずいぶん怪しげなものであることは理解している様子だ。

なぜこんな意味不明な話を持ち出したのか、その真意を聞きだした後彼女の処遇を決めることにしようと思心に決めた。

「殿下は、スワジク姫の人物をどのように評価されていますか？もし差し支えなければお聞かせ願いたいのですが」

「……まあ、いいだろう。私のスワジクに対する評価は、自己中心

的で排他的な思考、自己顕示欲が強くて、猜疑心の強い女だ」

「はい、そうです。私も以前まではそう違わない認識でした」

「今は違うと？」

「はい。それは殿下だけでなく、落水事故以後姫に関わった者達であれば、違和感を覚えているはずです」

確かにミーシャの言うとおり、現在我々はスワジク姫の今までにない行動に翻弄されて頭を悩ましていたところだ。

「人畜無害、臆病者でどうしようもない善人。私が接してきて感じた今の姫様の評価です」

「なるほど。確かに君に言われてみれば、符合する点がいくつもあって納得だな」

いつの間にか前かがみになっていた体を、再度椅子の背もたれに寄りかかって、私は天井を仰ぎ見た。

確かに違和感という点では、なるほどと肯かざるを得ない点が多い。

だが、荒唐無稽な『別人格の憑依』という話を納得させうる内容かといわれれば、少々首を傾げなければならぬ。

確かに以前のような攻撃的な雰囲気は消え、どこか町娘を思わせるような仕草や行動が目立っていたのは確かである。

だからといってそれが『別人格』であると、いったいどこの誰が証明出来ると言うのだ。

「だがやはり『別の人格』だとか、『イセカイ』から呼び寄せられ

た魂だといわれても誰も納得はしないと思うのだが」

「はい。正直私もその点については、姫様の論を証明できないのでどうしようもありません。ただ、落水事故以後の姫様の言動を見聞きして、そして実際に彼女の心に触れてみて、私は確信いたしました。あの姫様は別人であると」

まるでそれが最大の証明であるといわんばかりに胸を張って言い切る彼女の姿を見て、少し考えを改めるべきなのかもと私は根拠もなく思ってしまった。

ミーシャの今までの働きを見る分には、彼女は侍女として十分以上の働きをしていると思う。

その誠実な働きに清廉な人格はヴィヴィオも大いに褒めていたところではあるので、彼女の狂言だと言い切るのも少し疑問の余地がある。

だが、それでも彼女の話は無条件に信じるには、色々と情報が足りないのも事実。

「殿下。私は必要以上に姫様を警戒するのは、いい結果には繋がらないような気がするのです。あの姫様は自分の善性にそって行動なされています。ですのでその言葉、行動をそのまま受け入れてあげれば、それがきつと姫様にも殿下にとつても最善の道になる、と私はそう思っています」

「……」

彼女の言わんとしていることも分かる気がするが、といって無条件に蛮行姫を信じていいものかどうか。

しばしの間、無言でじつとミーシャを見つめ、ミーシャも無言で

私の視線を正面から受け止めている。

その瞳に揺らぎはなく、その表情にも翳りも不安も焦りも見えない。

「すぐに信じるとはいいません。ですが、落水事故以後の彼女のことをもう一度思い返してあげてください。そして疑いの眼でみるのではなく、彼女の善意を信じて感じ直してください。その上で、姫様から今の話を打ち明けられたときには、黙って話を聞いてあげて欲しいのです。心を開いて、彼女の気持ちを受け止めてあげてください。それが出来るのは、多分殿下を置いてほかにはいないと思うから……」

言いたいことを言い切ったという表情で、ミーシャは口を閉じた。彼女の気持ちは分からないでもないが、正直信じたい気持ちが半分、疑わしい気持ちが半分である。

その私の内心も見透かして、ミーシャは信じなくていいと言ったのだろう。

もし、スワジクからその話があるのであれば、先入観なしに聞いてやるのもいいかもしれない。

その上でスワジクやミーシャの言うことが狂言かどうかを判断すればいいことだ。

もし狂言であれば今までどおりの対応で問題ないだろうし、本当ならば、それは王国にとってはいい話なのだろう。

そう頭の中で結論付けた瞬間、目の前にあの夜の幼かったスワジクが現れる。

(またね、フェイタール兄様……)

突然湧き上がる寂寥感に、私は意味が分からずと惑ってしまふ。

あの夜のスワジクの笑顔がなぜこんなにも悲しく見えてしまうのか、この時の私には理解できなかった。

27話「はあ、ようやく肩の荷が下りたか……」

「申し訳ありません！」

昼下がりの僕の私室、目の前で勢い良く直角に腰を曲げて謝罪する人が二人いた。

コワルスキーさんとヴィヴィオさんだ。

その横には神妙な顔をしたフェイ兄も一緒に立っている。急に話がしたいと押しかけられて、開口一番が上の科白。

「えと、急に謝られても意味がわからないのですが……」

「はい、実は……」

「いい、コワルスキー。私が説明する」

「殿下……」

いつぞやのシリアスモードで僕の前に立つフェイ兄。

この顔もなにやら随分と久しぶりの気がするなあ、などと暢気な事を考えて何となくこれから聞かされる現実から逃げてみたり。

だけど無情なるかな、僕のささやかな抵抗なんて現実はこれっぽちも考えてはくれないわけで。

「スワジク、以前から君が会いたがっていたボーマンとニーナの2名についてなんだが」

「は、はあ」

「実はもう王宮には居ないんだ」

「……あの、それって死んだとかですか？」

「いや、それはない。王族に対して適切な対応を取れなかったとして、解雇したんだ」

「適切な対応？」

「ああ、一緒に食卓についてお茶していただろう？ あれが問題視されたんだ」

「は、はあ」

気の無い返事をしながら、不当解雇じゃないのかとふと考えて見る。

っていうかあれで解雇されるなら、きっとミーシャは5回くらい磔の刑にしないとイケないと思うんだ。

まあ、周りにバレないようにお互い気を使っているから、大丈夫だとは思っただけだね。

……あれ？ なんかそう言つとまるで僕とミーシャって付き合ってるみたいに聞こえる不思議。

うつむ、確かに美人さんだし気が利くところや尽くすタイプの人だから、一緒にいて全然疲れなくていいんだけど。

あつ、メイドさんだからそれは基本スキルなのかな？

いやいや、今はそんなどうでもいい事を考えている場合じゃない。現実逃避も程ほどにしないと！

「あの、フェイ兄様。やっぱり私がいけなかったんでしょうか？無理やりお茶に誘ったのは私ですし」

「い、いや、我々も少し神経質になりすぎていたと思う。解雇というのも、本来であればありえない決定だ。その……」

凄く言い難そうに言葉を濁すフェイ兄をみて、理解した。確かに蛮行姫の以前の行状を考えれば、仕方の無かった対応なのだろう。

僕もあの頃はまだ外の人の事がよく分かっていなかったから、手当たり次第に情報を集めようと必死だった。

これくらい大丈夫だろうと思ってやったことではあったのだが、それが他人の人生を大きく左右させるような事態になるとは夢にも思ってもみず。

ただ、それを他人から責められても納得はいかないだけけどね。

「あ、あはは。そうですね。私が急におかしな行動を取り始めたから、皆さんびっくりしたんですね？」

「正直にいうと、そうだ。君が落水する前と後では、まるで別人かと思うような変わりようだ。もちろん、いい意味で変わったわけなんだが。それに私たちが対応しきれていなかった」

「フェイ兄様たちは、ポーマンやニーナに良かれと思ってしたことなのですよ？　なら、それを私が責めることは出来ません」

「……そうか。そう言ってくると、少しだけ救われた気になる」

自分達だけがお互いを理解し許し合ったとしても、厳然とそこには被害者が残っている。

ぎこちないフェイ兄の笑みは、多分そういうことなんだろう。

僕だって非常に後味の悪い思いをしているのだから。

誰が悪いと責め合ってみても埒が明かない。

それならば少しでも状況を改善するために、僕が出来ることを少しずつでもするしかない。

「コウルスキーさんも、ヴィヴィオさんも頭を上げてください。この件について、私から皆さんに何かを言うことはありませんし、恨んだりもしません。筋違いだと思うから」

「有難うございます、姫殿下。今後はこのような事の無いよう、従事長として誠意を持ってお使えさせていただきます」

「有難うございます。それはそれとしてですね、2人の行方はわかっていますしやるのでしょうか？」

「……そ、それが、ニーナの方はともかく、ポーマンも実家には帰っていない様子です。実際2人がどこに行ったのか分からないのです」

ヴィヴィオが申し訳なさそうにそう釈明をした。

きつとここ数日の間に八方に手を尽くしたんだろうな、という事は鈍感な僕にでも察せられる。

行方不明というのであれば、僕達が彼らに謝罪する機会すらない。まさか将来を悲観して……、なんて事になっていなければ良いんだけれどなあ。

「分かりました。では引き続き彼らの行方を追ってもらえませんか？ やっぱり一番の被害者は彼らだと思いますので、直接謝りたいです」

「はっ、全力を持って捜索に当たらせてます」

コウルスキーさんが直立不動の姿勢のまま、力強くそう言ってくれた。

何時になるか分からないけれど、僕達の手の届く範囲に居てくれるならきつと会って謝罪できる時も来るに違いない。

さて、もう一つ僕には出来ることがある。

それをやっておかないと、今後もきつと周りの皆は僕を勘違いしたまま、望まぬ方向へと話が進むに違いない。

だから、僕はもう自分を偽るのをやめようと思う。

それが状況の改善の一步になるはずと信じて、僕は静かに心を定める。

「フェイ兄様、もっと早くに言えばよかったです、お話ししなければいけないことがあります」

「ああ、聞こう」

フェイ兄も、恐らくある程度何かを感じていたのだろう。

僕の突然の話にも動じることなく、静かに頷いた。

そうして僕は、全てを包み隠さずフェイ兄達に告げたのだ。

自分が、スワジク・ヴォルフ・ゴードインという人格ではないということ。

その後、フェイ兄たちに全てを洗いざらい話したら、以外にも素直に僕の話を受入れてくれた。

実際腹の底でどう思っているのかは分からないけれど、それでも突拍子も無い僕の話に笑い飛ばしませずちゃんと最後まで聞いてくれたのだ。

それだけでも随分と前進したのではないだろうか。

もっともスワジク姫を演じて彼女の悪評を覆すというミッション

は、残念ながら失敗したわけではあるのだが。

ぼんやりと考え事をしながら、ベッドの上で仰向けに寝そべって天井を眺める。

ああ、そういえばこれがこの世界の最初に見た光景だったわけ。意味も無く感慨に耽る僕の耳に、最近聞きなれた涼やかな声がする。

「姫様、失礼いたします」

就寝の時間になったので、いつものようにミーシャが静かに部屋へと入って来たのだ。

僕は半身を起こそうとして、ミーシャはそれをやんわりと押し戻す。

寝ていていいということなんだろう。

彼女はそのままベッドの端に腰を掛けて、僕の顔を覗き込んでくる。

「意外と落ち着いていて安心しました」

「取り乱す程のことじゃないし？」

「クッキー見て泣いた娘がそんな事をいつても、強がりには聞こえませんが」

「ふ、ふん。あれはボクが泣いたんじゃないかと、この体の涙腺が弱いつていうか」

何となく言い訳めいている気もしなくは無いが、泣き虫と思われたままなのも癪に障るしね。

そう思って自己主張するも、ミーシャといえばそんな僕の話をやニヤと笑みを浮かべて聞いている。

「ふふ、無理して背伸びしている子みたいで可愛いです」

「なんかむかつく」

「まあ、それはそれとして、明日予定通り孤児院へ行ってみます。多分あちらに行けるのが夕方くらいなので、帰って来るのは明後日の朝になると思いますが」

「そか、ゴメンね。わざわざ」

ミーシャは軽く笑って、湿っぽくなりかけた僕の言葉を受け流す。色々とあれな人ではあるけれど、やっぱり今でも一番の味方といえるのはミーシャだけだ。

ま、今後はフェイ兄達も少しは打ち解けてくれると思うから、結果として状況の改善という目的は達成出来たと思っていいのだろう。僕を理解してくれる人が増えるのは、きっと悪いことではないはずだから。

「きつと、蓋を開けたら肩透かしを食らうくらい理由なんだろうと思ってます。だから姫様もあんまり気に病まないでください」

「努力はするよ」

「色々と前向きに行動するくせに、意外と小心者なんですな」

「うるせー」

いわれなき中傷に反論してみるも、何の効果も無いあたり救いようが無い。

もつとも小心者といわれれば確かにそうなので、僕としては苦笑いするしかないんだけど。

おでこにおやすみなさいのキスをして、笑顔でミーシャが出て行った。

その去り際の彼女の笑顔に、意味も無く見とれてしまう僕がいる。

「やべえ、ミーシャがボクにフラグを立てて行った気がする。いや、それで普通なんだよな。ボクは男なんだし。……あ、でも外側は女の子だから、やっぱり百合になるのか？」

不毛な悩み事で一晚を明かす僕であった。

スワジクの寝室からミーシャが出てきたのを見て、私は彼女に近づいた。

私の姿を見た彼女は恭しく一礼をしつつ、私が傍に来るのを待っている。

「どうだった？」

「はい、随分と落ち着いては居られるようです」

「そうか。最初は信じられなかったが、君の報告のお陰で随分と状況がいい方向へ向かってくれた」

「差し出がましい口を差し挟み、恐縮いたしております」

「いや、君が彼女の秘密を話してくれなければ、きっと我々は今も

スワジクのありもしない裏を警戒して右往左往していたに違いない」

そう、私たちがスワジクに真正面から真実を打ち明けたのは、ミーシャが事前に彼女の身に起こったことを説明してくれたからだ。他人の人格が憑依しているというスワジクの話は、ミーシャの普段を知らなければ狂人の戯言と切って捨てていただろう。

「ですが殿下、くれぐれも私が喋った内容については、責任ある方々以外にはお漏らしにならないようお願い申し上げます」

「分かっている。右も左も分からぬ彼女を、政争の道具にさせるつもりは無い」

「ご配慮、有難うございます」

そういつて軽く頭を下げるミーシャに、私は軽く手を上げて礼の必要の無いことを伝える。

いろんな意味で、この侍女には感謝せねばならないだろう。

話は終わったとして去ろうとした私の背中に、ミーシャが遠慮がちに声を掛けてくる。

「あの、殿下」

「何かまだあるのか？」

「何かというか、その少しいい難しい事なのですが……」

「なんだ、言ってみろ。この際だ、どんな事であっても笑わず受け止めて見せよう」

「笑うというよりも、怒らないで欲しいのですが……」

なんだろう、何かの失敗を許して欲しいとかそういう話だろうか？
不審に思いつつも、引き攣った笑顔で立っているミーシャに再度
向き直る。

彼女も意を決したのか、ごくりと生唾を飲み込んで語りだした。

「姫殿下に対してのアプローチの事なのですが……」

「あ、ああ、それがどうした？」

「その今の姫様にはどうも肌に合わない様子です……」

「……何が、合わないのだ？」

「主に姫殿下を褒めるお言葉とか、仕草とか、そういった事がどうも苦手のように思われています」

二人の間を流れるしばしの無言の時。

スワジクは私の接し方が苦手だと感じているのか？

そう言われてみれば、落水前の反応とは違うように思えてきた。

「……具体的には、どの様に思っているのだ？」

「それを申すには、先に無礼を許すという言葉頂かないと」

「そ、それほどの事なのか？ それほどに私は彼女に嫌われているのか！？」

衝撃の事実、私は思わずミーシャに掴み掛かりそうになる。

それはそうだ、今の今まで彼女に好かれていたと信じて疑って
なかったのに、蓋を開けてみれば実は嫌いでしたとか冗談ではない。

私の剣幕をある程度予想していたのか、ミーシャは慌てる風も無

く落ち着いている。

「というかその事実をこの侍女は知っていて、私がスワジクに言い寄っている様を見て何を思っていたのだろうか。」

それを考えると、急に激しい動悸と息切れがしてきた。

「ゆ、許す。許すから、スワジクがどう私のことを思っていたのか教えて欲しい」

「はい、では。第一に姫を呼ぶときの声の掛け方がキモイとの事です」

「キモイ？ キモイとは何だ」

「気持ち悪いの略だそうです」

足の力が抜けて廊下に跪いてしまう。

「気持ち、悪いだと？ この私が？」

私の有様を見て、脂汗を流しながらこちらを伺ってるミーシャ。力ない仕草で、私は続きを促した。

「こうなれば皿まで喰らおうではないか。」

「次は、すぐに肩を抱いたり、キスしてくるのがうっとおしいと」「ぐはっ」

「それに、用もないのに頻繁に会いに来られるのも、すとーかーの様で見ていると痛々しいそうです」

「すとーかーなる物が何かは分からぬが、痛ましい存在である事だけは魂に刻み込んだ……。もう、それぐらいで終わりか？」

「いえ……」

「そうか、まだあるのか。構わぬ、続けてみる」

「姫様曰く、『フェイ兄ってシスコンロリ変態だ』と」

「それは一体どういう意味だ？」

「シスコンは、自分の妹を溺愛する残念な人のことだと、教えていただきました。で、ロリですが……」

「ロリとは……？」

知らず知らずの内にぐくりと唾を飲み込んでいる私がいる。

これ以上の最低な評価などないと信じたいのだが、ミーシャの顔を見る限りそうではない様子。

くっ、私はこの攻撃に耐えられるのか？

「ロリとは、小児性愛好者のことのようにです。つまり、フェイタール殿下は、小児性愛好者の妹溺愛の近親願望のある変態さんであると姫様は思っているようです」

「ミーシャ、止めてあげて！ フェイ兄様のHPはもう0だよ……！」

跪く力すらなくなって四つん這いになっている私に、部屋から走り出てきたスワジクが抱きついてきた。

ああ、君はそこまで嫌っていながら、無様な私を気遣ってくれるのか。

だが、少し遅かったようだ。

HPがなんなのかは分からないが、確かに私の魂はミーシャの指摘によって粉々に砕けちってしまって0になったよ。

静かに涙を流すフェイ兄の肩を抱きながら、僕は乗りに乗って喋っていたミーシャを軽く睨んでみた。

上気した頬に少し潤んだ瞳で這い蹲っている敗者を見るその姿は、

まんま女王様である。

「ミーシャ、フェイ兄の反応見て楽しんでいただけろ？」

「いえいえ、何を仰られるのですか。私はただ殿下に現実を見せて差し上げようと」

「いやいや、ミーシャ、それ嘘だよね？」

「だってすっげーいい笑顔すぎるもの。」

「ま、私が居ない間に変に姫様にちよっかいを掛けられても困りませんので、保険でしょうか？」

「な・ん・の・保険だよ！ っていうかフェイ兄が立ち直れなくなったらミーシャの責任だからねっ！」

「その程度で使い物にならなくなる殿方なのでしたら、私のほうがよっぽど頼りになりますよ？」

「なんのアピールなんだよ、お前は！」

喧々囂々、カオスな夜はそうして更けていったのである

28話「紅い花が咲いた夜」

王都の西の外れ、古びた教会に寄り添うように立てられたレンガ造りの寄宿舎がある。

王族の私財を持つて運営されるその寄宿舎には、10名ほどの神父とシスター、50人程の孤児たちが生活していた。

彼らは生きていく上で必要な教育や技術をここで学び、ある者は王都のギルドへ、ある者は商家へ奉公にゆき、またある者は王宮の下働きとして召抱えられるのだ。

私は古臭い鉄格子の門扉を押し開けて、笑い声の響いている寄宿舎へと向かった。

玄関に辿り着く前に、数人の子供達が転がるようにして裏庭から現れる。

「あれ？ 何かご用事ですか？」

一番後ろから逃げる子供達を追っかけていた年かさの子が、息を弾ませながら傍に来た。

私は意識的に表情を作って笑いかける。

「ええ、少しここのシスターさん達とお話がしたくて来たのだけれど、いらっしやるかしら？」

「あ、う、うん。ちよつと待っていてください。今呼んできます！」

「お兄ちゃん、何してるんだよお！ 早くしないと、皆逃げちゃうよお！」

「馬鹿、お客さんだって。俺、先生呼んでくるから、お前みんなの

面倒見ててくれよな」

「えー!!」

仲間のブーイングを五月蠅げに振り払って、少年は寄宿舍へと掛けていった。

さっきまで楽しそうに遊んでいた子供達は、詰まらなさそうな顔で一塊になっている。

少し罪悪感を覚えた私は、いつもの侍女スマイルで彼らの方へと近づく。

「ごめんね、皆。代わりとってはなんだけど、お姉さんが鬼になつてあげようか?」

「え? いいの?」

「ええ、いいわよ! でもお姉ちゃん、ちょっと強いよお?」

子供達の相手を任された子が、目をキラキラさせて私を見ている。多分、この子には私が救世主か何かのように見えているんだろう。周りに居る子供達は、新しい遊び相手への期待で皆テンションが一気にハイになっている。

「鬼は全員捕まえないと交代出来ないルールで、捕まった人はこの木の下で檻に入るの。捕まってない人が檻の中に入ったら、解放したことになるって、皆逃げられるんだよ。本当は鬼も2、3人でやるんだけど、お姉ちゃんは大人だから、一人でいいよね?」

「ええ、いいわよ」

「範囲はこの寄宿舍の塀の中。建物の中は入っちゃだめなんだ。そ

れじゃあ、ここで15数えてね！」

ざっとの説明を終えると、子供達は嬌声を上げながら思い思いの方向へと逃げ始めた。

私はわざとゆっくりと数えて逃げる時間を作ってあげる。

ま、敷地内だけなら楽勝でしょう。

「……13！……14！……15！！それじゃあ、いつちや

うよお！」

「きゃあああ！」

「鬼が来るぞお！逃げろお！」

「あははは、怖いよー」

子供は全員で8人。

今見えるだけで4人、後の4人は建物の裏側に回ってここからは見えない

ま、とりあえずトタタと走っている4、5歳の子は後にして、目の前で余裕をかましているガキからめるか。

私はゆっくりとイガグリ頭の子供に向かって歩き始める。

相手も自分が標的になった事を悟ったのか、にやりと笑みを浮かべていた。

ふむ、とりあえず半分くらいの力でいっか。

私は少しだけ足に力を溜めると、獲物に向かって駆け出す。

そのスピードにびっくりしたのか、イガグリ頭の子は私の腕の下を横っ飛びに避けた。

「ほほう、今のを避けますか」
「へへん、そう簡単に捕まってたまるかってーの」
「なら、これでどうかな？」

スカートを翻しながら、さっきよりも鋭くイガグリ君に突撃する。それを見て彼はニヤリと笑い、私に向かって同じように突っ込んできた。

私は衝突する前に少年を受け止めるべくスピードを一気に殺して、待ちの姿勢を取る。

彼はそれを見越していたようで、激しい砂埃を上げながらこちらへ向かってスライディング。

まんまと股の下を潜られて、背後からスカートを大きく捲られた。

「うひょー、このお姉ちゃん、黒いパンツはいてるぜー！」
「なっ！ー！」

「トマト君最低！」

「良くやったぞ、トマトおおー！」

「み、見えなかった。も、もう一回やるんだ、トマト！」

「トマト、マジきもいー」

校舎裏に隠れていたはずの悪餓鬼共がイガグリ君に声援を送り、私たちの周りにいた女の子達が罵声を送る。

誇らしげに両手を挙げて自分をアピールするイガグリ君よ、慢心したな。

私はくるりと踵を返すと、そのまま右手を前へと突き出す。

私の動きに気付いたイガグリ君は、そのまま私に後ろを見せて駆け出そうとしたが、音速を超える私の右手に敵うはずも無い。

「ひぎいいいいい！」

「ふっ、油断大敵というんだ、覚えておくといい」

がっしりと後頭部を鷲掴みにし、逃げられないように片手で宙にぶら下げる。

伊達に体を鍛えているわけではないんだからな、ふっふっふっふ。

「このババア、子供相手に何マジになってやがんだよー」

「残念だったな、小僧。今の私は泣く子も黙るブラッディオーク。

貴様の血を見るまでは、この怒りの炎は消せはせぬ」

「ぎゃあああ、悪魔だあ！ 鬼だああ！」

「わははは、もとより私は鬼だろうが」

「うわーん、殺されるううう」

そんな楽しい鬼ごっこが小1時間ほど続いたころ、ようやく敷地の裏口からシスターの一人が小走りに駆けてくる。

息を弾ませてやってきたのは、この間厨房にも着ていたアンジェラというシスターだ。

「あ、あの、遅く……、なりまして、大変申し……訳あり、ません」「いえいえ、別にいいですよ。久しぶりに童心に返って遊ばせて貰いましたし」

「そうですね、そういつて頂けると助かります。あ、立ち話もなんですから、中へどうぞ」

「はい、すいません。それじゃあ、皆また今度あそぼうね？」

「もう来んな、ブラッディ・オークめ！」

「おねえちゃん、また遊んでね」

「わはは、トマト涙目エ、ザマあ」

概ね好意的な反応に満足しつつ、シスターの後を追う。

また遊びに来てもいいかなと、ノスタルジックな気分ですんなことを考えていた。

寄宿舎の中に入って直ぐにある応接室に通され、私はシスターア
ンジェラが用意してくれたお茶で喉を潤す。

追いかけてここで乾いた喉に丁度良い温度。

なかなか気のつくシスターだなと思う。

こんな気が利く人が、果たして姫様のクッキーをぞんざいに扱う
のだろうか？

そう思いながら目の前でニコニコとお茶を飲んでいるシスターを
盗み見る。

「ところで今日はどのような御用事でしたでしょうか？ えっと…

…」

「ミーシャです。姫殿下の傍仕えをいたしております」

「有難うございます、ミーシャさん。先日も美味しいクッキーを沢
山頂きありがとうございます」

「いえ、お礼は私にではなくて姫殿下にお願いいたします。クッキ
ーは足りませんでしたでしょうか？」

「はい、それはもう、食べきれずに知り合いにお裾分けしたたく
らいですから。わざわざお気遣い頂き、有難うございます」

爽やかな笑顔での切り返しに何か裏がないかと勘ぐって見るが、見れば見るほど表裏の無い良い笑顔だ。

王宮の中に長く居たせいで、自分の感性は段々とひねくれていつてるんだらう。

こんな綺麗な笑顔の裏を探ってしまった自分に、少し、いやかなり嫌悪感を感じて落ち込む。

「ご近所にお配りに？」

「いえ、この孤児院出身で、この近くの盛り場で働いている娘に上げたのです。なんでも彼女のお友達がお姫様のクッキーだと聞いたら、余っている分全部くれて」

「……それは、またなんとも」

「でもあのクッキー、割と足が速かったので、あの娘達ちゃんと食べ切れたのかしらと不安になっていたりするんですけど」

なるほど、恐らくあの大量の廃棄クッキーは、その知り合いが食べきれずに腐らせて捨てたのだらう。

まったくなんていう業突張りな知り合いだらう。

お陰で私の姫様に要らぬ心労を掛けたじゃないか。

もしその知り合いとやらに出会う機会があつたら、心行くまでお・は・な・ししななければ駄目だな。

そう堅く心に誓って、私はその孤児院を後にした。

「少し長居し過ぎた……」

薄暗くなった王都の夜道を、私は一人寂しく街へと向かって歩いていった。

道すがら姫様へのお土産に買ったブレスレットを懐へ大事に入れ、夕方に荷物を預けた馬車置き場を目指す。

寄り道をしなければ明るいうちにここまで帰ってこれたのだが、まあ姫様へのいい買い物をしたのでよしとする。

鼻歌交じりに道を急いでいると、なにやら嫌な足音が聞こえてくる。

私の歩幅を真似て、付かず離れず追いかけてくる2つの足音。

レギンスの靴紐を結ぶ振りをして、それとなく背後を見てみた。

ごろつき風の男が二人。

嫌な笑みを浮かべてこちらを覗き込んでいる。

「さてさて、どうしたものでしょうか」

ごろつき二人程度であれば、常日頃の鍛錬で培った武術で対応出来る範囲。

これ以上相手が居ないことと、プロでないことを祈りつつ、なるべく人通りの多そうな道を選んで歩く。

だが私のささやかな希望は叶えられず、後ろからだけでなく前から似たような風貌の男達が、人通りが無くなった頃を見計らって集まってきた。

「くっ、囲まれる前に……」

私は横道に逸れようと、狭い路地に向かって駆け出した。

慌てて追いかけてこようとする男達を肩越しに確認しながら、細い路地を駆け抜ける。

「くそっ、逃げたぞ、追え！」

「お前らはあつちから回り込め。たかが女狐一匹、逃がすんじゃないぞ」

「くっ、あははは。ノロマな亀になんか捕まってやるものか」

私は昼間の鬼ごっこを思い出しながら、高まる興奮に身を任せる。狭い通路に所狭しと置かれた木箱やゴミの山。

ある時はそれらを足場に空を駆け、またある時はそれを撒き散らして相手への妨害とする。

私は一匹の獣になったような気持ちになって、ただ闇夜に浮かぶ月を頼りに路地を駆け抜けた。

「ちくしょう！ 早く捕まえろ、クズ共があ！」

「うっせえ、こつ足場が悪くちゃ走れるかってんだ」

「礫を射掛ける！」

耳元を風を切って飛んでゆく石礫が、私の金髪を数本筆記取ってゆく。

直線的な疾走から、右へ左へと不規則なターンを繰り返す走り方

に変える。

男達の放つ礫は一つとして私を捉えることは出来ず、聞こえてくるのは罵声ばかり。

そうこうしているうちにその罵声すら聞こえなくなり、ようやく正体不明の追っ手から逃れることが出来た。

「はっ、はっ、はっ。ま、日頃の鍛錬の賜物だな」

軽く上がった息を整えながら、私は人通りのある道へ出ようと歩き出した。

その時、懐から何かが落ちそうになるのを感じる。

何かと見て見れば、先ほど買った姫様へのプレゼントが落ちかけていた。

「危ない、危ない。折角のお土産を失くしてしまったら、正直立ち直れなくなるところだった」

苦笑いをしながら、落ちかけているブレスレットをポケットに入れ直そうとした時、前から路地に入って来た人とぶつかってしまった。

「ああ、すみませんね、お嬢さん」

「いえ、こちらこそ不注意でした。申し訳ありません」

「いえいえ。それでは、私は先を急ぎますので。よい旅路を」

「？」

その男の去り際の言葉に違和感を感じて、振り返ろうと体をよじつたら……。

「あ……」

下腹部に焼きゴテを突っ込まれたような激しい痛みにも、私は立っていられなくなって膝を突く。

何事かと思いい下を向くと、足元に見える真っ赤な血溜りと自分の体からよきりとはみ出ている何か。

鉄錆びの匂いが口に充満して、私は吐血した。

「ひ、姫さ、ま……」

その言葉を最後に、私の意識は深い闇へと引きずり込まれた。

29話「そして僕は笑えなくなってしまった（前編）」

その日は朝から憂鬱な天気だったように記憶している。

僕はいつもの様に朝の身支度をアニス達に任せ、ぼんやりと曇天の空を眺めていた。

朝一番に来るはずのミーシャが何故か姿を見せず、スヴィータ達が不平を漏らすのに苦笑いをしながら耳を傾ける。

相変わらず距離感を感じるものの、スヴィータやライラも簡単な雑談くらいなら応じてくれるようになっていた。

こういった何気ない話でも彼女らの話を黙って聞くのは、親近感を増すためには大事なことなのだと思う。

「でもミーシャ、朝一番には帰るって私には言ってたのですけれどね」

「どうせ行き摺りの相手でも見つけて、寝過ぎしたんじゃないでしょうか？」

スヴィータが冷静にミーシャを一刀両断。

まあ、そう言われてしまうと弁護する材料よりは、憶測を補足するよくな内容の事実しか思い浮かばないわけ。

アニスは多分僕と似た気持ちなのか、半分呆れ顔、半分怒っているって感じた。

「そういわれると中々反論出来ないけど、いくらミーシャさんでも仕事を忘れて色事に耽るような人でもないと思うのですけれど」

「事実、無断で遅刻しています。許されざる怠慢ですわ。ライラさ

んから一度厳しくいつてもらわないと」

「あ、うん。分かった。帰ってきたらちゃんと怒っておくわ、スヴェータ」

口を動かしながらも、一瞬たりとて止まらぬ手元。

流れるような彼女達の動きを意識の端で感じながら、考えることはミーシャが居ない理由ばかり。

もっとも今ここで何をどう悩んだところで、真相に辿り着くことなどありえない。

いつもの笑顔でひょっこり現れたらどんなお仕置きをしてやるのか、想像の中で逃げ惑うミーシャを僕は夢想する。

ふと窓の外を見ると、何やら人の出入りが激しい。

いや、普通の一般人ではなくて、兵士達の出入りが激しいようだ。長い間この窓から外を見ているけれど、あんなに慌しい様子は見ることが無い。

低く垂れ込めた暗い雲と兵士達の様子が、理由も無く僕の心をざわめつかせた。

今朝ミーシャが無断で休んでいる件でヴィヴィオの部下が調査に向かったところ、彼女の失踪が伝えられた。

王都西部地区にある馬車駅の近くの宿に、彼女の荷物が荒らされて放置されていたらしい。

当然当人の姿はどこにも無く、足取りも掴めない状況だ。

じっと机の前にかじりついていしか出来ない現状に、私の焦燥感は募るばかり。

嫌な想像しか浮かんでこないが、まだ決定的な情報は私の元には来ていない。

それだけを頼みの綱に、見知った少女の無事を祈る。

慌しい足音が聞こえたかと思うと、ノックもなしに開け放たれる執務室のドア。

息を切らしたセンドリックだった。

普通であればきちんとノックをしてから入るのが筋ではあるが、今はそういう通常儀礼的なこと一切を無視させている。

「報告です！ 西地区駅馬車付近の路地にて、多量の血痕を発見いたしました」

「っ！」

「怪我人、もしくは死体等は付近には見当たりませんが、途中まで引き摺っていった後があったので恐らくは処理されたものかと……」

「それが失踪者であるという根拠は？」

「数人の目撃者が居ました。彼らの情報から、倒れていたのは女性、年齢が20歳前後、髪がブロンドのショートだそうです」

知らず知らずの間に力が入っていたのか、嫌な音を立てながら奥歯が軋む。

今の情報だけで、その血痕の主がミーシャであるとは断定は出来ないが、恐らくそうなんだろう。

「それと、現場にこれが落ちていました」

そつと机の上に差し出された黒く凝固した血にまみれの女物のブレズレッド。

これをもつてくる意味が分からず、センドリックを見上げた。

「周囲の聞き込みをした結果、アルトワル孤児院と駅馬車の間にある露天商が商っていたものと判明しました」

「……で？」

「私が直接話をしました。10中8、9はミーシャ殿が購入された品物であると。店主曰くは、誰かのプレゼントのようであったと」

「そうか……。すまないが、引き続き調査を頼む」

「はっ、了解しました」

踵を返してセンドリックが足早に部屋から出てゆく。

入れ違いに部屋へ現れたのは、沈痛な面持ちのレオとヴィヴィオであった。

私は二人を一瞥してから、軽く首を左右に振る。

私の仕草を見て意味を理解した二人は、深いため息をつきうな垂れた。

そんな二人に声を掛けるのは少し躊躇われたが、早急になんらかの対応をしなければならない。

特にスワジクや彼女付きの侍女たちにどう説明したものか。

レイチェルの時ですら、平静を保つのにそれなりの時間が必要だったのだ。

この上ミーシャまでが事件に巻き込まれたと知ったら、彼女達がどう反応するのか想像もしたくない。

「兎に角、今ここで起こっていることは絶対に外に知られてはいけない。特にスワジクとその周りの人間には、だ」
「はっ、了解しました」

ヴィヴィオも深く頭を下げて了承の意を示す。

ようやくスワジクの問題が単純化出来そうだと喜んでいた矢先この事件。

あまりにタイミングが良すぎる。

それに何故ミーシャを狙ったのだ？

ミーシャがスワジクを揺さぶるのに一番効果的な人材だと知っていた？

一連の騒動で誰が一番得をするのか。

いろんな仮定が頭の中に浮かんで消え、消えては浮かぶ。

そこへまた慌てて、衛士の一人が飛び込んできた。

「閣下、大変です！ 姫殿下の部屋に何者かが矢を打ち込んできました」
「なんだと！？」

今朝は珍しくフェイ兄も現れず、いつもより静かな朝御飯を終わらせた。

普段と変わらぬ朝のはずだが、居るはずの人間が居ないと思うだけで少し心もとなく感じている自分がいる。

どうも先日来からの出来事が、地味にじわじわと僕の心にダメー

ジを与えていたということなのかな。

まあ、実際クッキーについてはミーシャが帰ってくれば経緯が分かるだろうし、ボーマンたちの事だってフェイ兄達がきつと上手くやってくれるに違いない。

そうしたら何もかもが上手くいくに決まっている。

「さて、じゃあ自分の部屋へいきますね」

「はい、姫様。あ、後でお持ちするお茶はいかがいたしましょう？」

「そうですね、アニスに任せます。アニスが入れてくれるお茶はいつも美味しいですから」

「お褒め頂き有難うございます。では、ダンブラ産の新茶を用意させていただきます」

「ええ、お願いします」

アニスがぺこりと頭を下げて寝室から出てゆく。

僕はそれを見送った後、スウィータとライラをつれて自室へと向かった。

お姫様という仕事は、なかなか毎日が退屈だ。

まあ、公務につけと言われても右も左も分からない僕じゃ、何の役にも立たないから仕方が無いんだけれども。

でも日がな一日やることが無く、お茶や散歩で時間つぶしつても限界がある。

とは言うものの、先日フェイ兄にカミングアウトしたことで家庭教師の時間を明後日から増やされるらしい。

やることは、歴史、礼儀作法、舞踊に貴族家系図。

前二つの授業に凄く時間を割かれる予定で、後ろ二つはまあ付録みたいな感じ。

ミーシャにもいろいろと教えてもらっていたけれど、やっぱり宮

廷付の教師になると教える内容の格が違うらしい。

僕自身はミーシャが先生で全然問題なかったんだけどね。

「さて、明後日に向けての予習でもしましょうか。ライラ、すいませんが歴史の本をとっていただけますか？」

「はい、姫様」

持ってきてもらった本を広げて、頑張って読んで見る。

うう、やっぱりなんか難しい。

ことさら難解な言い回しを使っていたりするもんだから、文章の意味を理解するだけで脳みそがショートしそうになる。

読み始めて3分で嫌になっただけ、メイドさん達が見ている手前簡単にギブアップしたのでは恥ずかしい。

妙な意地を張って、僕は頭から湯気を出しながらうんうん唸って暗号解読に勤しむ。

ほどなくしてアニスがワゴンを押して入ってくると、焼きたてクッキーの美味しい匂いが部屋に充満する。

朝ご飯を食べた後だけど、そんな美味しそうな匂いをさせられたら食べたくなるのは仕方ないよね。

目の前に差し出された紅茶とクッキーを見て、始めたばかりの勉強を中断してお茶に逃げる。

「美味しい。流石料理長ですね」

「はい、姫様からレシピを頂いた後、每晚試行錯誤して改良を加えた新作らしいです」

「ははは、凄い職人魂」

本当は皆と一緒にお茶をしたかったが、ニーナたちの例もあるの
でそこはぐっと我慢する。

一人で食べてもつまらないのには思うものの、これが姫様と呼
ばれる人の運命だと割り切って考える。

ほんと偉い人になんか成りたくなかったなあ。

愚痴っぽいことを考えながら暖かいお茶に口をつけていたら、突
然背後の窓ガラスが大きな音を立てて砕け散る。

「きゃあああ！」

アニスやライラの悲鳴が聞こえる。

多分僕も同じよな悲鳴を上げていたに違いない。

降りかかってきたガラスの破片を振り落としながら、何が起こっ
たのかと辺りを見回す。

砕け散った大窓、壁に突き刺さった太い矢。

その矢に括りつけられた円筒の筒から吐き出される白い煙。

爆発物？

「皆、部屋から逃げて！」

「え？ あ？」

僕の声にとっさに反応できない3人は、煙を吐き出す筒をぼんや
りと眺めて不思議そうにしていた。

パチパチつと何かが小さく弾ける音がしたかと思ったら、今度は
大きな音を立てて筒が破裂する。

「きゃああああ」

「早く外へ！」

「は、はい！」

僕の叱咤にようやく我を取り戻した3人は、慌てて廊下へとまろびでた。

扉と僕の間には机がある分僕が一番逃げるのに時間が掛かる。

小走りに部屋を出ようと思ったが、打ち込まれた矢はさっきの破裂音以降、音も煙もしなくなった。

僕は恐る恐る矢のほうへ近づくと、爆ぜた筒の中から少し見えていた紙の様なものを取り出す。

所々焼け焦げたその紙には、大きな字でこう書かれていた。

帝国の牝犬に尾を振る者に、我らは等しく天誅を加えん。

「なに、これ？」

血の様な真っ赤な字で書かれたその文字に、僕は言いよりの無い不気味さを感じた。

そこへ随分と慌てたフェイ兄やレオ達が部屋の中に駆け込んでくる。

僕が無事なのを見て安心したのか、ほっとした表情をして近づいて来て、僕の手元にある紙に気がついて凍りつく。

「フエイ兄様、これって？」
「それは……」

何かを言い淀むフエイ兄をみて、加速度的に増殖する僕の不安。まさか、それは無いだろうと思いつつも不安を形にしてしまう。

「この帝国の牝犬ってボクのことですよね？」

「……」

「で、それに尻尾を振る者っていうのは、ボクに良くしてくれている人の事って解釈でいいんだよね？」

「……いや、それは……」

「フエイ兄様、ミーシャはどうしたの？　なんでミーシャはここに今居ないんですか？」

「……」

僕の中で大きく育ちつつある不安を否定して欲しくて、一歩フエイ兄に詰め寄る。

一方のフエイ兄は、僕の視線を真正面から受け止めきれずに苦しげに横を向く。

その後ろに立つレオだつて良く似た表情だ。

何より、彼らはさっきから僕の言葉に対して何一つ反論してくれない。

僕が一番聞きたくない事を、馬鹿なことだと否定してくれないのだ。

「フエイ兄！　ミーシャに何があったの!？」

僕は思わずフェイ兄の胸倉を強く握り締める。

否定して欲しい。そんなことは無いと言って欲しい。僕の想像は、馬鹿げていると笑い飛ばして欲しい。

どんな言葉でもいいから、早く僕を否定してよ！

「フェイ兄！」

「ミーシャは、今行方不明だ……。状況からして恐らくは……」

ガシャンという大きな音が、部屋の中に響き渡る。

僕もフェイ兄もハツとなって後ろを振り向くと、そこには扉越しにこちらを呆然と見つめるアニスが居た。

彼女の足元には、さっき彼女が運んできたワゴンが横倒しになっている。

「う、うそ……」

アニスの絶望に塗りつぶされた表情を見て、僕は自分の犯してしまったミスに今更ながら後悔する。

いまここで僕は取り乱してフェイ兄を問いただすべきではなかったんだ。

僕はきゅっと下唇をかみ締め、自分自身の迂闊さを呪った。

30話「そして僕は笑えなくなってしまった（後編）」

張り詰めた空気の中、アニスが一步部屋の中へと入ってくる。

僕とフェイ兄は自分達の失態に動揺していて、彼女が近寄ってくるのをただ黙ってみているだけ。

そうしてアニスが僕達の目の前で立ち止まると、震える声をようやく絞り出した。

「で、殿下、ミーシャちゃんに、一体何があったんですか？」

「……そ、それは」

「アニス、あのね」

「姫様は……！」

「っ！」

「……姫様は、少しの間だけ黙ってていただけませんか？」

絶叫に近い音量に、なんとか宥めて下がらせようと思っていた僕は、見えない何かを押されたかのように一步後ろへ下がる。

フェイ兄の顔をちらりと盗み見ると、苦虫を噛み潰したような顔でアニスを見下ろしていた。

知りたくも無い事実の恐怖に、アニスは怯えて逃げ出しそうになっているが辛うじて踏みとどまる。

自分が大好きなミーシャの事だから、アニスは踏みとどまれたのだろう。

アニスの悲壮な表情と揺れる瞳が、フェイ兄に彼女の覚悟を伝えた。

「ミーシャは、恐らくは昨晚から行方不明だ。何らかの事件に巻き込まれた可能性が……」

「その事件というのが、その手紙なんですね？」

「断定は出来ない」

「他にどういう解釈が出来るのですか？ 昨日ミーシャちゃんが居なくなつて、今朝この手紙が放り込まれたつてことは、そういう事ですよ？」

「まだ死んだと決まつた訳では……」

アニスは俯き加減でじつと下唇を噛んで、溢れてくる何かと戦っている。

多分それは悲しさというよりも、何かに対する怒りなのだろう。

彼女の小さな肩が振るえて、息遣いも荒い。

「なんでミーシャちゃんが狙われなくちゃいけなかつたんでしょか？」

「……こういつた手合いに、理屈など付けられん。奴らは奴らの勝手な主観で行動しているんだ。運が悪かつたとしたしかな」

「嘘！ 運が悪かつたなんて、……嘘だ。そんな殿下自身も信じていらつしやらないような言葉で、私をはぐらかさないでください」

「アニス、落ち着くんた。君の気持ちはよく分かるが、身近に敵を探してもそれは不毛な結果しか……」

「じゃあ、私は誰を恨めばいいんですか？ もし本当にミーシャちゃんか……だつたら、私は誰を憎めばいいんですか？」

フェイ兄に向かって吐き出された言葉は、だけどしっかりと僕の胸に深く突き刺さる。

ミーシャが居なくなつた理由は、恐らくこの手紙が言つとおり私と仲良くなつたからに違いない。

誰かが僕達の毎日をどこから見ていて、それで生贄を見つけたんだ。

ミーシャを殺したのが犯人の罪なのであれば、ミーシャを殺させる要因を作つたのは……僕の罪なのだろうか？

人と仲良くなりたいと思うことが罪になるのなら、僕はどうあればよかつたのかな？

(憎めばいいのよ。傍に居る人を。自分を取り巻く状況を。そして自分自身を)

それは幻聴。

聞こえるはずの無い、本当のスワジク姫の声。

でも、今ならなんとなく彼女の深い悲しみが少し見えた気がした。

「アニス……」

僕はどう声を掛ければいいのかも分からないまま、それでもいたたまれずに彼女に声を掛ける。

何か話することで、少しでもアニスの気持ちや和らげばいいとでもそれは火に油を注ぐ結果にしかない。

「楽しいですか？」

「え？」

「周りの人を不幸にして、そんなに楽しいんですか？」
「そこまでだ、アニス！」

据わった目で僕を睨みながら、低い声で僕を糾弾するアニス。
そこから先を言わさないようにと、フェイ兄が僕とアニスの間に割って入る。

だが激昂したアニスがそれで止まるわけも無く、フェイ兄を振り切って僕に掴みかかって来た。

「そんなに私たちが苦しむ姿が楽しいんですか？」

「ち、違つ、そんなことは……」

「だったら、なんでミーシャちゃんがここに居ないんですか!？」

「……」

「だったら、なんでレイチエルさんがここに居ないんですか?!」

「……」

「皆、貴女に近づいて居なくなっただんですよ？ これ以上、私から友達を奪わないで……」

ぼろぼろと涙を流しながら崩れ落ちるアニス。

僕はただ見つめることしか出来ず、声すらも出ない。

そして、破滅の言葉は紡がれる。

「どうして、貴女はあのまま死んでいてくれなかったんですか？」

「アニス！」

フェイ兄の鋭い叫びが部屋に響いたが、そんなものは今のアニスにも、僕にすら届かない。

僕に向けられた純粹なアニスの願い。

その呪詛は、あつという間に僕の心臓に絡みつき鋭い棘を突き刺した。

「貴女があのまま死んでくれていたら、せめてミーシャちゃんは死ななくて済んだのに！」

「よせ、アニス！ それ以上喋るなっ！！」

「あなたなんか、死んじゃえば良かったのにつ！！」

パンツと乾いた音が鳴り響く。

フェイ兄がアニスを平手打ちした音。

「衛兵！ この者を連行して牢にぶち込んでおけ」
「はっ！」

叩かれて呆然としているアニスを、見知った衛兵達が両脇から抱え上げた。

アニスは特に抵抗する様子も無く、大人しく連れてゆかれる。

ほんの少し前まではいつもと同じように僕と過ごしていたアニスが、今は罪人として連れて行かれるのだ。

「大丈夫か？」

「う、うん」

フェイ兄が僕に寄り添うように肩を抱き、気遣ってくれている。いつもはウザイとしか思えない行為も、今だけは有難かった。僕はフェイ兄の胸に頭を持たせ掛けながら、ぼんやりと宙を眺める。

「フェイ兄、アニスは……、どうなるの？」

「……暫く牢で頭を冷やしてもらおうと思う。時間が経てばあの娘も冷静になれるかもしれないしな」

「不敬罪……、ってやつなんだよね？」

「ああ……」

「レイチエルの二の舞だけは……、駄目だよ」

「ああ……」

多くの人が見守る中での発言だから、簡単には許されることはない。

それに悪しき前例がある。

でもアニスまで居なくなったら、僕はきつと駄目になるだろう。

フェイ兄は僕を優しく抱き上げると、そのまま寝室へと連れて行ってくれた。

スワジクを寝室に運んでから、身の回りの世話をライラとスウィータに任せ、私は自分の執務室に戻った。

ミーシャの事も、アニスの事も非常に頭の痛い一件ではあるが、それよりも私には気にかかることがあった。

それはスワジクの事である。人格が入れ替わって以降のスワジクは、本当に良い笑顔をする娘だった。

私が7歳の夜に見た、あの時のスワジクのはにかむ姿と変わらぬように。

しかしさっきの彼女の表情は、再会したときのスワジクを髣髴とさせた。

まるでこの世に楽しいことなど何一つとしてないというような、絶望や拒絶を臭わせる表情だ。

このままでは、今のスワジクも同じ道を歩んでしまうのではないか？

それを未然に防ぐには、私はどう動けば良い？

「殿下、そう思いつめたところで状況は変わりませんよ？」

「……レオ、か」

「この度の件は、未然に防げず申し訳ありませんでした」

「人は万能には出来ていないんだ。広げた指の間から零れていくものだってあるだろう」

「そうかもしれませんが、やはり悔やまれます」

優秀だ、天才だと言われても、所詮人間のすることに万全などということはない。

今は極左派の仕業としてミーシャの件を捜査しているが、それだって本当かどうか怪しいものだ。

何せスワジクの敵は多すぎる。

皆、自分達の正義を振りかざして、あの娘を蹂躪しようとする暗躍し

ているのだ。

それはもちろん自分達を含めての話。

「私はな、レオ……」

「はい、なんででしょうか」

「スワジクがなんであそこまで傍若無人に振舞っていたのか、本当に理解出来なかった」

「はい」

「下心を持つて近寄ろうとする者には牙をむいて、親しみを持つて近寄ろうとするものには毒舌と暴力で接してきたんだ」

「はい」

「私はそれを母親に対する処遇への逆恨みや自分の環境への反発、ヴォルフ家の名を守るためだとばかり思っていたのだが……」

「はい」

「いや、思い込もうとしていたのかも知れないな」

だからどうしたという話。

全ては憶測、全ては過去。

スワジクが何を考え、思っていたのか、それはもう私が知りたいと思っても叶わぬ願いなのだ。

「私は、やり直せるのだろうか？ あの夜からもう一度……」

そんな自分にだけ都合の良い話が、世の中に通用するはずも無く。次の日の朝、スワジクの部屋の前でぼんやりと立っている二人の侍女の姿を見つける。

何事かと思い二人に何があつたのか聞いてみた。

「はい、今朝いつものように姫様の支度をとって参りましたら、道具一式を中に入れたところで追い出されてしまいました」

「何を考えているんだ？」

「私たちには、少し分かりかねます」

「分かった。私が聞いてこよう」

私は二人の侍女を置いてスワジクの部屋へと足を踏み入れた。

スワジクは鏡台の前に座って一生懸命髪を梳いているところだった。

鏡に私が映つたのを見たのか、慌てたように此方を振り向いて朝の挨拶をする。

「今朝はどうしたんだい？」

「えと、自分のことは自分で出来るかなと」

「それは彼女達の仕事を奪うことになるんだよ。気持ちには分からないでもないけれど、それも王族の仕事の内だ」

「かもしれないませんが、あまり彼女達もボクと一緒にいたいと思つてないようですね」

「……」

「なら、一人のほうが気楽で良いのです」

困つたような顔をしてそう言い切るスワジク。

きつと昨日のアニスのことか尾を引いているのだろう。

だからといって無理やり侍女を引き入れるのも、スワジクの気持

ちを考えれば躊躇われる。

私は彼女に何も言えず、仕方無しに朝食の準備を手伝って一緒に食べることにした。

次の日も、やっぱり侍女たちは扉の前で待ちぼうけを食らわされている。

その次の日も同じことが繰り返され、ライラ達もそついう役割に変わったのだと割り切った様子。

「スワジク、ご機嫌はどうか？」

「ああ、フェイ兄様。別にいつもと変わりないですよ？　なべて世は事もなし、つてところですね」
「そつかい」

次の日もまた、私は彼女の様子を見に部屋へ通う。

「え？　今日はずっと外の景色を眺めていました。まあ、少し退屈ですけど、平和が一番ですよ」

錆び付いた様な愛想笑いしかしくなったスワジクを見ても、私には彼女にかけられる言葉が見つからず、ただそつかと頷くだけ。
予定していた家庭教師たちも全てキャンセルして、スワジクはただ一人あの寝室に閉じこもる。

誰とも会話もせず、少しも笑いもせず。

ほんの数日前までのあの賑やかさが、いかに貴重なものであったのか嫌でも思い知らされた。

私は、あのスワジクに何をしてやれるのだろうか？

どうすれば、私はあの笑顔を取り戻せるのだろうか？

過ぎ去った時間は、どうあがいても取り戻せないのだろうか……。

31話「よじろ、鳥の冠亭へ」

王都の北部、エリス通りの一角にある酒場。

駅馬車から吐き出される旅行者相手のその酒場で、元王宮政務館付き侍女である私は働いていた。

「ニーナ！ 3番の料理、上がったぞ」

「はいっ！ 今行きます！」

キッチンの奥から親父さんのだみ声が飛んでくる。

私は直ぐにカウンターへ向かい、置かれてある料理を手押しワゴンの上に載せ、窓際にある3番のテーブルへ向かう。

途中、食べ終わったテーブルの片付けをしていた女将さんから、次の指示が飛んできた。

「ニーナ！ あっちのテーブル早く片付けておくれよ」

「はい！ この帰りに行きます！」

「あいよ」

テーブルの間を器用にワゴンで抜け、3番テーブルに到着。

山と積みまれていた料理を手際よく並べて行き、忘れず一声掛けて行く。

これは王宮に躡けられた、侍女の心得みたいなもの。

体に染み付いてしまっていて、ついつい口に出してしまうのだ。

「はい、スパニラ海鮮丼大盛りです。今日の海老は新鮮ですから美味しいと思いますよ?」

「ありがとうございます、ニーナちゃん」

「こちらの方はランチのBセットですね。このお肉には、イチジクのジャムが合いますので、是非お試しください」

「へえ、そんな食べ方もあるんかー」

「ええ、西方から来られるお使者の方たちは、よく好んで食べていらっしやいましたよ」

世の中何が受けるか分からないもので、これがお客様にとっても評判が良い。

おかげで指名が多くなってチップも沢山貰えて、私的には大満足。ただ、忙しい時間帯になるとほぼ殺人的な仕事量になるんだけれども。

「ニーナちゃん、注文取りに来てくれよー」

「はーい! 今行くんでちょっとだけ待ってくださいいい」

もてもてなのは嬉しいけど、受け持ち以外のエリアからもご指名がくるのは勘弁してほしい。

そんなこんなの昼食時、20テーブルもある広いホールを、私は右へ左へと忙しなく動き回った。

「よお、お嬢ちゃん。おれっちの注文も聞いてくれよ」

「ひいやあっ」

新規のお客様の注文を受けに早足で向かっていたら、途中のテーブルの客が私のお尻をぺろんと撫で回す。

慌てて振り返ってみると、傭兵崩れっぽい人達が下卑た笑いで私の体を値踏みしているみたい。

震える足を必死に押さえながら、丁寧な対応を心がける。

「すみません、あちらのテーブルの注文をとりましたら直ぐにまいりますので、暫くお待ち頂けませんでしょうか？」

「なあにいつてんだよ。俺たち腹減ってたんだ。こっち先に聞けよ！」

「あの、順番です。すみません、直ぐに戻ってきますから」

「よお、この嬢ちゃんいいケツしてるぜ」

「ちょ、お客様、触らないでください」

「おいおい、そんな子供みたいな女触って喜んでんじゃねえよ」

「うるせー」

「ちょっと、いい加減放してください」

「いいじゃねえか、減るもんじゃなし」

「そっという問題じゃありませんからっ！」

腕をつかまれ逃げるに逃げられなくなった私は、この状況を見ているであろう彼の方へと助けを求める。

彼と目が合うと、投げやりっぽい表情でこっちに歩いてくるのが見えた。

「つてか走って来てよ、この自宅警備員！」

「あー、お客さん達、この店はそっいったとこじゃないんで。遊び

たきや、この先にある遊郭にでもいつてきなよ」

「ああ？　なんだ、この小僧は？」

「坊ちゃんはや、家に帰ってママのミルクでも飲んでな」

子供扱いされるの嫌ってるから、ああいった扱いは彼の前では禁句なのだけれど。

案の定、彼のこめかみの血管がひくひく動いている。

カウンターの途中でこつちを見てるマスターを振り返り、彼は暴れて良いかどうかの確認をした。

血の気だけは一人前。

そしてカウンターのの中のマスターが良い笑顔で、サムズアップした手を上向きから下向きへと変える。

「よう、お客さん。じゃあこうしよう。表に出て、俺に勝てたらこの食事の払いは全て俺持ち。負けたら、尻尾巻いて帰るってのはどうだ？」

「ぶはっ！　このチンマイのが俺たちの相手をするって？　ひいはははははっ」

「腹が擦れるう！　お子様が粹がった所で、微笑まし過ぎて笑うしかねえんだよ」

あ、どっかでブチンって音が聞こえたような。

彼を見たら、案の定切れて目が逆三角になっている。

うん、明日からもうちよつとご飯に小魚とか牛乳とか増やした方が良さそう。

「はっ、そのお子様相手にびびってんじゃねえのか？」

「くひひっ、ああいいぜ。受けてやるよ、小僧。だが、飯だけじゃ許さねえ。この嬢ちゃん、一晚借りるぞ」

「ああ、望むところだ」

「ひやはー、こりゃ燃えてきたぜ。飯と女が食い放題だよ」

「まったく、しょうがねえ奴だ。こんな子供相手に欲情してやがって」

「最近、体動かしてなかったから、丁度いいじゃねえか。飯がただつてのは惹かれるしな」

……なに勝手に私を景品に掛けているのかな？

静かなる怒りをぐっと腹の底に留めながら、傭兵崩れっぽい人達に連れられて外へと一緒に連れ出された。

景品が逃げないようにつてことなんだろうけど、荒事は嫌いなので勘弁してほしい。

「よし、この辺りなら十分な広さがある。さあ、やるつか」

「ああ、いいぜ」

店の裏側にある納屋横の空き地で、彼は腰に差していた木剣を取り出した。

敵は全部で3人。

その内の一人は私を捕まえていて動けないから、実質2対1。

ごろつき達は相変わらず彼を舐めきっており、彼もそんなごろつき達を見て内心笑っているんだろう。

「ふつ、せいぜい苦しませように一発で終わらせてやるよ」

ごろつきがそう言うが早いか、彼との間合いを一気に詰めて袈裟懸けに鞘付きの剣を振り下ろす。

当たれば骨の2、3本は折れそうな勢いの打撃だが、彼はそれを木剣ですりりと受け流し、返す刀でごろつきを打ち据えた。

鈍い音が聞こえて、ごろつきは脂汗をたらたらと垂れ流しながらその場に蹲る。

多分、鎖骨折れたんじゃないかな？

「野郎！」

仲間の人が蹲って動かないのを見て、もう一人の方が激情に任せて剣を振り回す。

今度の人とは2、3回打ち合ったかと思ったら、相手の喉に鋭い突きを入れた。

ごろつきの人はそのまま真後ろへもんどりうって倒れ、動かなくなる。

身じろぎするくらいの短い時間で2人を倒し、最後の一人に鋭いガンを飛ばす。

「まだやるのか？　ごろつき」

「くっ」

目の前で蹲る2人と、剣を片手に息も乱さず悠然と立つ彼を見比

べる最後のごろつき。

掛かっていくかと思っただら案外あっさりと観念したようで、手にした剣を腰に戻して「降参だ」と彼に告げた。

私は無事解放され、彼の元へと小走りに駆け寄る。

「よう、ニーナ、大丈夫か？」

爽やかな笑顔でこっちを見る彼へ、私は精一杯の笑顔と共にその腕の中へ飛び込む。

私の様子に安心したのか、彼は剣を剣帯に差し込んで私の頭をわしゃわしゃと撫で回す。

で、私はその気を緩めた彼の襟首にそっと手を回し、力の限り締め上げた。

「ぐううふううう」

「ちよつとポーマン！！なに勝手に私を賞品扱いしてんのよ！」

「死ぬ、死ぬ！息が出来ねえ」

「ああいう時は、まず私を助けるべきでしょう？　か弱いレディを守れないなんて、それじゃただの穀潰しだよ？　分かっているのかな、かな？」

ポーマンは私の手を襟から強引に引き剥がすと、涙目でこちらを睨み返して来た。

その視線に、私は全身で怒っていますと頬を力一杯膨らませて抗議する。

「どこがか弱いレディなんだか」

「な・に・か？」

「す、すいません」

呆然と私たちのやり取りを見ていたごろつき達を八つ当たり気味に睨むと、慌ててその場を立ち去っていく。

もう2度とここにくんなど心底思う。

ボーマンと私は、王宮を解雇されてからすぐこの酒場で働き出した。

冒険者ギルドを兼ねる酒場は、慢性的に人不足なのだ。

なんでかというのと、さつきみたいな荒事が怖くて辞めていく女の子が多いのである。

高給で住み込みの働き口なんて願っても無い話だから、私は2つ返事で了承しボーマンとの共同生活を始めた。

最初ボーマンは職が見つかったんなら俺は別のところに行くといっていたが、一生懸命頼み込んだら分かってくれたみたい。

なんだかんだ言っただけで優しい人なのだ、ボーマンは。

ま、その時のボーマン、妙に顔を紅くしていた理由だけは良くわかんなかったけど。

「あの、ニーナさん？ そろそろ襟首放してほしいんですが」

「あ、ごめん」

手を放したら、涙目のボーマンが私を睨んでくる。

ちよつと首が絞まっついていて、息苦しかったみたいだ。
ま、乙女の心を傷つけた代償だと思えば、安いものだと思う。

「やっぱりさ、俺の護衛つて要らないんじゃないかねえの？」

「何いつてるのよ、か弱い女の子をこんな荒くれ者が良く来る酒場に一人放置していく気？ それでも騎士を目指す人なのかな？」

「決めたの、お前じゃねえか」

「な・に・か、文句でもあるの？」

「……はあ、わーっつたよ、もう」

がしがしと頭をかき回しながら、店へと歩いてゆくボーマン。

彼の背中を見送った後、ため息を一つついて私も仕事にもどる。

騒がしいけど、充実した日々。

王宮を首になったのは悲しかったけど、今はちゃんとしたお仕事にも就けたし、ボーマンも一緒だから不安など無い。

私はこんな毎日がこれからも続くものだと、このときは無邪気にそう思っていた。

32話「はい、救急車が通りまーす」

鳥の冠亭の裏口で買い出し用の荷馬車の手入れをしていると、店の大将が顔を出してきよるきよると辺りを見回しているのが見えた。あれだけガタイの良い人が周囲を伺っている絵というのも、なんだか物騒な気がする。

知らない人が見たら、どこの兵士が忍んで来たのかと思うだろう。暫く様子を見ていたが一向に中に戻らないので、俺はもそもそと馬車の下から這い出ると大将に向かって声を掛けた。

「どうしたんですか、大将？」

「おお、ボーマン。そこに居たのか。急で悪いんだが、町外れのヘインズさんとこ行ってトマトを1箱貰ってきて欲しいんだ。頼めるか？」

「ええ、いいですよ。丁度荷馬車の整備も終わったんで、ひとつ走りいってきます」

「おう、頼むわ。代金はいつもどおりでお願いしますと伝えておいてくれ」

それだけいうと大将は、用は終わったとばかりにとつと中に引っ込んだ。

必要の無い話をだらだらとされるよりは、ずっとさっぱりしていて俺としては付き合いやすい人である。

逆に二ーナのような反応はわりと苦手かもしれない。

あいつ、声を掛けないとすぐ不機嫌になるし、質問されたから素直に答えたのに、答えが気に入らないのか直ぐに噛み付いてきて口論になる。

まったく女つて奴は訳がわかんねえ。

さて、そんな与太話は置いておいて、大将に言われた買い物に行かなきゃな。

俺は納屋の隣にある馬小屋から、いつものラバを1頭引っ張ってくる。

そいつを荷馬車に括りつけて、ヘインズさんの農場へ向かって出発した。

ヘインズさんの農場へ行く道はもう何度も通っているので、迷うことも無く到着できた。

母屋の前に置かれていたトマトを荷馬車に積み込み、その他にヘインズさんがこちらに売り込みたい野菜をいくつか受け取る。

大将が気に入れば、次回の注文のときに発注することになるようだ。

積み込みが終わると俺は愛想のいいヘインズさん夫妻にお礼を言っつて、そのまま西地区の鳥の冠亭へと向かう。

今からなら晩御飯の時間を少し過ぎたくらいには帰れそうだなと、馬車の上でぼんやり考えながら夕陽に照らされた地道に行く。

こんな平凡な毎日を送っているわけなんだが、騎士になるという夢は捨てた訳ではない。

ただ、ゴードイン王国での達成は難しくなった。

じゃあ近隣の国へ目を向ければいいじゃないかとも思わなくは無いが、実家がゴードイン王国の1地方を預かる領主である以上、他国に流れれば実家の立場が無い。

首になったからと家に泣きついていくのも自分のなけなしのプライドが許さないし、実際問題行き詰った感をひしひしと感じている。

今はまだニーナが自立するまでというその場しのぎの目的があるからいいが、それすらも無くなったら俺はただの役立たずだと思う

「くそー、あのクソワルスキーの奴、今度あつたらぶっ飛ばしてやる」

益体も無い事を一人呟きながら、ほんと将来どうしようかと真剣に悩みつつける俺だった。

ラバに引かれるままに馬車を走らせていると、程なく陽も落ち辺りが薄暗くなってくる。

俺は用意していたランタンと支柱を取り出し、馬車の荷台に固定し点火した。

ほんの数m先までだがなんとか道が見えるので、馬車の速度を落として事故を起こさないように気をつける。

もとかからこれくらいの時間になると分かっていたので、特段慌てることもない。

街に入れば家から漏れる光もあるし、道も石畳で舗装されているので遅れた分は挽回できるはず。

「ん？」

ようやく西地区に入って宿屋街辺りを走っていると、なにやら人だかりが出来ている。

なんだろうと思って馬車をゆっくり走らせていると、急に道端から人が飛び出してきた。

「うわぁお、と、止まれ！」

ラバと飛び出してきた人の両方に向かって叫びながら、たずなを目一杯引き、車輪止めを引き上げる。

慣性に押された馬車がそれでも前に進んだが、ラバも車輪止めも力一杯頑張ったお陰でなんとか飛び出してきた人を跳ねることもなく止まれた。

よかったと思っただけでほっとしたら、とたんに怒りが湧いてきて目の前の男を罵倒する。

「お前馬鹿か！ 馬車の前に飛び出すなんて死ぬ気か！？」

「む？ 貴様は確か……」

細身の爺さんが、俺のほうを睨むように凝視している。

だが俺のほうはそんな爺さんの視線よりも、彼の風体に度肝を抜かれていた。

全身血まみれなのだ。

さっきまで街角の一角で屯していた人ごみは、今度は俺と爺さんを半円に囲むようにして成り行きを見守っている。

俺は万ーのため、手探りで腰に差した木剣の柄を握った。

「丁度良い、貴様、こっちに来てワシを手伝え！」

「はあ？ 何寝ぼけたこといってんの。血まみれの不審人物に指図される云われはねえよ」

俺がそういって相手の言葉を完全否定すると、さも意外そうな顔

をしてこつちを見ている。

っていうか、ギャラリーの視線も妙に冷たく感じるのだが、気のせいだろうか……。

「元近衛の小僧は、よほど人助けが嫌いに見える。姫様もとんだ眼鏡違いをされたものだな、やれやれ」

「!?!」

頭を左右に振りながら、人ごみの中に入っていこうとする爺さん。姫様という単語に思考を囚われていた俺は一瞬呆然としていたが、自分でも分からない何かに突き動かされて、去っていこうとする爺さんの背中に向かって慌てて声を掛けた。

「待てよ！ 姫様ってなんだよ！ なんで」

「喧しい！ 姫様を泣かせたくなかったら、急いでワシを手伝わんか、ひよっこが！」

「なっ」

意味が分からない。

何故目の前の爺さんは俺が姫様に憧れていたことを知っているのか。

何故姫様が泣いてしまうのか。

分からない事ばかりだ。

なら、この爺さんの後についていけば何か分かるのだろう。

例え何かの罫だとしても、武器もあるからなんとかなる。

俺はそう結論付けて、血まみれの爺さんのあとを追った。

「先生！ 水を持ってきました。あと清潔な布も一緒に」
「すまぬな。水桶は患者の横において、布は汚れぬように持っていてくれ」
「はい」

患者？ 怪我人がいるのか？

前に行く爺さんが周りの人にいちいち指示を与えながら進んでいくのを見て、余計に分からなくなった。
人ごみを抜けたら、そこは血の海だった。

「な……」
「せ、先生、ようやく血が止まりました」
「そうか、では君と君、それにそのひよっこ、患者をなるべく揺すらんようにそこに広げた毛布の上に移すんじゃ」
「あ、ああ、わかった」

目の前に倒れている女性は、どう鼻肩目に見ても重傷である。
とても生きているとは思えないような有様だ。
指を指された男達がその女性に近づいて手と足を抱える。
俺は腰の辺りを持って、傷に響かないようにゆっくりと持ち上げた。

「よし、血を触ったものは、こっちの桶へ来い。綺麗に洗い落とすんじゃ」

「はい、先生」

「で、そのこのひよつことお前達は患者をあの馬車に乗せよ。で、お前達は人を引き摺ったような跡を違う方向へ作っておいてくれ」

「はい」

爺さんの指示に従順に従って動く街の人達。

ますます意味が分からなくなつて、なにやら偽装工作を始めた彼らを呆然と眺める俺。

そこへ爺さんの叱咤が飛ぶ。

「小僧！ 患者を死なせたいのか！ 早く運ばんかつ！」

「は、はいっ！」

場の雰囲気の流れされて素直に返事をしてしまったことを後悔しつつも、毛布の上の女性をそつと馬車の荷台へ乗せた。

知らない間に馬車の上には柔らかそうな寝床が設えてあり、邪魔なものは全部馬車から下ろされている。

一瞬迷つたが、人命には代えられないとトマトは諦めることにした。

大将の怒る顔が思い浮かんだが、これはしょうがないよな？

悩んでいると、さっきの爺さんが馬車の荷台に乗り込んできた。

「よし、小僧、ここから逆向きに走ってブロン地区のワシの屋敷へ行け」

「あんたの屋敷なんか知らねえよ」

「使えん小僧じゃな。ワシが指示を出すから、その通り走らせるん

じゃ。あとなるべく静かに早く走れ」

「なんだよ、そのムチャな要求は」

「姫様が泣くぞ？」

「それがどうして姫様が泣く話になるのかが分からねえ」

そういつて嘔み付くと、心底不思議そうな顔をしてこっちを見る爺さん。

微妙に憐れみが含まれているような気がするのは気のせいだろうか。

爺さんは座る位置を変えて、横になつてゐる女性の顔に掛かった血まみれの髪を分けてみせる。

なんとなく見たことがあるような顔なんだが、どうも思い出せねえ。

そんな俺を、さらに深い憐れみをもってみる爺さん。
くそつ、なんか腹が立つ。

「この娘は姫様付きの侍女じゃ。お前も一度あつとるじゃろつが？」

「っ！！　そういわれてみれば似ているような……」

「時間が惜しい。早く行け！」

無言で頷いて馬車を出そうとしたときに、一人の男が馬車に取り付く。

「先生！　この後俺らどうしたらいいですか？」

「早く家に帰って、この事には口を噤んでおけ。でなければ厄介ごととに巻き込まれるぞ。衛士たちがくるかも知れぬが、ワシらのこと

は一切口外してはならん」

「は、はい、先生！ それは絶対にしゃべりません」

「ヨシ婆さんには暫く会いにいけんから、薬が欲しければ使いのものを屋敷へ遣すように言っておいてくれ。あと急患も一緒じゃ」

「はい。分かりました」

「後はよろしく頼んだぞ」

「はい、先生！ 任せておいてください」

爺さんが短く俺に行けと指示を出す。

それに素直にしたがって、言われるとおりに馬車を走らせた。

程なくして街を抜け、木々が鬱蒼と生い茂るブロン地区へと入る。いくつか道を曲がりより深い森の中へと入っていくと、目の前に急に開けた土地が現れ、その先に1軒の古ぼけた館が見えた。

「あれがワシの屋敷じゃ。門扉は既に開けてあるから、かまわず突っ走れ」

その指示に舌打ちしつつ、俺は馬車を可能な限り静かで早く走らせた。

爺さんのいうとおり大きな鉄格子の門扉は、俺たちを歓迎するかのように大きくハの字に開かれていた。

それを横目に見つつ、敷地に入って玄関前のロータリーに馬車を横付けする。

すると玄関が勢い良く開け放たれ、3人の侍女が現れて馬車へと駆け寄ってきた。

「この患者を手術室へ」

「はい、ドクター」

「それと、ジュークは如何しておるか？」

「はい、ドクターからの使いが来てから、直ぐに術式の準備に入っております」

俺には意味の分からない会話を繰り返しながらも、横たわっている女性を馬車から降ろし担架に乗せて運んでゆく。

正直訳が分からず、一人取り残された感があるのは仕方がないと思うんだ。

「意味がわかんねえよ！ 一体何がどうしてこうなってるんだよ、爺さん！」

「馬鹿が幾ら考えても時間の無駄じゃ。それよりも早く行け、状態が悪化しておる」

「はっ、承知いたしました、ドクター」

「爺！ ちゃんと後で説明しろよなっ」

「気が向いたらしてやるう。今日のところはもう帰って良いぞ。あと、この場所と侍女のことは誰にも漏らす出来ないぞ？ 姫様を守りたければな？」

捨てゼリフの様な一言を残して、目の前で玄關の扉が閉ざされる。徹頭徹尾、状況に振り回された拳句、意味も分からぬまま帰って良いとか、ふざけるなど憤るものの当たる先がない。

仕方ないので馬車に戻ると荷台に見慣れぬ荷物が置いてある。

どうやら街の人達が侍女さんの荷物の一部を持ってきて載せてくれていたみたいだ。

振り返って渡しに行こうかと思ったが、なんかムカつくのでやめておく。

どうやら着替えだけみたいだから、無くても問題ないだろう。

こんな大きなお屋敷なんだしな。

ああ、レベルの低い事してるのは重々承知だが、これくらいの意趣返しくらい許してくれよ。

そう自分自身に言い聞かせながら、夜道を鳥の冠亭に向けて帰っていく俺だった。

33話「ガーゴイルって生まれて初めて見ました」

カーテンの隙間から差す朝陽がもろに俺の顔に当たって、折角気持ちよく寝ていたのに目が覚めてしまった。

頭をぼりぼりと掻きながら自分を見下ろすと、何故かシャツとパンツ一丁である。

「あれ？　なんで俺パジャマ着ないで寝たんだろ……」

まだ寝ぼけている頭をフル稼働させながら、昨日のことを思い出すようにも失敗。

どうでもいいかと思って、クローゼットから替えの服を取り出して着替える。

ああ、結局昨日は風呂にも入ってなかったっけ。

どーっすっかなあ、1日くらい大丈夫かな……。

寝ぼけ眼を擦りながら1階に下り、従業員用の入り口から厨房へと入った。

大将と女将さんは既にテーブルについて朝食を始めており、二ナがキッチンの奥で2人分の食事の用意をしている。

「おはようございます」

「ああ、おはよう、ボーマン」

「あら、今日は随分とお寝坊さんだねえ」

「あ、あはは。なんか疲れてたみたいで」

大将たちに挨拶をしてから、キッチンへ向かう。
自分の分の食事は自分で用意して片付ける。

これが鳥の冠亭従業員の決まりなんだが、ニーナはいつも俺の分の朝食だけ用意してくれる。

決まりだから気にするなといつてもニーナは聞かず、女将さんや大将も特に彼女をとがめたりはしない。

むしろ何やらニーナをけし掛けているような気もするのだが、そんなに俺を弄って楽しいのかなと思う。

「おはよう、ニーナ」

「……」

「なんだよ、返事くらいしろよ」

「ふんだっ」

「何怒ってるの?」

「つく!」

機嫌の悪そうなニーナに理由を尋ねたら、凄い勢いで睨まれた。
ん? そういえば昨日の晩も何か喧嘩したような記憶が……。
うむ、まだ頭が寝ぼけていて上手く思いません。

「まだ昨日のこと、納得した訳じゃないんだよ?」

「んー? 昨日のことって侍女の人助けたこと?」

「それは別にいいんだけど、人助けだから。駄目なのはその後のこと」

「その後って何か言ってたっけ、俺」

「……こいつうう」

ジト目でこつちを睨んでくるニーナをよそに、なんの話だったかと頭をひねる。

暫く頭をひねってようやく解答に行き着いた。

「ああ、姫様の周りでは何かが起こってるかもしれないから、あの爺さんのとこ行って問い詰めてくるっていう話か？」

「そうだよ！ それ！」

「なんでそれを怒るんだ？ 侍女さんは助けても怒らないのに、姫様を助けたいと思うのは駄目なのか？」

「怪我してる人を助けるのはいいけど、何も王宮のややこしい話にポーマンが首を突っ込む筋合いはないと思うの。大体、私たちが王宮首になったのも、元はといえば……」

「おい、それ以上いったらぶっ飛ばすぞ？」

「あっ……、ご、ごめんなさい」

ニーナの暴走のお陰で頭がすつきりしすぎるくらいにすつきりした。

キッチンの中で調理匙を持ったままシュンと小さくなっているニーナ。

俺の視線に怯えるニーナの姿を見て多少罪悪感があったけれども、そこだけは絶対に譲れない。

「俺達が首になったのは、姫様のせいじゃねえよ。姫様の周りにいる馬鹿共のせいだっつってんだろっが」

「……でも」

「いいか、今後一言でも姫様の悪口いったら絶交だからな。わかっ

「たか！」

「……ボーマンの……」

「なんだよ、言いたい事があるならはつきり言えよ！」

「…ボーマンの、馬鹿あああああああ！！」

「うわあちいいいい！」

ニーナは俺を罵倒すると同時にお椀に入れていたスープをブン投げて来た。

あんまりの突然の行動に、俺はなすすべも無く頭から湯気のたったスープを被つてしまい、熱さのあまりのた打ち回る。

当のニーナといえ、後ろも見ずにそのまま走って逃げてしまふし、大将達は馬鹿笑いしてこつちを笑つてるし、涙が出そうだ。

俺が熱さに悶えていると、女将が笑いながらキッチンにあった瓶から汲んだ水を俺の頭に容赦なくぶつ掛けてくれる。

熱くはなくなっただけ、今度は全身水浸しで散々だ。

「なんなんだよ、まったく」

「ま、水も滴る良い男つてことなんじゃないのかい？」

「……それ、どういう意味ですか、女将さん」

「さあてねえ、それは私の口からは言えないよ。ちゃんと本人に確かめるんだねえ」

「……もういいです。着替えてから、出かけてきますから」

「そう、行くんだ？ 帰りは？」

「夕方くらいまでには帰ってくるつもりです」

「あいよ。気をつけてね。あんまりヤバイ事に首を突っ込むと、ニーナちゃんが泣くんだからね」

「あいつは関係ないでしょう！ からかわないてくださいよ」

俺をみてくすくす笑う女将さんを置いて、とつと自分の部屋に戻って着替えることにする。

まったくこれだから女つてやつは分からねえぜ。

うつそうと生い茂る森の中にあるせいで、爺さんの館は常に薄暗い。

まるで伝説の死霊使いか、魔女の館のようだ。

俺が玄関の前まで馬で乗りつけると、中からまるで最初から予定されていたかのように侍女が2人出てくる。

馬から下りた俺は近寄ってくる赤い髪の侍女に馬を預けて、もう片方の薄紫の髪の侍女に爺さんの元へ案内をしてもらえようお願いした。

「はい、畏まりました。ひよっこ様」

「ひよっこ、ちげえよ！ ボーマン！ ボーマン・マクレイニーだからっ！」

「ああ、これは失礼いたしました。主様がひよっこと呼ばれていましたので、てつきりそうという名前かと」

コロコロと笑う侍女に悪意は無かったと信じたい。

涙目になった俺をみて頬を赤らめている侍女の反応はさておき、俺は爺さんのところへ早く連れて行ってもらうよう再度お願いをする。

笑顔で頷いた彼女を先導に、俺はこのお化け屋敷の中へと足を踏み入れた。

この少しあと、俺は死ぬほどこの館に入ったことを後悔する羽目になるのだが、この時の俺はそんな未来のことなど何一つ知るよしもなかった。

薄暗い森の中にある館の中は日中といえど当然のように薄暗く、シャンデリアや壁の燭台に灯された光で照らさないと先が十分に見えるほどである。

ランタンを手にした侍女がある部屋の前で止まり扉を開け、俺に先に中に入るよう促す。

どうやらここは応接室のようで、俺は部屋の中央においてあるソファに遠慮なく腰を掛けた。

暫くするところどころと何かを移動させるような音がしたかと思うと、案内してくれた侍女さんより大人びた感じの侍女が部屋に入ってくる。

「どうやらお茶とお菓子を持ってきてくれたみたいだ。

さっきの侍女さんも結構可愛くて良いスタイルをしていたが、目の前の侍女さんもなかなか綺麗な美人さんである。

「ま、俺も一応男だから、やっぱり綺麗な女の人にはドキドキするわけなのだが。」

「ど、ども」

「どうぞ、召し上がってくださいね、うふふ」

「あ、有難うございます」

意味深な笑みを浮かべて去ってゆく侍女。

何やらお尻の辺りがむず痒くなってしまいそんな感覚に戸惑いながらも、出されたお茶を飲もうと手を伸ばす。

するとまた扉が開いて、お茶を持って現われた最初の侍女さん。俺が飲んでいるお茶と茶菓子を見て、目を丸くしていた。

「あー！ なんで？」

「あ、え？ なんてって何が？ 俺、なんか悪いことした？」

「ノインがお茶出すって言ったのにー！」

頬を膨らませて怒り出す侍女さん。

どうやら名前はノインさんというらしい。

そのノインの後ろから数人の侍女たちがこっちをみてくすくす笑っているのが見えた。

ノインもそれに気がついたらしく、勢い良く振り返って噛み付いていく。

「誰？ ノイン折角頑張ってお茶用意したのに！」

「くすくすくす、ノインばかり良い子ちゃんするの、よくないと
思いマース」

「ツエーン、五月蠅い！ ノイン本気で怒ってるんだからあー！」

「あらあら、ごめんなさいねえ。持って行ったの、私なんだ」

「うー、フィーア姉さん、ずるい！」

「早いもの勝ちよー。こんな面白いこと、指を啜えてみてるなんて
出来ないもの」

俺は喧嘩を始めた侍女達を、止めるでもなく呆然とみているしか

出来ない。

というか、あまりに意表をついた展開にどう反応していいかわからないといった方がいいか。

そうやって固まっていると、後ろから誰かがソファ越しに俺を抱きしめた人がいる。

「っ!」

「ふふふ、駄あ目。大人しくしててね、ひよこ君?」

「うひゃああ」

気配にも気付かず間抜けにも背後を取られた上、抱きしめられただけでも屈辱的な事なのに、あまつさえその女は俺の耳を扇情的に舐め上げる。

柄にも無い俺の悲鳴を聞きつけた目の前の侍女の一団が、一斉に目を三角にして振り返った。

「あー! アインス姉さん! 抜け駆けズルイ!」

「ノインは人の事いえないと思う」

「そうそう、ノインは黙ってないよね」

「うん、フィーア姉さんも駄目だと思っんだ、エルフは」

「うー、私も抱きつく!」

「あ、アハト! ずるいつ! じゃあ私も抱きつく!」

色とりどりの髪の色や体つきをした侍女達が一斉に俺に抱きつきに来て、なんていうかも匂いとか感触とかでエライことになっていたりする。

そんな俺にお構い無しに、あちこち撫で回したりキスしてきたりする侍女さん達。

なんだろう、俺、モテ期でも急に来たのか？

「ひよこ君こっち向いてえ」

「ふあぶつ。いや、吸い付くなつて。てかひよこ、ちげえよ！」

「やーの、こっち見てくださいの」

「凄ーい。この子の胸板結構厚いよー」

「これが人間の感触ですかあ。最高ですう」

「ねえねえ、服脱がして中身見てみようよ！」

「あ、面白そう！」

「「「よし、剥いちやえっ！」「」」

「ちよつ、やめ！ 駄目だつて。ズボン脱がすなあ！ キスしてくるなあ」

もう支離滅裂の嬉し恥ずかし大冒険つてな感じの状況に、流されそうになりながらも必死に抵抗する俺。

揉みくちやにされて今にも天国に行きそうになった瞬間、それはやってきた。

忘れるべきでは無かつたんだ、ここが何処であるのかということ

「なんだ、ひよっこ、来ていたのか」

「あ、主様」

「ふあへ？ あるじ、様？」

匂いとか感触とかでピンク色に霞みかけた意識を必死に正常運転に戻しながら、しわがれた声のほうを向いてみる。

と、そこに立っているのは昨晚であったあの怪老人。

この応接室の状況をゆっくりと見回して状況に納得したのか、ひとつ頷くと俺に向かって問いかけてきた。

「ひよっこはガーゴイル相手でも欲情できるのか。なるほど、若さだな」

「へ？ ガーゴイル？ ガーゴイルって、あの動く石像とかいう、アレか？」

「そうだ。彼女らはワシが作ったガーゴイルだよ、ひよっこ」

「見事に鼻の下伸ばしてたよね。かつこ悪い奴」

「うぐっ」

そういつて爺さんとの会話に割り込んできたメタボ体形の糸目男。指摘されたことは確かに事実であっただけに、反論したくても出来ずに唸るしか出来なかった。

っていつか今の痴態を見られていたって、俺、泣いて帰っていいんじゃないのかと。

死ぬほどの屈辱だ。

「気にするな、ひよっこ。うちのガーゴイル共が迷惑をかけたみたいで済まなかったな」

「キャハハ、案外楽しんでたからお礼を言ってもらえるかもよ？」

「ジューク、そうあからさまに傷に塩を塗りこむものではないぞ。くっくく」

どう返して良いか分からないまま、俺は一人脱がされかけた服をせっせと直す。

下唇を噛むことで羞恥心をなんとか堪える。

俺の屈辱的な姿を見て侍女達はまた何やら萌えているようだが、それは無視するのが一番だ。

ああ、早くこの屋敷から逃げ出したい。

こんな屋敷来るんじゃない。

死ぬほどの後悔を何とか胸のうちに押し込んで、俺は爺さんに向き直る。

まだ顔が赤いのは、この際無視だ。

「き、昨日のこと、説明してもらえんだろっな？」

「キャハッ、今更取り繕ってもカツコワルイのはどうにもならないヨ？」

「う、うるせー！ 教えるのか、教えないのか、どっちなんだよ！ 姫様に何か関係してるんだろっ？」

ジュークの冷やかに逆切れしながらも、俺はその横に立つ爺さんに向かって意味も無く怒鳴り散らす。

爺さんはそんな俺の反応に不快感を示すでもなく、じつと俺を見つめている。

まさかこの爺さん、ホモって事はねえよな……。

「教えても良いが、お前は姫様をどうしたい？」

「姫様がもし何か困ったことに巻き込まれているんなら、俺は少しでもあの人の力になりたい」

「蛮行姫だぞ？ 噂くらい聞いたことあるんだろっに」
「そんな王宮内とか王都でしか通用しない噂になんか興味はねえよ」
「確かに。王女がどんな人物であろうと、概ね王都外の間人には
実感はないか」

アゴに手をやって暫く悩むようなそぶりを見せる爺さん。
何やら一人でぶつぶつと呟いているようだが、距離があるので何をしゃべっているのかはよく聞こえない。

そして徐にポーズを崩すとこちらへ歩み寄ってきて、低い声で脅かすような感じに囁きかけてきた。

「お前が命を掛けてあの子の力になるといつのなら、あの子の周りで何が起こっているか教えてやろう」

「ああ、望むところだ！」

「よく考える。こちら側に踏み込むということは、お前は王宮という檻からは逃れられなくなる。それがお前の周囲の人間を不幸にする可能性だつてあるのだぞ？」

「……なら、その不幸ごと、俺は皆を守って見せる！」

「……言うは易しだな。が、貴様の覚悟受け取ろう」

そういつて、爺さん、ドクターゲェロは俺を書斎に通してくれて、色々と言ってくれた。

スワジク姫のこと、宮廷で起こっていること、そして彼女の死を望む者達が王都に潜んでいるということ。

不謹慎だが俺はわくわくしていた。

このシチュエーションは、俺が憧れていた騎士というモノのにぴたりだったから。

あの銀色の儂げな天使を俺がこの手で守ってやれるんだという事に、俺は何よりも興奮していたのだ。

34話「メイド騎士、爆誕！」

また朝が来た。

僕はいつもの時間に、いつものように起きて、いつも通りの身支度を始める。

今までは黙っていてもミーシャやアニス達が全てをやってくれていたが、今はその二人はここには居ない。

ライラとスヴィータは、多分扉の外で僕の朝食が終わるのをじっと待っているのだろう。

部屋の中には既に食事を載せたワゴンがぼつんと置かれ、汗をかいた水差しが透明感のある音を鳴らす。

いつもなら聞こえてくる笑い声やメイド達の掛け合いはなく、ただ静かに灰色の時間が過ぎてゆくだけ。

髪を梳き終わると顔の手入れをしなければいけないのだが、最近 は面倒くさくてせいぜいが乳液をつけるくらいしかしていない。

化粧なんてする気も起きないし、する意味も無いからこれでいい。暫くしてフェイ兄が静かに部屋に入ってくる。

これも恒例行事となっているので、驚くこともない。

「やあ、おはよう、スワジク」

「おはようございます、フェイ兄様」

「今日は気分はどうか？」

「そうですね、いつも通りだと思います」

「……そうか」

いつものように愛想笑いを浮かべて、僕はフェイ兄の気遣いをスルーする。

分かってはいるのだが、今はその優しさが鬱陶しいのだ。
僕のごとは放っておいて欲しいといっても、フェイ兄はしつこく毎日やってくる。

何度怒っても、何度泣いてお願いしても、フェイ兄はまるでそれが自分の義務であるかのように、毎朝毎晩やってくるのだ。

「昨日市場に行ってきた、美味しそうなパジイがあったから買ってきたんだ。スワジク、これ美味しいって言ってただろ？ これなら食べれるんじゃないかと思うんだが、どうだろう？」

「有難うございます。いつもすいません」

「気にしないでくれ。私がやりたくてやっていることだ。君は謝らなくていい」

「はい、すいません」

感情の無い僕の返事に、フェイ兄は苦笑していた。

いつものようにフェイ兄は朝食を用意してくれ、僕は黙ってそれに口をつける。

それも3口か4口ほど口に入れたら、胸がむかついて来て吐きそうになった。

最近はずっとこう。

お陰で以前でも十分にほっそりしていた体が、今ではあばら骨が浮き出てみつともないくらいになってしまっている。

急に立ち上がったりとすると、酷い時は立ちくらみで倒れそうになることもあった。

栄養が足りていないのは十二分に承知しているが、食べ物喉を通らないのだから仕方が無いと思う。

料理長やフェイ兄達がいろいろと工夫をしてくれているのも知っているが、一向に状況が改善する兆しはない。

いや、改善する気が僕には無いのだ。

何で僕は生きているのか？

どうして僕は生かされているのか？

これから僕はどうやって生きていけば良いのだろうか？

ミーシャは苦しんで死んだのだろうか、それとも苦しまずに済んだのだろうか？

ふとした拍子に聞こえてくる地下からの怨嗟の声。

なんで死んでいないんですか？

いつ死んでくれるんですか？

そんな呪詛が湿った感触と共に耳にずりりと入ってくる。

(このまま僕が餓死したら、皆幸せになれるのかな？)

ミーシャの笑顔が、アニスの拗ねた顔が、スウィータの呆れた顔に、オドオドと皆を見比べるライラの顔が浮かんでは消えた。

じわりと目頭が熱くなり、僕は声も無く涙を落とす。

ぼつかりと開いた胸の穴がギシリギシリと音を立て、僕の心を壊してゆく。

こんな思いをするくらいなら早く楽になりたい。

外の人は親友のレイチエルを殺してしまった後、ずっとこんな気持ちで生きていたのだろうか？

だから遺書なんかを用意して、殺される準備をしていたのだろうか？

ミーシャとは親友というほど深く長く付き合っていたわけではなけれども、それでもこんなに辛く苦しい毎日なのだ。

もし僕の想像通りだとしたら、外の人の気持ち、今ならなんとなく理解できる気がした。

ふと周りを見回してみるといつの間にか朝食は全て下げられており、目の前にはカットされたいくつかのフルーツと絞りたてのジュースが置かれている。

フェイ兄の思いやりに頭が自然と下がるのだが、それでも目の前の食べ物に手をつける気にはなれない。

それらを用意してくれた当の本人も既に部屋からは消えており、またいつものように1人きりの1日が始まる。

部屋の片隅にうず高く積み上げられた本の1冊を手にとる。

いつもの窓際、変わらず置かれている椅子に座り、手にした本を目の前の机の上で広げてみた。

もつともそれは単なる形だけの行為で、本を読むわけでもなく窓の外を見るときもなしに眺め続ける。

人の流れ、雲の流れ、陽の指し加減に影の伸び具合。

それすらも意識をしていないから、記憶の片隅にすら残りはいない。

いつもの僕の灰色の時間はこうやって過ぎていくのだ。

僕は、いつこの灰色の世界を終わらせられるのだろうか。

どうせ僕はこの世界にとって異物でしかないのだから、いつ終わっていいんじゃないのだろうか？

こっちで死んだら、僕の魂は元の世界に戻るのだろうか？

もう、この世界で生きているのが辛いよ。

誰か、誰か、僕を助けて……。

僕を……して。

鳥の冠亭、ポーマン・マクレイニーの私室。

俺は、ミーシャさんの荷物をベッドの上にぶちまけて、何か使えるものは無いか探していた。

ドクター・グエロの話では、姫様は今精神的に追い詰められている状況にあるそうだ。

ミーシャさんが死んだと思っっているので、自責の念に駆られ拒食症になっているらしい。

その他にも色々と思い悩む事柄もあり、鬱症状もでていっていると聞いていた。

姫様の現状について理解できたとは思わないが、のっぴきならぬ精神状態にあることだけは分かる。

一番の大きな要因であるのは、やはりミーシャさんが殺されたと思っ込んでいることだろう。

ならミーシャさんが生きてるっていうこと知らせることが出来れば、彼女の状況は少しは改善されるのではないか？

なんとかして彼女に伝えられないだろうか？

それも、王宮の人間や刺客たちに気付かれない方法で、だ。

幸いにして彼女の手荷物の一部は俺が預かっている。

この中からミーシャさんだと一発で分かるようなものがあれば、彼女が生きているという証になる。

とは言うものの、小物をベッドの上に並べて眺めてみてもどれもこれもあまりぱっとしない。

ドクター・グエロに頼んで持つていつて貰えばいいんじゃないかと思っしたが、ドクター曰く持ち物チェックが登城時に行われるらしい。

診察以外に不要なものを持つて入るのは難しいそうだ。

ならドクターの口から説明してはどうかとも提案したら、誰が聞いているかも分からないのに迂闊な発言は出来ないとのこと。

なので、やはり城の外から何らかの方法で姫様と直接連絡を取るしかないのだが……。

「なんか良い方法ないかなあ。魔法で声が直接届けられたら良いのに」

そういつてベッドの上にごろんと仰向けになる。

丁度頭の位置にミーシャさんの布鞆があつて、良い塩梅の枕となつた。

フカフカしてて気持ち良いな……。

「つて、まだ中に何か入ってるじゃねえか！ 何が一体入ってるんだ？」

慌てて起き上がり、鞆を手に取ってみる。

良く見てみると取り出し口がもう一つあつて、どうやらそこに服が数枚入れてあつたようだ。

それがクツション代わりになつたので、ふかふかしていたのか。

俺は少し躊躇つたが、鞆の中に手を突っ込んでその服を取り出してみる。

中に入っていたのは、薄い生地シャツと侍女用のエプロンドレス、白いエプロンと袋に入った小さく折りたたまれた白い布。

多分ハンカチだろうか？

そう思つて袋の中の布を取り出してみると、やはり小さい布着れだ。

ただ、なにやらハンカチとは赴きが違う気がする。

恐る恐るだが、両手で布を持って大きく広げてみた。

「おおっ、これってもしかしてパンツってやつじゃねえのか？」

下穿き、下着、パンツ。

色々と言いはあるのだろうが、それはまさしく女性が下半身を隠すために身に着けるものである。

思わず辺りをキョロキョロと見回してみたら、再度パンツに視線を落とす。

こ、これはあれだ、その社会勉強というか、後学のためというか、人類の発展には必要不可欠な調査なんだよ、きつと。

「へえ、ボーマンにそんな趣味があるなんて知らなかった」

「ひいひいひい！」

「鼻息荒くして何見ているのかと思ったら、人の荷物漁って下着なんか探していたんだ」

「ちちちちち、違いますですよ、ニーナさん？」

「その割には鼻の下がびろろんと伸びていたみたいだけれど？」

人間慌てていると碌なことをしない。

今の俺がまさにそれだ。

鼻の下が伸びているといわれ、慌てて手を持っていつて確認したまでは良いのだが、たまたま持っていたものが悪かった。

人の下着を鼻の下に押し付けて、顔を真っ赤にしている変態の出来上がりだ。

「……………最低」

絶対零度の視線と言葉を浴びて初めて、俺は俺の仕出かした最大級の失敗に気がついたのだ。

慌てて鼻の下に当てた下着を放り出して、ニーナに言い訳しようと近寄ろうとする。

だがニーナは俺が近寄った分だけ遠ざかる。

くそう、なんだろう、自尊心とかプライドとか色んな物がズタボロになっていく。

「ニーナ、違うんだ」

「ボーマンがそんな人だったなんて、私知らなかったよ」

「いや、だから違うんだって」

「女の人なら誰のでも良いんだ？」

「ば、ち、違うって」

「へえ、じゃあ、ミーシャさんのだったから、匂いを嗅いだの？」

「違うって。これは事故なんだよ！ たまたま何だろうって広げたのがパンツだっただけでだな！」

「……」

相変わらず冷たい視線を送ってくるニーナに、その後小一時間ほど誤解を解くための釈明するのに時間を使ってしまったのだが長くなるので省略させてもらう。

しかし血涙を流し魂を削った甲斐があったのか、姫様と直接連絡をとる意外な手段をニーナが提案してきた。

提案してくれたのはいいのだが、それを実現するには多くの問題、主に俺の男としての尊厳が失われそうに思える。

とは言うものの俺にはその提案を拒否するだけの気力も根性も無

く、ニーナの言うがままになるしかなかった。

変態という汚名を雪ぐには、さらなる屈辱に耐えなければならなかったのである。

世の中はこんなはずじゃ無かったという事で一杯だと、改めて気付かされた昼下がりであった。

曇天の空を、薄暗い部屋の中から見上げている。

一面の鼠色の空ではあるけれども、それでも同じ形の雲はないのだ。

昼食、といっても3口くらいしか喉を通らなかつたけど、を済ました僕は、午前に引き続いて、窓際に座ってぼんやりと時間が過ぎてゆくのを感じている。

あれから何日経って、今日という時間がどれくらい過ぎたのかも、今の僕には分からない。

いつものように、いつもの如く、時間は流れてゆくだけ。

そして僕はいつか身も心も朽ちていくのだろう。

ふと視界の端に何かが動いているのが見える。

何の気なしに視線を移すと、どこかの集合住宅の家の屋根の上に人が数人上がって揉み合っているのが見えた。

屋根の上で喧嘩しているのだろうか？

それにしても、人だかりの中心には野球の応援団旗くらいの大きさの旗がはためいていた。

「あ、あの紋章は……」

風に靡く団旗の紋章、ミーシャが国内貴族について教えてくれた中に確かあったはず。

記憶の奥底に沈みこんでいる情報を無理やり掘り起こして、あそここの屋根にたなびいている旗がどのものかを思い出そうとする。旗は相変わらず数人の人に揉みくちやにされて大きく揺れて、今にも屋根から落っこちそう。

でもなんでだろう、僕はあの旗から視線を逸らせることが出来ない。

いつもなら窓の外で何が起こっても、欠片も僕の興味を惹くことは無かったのに。

喉がヒリつく。

口の中が乾いているようだ。

目は逸らさぬままに、僕はテーブルの上にあった冷めた紅茶を口に含む。

その時、旗が大きくよろめいたかと思うと屋根から落ちそうになる。

「あつ……」

思わず声を上げてしまった自分自身にびっくりしたし、それ以上に自分が何かに興味を持っていることが信じられなかった。

落ちないで欲しい。

頑張れ。

これといった意味も無く、倒れそうになる旗とそれを支える人を応援している自分がある。

次の瞬間もう倒れてしまうと思った旗が一気に力をぶり返し、取り囲んでいる男たちを振り払い、堂々と屋根の上に旗を突き立てた。風にたなびく旗の下、濃紺のエプロンドレスと真っ白な前掛けを付けた金髪ショートカットのメイドが立っている。

あのメイド服は、僕付きの侍女にしか着用を許されていないものはず。

アニスは赤毛、スウィータは金髪のツインテール、ライラもショートカットだけど、水色の髪をしている。

金髪のショートは、ミーシャだけだ。

僕は手に持っていたカップをテーブルにおいて、目の前の窓を大きく開け放つ。

ここからあの屋根まではとてもじゃないがお互いの声が届くような距離にはない。

僕は屋根の上に仁王立ちしているメイドさんを凝視する。

あれは本当にミーシャなのだろうか。

ミーシャが生きていてくれたのだろうか？

そして僕の瞳は、屋根の上に立つメイドさんにピントがぴたりと合った。

パーマをかけた様な金髪は、ミーシャのそれとは似つきもせず。しっかりと着込んだ濃紺のエプロンドレスが風に靡く。

自身も自分の格好が恥ずかしいのか、頬を赤らめながらもむすつとした顔をしている。

そう、そこに居たのは、いつぞやの騎士見習いのボーマン・マクレイニーその人であった。

「ぶーーーーーっ！」

口の中に含んでいたお茶を一気に噴出してしまった。

待て！ それは無いだろう？

あまりの衝撃に何から突っ込んで良いか分からず、僕のほうがつともない位にうるたえてしまっている。

「っていつか、ボーマン、君は何してんだよ……」

ああ、なんか真面目に悩んでいた自分が馬鹿みたいじゃないか。

相変わらず集合住宅の住人に揉みくちゃにされているボーマンを、冷めた目で見ている僕がいる。

もうね、突き落とされたら良いと思うんだ。

そう心で悪態をついたらその願いが天に通じたのか、ついにボーマンは集団に押し倒されてそのまま屋根裏部屋へと引きずり込まれていった。

「あ、あはは。本当に馬鹿だよな、ボーマンって」

肩の力が抜けて、胸を塞いでいた何かが綺麗さっぱりと消えてなくなっている。

何故ボーマンがあそこでメイド服を着て立っていたのかは、何となく理解できた。

多分、ミーシャは生きている。

それに何らかの形でボーマンが関与していて、僕にそれを知らせるためにあんな馬鹿なことを仕出かしていたに違いない。

真っ赤な顔をして周囲にわめき散らしていたボーマンの様子を出すと、自然と笑みが浮かんでしまう。

「ミーシャが無事だって分かっただけでも嬉しいよ。ありがとう、ボーマン。でもね、もう僕に近づいちゃ駄目だよ？ きっとまた皆に迷惑を掛けてしまっただろうから……」

聞こえるはずの無い忠告。

そうであったとしても、僕はそれを言わずには居られなかったんだ。

35話「メイド騎士まで何マイル？」

ミーシャ失踪から既に1週間が経とうとしている。

スワジクは食事に手をつけず、半分断食の様な毎日が続いていた。彼女が好んで食べていたものや果物、あるいは彼女が作っていたお菓子など、手を変え品を変えて出してみるが駄目なのだ。

日に日に痩せ細っていく彼女の頬を見て不憫に思っても、私にはそれをどうする事も出来ない。

むしろ色々世話を焼くことで、余計に彼女に精神的な負担を強いているような気がするのだ。

無論スワジクが何か言ったわけではない。

が、こちらの期待に答えようと食べ物や口にしては吐くという事を何度も繰り返していれば、いやでも自分達の間で起きている事が負担になっていくのだと気がかざるを得なかった。

だからといって食事を出さないわけには行かないし、彼女を悲しませたまま過ごさせて良いわけではない。

そんな終わりの無い葛藤に苛まれながら、私はいつものように朝御飯を乗せたワゴンをスウィータから受け取って部屋に入る。

「やあ、おはよう、スワジク」

「おはようございます、フェイ兄様」

「今日の気分はどうか？」

「ええ、いつもより良いと思います」

いつもと同じ掛け声をすると、ここ数日とは少し違った反応が返ってきた。

私は不意を付かれたせいで、窓際に座ってこちらに微笑みかけて

いる少女を呆然と見返すことしか出来ない。

スワジクは固まってる私を見て、笑いながら立ち上がってこちらへと歩いてくる。

少し足元が覚束ないようだが、それでもしつかりと自分で行動しているのだ。

この1週間、誰が何を言ってもオウム返しの人形のような彼女が、今久しぶりに自分の気持ちが籠った言葉で返事をしてくれた。私はその事実になんか目頭が熱くなる。

「そ、そうかい。それは良かった。今日は何を食べたい？」

「えっと、あんまりまだ食べれそうには無いですけど、パンとミルク、それにサラダを少しいただきますね」

「分かった。直ぐに用意しよう」

そういつてワゴンの上に載っているミルクのピッチャーに伸ばした私の手を、スワジクがそつと掴みにきた。

ひんやりとしたその手の感触に、私は少し驚いて彼女に振り向く。スワジクはゆっくりと頭を振りながら、私の手を押し返す。

「フェイ兄様に甘えるのも、今日までですよ。食事の準備くらいは自分で出来ますから」

「あ、いや、しかし」

「ワゴンをもう少しテーブルの傍に置いてもらえれば、あとは自分で食べたいものを選んで取りますから。フェイ兄様も自分の好きなものを選んで食べてくださいね」

「あ、ああ、分かった」

以前の様な明るい雰囲気、私は正直戸惑うしかなく彼女の言いなりに席に着いた。

鼻歌交じりに朝食の準備をしているスワジクを見て、その急変振りの原因について色々考えてみるが思い当たることは何も無い。

一体何が彼女をここまで変えたのか。

悪い方向に突き抜けてしまって、以前の『蛮行姫』に戻ろうとしているのだろうか？

それにしても表情はさっぱりとしていて、蛮行姫だった時の薄暗い影のようなものは感じない。

じゃあ、彼女を取り巻く環境なり事件が解決した？

それもありえない。

少なくとも昨日と今日で、スワジクの周囲において変わったことなど何一つ無い。

彼女自身の変化を除いては、だか。

自分で作ったパン粥を美味しそうに口に行っている彼女を見て、私は一人混乱していた。

私の執務室の中、私が急遽呼び寄せた面々が揃う。

レオにヴィヴィオ、センドリックにドクター・グエロだ。

集まった面々を見渡しながら、私は今朝のスワジクの様子を彼らに告げた。

そして、昨日彼女に変わったことが無かったか尋ねる。

「私の方では、特に何か外部に動きがあったという報告は受けておりません」

「私もライラから何の報告もありません。いつもと変わらぬ様子だったはずです」

「昨晚は私が直接姫殿下の寝室周りの警戒に当たっていましたが、いつもと同じでとても静かな夜でした」

やはりスワジクの周囲の変化は見られないようだ。

私はドクターを見て、発言を促す。

精神を急激に病んだという可能性もあるのだから、医師の見解も押さえておくべきだろう。

「こちらに伺う前に、姫様の健康診断をしに行っていました」
「で、どうだ。先日ドクターはスワジクが心を病みつつあると言っていた、それが悪化したのだろうか？」

「いえ、それはありません。受け答えもしつかりとなさっていて、目にも力がありました。心の病という点では、もう心配は要らぬかもしれません」

「病状は改善したのだな？」

「依然栄養状態はよろしくないようですが、今朝は自分から食事を少しとはいえ採られたのであれば、そちらの問題も時間が解決してくれましょう」

「ドクター、彼女が回復した原因というのは一体なんだと思うか」

「一般的に言えば、心を抑圧していた問題が解決された、と見るべきでしょうな」

「何一つ彼女を取り巻く環境は変わっていないのか？」

「心の開放と現実の環境の変化というものは、必ずしも一致するとは限りません。状況は変わらなくても、考え方を変えるだけで気の病というものは治ったりするものです」

「では、スワジクがミーシャの死について割り切れたということか？」

「あるいは、そうかもしれませぬ。今日のところはそこまで突っ込

んだ問診をしたわけではありませんので、確実にそうとは言いい切れませんが」

「そうか、ありがとう」

つまりはミーシャの死に対する彼女の気持ちの整理が付いた、ということだろうか。

それにしても、そんな一晩で急にころっと気持ちを切り替えられるものなのかと不思議に思う。

自分ならどうだろう。

もし今のスワジクが暗殺されたとして、ある日突然綺麗さっぱりと忘れ去ることが出来るか？

一生懸命想像してみるも実感が湧かず、そんな事になったらきつと普通ではいられないのではないかと漠然と感じるくらいが関の山。貧困な自分の想像力のため息を思わずついてしまう。

さて、結局集まってもらったものの有用な情報も意見も無かった。いつまでもこうしていても埒が明かない。

とりあえずは彼女の様子を見守るくらいしか、今の私に出来ることは無い。

私は皆を下がらせてから、溜まっている日常業務に取り掛かることにした。

私たちが頭を悩ませている頃、スワジクの寝室では彼女が一人窓の外をみて涙を流しながら笑っていたのだが、神の身でもない私たちには知る由もなかった。

さらにその同時刻、とある集合住宅の屋根の上ではひとりの変態メイド赤リボン騎士が乱闘騒ぎを起こしていたりするのだが、それも人の身である私たちには知る術は無い。

ここ数日決まって朝のこの時間に、メイド騎士ポーマンは私の部屋の窓から良く見える屋根に上っては僕を笑わせてくれる。

多分本人にはそのつもりが無いのかもしれないけれど、……いや、つもりが無いならあんな馬鹿っぽいボンなんか付けてこないか。ていうか、なんで毎日屋根に上ってくるのかな？

変な趣味にでも目覚めたの？

今日も今日とて、集合住宅の住民に袋叩きにあっている変態メイド騎士ポーマン。

窓枠に頬杖を突いて、彼の悪戦苦闘ぶり見守る僕。

こつちから何度か手を振ってみたこともあるけれど、乱闘に忙しいのか気付いてくれたためしがない。

僕が気付いてるって分かったら、きっとポーマンもあんな馬鹿なことしなくていいのに。

それにあんまり僕に付きまといっていると、きっと良いことなんて何も起こらない。

むしろ外の人を疎む人達から目を付けられるだけだ。

早くあの馬鹿騒ぎを止めないといけないんだろっけど、あの姿をみると真面目に彼の身を案じていることすら出来ない。

なんていうか全身の力というか、やる気が抜ける。

「とはいうものの早くアレを止めないと、今度はポーマンの身に何かあっても困るしねえ」

あ、ポーマンが屋根から蹴落とされたのが見えた。

うーん、あの高さから落ちて大丈夫なんだろうっか？

少し心配になったが、屋根から下を指差して高笑いしている住人

達を見る限りでは、多分そんな深刻な事態にはなっていないんだろ
う。

頑丈だな、ボーマン。

なんていうか、僕が彼を心配してあげる事もないんじゃないだろ
うかと思ってしまう。

ま、冗談はさて置き、本当にボーマンのアレをなんとかやめさせ
ないと駄目だ。

その為には、やっぱり外に出て行かないと駄目か。

さて、どうやって外に出よう？

抜け出すなら夜だけど、ボーマンは朝にいつもの屋根にやって来
る。

夜のうちに抜け出してあの場所の近くで待つのが、一番賢いやり
方なんだろうけど。

でも朝はフェイ兄がいつも心配してやって来るから、朝に部屋に
居ないというのも問題がありそうだ。

あとは朝食後部屋を抜け出して、そのまま外へと逃げ出すくらい
しか方法を思いつけない。

「こつ、なんか秘密の通路とかがあって、そこからすつと逃げ出せ
たりしたらいいのになあ」

そういえば僕が生まれる前のアニメには、リンの騎士とかいう
牢獄に囚われたお姫様が活躍する話なんかもあったなあと思い出す。
まあ内容はよく知らないんだけどね。

カ オストロ伯爵の屋敷にだっている仕掛けがあったんだか
ら、本物の王宮にあるこの部屋にもあって当然じゃなからうか？

そう思って部屋の壁や装飾品、あるいは床の敷物の下など手当た
り次第に調べて回る。

半日ほどいろいろと調べていたけれど、なんにも見つからなかった。

よく考えたら僕程度の人間に見つけられるくらいなら、そんなの秘密の通路とはいえないんじゃないかな。

ただでさえ体力が落ちているのに無駄な労力を使って、フルマラソンを走りきった後の様な状態になっている僕。

結局王宮脱走計画は、朝食後さりげなく城から脱出するというこ
とにした。

次の日の朝、僕はフェイ兄との朝食を終えて直ぐ、いつぞやの変装用令嬢衣装を引っ張り出してきた。

王宮内で用意されているドレスは、やっぱり外に出て行くには少し派手すぎる。

姿見でおかしなところが無いかちゃんとチェックして、僕は静かに寝室のドアに身を寄せた。

耳をドアに当てて外の音を聞くが、これといって気になるような音は聞こえない。

そつとドアを少しだけ引いて、頭だけそろりと廊下に出してみた。
右を見て、左を見る。

「うん、誰も居ない」

今日の朝食はいつもより早めに持ってきてもらったので、王宮内で活動している人はまだそれほど多くは無い。

抜き足、差し足、忍び足。

そつえばいつぞやも、こんなスニーキングな事してたような気がするなあ。

階段までくると、下からライラとスウィータが何かを話しながら上がってくるのが見える。

僕はすかさず階段横にある部屋の中に身を潜め、スウィータ達が行過ぎるのをじっと待つ。

徐々に声が大きくなって、そして遠ざかってゆく。

そつと外を覗いてみると、丁度廊下の角を二人が曲がって消えてゆく所だった。

もう一度階段を覗いて、誰も上がってこないことを確認する。周りに細心の注意を払いながら、人気の無いロビーへと出た。

「ふう、ここを過ぎて外に出れば、この格好ならある程度ごまかしは利くかな？」

僕は足早にロビーを駆け抜け、王宮の内広場へと出る。

流石にここまで来れば、いくつか人影のあることを確認できた。

もっとも彼らは侍女や下働きの下男下女達で、朝の支度で忙しそくに動き回っている。

誰もこちらを不審がって見ていないようなので、僕はそそくさと正門へと向かって堂々と歩いてゆく。

こつこつと下手にオドオドした方が不審がられるものなのだ。という何の根拠も無い自信を盾に、僕は正門の衛士の傍を通り抜ける。

「お早いお出かけですね？」

「ええ、ちよつと朝市場に姫様の果物を買いに」

衛士の一人が僕を見て、笑顔でその声を掛けてくる。

一瞬焦るが、なるべく平静を保ちつつ、軽くお嬢様っぽく会釈をしながら返答を返す。

これで騙されてくれたらいいんだけど、と祈りつつあくまで慌てず騒がず場外を目指す。

そんな僕の内心には気付かずに、衛士は笑顔でお気をつけてと送り出してくれた。

振り返りたくなる衝動を抑えながら、僕は跳ね橋を渡って町の中に紛れ込んだところでようやく緊張を解いた。

「ふはー、心臓に悪いや。とはいうものの、上手く城外へ出れたな。あとはボーマンがやって来る前にあの場所に先回りしておかなきゃ」

僕は町の北側に向かって、よく知らない町の中へ踏み込んでいった。

ボーマンに会って、もう僕に二度と関わらないようにと言い聞かせるために。

36話「すれ違つ心」

王都の朝の空気は、僕がいた世界のどんな朝よりも澄んでいた。王宮の中に引きこもっている方が多かった僕には、皆で出かけたあの日以来の街の風景だ。

目的の場所までの道のりはあまりよく分からないが、とりあえず自分の部屋から見えた建物を目指して行けば良いはず。

まずは城の北側へ向かつて街の路地を適当に歩く。

極力人とは出会わないように、特に衛士さん達に見つからないように、細心の注意を払いつつ移動する。

半時間くらい歩いたら、ようやく目印にしていた集合住宅が見えてきた。

塀の影から顔だけを覗かせて、周囲の状況を確認する。

住宅の入り口に厳つい体格のお兄さんが2人、家の周りを警戒している人が2人一組になってぐるぐると歩き回っていた。

「ボーマン、どんだけ警戒されてるんだよ……」

そりゃ女装した変な人が、突然自分の家の屋根に毎日旗を立てに来たら怒るよね。

どうしようかなと思って思案していたら、別の路地から件の住宅を除いている変態、もといボーマンを発見した。

今日はあの赤いリボンは付けてないようだ。

そのかわりと言わんばかりに、ボーマンの短い毛を三つ編みっぽく寄り合わせ、小さいリボンでくくつてある。

なんだろう、あの奇抜なヘアスタイル。

あれはボーマン一人では出来ないから、きっと誰かが悪ノリして

遊んでいるように思えるんだけど。

しかし、それで出歩いているボーマンも強者と言わねばならないだろう。

ボーマンは少しの間躊躇っていたようだけれども、意を決したのか、警戒していた男の人達の間隙をついて一気に集合住宅の入り口へと駆け込もうとした。

が、敵も然る者、隙を見せていたのはどうやらボーマンへの誘い水だったようで、駆け込もうとした入り口からさらに2人の男の人が踊りでる。

4人も入り口の前に立ちふさがっていたら、流石のボーマンでも手も足も出ないのではないか？

僕は声を掛けるのも忘れてボーマンを見守る。

頑張れ、ボーマン！

「ちよいと、お嬢さん」

「へうっ」

急に背後から声を掛けられて、みっともない返事を返してしまう僕。

慌てて振り返ってみると、赤ら顔のおじいさんが数人の町人を連れて立っていた。

おじいさんは帽子を逆さまに持っており、その中に硬貨が割りと沢山入っているのが見える。

僕が戸惑っていると、おじいさんはニヤリと笑って帽子を僕の前に差し出す。

「一口どうじゃね？」

「賭けてるのですか？」

「おお、そうじゃとも。あの女装の小僧が屋根に上って何分持つか、それを賭けているんじゃないよ」

手にくじ札つばいものを持った中年の太った男の人が、おじいさんを押しつけてさらに最近の結果速報を頼んでも居ないのに教えてくれた。

あれだね、皆暇なんだね……。

「昨日は砂時計3回転半、一昨日が5回転旗付き、4日前が二回点半です。あ、旗付きってのは、屋根の上に旗を立てたかどうかで倍率が変わるんです」

「さあ、お嬢さんは何回転に掛けなさる？ もちろん旗付きだけのベットもありです」

未だ玄関口で悪戦苦闘しているポーマンを肩越しに振り返りながら思案する。

僕を励ますためと、一生懸命に頑張るポーマン。

そんな彼の一生懸命な気持ちを、無駄にしちゃいけないよね。

僕はおじいさんに向かって、短く言い放つ。

「3回転の旗なしに、銀貨2枚」

「お嬢ちゃんギャンブラーじゃなっ！」

「褒めても何もでませんよ？」

良い笑顔でぐつと握手を交わすおじいさんと僕。

さて、門番4人をいつの間にもやら抜いたボーマンは、勢い良く玄関の中に駆け込んでゆく。

途中の階段ぼいところの窓から、奥さん連中から色々物を投げつけられている様子が見えた。

毎日こんな苦勞をして屋根に上ってきていたのかと思うと、なんか少し泣けてきた。

頑張れボーマン、なんか可哀想になってきたけど、とりあえず僕の銀貨の為に、めいっばい頑張れ！

暫く外からぼーつと集合住宅を眺めていたら、ようやくボーマンが屋根裏部屋の窓から這い出てきたのが見えた。

満身創痍という言葉がぴったりの様子のボーマンに、屋根裏部屋の住人らしき若い女性が情け容赦なく箒でボーマンの背中を叩いている。

起き抜けに押し入られて怒っているみたいだ。

激しい攻撃を受けながらも、ボーマンは僕の部屋が見えるであろう位置にまで移動し、背中に背負っていた鞆の中から旗を取り出す。慣れた手つきでそれを組み立てていくボーマンの背後から、同じ若い女性の部屋から追っ手の男達が屋根へと這い出てくる。

それぞれの顔に紅葉の跡や引つかき傷が付いているところを見るに、多分ボーマンと同じように部屋の中で違う戦いがあったようだ。まあ余談はともかく、ボーマンがなんとか旗を組み上げた頃に、追っ手が彼を取り囲む。

僕は思わず手をぎゅつと握り締め、この次の展開をじっと見守った。

僕の横で静かに回転する砂時計。

これで丁度2回転半になる。

あともう一回この砂時計が回転するまでは、なんとか粘って欲しいところ。

屋根の上では、いつもの如き乱闘が起きている。

人数に任せて押し包もうとする住人側と、させまいと旗を武器に近寄らせないボーマン。

そんな彼らを下から仰ぎつつ、自分達が張った山が来ると、やれ「変態今だ、落ちろ」とか、「住人の底意地を見せてみる」といった野次が飛ぶ。

当人達はそれを気にしている余裕もなさそうだけどね。とうとう3回転目に砂時計が入った。

「ボーマン！」

僕は周りの野次に負けないように、屋根の上に向かって腹の底から声を出す。

1度目は気付いてもらえなかった。

だから僕は2度、3度とボーマンの名前を連呼する。

僕の声がようやく届いたのか、乱闘していたボーマンがちらりと僕がいる方に視線を向けた。

ここが最後の正念場とばかりに、僕はボーマンに大きく手を振って叫んだ。

「ボーマン！ 落ちろおおお」

「何でえええ？」

僕を見て驚いたボーマンの隙を住人達が見逃すはずもなく、胴上げのように抱えあげられそのまま地面に向かって放り投げる。

落とす場所には束にした飼葉が積み上げられており、そこに投げ落とすのがお約束になっていたようだ。

一瞬ヒヤツとしたけれど、無茶をする中にもちゃんとルールがあったようで安心した。

胸を撫で下ろしている僕の横に、おじいさんがやって来る。

「知り合いじゃったのか？」

「今更卑怯なんていいませんよね？」

「ま、特に何か不正をしていた訳でもなし、因縁をつけるつもりはないぞい」

「太っ腹ですね」

「ああ、あの小僧には稼がせて貰ったからな。これが払い戻しの銀貨16枚じゃ」

「有難うございます」

おじいさんはニヤリと笑って、そのまま群がる人達を引き連れて町の中へと消えてゆく。

それを見送っていたら、ようやく飼い葉の中から這い出してきたポーマンが僕のほうへとやってきた。

「ひ、姫様……、なんで「落ちろ」なんですか？」

泣きそうな顔をして僕の前に這い蹲るポーマン。

僕は彼の頭にそつと手を置いて、僕は僕に出来る最高の笑みを向けた。

「お陰で儲かりました」

掌の中の銀貨を見せると、ポーマンは一言「不幸だ」といつてその場で伸びてしまった。

さっきの集合住宅から少し離れたところに北街のマーケット広場というものがあって、ポーマンと僕はそのオープンカフェもどきでお茶を飲んでいた。

「ポーマン、元気そうで何よりです」

「有難うございます。もう王宮仕えでもない俺なんかには、会いに来ていただけるだけで光栄です」

「あれだけ毎日屋根の上で暴れていたなら、気にもなりますよ。ふふふ」

「あの、それですね、俺、姫様に伝えたいことがあって……」

カップの中の自分の顔を見ながら、軽く首肯して分かっていると無言でポーマンに告げる。

ポーマンも内容が内容だけに、僕の意図が分かったのか迂闊に声に出さないでくれた。

「生きているって分かっただけで十分です。有難う、ポーマン」

「い、いえ。実際俺は馬車を走らせただけです。あんまり役に立っていないかったですね」

「ううん。こうやってボクに知らせてくれたじゃないですか。それ

だけで涙が出るくらい嬉しかったです」

「いや、そんな」

自分の気持ちを正直に打ち明けて微笑むと、頬を赤くしたポーマンは急にどもりながら視線を右へ左へと彷徨わせる。

僕は紅茶を少し口に含んで喉を潤した。

うん、妙に緊張しているのが自分でも分かる。

「あのね、ポーマン。ボクのせいでお仕事首になってしまつて、ごめんね。首になつたつて聞いてから、ずっと会つて謝りたかつたんだよ」

「いえ、それはお気になさらないください！ 俺、姫様のせいだなんてこれっぽっちも思つていませんから！」

「あーうー、ポーマン、あんまり姫様つて大きな声で言わないで」

興奮して大声になつたポーマンを宥めながら、一応自分の身分がばれない様に注意してくれるよう促す。

自分の失態に気付いたのか、ポーマンはしゅんとなつて頭をかいている。

「す、すいません。俺、血が上ると周りが見えなくなるんですよ。じゃあ、なんとお呼びしたら良いですか？」

「以前外出したときは、お嬢様つて呼ばれてた。だからそう呼んでくれたら、分かりやすいかも」

「はい、分かりました、お嬢さま」

さて、最初の用件を切り出そうか。
僕はポケットに入れていた小さな宝石箱を、ボーマンの前にすと差し出す。

きよとんとしているボーマンに、僕は箱の中身を説明する。

「あのね、この中に指輪が入っているんだよ。これ持って行って欲しいんだ」

「はい？ 指輪？ お、お、お嬢様が、お、お、お、俺に、指輪？ ？？」

「ああ、違う違う。これは、その服の持ち主に渡して欲しいんだ。多分これから色々と物入りになるだろうし、実家にもおいそれと帰れなくなるだろうし」

「あ、ああ、なるほど……」

何故かしよぼーんと肩を落とすボーマンに、僕は自分の配慮の無さに気がついた。

慌てて色々と体中を探ってみるけれど、あの指輪ほど高価そうなものは身に着けていない。

せいぜいがこのイヤリングくらいか。

それでもないよりはマシかもしれないので、慌ててイヤリングを外してボーマンの前に置いた。

「ご、ごめんね、気がつかなくて。今、手持ちにこれしかないのね。こんなものでよかったですら貰ってくれると嬉しいかな」

ポーマンは差し出されたイヤリングをじっと見て、片方だけ手に握り締め、もう片方を僕に返してきた。

「いや、イヤリング片方だけ返されてもどうしようもないんですけど？」

「別に褒美が欲しくてこんな真似してた訳ではありません。僕は貴女の力になれることが嬉しいんです」

「え？ あ、ありがと……」

「でも折角ですから一個だけ貰います。あ、あ、後の一個は、ひ、ひめ、あ、いや、お嬢様が大事にしてくれたら嬉しいなあと思ったりますんですが、どうでしょうか？」

茹で上がったように真っ赤な顔をしているポーマン。

案外ロマンチストなところがある奴だな、と少し微笑ましく思う。

僕も中学生のころは好きな女の子に告白するときは、こんな感じに茹で上がっていたんだろうなあ。

「分かりました。じゃあ、もう半分は私が大事に持っておきますね。あとそちらの指輪もきちんとあの人に渡してください」

「それはもちろんです」

「それともう一つ、あの人に伝言をお願いしたいのです」

「はい、なんでしょうか」

緊張で上手く呂律が回らなくて、僕は少しお茶を飲んで心を落ち着かせる。

こんな嫌な伝言をポーマンに頼むのは凄く気が引けるんだけど、

でもやっぱりこれだけはちゃんとやっておかないと駄目だから。
どんなに嫌われても、それが僕の責任だと思っから。

「あのね、その指輪を渡すときに、私がおめんなさいって謝っていったって伝えて欲しいんです。あと、もう王都には近づかないほうがいいって事も。その指輪を売れば、多分10年くらいは遊んで暮らせるお金になるはずだから、どこか長閑な町でも見つけて静かに暮らして欲しいって」

「……」

「本当はいろんな問題をボクが解決できたら良いんだろうけど、正直ボクにはどうしていいのかも分からない。だから、一番いいのはボクに二度と近づかないことだと思っから。だから、さよなら、だねって」

ポーマンはじつと自分の前に置かれたコーヒを睨みながら、静かに肩を震わせている。

うん、多分僕の言い分に腹を立てているんだろう。

あんまりな僕の話に、さらにそれを僕が直接言わずに他人に言わせるという卑劣振り。

ポーマンは一本気なところがあるから、こんな卑怯な僕に愛想を付かせて怒ってどっかにいってしまっかもしれない。

まあ、そうなればそうなたで彼を傷つけずにすむので、僕的には少しだけ気が楽になる。

僕はじつと彼が爆発するのを待つ。

でも、いつまで待ってもポーマンは怒ることも、蔑むような目で見てるような事もしなかつた。

ただ俯いたまま、僕に向かつて呟いた。

「分かりました。その伝言、俺が責任をもって彼女に届けておきます」

「あ、あの……」

「大丈夫です。心配しないでください。貴女が精一杯考えて出した答えなのでしょう？ でしたら、それは俺の判断で聞かなかったことにしていい話じゃない」

「あ、ありがとう、ボーマン」

微動だにしないボーマンに少し不安を覚えるも、彼が返してくれた答えは僕が望むとおりのもの。

それについて僕が文句をいうのも可笑しいのだが、なんとなく彼の態度に違和感を覚えた。

望んだ答えなのに、ボーマンらしくない。

でもそのボーマンらしくない答えを強要していたのは、他ならぬ自分自身。

僕はいつたい彼に何を望んでいたというのだろうか？

「あ、あとね、そのボーマンも、もうボクと関わるのは止めた方がいいと思う」

「……理由をお聞きしてよろしいでしょうか？」

「さっき言ったのと同じ理由。ボクに関わったら、多分、ボーマンに迷惑が掛かるから。それも命に関わるような、ね。だから友達は選ばないと、長生きできないかなって」

「俺は、貴女のことを友達などとは一瞬たりとも思ったことはありません」

「あ、う、うん。そうだね。ごめん」

「いえ……」

気まずい雰囲気か二人の間を埋め尽くす。

ちよつとシヨックだったかな。

ポーマンとはお友達になつていたつもりだったんだけど。

こつもはつきりと否定されると割ときついもんだな。

「貴女の気持ちや考えていることは分かりました。それでは俺は、早速その人のところへ行つてきます」

「うん。ありがとう。ポーマンには色々迷惑掛けっぱなしだけどね」

「いえ、お気になさらずに。それでは」

席を立つと、くると僕に背を向けて出て行くとするポーマン。終始俯いたままだったので、どんな顔をしているのか、何を考えているのかわからない。

その後姿を見て、僕は何かに急かされるように声を掛けてしまった。

「ポーマン！」

彼の足がぴたりと止まるが、振り向きはしない。

僕はこの世界に来て出来た、自分だけの片思いだけでも、友達に、万感の思いをこめてさよならを告げる。

「ありがとう。ボク、ミーシャやポーマンに会えて、本当に嬉しか

ったよ」

僕は一人、マーケット広場の中を歩いてゆく。

すれ違う人々は朝市で買ったのか、いろんな果物や野菜を抱えて笑顔で歩いている。

その笑顔も朝の空気のようにとても澄んでいて、沈みがちだった僕の心はそれだけでとても洗われたように思う。

でも仲の良さ気な家族や友達連れとすれ違うと、とても切なくなる。

フェイ兄やミーシャ達と一緒に出かけた日のことが、ボーマン達と無邪気にお茶をしていたことが、本当に楽しい思い出として頭の中にあるから涙が出そうになるのだ。

どうしてこんな風になったんだろうか。

繰り返し繰り返し考えたその間に、やっぱり僕は答えを見つけれない。

僕はただ皆と一緒に笑っていたかっただけなのに。

目尻に浮かんできた涙をそっと袖に含ませて、僕は空を見上げた。こつすれば涙も零れないんじゃないかと思つて。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

視線を下げると、5歳くらいの綺麗な金髪の可愛い女の子が手に赤いりんごの様な果物を持って、不思議そうに僕を見ていた。

なんとか自然に見える笑顔を作り、僕は木箱から降りて女の子の

前にしゃがむ。

「何かご用かな？」

「ううん。なんかお姉ちゃん泣いてるみたいだったから、どうしたのかわかって」

「あ、あはは。みっともないところ見られちゃったね」

「あのね、これあげる」

女の子は手に持っていた果物を僕に差し出して、頬を赤くしながらはにかんでいた。

一瞬どうしてそうなるのか分からなくてぼんやりしていたら、女の子が僕の胸に果物を押し付けて来た。

仕方なくそれを受け取ると、女の子は嬉しそうに笑いながら一歩後ろに下がる。

「あのね、フレンドも泣き虫なんだけど、これ食べたら元気になるわけ。だからお姉ちゃんもこれ食べて元気になってね？」

「あ……」

小さな女の子の何の打算も無い優しさに、僕はありがとこの言葉すら口から出すことが出来なかった。

ただぎゅっと果物を胸に抱いて俯いてしまう。

声を出したら、前を向いたら、色々と駄目になる気がして、ただ僕は漏れ落ちる嗚咽を堪えるのに必死だった。

そんな僕の背中を、小さな手がゆっくりときこちなく撫でてくれている。

「ご、ごめんね。お姉ちゃん、みっともないよね」

「うん、フレンドも良く泣くから。それでね、いつもこんな風にお姉ちゃんが撫でてくれるの」

「そっか。優しいお姉ちゃんだね」

「うん。怖いけど大好き！」

僕は涙でくしゃくしゃになった顔を袖で拭いながら、もう片方の手で女の子の頭を撫でてあげる。

往來で号泣とかがありえないとは思うものの、この不意打ちはなんか効いた。

道の向こうで女の子の両親と思しき人達がこつちをみて微笑んでいる。

恥ずかしかつたけど、会釈をしてから女の子を親元へと送り出す。

「ほら、お母さん達が待つてるよ？ もう行かなきゃね」

「うん。お姉ちゃんも泣いてばかりいたら、おなかが痛くなるワケよ。だからもう泣いちゃ駄目だよ？」

「うん、元気だ。これ、ありがとうね」

「うん。バイバイ、お姉ちゃん」

女の子が両親の元へ走って戻って行くのを、僕は泣きはらした笑顔で見送る。

それがとても羨ましくて、切なくて、だからまた目尻から熱いものが落ちていった。

キャラクターラフ画集(こっそり更新3/22)

絵師のふみ様が書いてくださったスワジク姫のキャラクター達です。もうね、イメージどおりのイラストで作者のテンションは有頂天を天元突破したのですよ(意味不明)！

3月22日に追加 主要登場人物、6名の指名手配写真(笑)

> i 2 0 2 4 4 — 2 3 8 6 <

スワジク・ヴォルフ・ゴードイン

> i 1 8 2 5 5 — 2 3 8 6 <

> i 1 7 5 9 4 — 2 3 8 6 <

僕らのヒロイン(笑)、スワジク姫殿下です。

年齢14歳 銀髪の美少女です。ラフ画にも書き込まれています
が若干幼児体形ですね。いわゆるロリペタという奴でしょうか？
外の人の時は、こんな可愛い表情はでけへんかったの。

フェイタル・ラブラフト・ゴードイン

> i 1 8 2 6 3 — 2 3 8 6 <

> i 1 7 5 9 5 — 2 3 8 6 <

変態ロリシスコン王子です。べつに変態シスコンロリペド野郎でも構いません。まあ、濡れ衣ですけどね。本人にロリペド趣味はございません。割とナルシーな所もあり、さりげなく”おされ”に気

を使っています。意外に彼はまだ17歳だったりするんです。そう考えると、割としっかり者ですよね。

ポーマン・マクレイニー

> i 1 8 3 3 6 | 2 3 8 6 <

> i 1 7 5 9 7 | 2 3 8 6 <

我らが熱血ヒーロー（熱血馬鹿ともいう）、ポーマン君です。15歳です。社交界、政界で揉まれてきたフェイタールとは違って、おぼこいです。良い意味でも、悪い意味でも世間知らずで、おぼっちゃんですね。まあ、育ちもお坊ちゃんなわけですが……。

ミーシャ・クロフェルト

> i 1 8 3 3 5 | 2 3 8 6 <

> i 1 7 6 0 0 | 2 3 8 6 <

言わずと知れたガチ百合メイド、ミーシャさんです。豪商の次女で、王宮には嫁入りの箔付けの為に無理やり放り込まれた模様。本人はこんな性格なので、あまり結婚とか考えて無さそうですけどね。可愛い年下の女の子や、庇護欲をかきたてるような女の子には目が無いようです。

37話「黒髪の少女と銀髪の少女」

街角で出会ったフレンドちゃんと別れてから、僕はしばらく路地裏で落ち着くまでぼーっとすることにした。

少し薄暗い感じで余り人も歩いていないから、泣きはらした顔でもあまり恥ずかしくない。

もちろん、それでも泣き顔が人目につかないようにと帽子を目深にかぶって、ひたすら目立たないように木箱の上でじっと座っている。

両手でしっかりと握っている果物の甘酸っぱい匂いが鼻腔をくすぐるけれど、これは持って帰ってから大事に食べようと思う。

通りすがりの少女の優しさに頬を緩めながら、泣き笑いの顔を見られたら絶対引かれると思うので、立てた膝の間に顔を埋める。

「はあ、これくらいの事でこんだけ落ち込んでたら、この先が思いやられるなあ。外の人って、お母さんが死んでからずっとこんな気持ちで生きてたのかな？　ずっと一人ぼっちで、誰にも理解して貰えず、誰とも理解出来ない……か」

外の人の母親は、ヴォルフ家を追われるようにしてこのゴージェイン王国に正妻として嫁入りしたらしい。

当時の王様は、ランドルフ家（帝国の有力な伯爵家で皇帝の少し遠い親戚筋）から嫁入りしていた正妻を亡くしたばかりだった。

当然、王様や周囲の貴族達の気持ちも逆撫でするような結婚だったそうである。

ましてやフェイ兄のお母さんは、とても出来た人で周囲から非常に愛されていたそうだ。

その傷心も癒えぬというのに、誰ともしれぬ男の子種を宿した売女を、属国とは言え一国の主押し付けるとは何事だという事らしい。

しかし、中原からの圧力が日に日に増し戦雲が濃く立ちこめる時期に、盟主国の不興を買うわけには行かず苦渋の選択だったみたいだ。

この当たりの話はミーシャから教わったんだけどね。

だから外の人のお母さんは、国中の貴族達から忌み嫌われた。

その娘である外の人も、親知らずの忌み児だと公然と蔑まれていたのだ。

「ボクは、外の人みたいに当り散らすなんて出来ないからなあ。フエイ兄や他の皆も色々苦労しているみたいだし。ボクさえ大人しくして物事がうまく行くなら、それもありか……」

ようやく涙も止まって、気分的にも大分ましになった。

大事になるまえにそつとお城に戻らないといけないよな。

そう思って立ち上がるうとしたとき、目の前に同い年か少し上くらいの女の子がこつちを見て呆然と立ち尽くしていた。

黒曜石のような綺麗な黒い髪を三つ編みにして後ろで纏め、着ている服はどこかの名家に仕えるメイドさんのようだった。

彼女はその可愛いブラウンの目をいっぱいに広げ、その視線は僕をがつつり捕らえて放さない。

目の前に立たれているので、当然僕は木箱から降りる事も出来ず、意味も分からないままその女の子にじつと見つめ続けられる。

1分くらい相手がじつとこつちを見つめたまま動かないから、僕は恐る恐る声を掛ける事にした。

「あ、あの、何かご用でしょうか？」

「……いい、いえ、別に。ただ知り合いに凄く似ている人だったのでビックリしただけです」

「あ、そうですか。世の中には自分に似た人が3人はいるらしいですからねえ」

「そうなんですか？」

「あ、いえ、言葉のあやと云うか、言い伝えと云うか、そんなようなものですよ」

僕が立ち上がりたそうにしているのに気付いて、その黒髪の少女が一步後ろに下がってくれる。

木箱から降りてお尻についた木屑を払いながら、微笑みつつ少女に向かってお礼をいう。

「ありがとう」

「……お礼を言われるような事はしていませんわ。どちらかというところ邪魔をしていたのは私の方です」

「んー、それでもやっぱり、ありがとうって言葉が一番しっくりくるんだけどなー」

「変な方ですね」

「出会い頭にガン見してた人に言われたくないよー、ははは」

「そうですね、私も変かもしれません」

寂しそうにふふふと笑うその笑顔に、なんかうつすらと影のようなものを感じた。

少し気になりはしたが、初対面の人にいきなり何か悩んでるんで

すかつて聞くわけにもいかないしスルーすることに。

変な人だなあとと思っただけど、行きずりに出会った人に対していう事でもないし、早く城に戻らないといけない。

ということで僕はピツと手を上げて、別れを告げて立ち去ろうとした。

「それじゃあ、ボクは家に帰らないといけないから」

「家？ 家がおありなのですか？」

「そりゃ帰る家の一つくらいは無いと生きていけませんし」

「あ、そ、そうですね。当たり前ですよ。私ったら何言ってるのかしら」

赤くなつた頬を押さええてうるたえる少女を見て、僕は少し和んでみたりする。

んー、なんかアニスとは別方向で天然っていうかいい味出す人だなあ。

ニヨニヨしている僕をみて、その少女も自分の慌てぶりに恥ずかしそうに肩をすくめる。

本当なら名前の一つも聞いて仲良くなりたいたいなと思うけど、それはやってはいけない事。

「じゃあ、今度こそ本当にさよならですね」

「え、ええ、そうですね」

軽く手を振って僕はその人に背を向けて歩き出した。
なるべく細い路地を通って正門に向かって歩く。

路に並ぶ軒先からは昼ご飯の準備をしているのか、何かを焼く匂いや美味しそうな焼き肉の匂いが漂う。

うっ、落ち込み気味でアンニュイな気分の筈なのに、なんでお腹だけは欲望に正直なのかな？

僕は垂れてきそうな涎をぐっと飲み込んで、ひたすら前へと進む。お腹は空いたけど帰れば何か食べれるし、我慢だ、我慢。民家を抜けてなにやら倉庫が立ち並ぶ一角を黙々と歩く。

「……」
「……」

おかしい。

何かがおかしい。

もう民家を抜けて倉庫街なんだから、いい加減焼肉の匂いも鼻から離れてくれたっていいはずなのに。

何時までたつても香ばしい匂いが僕を追いかけてくる。

思わず垂れてしまいそうになる涎を、なんとか我慢しながら歩き続けた。

あー、あともう一つおかしい事があるんだ。

なんかね、この寂れた裏路なのに足音が僕以外にもう一つある。

しかもさつきからずっと僕の後を付かず離れず追いかけてくるんだ。

あれかな、ストーカーかな？

僕はそーっと肩越しに後ろを振り向いて見る。

「え？」

「あら？」

さっきの黒髪の少女が、てくてくと僕の後ろをついて来ていた。しかも手にバーベキューの大きな串を1本持っているし。っていつか、なんでそんなの持って僕の後ろを付いてくるのかな？

「あら、奇遇ですわね？」

「……奇遇、なのかな？」

「ええ、奇遇ですわ」

そんな風に微笑みながら言われると、なんかこっちの思考が間違っているような気がしてきた。

奇遇じゃないよね？

絶対さっきの所から付いて来てたよね？

でなきゃ、串なんか買って持ってこないよね？

っていつか、どこで買った！　いつ買った！　そこが知りたいよ、僕は！！

「あらあら」

僕が悔しそうに串を睨んでいたら、目の前でこれ見よがしに串を左右に振る少女。

当然（？）僕の視線も串につられて右左。

し、仕方ないよね？　誰だって美味しそうな串を振られたら、思わずつられるよね？

「どうぞぞ?」

「え?」

「ですから、どうぞお食べ下さい」

「い、いいの?」

「ええ。そう思って買ってまいりましたから」

ど、どうなんだろう、見ず知らずの人に餌付けされるのって。

そう思っても僕の口の中は既に肉の受入準備が完璧に整っているわけで。

でもやっぱり毒とか入ってたりするかもしれないし自重すべきかも。

そうやって僕が躊躇していると、おもむろに少女が串に刺さっている肉と野菜を一口づつかじる。

「ふあ……」

「はふはふ、まだ熱くて美味しいですね。さあ、冷めないうちにどうぞ召し上がれ?」

「……い、いくら?」

「別にお金は要りませんよ? なんとなく貴方にこれをあげたくなっただけですし」

「お金はちゃんとあるから払う。そうじゃないとなんか色々駄目な気がする」

「そうですか。では銀貨一枚でどうでしょうか」

「うん、分かった」

僕はスカートのポケットから銀貨を一枚取り出して串と交換する。

まだぬくぬくの串はやっぱり美味しくて、あつという間に食べつくしてしまう。

指やら口に付いたタレをぺろぺろと舐めていたら、隣の少女が苦笑じりにハンカチで口と手を拭いてくれた。

まるでそれが自分の役目だというように。

「あ、あの、ありがとう。美味しかった」

「いえいえ、美味しそうに食べて下さって、私も和みました」

「そ、それじゃあ、私行きますね？」

「？ ボクじゃなくて、私なのですか？」

「あ、いや。ボクってというのは口癖で、ホントはちゃんと私って言わないと駄目で」

「お名前、お聞きしていいかしら？」

「うっ」

「駄目かしら？ お友達になれたと思いましたのに」

可愛らしく首を傾げて僕を見つめる少女。

そりゃ、仲良く出来るならなりたいけど、ミーシャの二の舞はゴメンだ。

僕は心を鬼にして、柔らかに微笑んでいる少女に向かって告げた。

「駄目じゃないけど、駄目なんだ」

「そうですか。それは残念です」

「ごめん」

僕はそれだけ言うてくるりと踵を返し、正門へ向かって歩き出す。

もうあと5分も歩けば見えてくるはず。

後味の悪い思いを無理やりに胸のうちに押し込んで、僕はひたすら足を前へと送り出した。

その後を同じ歩調で着いてくる足音。

方向もまったく一緒、歩幅も一緒、君は僕のシャドーマンかつ！
ちよつとイラツと来て、勢い良く振り返る。

そこにはやつぱりニコニコと笑みを浮かべている黒髪の少女。

「あ・の・ね？ ボクに着いてきたら駄目なの！」

「あら、今度はボクなのですか？」

「あー、もう！ ボクでも私でもいいじゃない！ 兎に角、ボクに近寄っちゃだめなの！ 分かってくれる？」

「あらあら、何か性病でももっていらつしやるのですか？」

「だーっ！！ 性病なんか持ってないし、持つ予定もないよっ！」

「それはいけません」

「なんで？ もしかして性病推進派の人なの！？ だったらなおさら近寄らないで欲しいかな！」

「いえいえ、性行為をしなくても性病には罹ったりするのですよ？

例えばですね、公衆浴場なんかでは寄生虫がですね……」

「怖い話はしなくていいから！」

「あう、残念です」

本当に残念そうに下を向く少女に、なんて言っただけいいか分からないようになってしまった。

あれかな、もう僕が誰か教えて怖がらせた方がいいような気がする。

こんな脅すようなやり方は嫌いなんだけど、この娘のためだもんな、仕方がない。

腹を決めて、僕は薄い胸を張って腰に手を当てふんぞり返る。

「もうね、この際だからはっきり言ってあげますね」

「はあ、何をでしょうか？」

「私が誰かって事をです！」

「え？ でも教えてくださらないって先ほど……」

「だあああつ！ 気が変わったの！ 教えてあげる、ってかむしろ聞いてください！」

「はあ、仕方ありませんねえ」

だ、駄目だ、疲れる。

さっきまでふんぞり返っていたのに、いつの間にやら猫背になつてて、気を抜けばがっくりと膝が崩れてしまいそう。

それでも僕は底を付きかけていた気力を掻き集めて、もう一度奮い立つ。

「良く聞いてくださいね？ 私の名は、スワジク・ヴォルフ・ゴードイン！ この国のお姫様だよ！」

「あらあら、まあまあ」

ばばあん！ って感じで自己紹介したら、急に目の前の少女がおろおろとします。

ようやく現実を分かってくれたみたいだ。

こんな風に自己紹介するのは嫌だったけど、この娘に迷惑がかかることを思えばなんてことはない。

「さあ、分かってもらえたみたいだから、ボクはこれで失礼するね？」

「いえ、でも、そのまま正門から入って大丈夫なのでしょうか？」

「え？ そりゃ、自分の家に帰るわけだから問題ないんじゃないのかな？」

「お姫様がお供もつけず一人で外出したと分かったら、怒られませんか？」

心配そうな顔でそういわれると、僕も少し不安になる。

といって他にお城に入る方法があるわけでも無し、怒られたなら怒られたときだよな。

「そうは言いますが、ばれたらきつと外出禁止とか、四六時中誰かが傍に付きっ切りになるとか、怖い教育係りの人に鞭でお尻を叩かれるとか……」

「今さらつとボクの思考を読んだよね？ 怖いんだけど！」

「壁に鎖で繋がれて、首輪を嵌められて、奴隷のように苛められるのですよ」

「うっ、そ、そんな事は無いんじゃないかな、多分？ っていうか思考を読んだことはスルーなの？」

「いえいえ、安易に考えてはいけません。私には見えます。部屋に軟禁されて涙を流しているお姫様の姿が！」

「嫌な妄想しないで欲しいよ！！」

「そうでしょうか？ 本当に私の妄想と言い切れますか？ 貴女の兄上様は、貴女を心配してお出ではないのでしょうか？ 可愛さ余って憎さ百倍とも申しますし」

なんか段々正門から帰るのが怖くなってきた。
鬼のように怒るフェイ兄なんて想像も出来ないけれど、でもやっぱり一人で出歩いたってばれたら外出禁止令くらいは出しそう。
過保護的な意味で。

「で、でもボクはあそこしか入り口知らないし」

「大丈夫でございます。私の姉が以前王宮に勤めていました時に、隠し通路があるのを教えてくれたのです」

「ええ！ マジで？」

「ええ、マジです。そこからなら誰にも気付かれることなくお城の中へ出入り出来るはずですよ」

「ほえー、それって誰でも知ってるの？」

「いえいえ、私の姉と私だけの秘密でございます」

「へえ、凄いねえ、君のお姉さんって」

「たまたまでございますよ。さ、私の後について来てくださいね」

そういつて颯爽と街の中へ戻ってゆく黒髪の少女。

少々不安に思ったけど、悪い人ではなさそうなので後を着いていく事にした。

本当にお城にちゃんと帰れるんだろうか？

なんとなく少しだけ不安になる僕だった。

38話「剣はただ主の為に」

街の中をまるで当ても無いかのようには無秩序に歩く黒髪の少女。付いて来いと言われてから、彼女の後を追いかけて既に30分以上は歩き回っている。

同じ道を行ったり来たりしていたり、行き止まりにぶち当たって引き返したり。

流石にこれはおかしいと思って、前を歩く少女に声を掛けた。

「あー、もしかして迷ってませんか？」
「……」

僕の問いかけに一旦は立ち止まる黒髪の少女だが、また無言で歩き始める。

うん、ばつが悪いからって無視はよくないと思うんだ。

僕は彼女の肩に手をやって振り向かせようとした瞬間、彼女は急に立ち止まっただけで両手を叩いた。

その音にちょっとびっくりした僕は、ひゃうという声を思わず漏らしてしまっただけ。

僕の情けない声を聞いた少女は、にやりと笑ってこちらを振り向く。

「ふふふ……」

「な、なに？ どうしたのかな？」

「まんまと引っかけましたわ」

「な……なに？」

少しうつむき加減でふふふと嗤う少女は、一步右へ移動すると背後にあるドアを指差した。

もしかして僕、騙されたのか？ 最悪の想像が僕の頭の中を過ぎる。

彼女は僕の顔を見て、にやりと笑った。

「到着ですわ」

「おかしいよね？ ただ到着したにしては、嗤い方とか邪悪っぽいよね？ それに到着って、ここさっきから10回以上は通ったんだけど!？」

「あらあら、興奮しすぎると体に毒ですわよ？」

暖簾に腕押し、ぬかに釘とはこのことか！

疲れ果てた僕は文句をいう気力も無くなって、がっくりと肩を落とす。

彼女といるだけですっごい疲れるんですけど……。

「さあ、こちらです」

そういつて先に立って古ぼけた教会の中へ入ってゆく少女。

僕は足を引き摺るような格好でその後を追う。

教会の中は古ぼけた外観にしては綺麗な方で、多分今でも町の人が集会とかで使っているんだらうなと思わせる。

正面の教壇の後ろにあるステンドグラスがとても印象的だ。

黒髪の少女は、教壇の右手方向にあるドアを開けてずんずんと奥へと入ってゆく。

僕もステンドグラスに目を奪われながらも、慌てて彼女につづいた。

廊下を歩き、キッチンらしき場所を越えて中庭に出ると、奥に平屋建ての宿舎っぽいものがある。

どうやらそこが目的地のようだ。

少女は中庭を突っ切って、宿舎の一番右端の部屋の扉を押し開ける。

中は昼だというのに少し薄暗く、少しカビ臭かった。

「ここは？」

「この教会の物置ですわ」

「へえ、なんか色々置いてるね。これは、鎧？ これは錆びた剣に折れた剣。穴の開いた鍋に、これは……、かかし？」

僕は乱雑に積み上げられた荷物を興味深げに眺めている間に、彼女は奥にあった暖炉脇にある壁の出っ張りに手を掛けた。

その出っ張りを力一杯壁に押し込むと、暖炉の左側の本棚がゆっくりとスライドして行き、隠し階段が現われた。

どうやら地下へと続いており、奥のほうからカビ臭い空気が吹き上げてくる。

「すごいね」

「んー、でもこの道、姫殿下がお作りになられたそうですけど、覚えてらっしゃらないのですか？」

「え？」

「なんでも王宮は息がつかまるとか言つて、ここから街に遊びに出ていらしたと姉はいつておりましたけども？」

「あ、ああ！　そ、そんなこともあつたかなあ？　さ、最近使つてなかつたから忘れてたよー、あはは」

「あらあら、忘れんぼさんでしたか」

「あ、あははは。忘れんぼさんでしたよー」

乾いた笑い声を上げながら、無理やり誤魔化す。

「こんなんで誤魔化せるのかな？　激しく不安だ。」

少女は暖炉の上においてあつたランタンに火を灯すと、僕のほうへと差し出す。

まあ地下は真つ暗だから、これがないと怖くて進めないよね。

僕はそれを受け取ると、一步だけ地下への階段に足を踏み入れた。

「私はここまでで失礼しますけれども、この先は一本道になっていくはずでございます。迷うこともないと思うのですよ」

「あ、うん。有難う」

「出口の開け閉めは、壁のこの窪みに手を突っ込んで取っ手を引くだけです」

「ほうほう、なるほど」

「それでは、お気をつけてお帰りくださいね。私はこの界限でよく迷っていますので、見かけたら声を掛けていただけると嬉しいのですよ」

「あ、う、うん。分かった。あの、色々ありがとうございます」

「いえいえ、貴女様のお力になれたのなら姉も喜んでくださると思うのです」

「そか」

僕と少女は笑顔で頷きあい、軽い別れの挨拶を交わした。

結局僕は最後まで彼女の名前を聞かなかったし、彼女も自分の名前を語るうともしなかった。

でもそれでいいのだ。

僕は取っ手を引いて、秘密の通路の扉を閉める。

ゆっくりと閉じてゆく入り口の向こうで黒髪の少女は、何故か出会った時に見せた暗く寂しい表情でこちらを見ている。

閉じる瞬間彼女が何かを呟いた気がしたのだが、扉の閉まる音でよく聞こえなかった。

気になりはしたものの、わざわざ開けて聞きなおす事も躊躇われたので、僕はそのまま隠し通路を進んでゆくことにした。

“やはり、私の事は覚えていらっしやらないのですね、姫様……”

たら、ればの話だが、この時の彼女の呟きを僕が聞き逃していなかったら、あるいはボーマンは事件に巻き込まれずに済んだのだろうか……

俺は自分の荒ぶる感情を上手くコントロール出来ないまま、古ぼけた館の扉を思いっきり殴るようにして押し開く。

丁度ロビーの掃除をしていたガーゴイルの1体（プラチナブロンドで褐色の肌をした健康そうな奴）が、その音にびっくりしてバケツを床に落として慌てていた。

「ドクターは何処にいる？」

「あ、あう、リビングでお茶してるけど……」

それだけ聞くと俺はガーゴイルが指を差した先にあるリビングに向かった。

「お、お前！ 片付け手伝えよなあ！！」

ガーゴイルの怒鳴り声が聞こえたけれど、今はそんな事にかかりあっている暇は無い。

ずんずんと奥に進んで、リビングのドアも荒々しく開け放つ。

ガラス張りのテラスっぽいところでジュークと二人お茶をしているドクターを発見すると、俺は大腿でそちらへと詰め寄った。

良く見れば机の上にへんてこな人形が置かれていたが、とりあえず今は関係ない。

「ドクター！」

「なんだ騒々しい。来訪のマナーすら守れんのか、ひよっこは」
「姫様と会った」

あざける様な表情だったドクターが、俺の一言で真顔になった。持っていたカップをソーサーに戻すと、体ごと俺に向き直る。

俺は机の上にさっき姫様から貰った指輪のケースを置く。

「ミーシャさんに伝言だ」

「聞かずともこれを見れば予想はつくが、一応聞こうか」

「これ売って王都から離れると。あと自分には二度と関わらない方が良いでしょう」

「……そうか。その道を行くか」

何やらしたり顔で頷くドクターに、俺は我慢できずにテーブルにカ一杯両手を叩きつけた。

テーブルの上においてあったカップやら人形やらが飛び跳ね、中身が零れてクロスを汚す。

ジュークがこつちを無言で睨んでいるが、そんなことは毛筋の先ほども気にならない。

「納得出来ねえよ！」

「何がだ？」

「姫様のやりようも、それを止められない俺にも！」

「……」

「何よりそんな風に姫様を追い込んだ奴らを、俺は許せねえ！」

もう一度、カ一杯テーブルに八つ当たりする。

今度はドクターもジュークもさっとカップに手をやって、中身がこれ以上零れるのを防いだのだが、まあ今の俺にはどうでもいい。ドクターを睨みつけ、俺は言う。

「教えてくれ！ 姫様を守るために、俺はどう剣を振るったらいいんだ？」

「キヤハツ、それドクターに物を頼む姿勢じゃないよね？ これだから騎士とか衛士とかいうヤツらは馬鹿だというんだ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ！」

「自分で考えられないなら、土下座でもしてみればあ？」

馬鹿にするようにそう言い放つジュークにむかつ腹を立てるが、でもそんなことくらいで道が開けるなら安いもんだ。

俺は腰に下げていた木刀を外して片膝をつき、剣をもった手を目の前について頭を垂れる。

「俺は政治とか貴族のしがらみとか苦手によく分からない。恥を忍んでお願いします。姫様の敵を、知っているなら教えてください」

「物事は、そんな簡単に割り切れるものではない」

「だけど、ミーシャさんを襲った奴らさえいなけりゃ」

「そんな奴らは唯の三下だ。トカゲの尻尾と一緒に、切れてもまた生えてくるものだ。それをいちいち潰したところで、姫様の状況は何一つ変わらんだらうて」

「なら、元凶を見つけ出して」

「例えば国内にいるその元凶とやらを潰したとしても、姫様を利用しようとする輩や害そうとする輩など後からいくらでも湧いてくる」「ならそれも皆潰してやる！」

そう意気込んで啖呵を切る俺を、何故か物凄い憐れみを持って見下された。

え？ 俺のその考えは駄目なのか？

ジュークも呆れ返った顔でため息なんかついている。

「ドクター、やっぱりこの馬鹿には難しすぎて分からないんだよ」
「小僧、お前のその木刀を寄越せ」
「？」

訳が分からないまま、手にした木刀を渡す。
ドクターはそれを手にすると、俺の目の前にかざした。

「この木刀はお前だ」
「はい」
「そしてお前を姫様だと仮定する」
「は、はあ？」

そしてドクターが手にしていた木刀を脇に放り出し、彼の懐に差してあった細い棒を俺の首筋に当てる。
意味が分からずぼんやりと棒を眺めていたら、それで思いつきり頭を殴られた。

「いてえ！ 何すんだよ！」
「これが姫様の現状だ」
「はあ？」
「さて、この状況でどうやってあの木刀は主であるお前を守ることが出来る？」

簡単じゃないか、木刀を手に取れば良いだけだ。
そう思って立ち上がり木刀を取りに行こうとしたら、また思いつき殴られた。

「いてえよ！ 何するんだよ！」

「姫様から木刀を取りにいつてどうする？ 姫様は木刀が傷つくのを恐れて遠くにやろうとしているのだぞ？」

「いや、でも木刀が無かつたら守れないぞ？」

「当たり前のことを言うな」

「??????」

意味が分からず頭を捻っていると、ドクターが呆れ顔で呟いた。

「姫様から木刀に近づかないのであれば、木刀から姫様に近づけばいいのではないか」

「何いつてるんだ、木刀に足が生えているわけがない」

といったところで、思いつきり俺の足を棒で殴りつけるドクター！
くそつ、こいつ何気に力がありやがる。

太ももを擦りながら、俺はドクターを睨み付けた。

「お前のそれは飾りか？」

「飾りのわけが無い！」

「なら行動しろ。木刀は敵を探さないし考えない。ただ主の為にの

み、その敵を討つものだ」

慌しく館を去ってゆく若い騎士の背を見送りながら、ドクター・グエロはテラスの窓辺に佇む。

その背に、テーブルから声が掛けられた。

「ドクター、お願いがあります」

「……なんだね？」

「体を作っていたきたいのです」

「……だが、彼女はそれを望みはしないぞ？ 残りの余生、静かな田舎町で過ごすのもよいものだ」

「剣はその主の敵をただ討つもの、とおっしゃられましたね。では侍女である私は、ただ主のために尽くすのみです」

「本体の処置はどうする？」

「お任せします。煮るなり焼くなり好きなように。動かない体に、用などありませんから」

ドクター・グエロは徐に振り返ってテーブルの上にある人形を見つめた。

傍に控えていたジュークに視線を移す。

「直ぐに使える戦闘タイプが1つあります」

「永くは持たんぞ？ 最悪魔力が尽きれば、戦闘体は泡となって消

えてしまつわけだが……」

「それで構いません。よろしくお願いします」

ドクター・グエロは深いため息を漏らすと、ジュークに指示を出した。

「術式の用意を。まったく老体をこき使うとは、とんでもない侍女だな」

「ありがとうございます、ドクター」

39話「無理やりつてよくないと思うんだよ、ボクは」

路地裏の薄暗闇の中、どこにでも居そうなごくごく平凡な顔つきの男が私を待っていた。

そのガラス玉の様な無機質な視線に心の底まで蹂躪されたような気がして、思わず背筋を震わせてしまう。

そんな私の怯えを見抜いたかのように、男はニタリといやらしく笑みを貼り付けた。

「どうしたのですか、ルナ」

「別に、どうもしませんわ」

「そうですか。でも、どうして殺ってしまったのですか？」

「……」

男は生理的に受け付けないような笑みを浮かべながら、近寄ってくる。

この男はいつもそうだ。

普段は居るのか居ないのか分からないほどに存在が希薄なくせに、相手の弱みや悲しみなどの負の感情を感じ取ると悪魔の様な笑みを浮かべる。

命の恩人でなければ、こんな下衆な男と係わり合いになりたくも無かった。

「あの教会はすでに廃屋となって長い年月が経っています。あの物置で、いや、あるいは隠し通路の中でもいいですね。短剣をこの辺りに刺し込めば、死ぬほどの苦しみを味わいながら暗闇の中でじわ

りじわりと死んでいくのに」

そういつて男は私の右のあばら骨の一番下辺りを撫で回す。きつとこの男の頭の中では、あの可愛らしい姫様が何度となく刺し殺されているのだろう。

粘り気のある気味の悪い笑みを見て、私はそう確信する。

それは自分の中の大切な何かを踏みにじられているような気がして吐き気がした。

「命を救っていただいた事には感謝していますが、私は貴方達の手先ではありません。私が殺したいと思ったときが復讐する時です」
「それはそうですが、高貴な方にも事情もあれば時間もありません。いつまでも貴方を匿っていられるとは限りませんよ？ ましてやあの売女の娘に顔を見せたのです。そうそう時間はかけられません」

私はこの男に助けられた。

レオ様の私邸を辞去し故郷に帰る途中、駅馬車に乗り合わせていた人達ごと闇に葬り去られるところを、この男がたまたま通りかかって助けてもらったのだ。

陰謀の全容について知らされた私は、首謀者である壘行姫の追及の手を逃れるために男の言うままに王都に舞い戻ってきた。

姉の死に報いる為に、駅馬車に居合わせた人達の恨みのために、何より自分自身の平穩の為に。

「あの娘は……、あの姫様は私を見ても驚きませんでしたわ」

「？」

「あの姫様は、本当にスワジク・ヴォルフ・ゴードインなのでしょ
うか？」

「逆に聞きますが、あの容姿を持っていて尚、彼女がそうでないと
言い張るのですか？」

「いえ、あれは確かに姫様でした」

「ならば何を迷うのです。今更止めるのですか？ レイチエル殿や
駅馬車の人々の悲しみを、あの蛮行姫の悪行を許せるのですか？
許していいのですか？」

「許しはしません。でも……」

煮え切らない私の態度を見て深いため息をついた男は、肩をすく
めてまた無表情に戻った。

どこにでも居る有象無象へ。

私の背に押し掛かるようにあったプレッシャーが、それだけで
うっと軽くなる。

それで私は理解することが出来た。

私はこの男が堪らなく怖いのだという事に。

「まあ、いいでしょう。高貴な方からも、蛮行姫が記憶喪失だとい
う情報が入っています。あなたの顔を見て驚かなかったところを見
れば、それは正しい情報だったという事です。となれば、利はここ
らにある。おそらく蛮行姫はあの出入り口を使って、今後街に出て
くるに違いありません。そのチャンスを狙っていく事にしましょう。
出来る限り仲良くして最後に裏切るというのも、非常にそそる殺し
方ですしね」

何も答えない私を暫くじっと見つめていた男は、口の端だけを歪

めて笑う。

「貴女がその気になるのを気長に待つことにします。ま、もっとも高貴な方から命令があれば、貴女の都合などお構いなしになつてしまえますが。そうならないように、お早めに決断をしていただけると助かります」

「分かりましたわ」

「あ、そうそう、もうじきお仲間が増える予定です。その方も大層蛮行姫に恨みを持っておられます。ええ、きつと顔をあわせたらびっくりするでしょうね。今から楽しみです」

そういつて男は闇に溶け込むように消えてゆく。

最初は魔法でも使っているのかと思つたが、そんな様子はない。きつとあいつは悪魔の使徒なのだろう。

だから魔法を使わなくても、簡単に闇に溶け込めるのだ。

ということは、私は悪魔に魅入られた馬鹿な女ということなのだろうか。

仲間が増えるということは、あの悪魔に魅入られた人が増えたということ。

その人は蛮行姫にどんな仕打ちを受けたのだろうか。

こんな茨の道を歩まないように、なんとか守つてあげたいと思う。

ふと幸せな頃の姉の顔が、声が浮かんでは消える。

あの頃はただ、姉に守られて日々を過ごすだけでよかったのに。

一体私の人生は何処で狂つてしまったのだろうか。

どこかに私を救ってくれる人はいるのだろうか。

やるせなさに沈んでしまいそうになる気持ちを、姉の笑顔や駅馬車にたまたま乗っていた人達の死に様を思い起こす事で奮い立たせる。

今は落ち込んでいる場合ではない。

この復讐はきつとこの国にとつても『いい事』なのだから。だから、私は『悪い人』になろうと決めたのだ。

所は変わって、王宮にある近衛隊舎の一室。

机の上に置かれているのは、近衛隊の証である白銀の剣。

特殊な製法でつくっていて、普通の剣とは違い刀身が輝くような銀色をしていることから、その通り名がついた剣である。

その輝かしい剣の向こう側に座っているのは、近衛隊のコワルスキー、筋肉マツチヨのおっさんだ。

俺とおっさんは、こうやって小一時間ほどにらみ合っている。

なんでかという俺が近衛隊に入るのではなくて、姫様の騎士として認めてもらえるようお願いしたからだ。

で、ヴィヴィオさんが姫様の意思を確認しに、北の塔舎へと行ってもらっている。

その結果待ちの為に、本当に仕方なくこの場にとどまっているのだ。

本心を言えば、今すぐにでも姫様の元へ行つて、警護に当たりたいくらいなのである。

それを乏しい自制心をフル稼働させて、現状を耐えているのだ。

うん、騎士の鑑だと自分で自賛しておこうか。

「なんで、近衛じゃねえんだ？」

「俺は姫様の為に戻ってきたんだよ！ 姫様以外の為に剣を振るつもりはない」

さっきから何度も繰り返されている問答だ。

おっさんは俺が姫様の騎士になることを嫌がっているようだが、こればかりは譲れねえ。

それにあんな首の切り方をされて、また頭を下げた働かぬ気にもなれないしな。

沈黙が支配する部屋の扉が、ようやく静かに開け放たれた。

俺もおっさんも、入ってきたヴィヴィオさんに視線を向ける。

「どうだった？」

おっさんがヴィヴィオさんに声を掛ける。

彼女は疲れた顔をして首を横に振った。

「姫様は騎士など要らないと。自分のことは自分で出来るから放つて置いて欲しいとも」

「ま、最近の姫様の行動をみてりゃ予想は出来たけどな」

別段落胆した様子もない2人に対して、俺は逆に激しくショックを受けていた。

確かにいきなり騎士にしてくれなどと言って、すぐに良い返事が返ってくるとは思ってもいなかったが、まさか会っても貰えないなどとは夢にも思ってもいなかったのだ。

そこまで姫様は自分を追い込んでいるのかと思うと、居ても経つても居られなくなる。

思わず腰を浮かせかけた俺に、ヴィヴィオさんが質問をしてきた。

「ボーマン、君は姫様に『貴女のことは友達と思ったことなどない』と言ったかしら？」

「あ？ え、ええ、確かに言いました。迷惑は掛けられない、友達は選べというようなことを言われたので、それは違うだろうと」

「……なるほど」

ヴィヴィオさんがこめかみを押さえて、なにやら痛みを耐えるような仕草をしている。

俺はあまり意味がよく分からなくて、おっさんの方を見た。

おっさんにはなにか思い当たる節があるのか、とても残念そうな表情だ。

「えと、何か拙かったですかね？」

恐る恐るヴィヴィオさんに声を掛けてみた。

彼女はどっかって良いのか迷った挙句、とんでもないことを口出す。

「ボーマン、あなた女の子と付き合ったことないでしょう？」

「はぐうあつ。そ、そんな胸を突き刺すような一言を、何故今言わないといけないのですか？」

「まあ、なんとなくお前さんの考えていた事は、騎士としては理解できるぜ。騎士と主の関係をそこいらの友達関係と一緒にされちゃ、

そら堪らんわな」

「で、ですよね!？」

さつきまでの険悪なおっさんとの関係をかなぐり捨てて、その援護射撃に最大級の尊敬の眼差しを送る。

だがその援軍もあっさりと敵に寝返った。

「だがよ、友達とは思ったこともない、で話をぶった切ったら、そりゃ姫様も傷つくわな」

「え? え?」

「言葉が圧倒的に足りないですよ、ボーマン君」

「いや、ヴィヴィオ、俺なら一言で済まずぜ? 俺に任せろってな具合で」

「あなたにはムードがないのですよ。それでよくあんな良い奥さんを貰えたものですね? 王宮七不思議のひとつです」

「おめえ、女つてのはな、無理やり引っ張って貰いたいって願望があつてだな、多少強引な方がいいんだよ」

「全部が全部、そんな女性ばかりだと思われているのも不愉快なのですが?」

「そんなツンケンしてるから婚期を逃しそうになってるんじゃないかねえか」

瞬間、部屋の空気が5度は下がったように俺には感じれた。

これが圧倒的な死の恐怖というものなのだろう。

そのプレッシャーに、さすが歴戦の勇士であるおっさんはたじろぎもしていなかった。

だが恐怖の女王は、さらにその上を行った。

机の上にあつた剣を手にすると、無言でそれを鞘つきのまま振りぬく。

俺も騎士を目指す者の端くれだ。

女性が振る剣筋など容易に見切れると思っていた。

いわんや歴戦の勇士ともなるおっさんであれば、それは確信としてあつたはず。

だが、そんな俺たちの予想をはるかに上回る斬撃に、おっさんは頬を張られて首がおかしな方向に傾いていた。

「誰が行き遅れですって？」

鼻からぼたぼた血を垂らしながら、兎のように震えているおっさん。

だが、そんなおっさんを俺は笑えなかった。

なぜならヴィヴィオさんの形相に、俺は本気でちびりそうなのだから。

だが、獅子は兎を狩るのにも全力を持って当たるといふ。

静かに振り上げられる2撃目を、後悔の眼差しをもって見つめ続けるおっさん。

すまねえ、俺にはあんたを助ける力などない。

迷わず成仏してくれ！

おっさんの最後を見る前に、俺はその場から逃げる。

とりあえずおっさんからヒントは得た。

彼の遺言となつた言葉を実行するため、俺はひたすら北の塔舎を目指す。

べ、別に背後から般若のようなヴィヴィオさんが追いかけてきそうだからとか、そういった理由じゃないんだからね！

ふと空を見上げると昼だというのに、一粒の星が煌いていた。

ああ、おっさん、あんたの貴い犠牲は明日くらいまでは覚えておくことにするよ。

俺の背後で3回くらい鈍い打撃音が聞こえてきたが、全身全霊を持って聞こえなかった振りをした。

俺は北の塔舎に入ると全速力で3階へと駆け上がる。

途中ライラさんに出会ったから、姫様が寝室に居る事もちゃんと確認済みだ。

頭の中で、何を言うかもきちんと整理しておく。

とりあえずは、言葉足らずで傷つけた件は平謝りだな。

それで、ちゃんと俺は姫様を守ってやりたいんだと大声で言えば、きつと頷いてくれるはず。

なんか都合よすぎかもしれないけれど、虚仮の一念岩をも通す、だ！

俺は姫様の部屋の前にたどり着くと、ノックももどかしく中に踊りこむ。

俺の目の前にあるのは、部屋の中央に置かれた大きなベッド。

ベッドから少し離れた場所にはダイニングテーブル。

そのテーブルの上には色とりどりのドレスが置かれており、その傍に姫様が一糸纏わぬ格好で立ち尽くしていた。

初雪のように真っ白な肌に、さらりとかかる透明感のある銀色の髪。

その様がとても幻想的で美しく、来る途中に考えていた科白が全部頭から消えてしまった。

「ひうつ！ ぼ、ボーマン？ なんで？」

「あ、うあ、えー？」

慌てて手にしていた小さい布で体を隠そうとしているようだが、あれは多分パンツだから体を隠すには圧倒的に面積が足りないはず。顔を真っ赤にして慌てている姫様を、なぜが妙に冷静な頭が克明に記憶領域へと記録してゆく。

「ちよ、ボーマン、何しにきたのさっ！！」

「あ、は、はい！ ひ、姫様、お、お、俺、（友達じゃないなんて言っつて）すみません！ 俺は貴女を（守っつて）やりたいんです！」
「ちよ、お、落ち着け、ボーマン！ いくら年頃だからって、こんな無理やりなんてっ！」

「俺、貴女を見たら（苦しんでいる姿を）、もう我慢出来ないんです！」

「ふぎやあああああ」

そういつて、姫様の肩に手を置いてがっちりホールドした。

うん、今考えても俺は死ぬほどテンパっていたんだと思う。

なるほど、ヴィヴィオさんが言葉足らずだという訳だ。

まあ、この反省は鳥の冠亭に帰ってから気付いたことではあるのだけれども。

そんな俺に、姫様は錯乱しながらも金的攻撃を敢行してきた。

テンパっている俺には当然防げるわけもなく、一発で悶絶し部屋の外へと放り出される。

そこへ隊舎から追いかけてきたヴィヴィオさんがやってきて、部屋の中にいた姫様と2、3言葉を交わした後、汚物を扱うような感じで城外へ放り出された。

もちろん騎士にも成れなかったし、今後王宮にも近づくなと釘をさされるオマケつきだ。

……どうしてこうなった？

40話「悪魔の囁き」

地下室特有のカビ臭さとランタンに使われている質の悪い獣脂の臭いが交じり合って、今にも鼻がもげそう。

そのくせに廊下の先に吊るしてあるランタンの光は、通路の一番奥にあるこの牢屋にまでは殆ど届かない。

まったく理不尽だと思う。

だけど最近はそのなかなかな光でも部屋の中の様子がよく分かるようになってきた。

嬉しくない自分の順応ぶりに、ここに閉じ込められてから何百回目のため息を付く。

不衛生な簡易ベッドに、枕元にある地面に穴が開いただけのトイレ。

看守からは丸見えの位置にあり、見られているのではないかという恐怖と戦わなければ排泄もままならない。

救いがあるといえば、排泄後の処理用にと綺麗な地下水が用意されていることだろうか。

ただこれは飲用には向いていないようで、飲むとお腹を下すらしい。

センドリックさんが、私をここ連れてきた時にくれぐれも飲まないようにと教えてくれたのだ。

本当の囚人であれば、そんな情報すら与えてもらえず、飢えと乾きの為にその水を飲んでしまつらしい。

一度下痢になってしまうと脱水症状と腹痛の2重苦に晒され、体力のない者なら1週間もすれば死ぬ一歩手前まで行くそうだ。

ところが私には毎日2回きちんとした食事を与えられ、飲み水もピッチャーに入れて部屋の片隅に置かれている。

牢屋の中の設備はそのままだけれども、少なくとも囚人に対する待遇ではないことは間違いない。

心配そうな姫様の顔が脳裏をよぎるが、それを無理やり憎しみの言葉で塗りつぶす。

「嫌い、嫌い、大嫌い。あの人のせいでミーシャちゃんが死んだんだもの。こんな偽善で許したりしないんだから」

私はシラミが湧いていそうなベッドの上で、一人膝を抱えて呪詛を唱え続ける。

昼も夜も分らないこの牢屋で気が狂いそうになりながらも、私は銀色の髪少女を呪いつづけた。

ミーシャちゃんと初めて出会ったのは、私が実家のラヴオニート伯爵家から出仕してきたその初日だ。

ヴィヴィオさんに連れられて侍女控え室で皆に紹介してもらっていた時、ミーシャちゃんから凄く目で睨まれていたのを覚えている。後で聞いたら、好みの女の子が入ってきて思わずガン見していただけらしいんだけど。

ミーシャちゃんが何を考えていたかなんて分からない私には、物凄く怖い人としか移らなかつたし。

そんな初対面だからどうしても苦手意識が先に来て、ろくな挨拶も出来なかつた。

貴族出の侍女は平民出の侍女から何かと苛められると噂に聞いていたから、なお更ミーシャちゃんから距離を置くように心掛けた。

でも実際苛めて来たのは貴族出の侍女達。

有力な貴族やフェイタル王子の気を引くために、婚活的に邪魔になりそうな相手は徹底して嫌がらせをしているらしい。

何をしてもみんなの2倍くらい時間がかかってしまう私は、彼女達にとっては格好のイジメの対象だったのだろう。

見てないところで仕事の邪魔をしておいて、時間通り仕事が出来ない私を暗に笑いものにする毎日。

分かっていても怖くて何も言えず、悔しくて毎日自室の枕を涙で濡らしていたっけ。

ある日お客様に出すお茶を容易していたら、わざと私のカートに小麦粉が入ったポットを落として嫌がらせをしてきた侍女がいた。

当然お茶やカップ、ワゴンはもちろん、私のエプロンドレスまで真っ白になってしまう。

あまりの事に呆然と立ち尽くしていたら、その侍女は凄いい猫撫で声で謝り出す。

ふと顔を上げてその侍女を見たら、謝っているのは形ばかりで目は完全に私を嘲笑っている。

何か言わなきゃという思いと、悔しいという想い、悲しみや情けなさがいっぺんに頭に上って、私は無言でぼろぼろと泣き始めてしまっ。

この年になって人前で泣く事になるとは、実家に居た頃には夢想すら出来なかったことだ。

そこに颯爽とやってきたのが、ミーシャちゃん。

一目みて事態を把握したのか無言でポットを落とした侍女に詰め寄って、彼女に向かって強い口調で言い放つ。

「脱げ」

この人、こんな場面で何を言っているのだろう？

私は泣きながらも顔を上げてミーシャちゃんの背中を見た。

そしてその先で顔を真っ青にして震えている侍女の姿も。

「そう、脱げないの。じゃあ、手伝ってあげる」

言うが早いか、激しく抵抗している侍女のエプロンドレスを、器用にもあつという間に剥ぎ取った。

あまりの早業に、私も脱がされた侍女も唾然とするしかない。

後日その秘技の話になったら、ミーシャちゃんは「つまらない者を脱がせてしまった」と苦笑いしてただけだね。

それはそれとして、下着姿になった侍女は涙目になりながらも、無礼者やら自分の家の権力を傘に来たような発言をミーシャちゃんに吐き続けた。

ミーシャちゃんはその全てを鼻で笑った挙句、

「そういえば君の実家、ウチに結構な借金があるんだけど？ 家を出してくるなら、当然ウチの実家も出てくるわけだけど、その覚悟があるの？」

と冷ややかに言い放ったのだ。

彼女はそれで何も言えなくなり、安っぽい捨てゼリフを吐いて逃げた。

ぼかんと成り行きを見守っていた私に、ミーシャちゃんは振り返って微笑みかけてくれる。

「その格好じゃ仕事に差し支えるよ。これ、サイズは合うはずだから着替えると良い」

「あ、あの……、どうして?」

「何が?」

「どうして、私を助けてくれたんですか?」

「いや、どうして助けたと言われても。もしかして助けられない方が良かった?」

ふるふると首を左右に振って意思表示して、でも彼女の笑顔が眩しくて真っ直ぐに見れない。

もちろん今までミーシャちゃんを避け続けていたという罪悪感も手伝っている。

「私、貴女にひどいことしてたのに……。怖がって避けてたのに」

「ん? あはは。そっか。でもその怯えっぷりがまた可愛かったんだけどねえ」

「はあ?」

「あ、いや、こっちのこと。さあ、脱いで。幸い髪には掛かってないから、顔とか拭いて着替えたら大丈夫だよ。その間に私がお茶の用意をしておくから」

そういつて服をテーブルの上において、ミーシャちゃんはワゴンの上を綺麗に片付けてゆく。

私はミーシャちゃんの後姿に、少しだけ勇気を出して声を掛けた。

「あの!」

「ん? 何?」

「わ、私、アニス・ラヴオニートって言います。実家は辺境伯なん

ですけど、ご存知でしょうか？」

「へえ、伯爵令嬢なんだ。どつりで物腰が上品なわけね」

「あの、あ、貴女のお名前を……」

「ん？ ああ、ちゃんと名乗ってなかったっけ？ 私はミーシャ。」

ミーシャ・クロフェルト。よろしくね、アニス」

その後、私とミーシャちゃんは周りがびっくりするほど仲良くなった。

まるで生まれたときから一緒にいた姉妹のようだと人に揶揄されるくらいに。

臆病で弱虫だった私に出来た、初めての親友といっていい存在。

まあ、そのあといろいろあってミーシャちゃんの恋人になっちゃったわけだけけど。

牢屋の中に木霊する私の嗚咽。

ミーシャちゃんとの思い出が、私の心をかき乱す。

もうミーシャちゃんは、あの笑顔を私に向けてくれない。

あの力強い声で私の名前を呼んでくれないんだ。

そう思うと、枯れたと思っていた涙が後から後から溢れてくるのだ。

「嫌だよお。ミーシャちゃん、嫌だよお……」

その時、ゆっくりと牢屋の扉が開かれた。

食事の時間でもないのに扉が開いたことに不信感を覚えて、泣き

ながらも顔を上げてそちらを見る。

そこには衛士の格好をした、表現しにくい人が立っていた。

あえて言うなら、どこにでも居そうな衛士の人といったところだろうか。

でも私の記憶の中に、こんな顔の衛士は居なかったはず。

思わずベッドから立ち上がって、その男から一番遠い部屋の隅へと逃げる。

ふわりと漂ってくる生臭い何か。

暗くて良く見えないけれど、抜き放っているナイフの先から水っ

ぽい何かが一滴落ちた。

ぴちゃりという粘ついた音に、何故か凄く心がざわつく。

自分の生存本能が危険を告げる。

この男はダメだと。

「アニス・ラヴォニート。貴女を迎えに来ました」

「……」

「大丈夫。私を信用しろなどとは言いません。私は貴女と取引に来たのです」

「……取引？」

「はい。人を一人、殺して欲しいのです」

男は口が横に裂けたかのような笑みを浮かべながら、ナイフを持たない手を私に差し出した。

さらに一步後ろに下がろうとしたけれど、後ろは既に壁でこれ以上逃げ場はない。

「憎いのでしょうか？ あの女が」

「……………」

「ええ、しゃべらなくても分かりますよ。狂おしいまでに荒れている貴女の心が。あなたが蛮行姫を殺してくれるのなら、私は貴女にそのチャンスと手段をあげましょう」

「……………姫、様を殺すの？」

「ええ、ミーシャさんを死地に追いやったのは、まぎれも無くあの女のせいです。貴女の大切な人は家畜を処理するかのように殺されたのに、あの女は豪華なベッドで毎日安眠しているのです。あなたがこんな薄暗い地下牢に閉じ込められている間に、あの女は贅を尽くした食事を腹いっぱい食べているのです。ええ、許せませんよねえ？」

「許せない」

「ならば私の手を取りなさい、アニス。貴女のその願いを、私はかなえて見せましょう」

その日、王宮の隔離地区の地下にある政治犯収容所からアニス・ラヴォニートが脱獄。

収容所にいた警備兵15名が全員一突きで殺されているのが発見され、王宮と王家の守護者たる近衛隊はその事実衝撃を受けることとなった。

41話「もう人には任せておけませんよ！」

陽が落ちて薄暗くなった廊下を、僕は鼻息を荒くしながらフェイ兄の執務室に向かう。

途中、衛士や赤い鎧を着た兵士さんとすれ違っけれど、僕の剣幕に怯いて誰も止めようとしない。

まあ、止められても押し通るけどね。

何をそんなに血相を変えてるのかっていうと、アニスの件、スヴィータから聞いたちゃったんだよ。

アニスが自分から脱獄なんてするはずもないし、15人もその為に殺すような娘じゃない。

大丈夫だとは思うけど、フェイ兄にはきちんとその辺りのこと確認しておかないと、後で取り返しの付かないことになってもいいけないしね。

僕はノックもそこそこに、フェイ兄の執務室に荒々しく乱入する。部屋の奥、大きな机にもたれ掛かるようにして、フェイ兄は難しい顔をして誰かと話していた。

フェイ兄と赤い鎧を着込んだワイルドでハンサムな騎士が、突然現われた僕にびっくりしてこっちに顔を向ける。

「どうしたんだい、スワジク？」

「フェイ兄様、アニスのことを小耳に挟んだのですけど」

「なっ、どうして!？ あ、いや……」

フェイ兄の取り乱しように、アニスの事は僕に知らせるつもりがなかったのだと理解した。

うん、スヴィータには感謝をしないとだね。

でなければ何も知らないままに、事は終わっていたかもしれないんだから。

場を取り繕おうとするフェイ兄の傍へ行つて、僕は下からその顔を少し睨むような感じ見上げる。

対するフェイ兄はほんの少しの時間で動揺から立ち直り、自然な笑みを浮かべつつ僕の肩に手を置く。

「スワジク、どこでその話を聞いてきたのかは知らないけれど、君はなんの心配もしなくていい。私達がきちんと君を守ってみせるから」

「そんなことを聞きに来たんじゃないです、フェイ兄様。アニスはどうなったのですか？ どうするおつもりなんですか？」

多分適当なことをいって追い返すつもりだったのだろうフェイ兄は、僕の追及に浮かべていた笑顔を強張らせる。

それでもフェイ兄は多少固い笑い声を上げながら、僕の頭に手をぽんと置く。

「心配しなくていい。必ず私たちが彼女の所在を掴んで捕まえて見せるから。だから安心して良いんだよ？」

「だーから！ それが安心出来ないんです！ アニスを捕まえるつてなんでです？」

「君に恨みがあつて脱獄したんだ。アニスを早く捕まえないといつか君に危害が加わるかもしれない、というのは分かってくれるよね？」

「何故もう犯罪者扱いなのですか？ そこが納得いきませんっ！」

睨み合う僕とフェイ兄の間に、ぬうっと一本の手が差し込まれる。邪魔な手の主を見上げると、さっきフェイ兄と喋っていた赤い鎧の騎士さんだ。

赤いボサボサの髪に小さな傷跡だらけの赤銅色の顔、猫科を髣髴とさせるような鋭い瞳に八重歯がちらりと見える大きな口。

どこから如何見ても、百戦錬磨の戦士って感じた。

彼は手だけではなくそのごつい体を僕とフェイ兄の間に割り込ませて来たから、思わず3歩ほど後ろに下がってしまふ。

なんか妙に負けた気がして、キツと赤い騎士さんを睨み付ける。

「すいませんがね、姫様。これは近衛と第一軍の俺たちの任務です。指揮権を持たない部外者に口を出されると、すっげー迷惑なんですけどね?」

「どんな任務?」

「は? 指揮権も持たない貴女に、何故説明せにやならんのか俺には理解しかねますがね」

嫌みつたらしく耳に小指を突っ込んで穿る赤い騎士。

なんでこいつこんな喧嘩腰なんだよ。

それに妙に見下されている気がしてとても気分が悪い。

ぐつと歯を噛み締めて、その怒りを下腹に押さえ込む。

「ア、アニスは私付の侍女だった者です。私には知る権利があるはずです」

「知る権利? はっ、なんすかそれは。ケンリとかいうもんが、俺たちの任務の邪魔をするほどたいそうなもんなんですかね?」

ここまであからさまに嘲笑と反抗というものを、真正面から叩きつけてきた相手はアニス以外では初めてだ。

そして彼の剥き出しの悪感情に、僕も怒りを持って向き合ってしまった。

この人たちに任せたら、きっとアニスは殺されてしまいかもしれない。

レイチエルの時とはまた違うけどきつと最悪の結果になる、そんな予感が僕の体を駆け抜けた。

「フェイ兄！ フェイ兄はちゃんと約束してくれましたよね？ レイチエルの二の舞は踏まないって」

「ふざけてんじゃねえよ！ そのレイチエルを殺したのは、お前だろうがよ！ その口でてめえは何抜かしてやがんだよ！」

がっとな胸倉をつかまれ強引に引き上げられる。

とたんに首が絞まって息苦しくなり、顔が赤くなっていく。

苦しむ僕の額に額をぶつけて、赤い騎士は大きな声で怒鳴り散らした。

「大体がそのアニスって侍女の親友が死んだのも、てめえが居たからじゃねえか！ なに部外者面してフェイに説教垂れてんだよ！」

「止さないか、クラウ！」

「お前もお前だ、フェイ！ いつまでこんな売女が産んだ汚物におべっか売ってやがる。ヴォルフ家の威光に継らなきゃ生きていけねえ屑なんぞ、とっとと実家に送り返せば良いだろうがよ！ この国

は俺たちだけでも十分に守っていける！！」

「幾ら従兄弟だからといって、言っただけの良い事と悪い事が有るんだぞ、クラウ。それにそのままではスワジクが死んでしまう」

呼吸が殆ど出来なくて意識が朦朧とする僕を見て、クラウと呼ばれた赤い騎士は忌々しげに手を離れた。

僕は思わず崩れ落ちて蹲り、ぜいぜい喘ぎながらも胸いっぱい息を吸い込む。

死ぬほどの息苦しさで自分とは無関係な部分で言われ放題な事に、悔し涙が零れた。

倒れこんだ僕のそばに慌ててヴィヴィオさんが寄ってきて、心配そうに背中を擦ってくれる。

僕はヴィヴィオさんの手をやんわりと押しのけて、震える膝に活を入れながらやっとこさ立ち上がった。

一瞬ふらつくと、さっとヴィヴィオさんが片肘を掴んで体を支えてくれる。

今度は手を払うことなく、彼女の好意に甘える事にした。

「貴方になんて言われようとも、ボクは……それでもアニスを助けていんだ」

クラウはつかつかと僕に近寄ると無造作に髪の毛を鷲掴みにして、そのまま僕を廊下まで引き摺ってゆく。

廊下に出たところで、勢いよく床に突き飛ばされる。

倒れた拍子に僕はどこかに頭を打ち付けたのか、意識を失ってしまった。

「胸糞悪い。他の奴らはどうか知らねえが、俺の前でいっぱしの口が利けると思うなよ？俺はお前なんかへとも思ってたねえんだからな」

薄れ行く意識の中、クラウのその言葉だけはしっかりと聞こえた。

ふと目を覚ますと、そこはいつものベッドの上だった。

起き上がろうとして、頭がぐわんぐわんと揺れて気持ち悪くなる。僕の気配に気がついたのか、誰かが僕の背中をそっと支えてくれた。

「あ、ごめんね、ありがとう」

「もう、大丈夫かい、僕の可愛いお姫様？」

「え？フ、フェイ兄？」

「さっきは酷いことになって済まなかった」

そう言って、フェイ兄は僕の頭に巻かれた包帯をそっと撫でる。

鈍い痛みはまだあるが、大人しくしている分にはそう問題はなさそう。

しかし、本当に手荒く扱われたなあ、あんな扱いは男だったときでもそうそうなかった気がするよ。

「クラウドは、君が入れ替わりだとは知らないんだ。だから君が話したことを本当の「スワジク姫」が喋っているものと思って、それで切れたみたいなんだ」

「……それでも、王女様に対する扱いじゃなかったよね」

「まあね。あいつは短気なので困るんだ。それに以前はそうなる事がお互いに予測出来たのか、徹底して避けあっていたしね」

「そっか。ボクがこのこ行って、もっともらしい顔して喋るから怒ったのか」

「まあ、そういうことになる。一応ヤツも王族の端くれではあるんだ。許してやってくれないだろうか？」

「……された事は許せないけど、でもきつと外の人の事がやって来たことを考えたら仕方ない……のかな？」

フェイ兄は苦笑いをしながら、僕の頭を優しく撫でる。

「んー、男に撫でられても嬉しくないが、でもまあ今はなんていうか気を使ってくれている雰囲気みたいなので、あんまり嫌な気持ちにはならない。」

「一応あいつにもきつく言っておいた。もうクラウドの方から君に近づく事は無いよ」

「んー、そだね、ボクも痛い目にはもう会いたくないし。今はそれでいいか」

「あいつに代わって、謝らせてもらっよ。本当にすまなかった」

「フェイ兄が謝ることじゃないと思うし。うん、今回のことはボクも不注意だったってことで」

「助かる」

僕の顔の横に並んで月明かりに照らされているフェイ兄の顔が、とても綺麗に微笑んでいる。

「うわぁ、これがイケメンパワーかぁ。」

男の僕でもちよつとドキドキするんだから、こりゃ女の子ならイチコロかもしらん。

「ちよつと頬を赤くして横目で盗み見ているのに気がついたのか、フェイ兄がおやつという顔で僕を覗き込んでくる。」

「照れている顔を見られるのが恥ずかしくて、僕は首がゴキッて音が鳴るくらいの勢いでそっぽを向く。」

「どうしたんだい、君？　なんか顔が赤いみたいだが、熱でも出て来たのかい？」

「あ、いや、別に大丈夫だと思うから。」

熱を測ろうとする手を両手で胸に押さえ込んで、危険を緊急回避！
今顔を触られたら、なんかいろいろと負けそう。

「と、と、ところでフェイ兄！　アニスはどうするの？　さっきはちゃんと話出来なかったから。」

「あ、え？　ああ、アニスカ。うん。アニスだな。」

「？」

「い、いや、なんでもない。アニスは今、第一軍の人員を使って市内を捜索中だ。」

「もしかして指名手配みたいな感じ？」

「指名手配という意味がよく分からないが、多分犯罪者を追いかけるという意味でいうなら、そういう事になる。」

僕はフェイ兄に半身を捻るように振り向く。
何故か真つ赤な顔をしたフェイ兄が、慌てたように顔を背ける。

「フェイ兄！ アニスは犯罪者じゃないよ！ 悪い奴らに連れ去られたんだ、きつと」

「そう思いたい気持ちも分かる。けどね、君の温情を相手が正しく受け取っていると思うのは、少し他人を信用しすぎるんじゃないのかな」

「なんでだよ！」

「君の意向もあって、当初は地下牢から直ぐにレオの屋敷に移すつもりだったんだ。スワジクを突き落とした侍女に我々がしたように」

そこまで言つて、苦虫を噛み潰したような顔になるフェイ兄。

きつとフェイ兄のことだからアニスに直接それを言いに行つたに違いない。

多分その時のやり取りを思い出して、こんな顔をしているんだろう。

アニス、一体フェイ兄に何を言ったのさ。

「拒否したの？」

「ああ。君の事を絶対に許さないと言い切っていたな。だからあれはもう君の知るアニス・ラヴォニートではないんだよ」

「……それは違つよ、フェイ兄。アニスはアニスだよ、何も変わらない。そりゃ、今は自分を見失っているかもしれないけれど、ミーシャが生きてるって知つたらこんな事はしなくなる」

「それについては、私の見通しが甘かった。君からその話を聞いた時に直ぐにでも彼女に教えておくべきだったんだ。レオの館に移して間諜の居ないところで事実を告げるつもりだった。相手に先手を許してしまったのは、間違いなく私のミスだな」

悔しそうに僕の両手の中で強張る腕を、僕はゆっくりと子供をあやすように叩く。

きつとフェイ兄は真面目すぎるんだろうなと思う。

僕ならきつと他の誰かのせいにして逃げるようなことでも、フェイ兄は逃げずに自分の問題だと馬鹿正直に真正面から取り組むんだ。陳腐な言いようかもしれないけれど、それはノブレス・オブリージユっていうものに違いないんだろう。

僕がフェイ兄くらの年のころは、きつと学校に通って世間のことなんか何も気にせず馬鹿ばっかやってた。

だからフェイ兄も、もう少し肩の力を抜くといいのになって思うときがある。

「そ、その、なんだ。君」

「ん？ 何かな、フェイ兄」

「そ、そろそろ手を開放して欲しいのだが。その、い、色々と困るんだ」

「あ、ああ、ごめんごめん」

そりゃ手を掴まれたままじゃ困るよね、ごめんごめんだよー。

僕は笑いながらフェイ兄の手をリリースして、照れ隠しにぺろりと下を出す。

なんか急にフェイ兄が咽た振りして勢いよく顔を逸らしたけれど、人の顔を見てそれは失礼だと思っただよ！

文句を言っつてやろうと身を乗り出したところで、頭がクラリとして目が少しだけ回る。

フェイ兄がしつかりと僕を受け止めてくれて、なんとか倒れるまでは行かなかつたけど。

ちくせう、さっきの奴、どんだけ思いっきり僕を床に叩きつけやがつたんだよ！

僕は悪態を心の中でつきつつ、フェイ兄に支えられるまま眩暈が治まるのをじっと待つ。

体感時間的には割りと長く感じたけど、実際には3分ほどじっとしてた。

ようやく眩暈が落ち着いて、いまの自分の有様に気が付いた。

月明かりが差し込む薄暗い部屋のベッドの上で、どうやら僕はフェイ兄にいつの間にもたれ掛かる格好になっていたのだ。

少し気恥ずかしくなったが、それでも今は人肌の温もりが心を落ち着けてくれる。

これが男のままの僕だったらちよつと困つたシーンだけでも、今は自他共に認める女の子。

少しの間くらいなら問題ない、ということにしておこつ。

「アニスのことは、善処するつもりだ」

「ん。分かつた」

フェイ兄は、多分精一杯にいろんな事を考えて言ってくれているんだ。

周りの事や僕の事、それにアニスの事も一生懸命考えて。

背中にあるフェイ兄の顔を見ようと頭を後ろに逸らす。

他人から見たら、フェイ兄の首元に顔をすりつけ甘えているように見える姿勢だ。

もつとも、僕にはそんな自覚はこれっぽっちも無い訳だけれども、そんな僕を見たこともないような優しい瞳で見下ろしているフェイ兄。

「フェイ兄？」

「あ、いや。考え事をしてた」

「考え事？」

「ああ、本当のスワジクも君のように心を開いていてくれたら、私は……」

「？」

きよとんとしてしている僕の顔を見て、本当に綺麗な笑顔のフェイ兄に、僕は思わず見とれてしまう。

くそう、イケメンって卑怯だ！

笑っているフェイ兄に、悔しくてむくれ顔を向けて非難する僕。

その僕の顔を後ろからそっと両手で包み込んだかと思うと、そっと唇を重ねてきた。

あまりの出来事に僕は凍ったようになるしかなくて、頭の中がパニックになっている。

フェイ兄はどうして僕にキスしてるのか？

っていうか、僕は男だっていうの……あー、言ってなかったわ。

これってどういう意味なんだ？ 友情の証？ 親愛の表現？

どれ位キスされたまま居たのか、少なくとも1分は動いてなかったんじゃないか？ いや、もっととされていたかもしれない。

「すまない。こんなつもりでは無かったんだ……」

「あ、う、うん。」

ゆっくりと僕から顔を離していきながら、バツが悪そうに言い訳をするフェイ兄。

僕もなんて返事していいか分からず、曖昧に頷くしかない。

そんな微妙な空気を振り払うように、フェイ兄が勢いよく立ち上がる。

「わ、私はそろそろ戻らなくてはならない」

「う、うん、そだね」

「今日はゆっくりお休みなさい」

「……は、はい、フェイ兄様」

顔を真っ赤にして逃げるように出て行くフェイ兄の後姿を、これまた顔を真っ赤にした僕が見送る。

なにこのBLシチュエーション。

いや、僕は今女の子だからBLにもならないのか……。

も、も、もちつけ、自分！

あれだ、今のは事故だ！ そう、出会いがしらの交通事故なんだよおおお！

暫くベッドの上で身悶えていた僕ではあるけれど、それでも自分のやりたいことは見失わない。

フェイ兄にはああ言ったけど、やっぱりクラウって人の事は安心出来ない。

見つけ次第、ですとろい、とかしかねない奴だしな。

ふらつく頭を押さえながら、僕は着替えるために起き上がる。

着替えてから少しのお金を持ち、隠しておいたランタンを手に僕はあの隠し通路へと向かう。

そう、僕は誰よりも先にアニスを見つけて、悲劇の元を断たなく
ちやいけない。

僕は秘密の扉の入り口の前に立ち、そう堅く決心したんだ。

42話「なんでこうなるの？」

薄暗い隠し通路を抜けて、僕はあの古ぼけた教会の物置へとやってきた。

出るときにランタンの灯りは消しているので、外には光は漏れていないはず。

もし誰かが見ていたら危ないから、そこはやっぱり細心の注意を払うことを忘れない。

暫く隠し通路の中から外の物音を聞いてみたけど、虫の鳴き声しかないので大丈夫そうだ。

まあ、こんな夜更けに裏寂れた教会の、しかも物置にくる人間なんて僕くらいなものだろう。

この間見た物置の様子と同じで山と積まれたガラクタと暖炉の傍に置かれた等身大のビスクドールが一つ……。

「あれ？　こんなところにこんなメイド服を着た人形なんて置いてたっけ？」

綺麗な緑色をしたボブカットの人形に、しばしボクは見とれてしまった。

っていつか、この間来たときはこんなの無かったよね？

こんな高価そうな人形を一体誰が持ってきたんだろう、もったいない。

きつと立ち上がったら僕と同じくらいの身長であろうビスクドールは、静かに月明かりに照らされて虚空を見つめていた。

もしかして呪いの日本人形みたいに動いたりして、などと馬鹿なことを考えつつ、そっと人形の頭を撫でてみる。

おおつ、凄いいい手触りだ。

「はあ、なんか癒されるなあ。この手触り気持ち良いよ。まったくこんな可愛い人形をこんな処に置いておくんなんてもつたいない！ 帰りもここにおいてあったら、持って帰ってみようかなあ？ って、ボクこんなことをしにここに来たんじゃ無かったよ！」

あまりの触り心地に夢中になって、危うく本来の目的を忘れかけるところだ。

早くアニスを探しに行かなきゃいけないんだった。

僕はガラクタの山の一角を、月明かりを頼りに物色し始める。

「確か、前にここを通ったときに見かけたんだけどなあ」

独り言を呟きながら、ガラクタの山の中へと手を突っ込む。

そうしてガラクタの山の端に埋もれていた一本の小剣を引きずり出してきた。

大体70cmくらいの長さの小剣で、ついてる鞘は今にもぼろぼろと崩れそう。

「自分を匣にするんだから、これくらいは持っていかないと流石に危ないよね」

薄汚れた鞘から剣を引き抜こうとするが、どうやら中で錆付いて

いるようで僕の力では抜けそうに無い。

この小剣ではさすがに人は切れはしないだろうけど、これで見れば痛い思いをするのは确实。

まあ最初から人を切るつもりなんて毛頭ないので、鞘付きのまま軽く素振りを試してみる。

「ほっ、たっ、と、とっ」と

うん、筋肉がまったく付いていない僕の体じゃ、こんな短い剣ですら満足に振りぬけない。

分かってはいたんだけどね。

でも有ると無いとでは、安心感が全然違う。

痴漢とかが出て、これを振り回せばきつと逃げていくに違い無い。

剣の埃を叩いてから、準備してきていたベルトに金具をひっ付けた。

「よし、準備オツケーだね」

僕はわざと外套の頭巾を外して、髪を目立つように外套の外に垂らした。

月の光を柔らかく反射して、僕の銀髪はきらきらと幻想的に輝いている。

うん、本当に綺麗だなあ、この髪は。

あんまりそんな事に関心してたら、ナルシストと思われてしまうかもしれないので良い加減なところでやめておく。

僕は物置の扉を内側から押し開けて、教会の中庭へと足を踏み出した。

月明かりがあるので、外は思ったより明るく感じる。

以前は教会の中を通って来たけれど、流石にこの時間に教会の中に入っていくのは躊躇われた。

神父さんとかが中で寝てたら、起こしてしまうかもしれないね。幸いなことにこの教会を囲む土塀は割りと低く、足がかりさえあればなんとかよじ登れそうだ。

僕は辺りを見回して、丁度踏み台になりそうな木の樽を見つけた。中身は入っていないのか思ったほど重くは無く、比較的楽に動かすことが出来そう。

「ふぐうううう！」

軽くは有ったんだけど、一人が入れそうな大きさの樽を動かすのって、思ったより重労働だった。

うん、この体のスペックが限りなく低いつてもあるんだろうけどね。

アニメの主人公とかだったらこんな土塀ひとつ跳びなんだろうけど、僕はアニメの主人公でもチート技能を持ち合わせたオリ主でもない。

やっとの思いで足場を作った僕は、その樽の上によじ登り、土塀の上に手をかける。

あとは自分の頭と同じくらいの高さしかないんだから、この壁を乗り越えるのは楽勝のはず。

そう思ってたぐつと体を引き上げるべく力を入れた。

「たやー！」

うん、飛び跳ねても体が30cmくらいしか持ち上がらない。

一旦手を離して息を整える。

気合は十分のはず、自分の身長くらいの高さなんだから大丈夫。

ただちよつと力が入れにくいだけなんだよ。

気合を入れなおして、再度チャレンジする。

「ひいぎいいい」

……45cmくらいかな？

いやいやいや、幾らなんでも非力すぎるでしょ、僕！

確かに筋トレとか体を鍛えるようなポジションの人でないのは分かっていたけど、でも懸垂1回すら出来ないレベルの非力さはあるえないんじゃないかな？

「もう一回！ ふりやつ！！」

「あらあら、後もちよつとですね」

「ふぬぬぬう！」

「腰を持ち上げてみましょうか？」

「ご、ごめん、お願いしていいかな？」

「ええ、よろしいですわよ」

急に腰をしたから持ち上げられて、ようやく上半身を土塀の上に引っ掛けることに成功した。

あとは足を持ち上げて、壁の上に寝そべるような形に出来れば—
安心だ。

スカートが捲くれるのも気にせずに、僕はがばりと足を上げて塀
によじ登った。

「向こう側に降りるのですよね？」

「あ、はい。そうです」

「じゃあ、向こう側に踏み台を移動させますね？」

「あ、有難うございます」

壁の上によじ登ったことで一息をつけた僕は、ようやく自分が誰
かと会話していることに気がつく。

眼下では、東洋人っぽい顔立ちの黒髪のメイドさんが僕が足場に
していた樽を、ころころと横倒しにして転がしている。

5mほど先に行くと木戸があって、彼女はポケットから鍵を出し
て木戸を開放した。

ころころころ……。

僕が無様に塀の上で寝そべっている辺りに来ると、寝転がしてい
た樽を起こして位置を調整する。

「さあ、どつぞ？」

「……」

「あああら。不機嫌そうな顔をされて、どうかなさいましたか？」

「……」

「さあ、こちらへ飛び降りたら壁を乗り越えたことになりますわ。
あと少しです。頑張りましょう」

いろいろと言いたい事はあるんだけども、何故か彼女のいい笑顔を見ていると怒るに怒れない。

きつと彼女なりに一生懸命考えて、僕の手伝いをしてくれたのだろうと思いたいけど。

僕は無言のまま塀の上で立ち上がって、樽に目掛けて飛び降りる。そしたら、樽の天板が抜けてそのまま僕は見事に樽の中にはまり込んでしまう。

黒髪メイドさんの視線が痛い。

もういやだ、帰りたい……。

「で、貴女はこんな時間にこんな所で何しているのかな？」

「そういうお姫様こそ、こんな時間に一人でお散歩ですか？」

「あ、いや、うん。散歩って言うか、人探して言うか？」

「人探しですか？」

「あー、うん。ちょっとね、侍女してくれる人が悪い人に連れ去られたみたいで」

「でも、それって兵隊さんのお仕事じゃないんですか？」

「あー、まあそうなんだけどね。ちょっと色々とあって、ボクが見つけないとその娘が危ないかなあって」

「んー、よく分かりません」

深夜の街を徘徊する僕の横に、メイドさんが並んで歩く。

最初は帰るように言ったんだけどぼやんとした顔で頷くだけで、一向に離れようとしてくれない。

うーん、ここを誰かに襲われでもしたら大変だよな。
どうやって追い返そう？

話をしながらも、僕は彼女から逃げ出すタイミングを探す。

「あんまり余所見をしながら歩いていると危ないですよ？」

「あはは、でも、ウチの侍女さんを探している訳だから、周りはちゃんと見て歩かないと」

まあ、今は君を撒く算段をしているんだけどね！

とある宿屋の前に差し掛かると、もう日も変わるうかという時分なのにまだ賑やかに営業をしているみたいだ。

中から香ばしい料理の匂いが立ち込める。

うん、晩御飯はしつかり食べたからお腹は空いてなんかいない。
空いてなんかはいないんだけど、匂いがするとうとうしても興味を惹かれてしまう。

「あらあら、何か買ってきましようか？」

「い、いや、大丈夫。今日は真面目に人捜ししてるんだから、買い食いなんてしている暇はないんだよ」

「歩きながら食べれるものでしたら、パヤリイはどうでしょうか。
中に入っている鶏肉と煮込み豆と野菜が絶妙なハーモニーを奏でていて、一度食べたら病みつきになること請け合いです」

「へえ、なんかタコスみたいなものかな？ って違う！ ボクは食べないっていったの！ 話ちゃんと聞いてくれている？」

「鶏肉の代わりに干し貝を使ったのもあるんですよ？ お姫様なら干し貝のほうがお好きですよ？ ちょっと行って買ってきますので、待っていてくださいね？」

「ちよっ！　なんで僕が貝好きって設定になってるの？　だからボクは食べないって……、ああ、行っちゃったよ」

後ろで纏めた黒髪を左右に揺らせながら、黒髪のメイドさんは『鳥の冠亭』へと入っていった。

なんであの人は僕の話聞いてくれないんだろう、本気で疲れるんだよ……。

といつつも、これはチャンスだ。

僕はそつと酒場の窓に注意しながら、後ろ向きに店の裏側へと移動する。

裏側に回って他に続く道があるならそつちを進んでも良いだろうし、仮に袋小路だったとしても息を潜めて隠れていれば、あのメイドさんもどっかに行ってくれるに違いない。

うん、完璧だな。

そう考えながら後ろ向きに進んでいたら、僕のお尻が何か柔らかいものにぼよんと当たる。

何かなと思って振り返ってみると、そこに居たのは僕のお尻の匂いを嗅いでいるロバの面があった。

そのロバは、なんていうかすっこいスケベそうな面構えで僕のお尻を眺めた挙句、あろう事かべろりと長い舌で舐めたのだ！

「ひいひい！」

「ブヒヒヒン」

「どうした、パレリカ？」

裏庭に馬小屋らしき建物あって、そこから男性の音がする。

エロバが嘶いたせいで、店の人にばれちゃったじゃないか！

僕は見つかったらヤバイと思って慌てて身を隠そうすると、急に後ろからスカートを力一杯引つ張られた。

不意の事だったので、僕はバランスを崩して尻餅をついてしまう。その際、何か引き裂かれる音がしたような気がしたけど、お尻が痛いのと昼間の頭を打った後遺症かちょっとだけ眩暈がした。

「パレリカ、どうしたんだよ一体？　って、ええええ!？」

目が回ってる傍で怒鳴らないで欲しいと思いつつも、声の主へと顔を向ける。

薄汚れた目の粗い作業着、細そうだけ結構筋肉質な腕、まだ幼さを残す顔に天然パーマが掛かった金色の短い髪。

その少年の顔は物凄く驚いているようで、大口を開けたまま固まっている。

「げっ、ボーマン」
「……」

僕が声を出したにも関わらず、ボーマンは一向に動き出そうとしない。

なんかどっかのショーウィンドウに飾られているとんでもマネキンのようだ。

お互い見つめあうこと数十秒。

突然、ボーマンの鼻から赤い筋が流れ出した。

「え？　ちよ、ボーマン、何で鼻血出してるの？」
「くおんのお、スケベーーーー！」

叫び声と共に何やら物凄い音がしたかと思うと、ボーマンが白目をむいて僕の方に倒れてくる。

「ちよ、ま、待って！　倒れてくんなあ」

突然の事に頭がついてゆけず、逃げるに逃げられなくなった僕にボーマンが倒れてきた。

丁度、尻餅をついて投げ出した両足の間に綺麗におさまるかのようになっ

しかもいつのまにやらスカートが裂けていて、下着が丸出しの状態で

そこにボーマンが顔を埋めるようにして倒れている。
流石にこれは男とか女とかいう以前に、物凄く衝撃的なシーン。

「う、う、うわあああああ！」

「ボーマン！　女の人の股間に顔を埋めるだなんて、なんて破廉恥なっ

地獄の底から響いてくるような声を上げながら、鬼の様な形相の翠の髪の少女、ニーナが手にフライパンを持って立っていた。

内心彼女の声と形相に悲鳴を上げそうになりつつも、なんとか声を殺すことに成功。

ニーナはボーマンの襟首をむんずと掴むと、無理やりに引き起そうとする。

「あ、あのー、ニーナ、さん？ 人間の背骨ってそっちにはあんまり曲がらないように出来ているんだけど……」

「な・に・か？」

「ごめんなさい」

襟首を後ろから掴まれているもんだから、気道が閉まって顔が紫色に変色している。

もうすぐ死ぬんじゃないかな、ボーマン。

呆然と事の成り行きを眺めていたら、今度はニーナが鬼の形相のまま僕の股間を凝視している。

恥ずかしいので両手で何とかカバーしてみるも、余計にニーナの視線が鋭くなるだけだった。

「ちよ、なんでそんなにガン見するのかな？」

「血……」

「血？」

「姫様、失礼ですけども、月のものは来てらっしゃいますか？」

「月のもの？ あ、ああ、アレね。うーん、当分先だって聞いているんだけど」

「そう、ですか」

鬼の様な形相から、今度は幽鬼のように無表情に変わるニーナ。あれ？ この娘こんな感じだったっけ？ もっとおどおどとして

て、チワワっぽかったような……。

片手でポーマンを引き摺りあげてニーナは呟く。

「ポーマン。姫様の事を剣を捧げる人だっというから、いろいろ我慢してたのに。姫様の純潔を奪っちゃったら、だ、だ、駄目なんじゃないかな？」

絶対的な冷気を纏った死の宣告。

ポーマンは白目をむいたままで、返答のしようも無い。

だが、それはある意味彼にとっては幸せなことだったのかも知れなかった。

片手に持ったフライパンの柄から、なにやらぎりぎり和不吉な軋みが聞こえる。

「自分の主君に欲情して襲うなんて、騎士の風上にも置けないよね。でも大丈夫、そんなポーマンでも私は見捨てたりなんかしないからね。一緒に死んでお詫びしようね、ポーマン」

「ちょおおおお！ ちよつとまつて！ ボクの純潔ってなにさ！

そんなの奪われてないから！ 全然大丈夫だから！ 落ち着いて、お願いだから落ち着いて！！」

目にも止まらぬ速さで振りぬかれるフライパンの往復びんたの嵐に、僕は怖くなってニーナを羽交い絞めにして動きを止めようとした。

その騒ぎを聞きつけて、どんどんと店の中にいた人たちが窓からこっちを見ている。

もちろん、その中にはあの東洋っぱい少女メイドも混ぜられている。彼女に見つからないままに逃げ出す計画も失敗。わざわざポーマンを危険から遠ざけようとしたのに、いきなりのエンカウント。

「なんでこうなるの!」

僕の魂の叫びは、誰にも届かないまま夜空に消えていった。

43話「自分に出来る事、自分がやらなければならない事」

厨房の一角で、僕とポーマン、それに名前も知らない東洋チックな美少女メイドさんが顔をつき合わせていた。

僕らから少し離れた洗い場で、ニーナが仕事をしながらジト目でこちらを見ている。

ああ、破れたスカートはニーナのお古を貰ってるので、パンツ丸出しな状態ではないことは力いっぱい主張しておく。

ただ、鼻血で汚れたパンツまでは替えがなかった。

ニーナに借りるにしても、肌に直接着るものだからやっぱりなんとなく気後れしてしまう。

貸す側のニーナも、姫様にお貸しできるような下着はありませんと勢いよく首を振ってたし。

そんなこんなでスカートだけは穿いたけど、下はノーパンという男が知ったらが喜びそうな状況に陥っている。

スカート自体は膝下までたっぷりあるから、風で捲れてというエロイベントはあり得ないといっていい事だけが救いか。

「で、姫様はどうしてこんな時間、こんな場所に侍女を1名しか連れずに歩いているのですか？」

「あ、いや、その」

視線が泳ぎまくりの僕の態度に、自然とポーマンの表情が険しくなる。

どう誤魔化そうと必死に考えていると、彼の視線が僕の腰に下げていた錆びた剣に向く。

なんか見られてるなあと思ってさりげなくお尻の方へ隠したら、

ポーマンの手が伸びてきて僕の剣を取り上げた。

ちよ、女の人のお尻に手を出すのは、セクハラだってば！

「それに、こんな剣なんか持ち出して……。手入れもしていないから刀身もボロボロじゃないですか」

「い、いや、その、それは護身用にと……」

「護身用？ これならそこら辺に落ちている棒を持っているほうがまだマシですよ？」

僕がいくら力を入れても抜けなかった刀を、いとも簡単に抜き放つ。

その拍子に鞘の中で嫌な音がして、抜き放った赤錆た刀身は全体の3分の2程度しか出てこなかった。

ポーマンはさらにその刀身を軽く料理用の大きな置き石に軽く叩き付ける。

と、剣はあつけ無くぼろぼろと崩れ去り、手には柄だけが残った。なんだよ、その砂糖菓子のような崩れ去り方は……。

残骸を踏み越えて、ポーマンが僕に詰め寄ってくる。

「説明、していただけますよね？」

「あらあら、隠すほどのことはありませんよ？ ただの人探しですとお姫様は仰ってましたもの」

「人探し？」

僕がポーマンの質問に答えあぐねていたら、横からメイドさんが突然口を挟んできた。

慌ててメイドさんの口に両手を押し当てて口封じを試みようとしたら、ポーマンにおでこを抑えられてしまって彼女に届かない。ってというか、一国のお姫様にその扱いはないと思う！

「人探しってどういうことですか？」

「ええ、なんでも悪い人達に侍女さんが連れ去られたらしくて、それを近衛さんや兵隊さんたちよりも先に見つけたたって仰ってましたわ」

「姫様、詳しく説明していただけるんですよね？」

「あ、あは、あははは」

ジト目のポーマンに睨まれて、引きつった笑いしかあげられない僕。

何勝手に暴露してるのさ、黒メイドさん！

もうしらばっくれる事も出来なくなつて、ぽつぽつとポーマンにアニスの一件を打ち明け始めた。

「なるほど。話は大体分かりました。では衛士達よりも先にアニスさんを探し当てなければいけない、という事ですね？」

「うん、まあそういう事なんだけど……」

「まだ何か話していないことがあるのですか？」

「ううん、それはないけど。ボクとしてはあんまり関わって欲しくないかなって」

ちょっと俯きつつ視線を横に外してブルーな表情を作る。

そんな僕を見て、ポーマンは大きいため息をついて首を前に落と

す。

なんか凄い勢いで呆れられている気がする。

そのポーズのまま、低い声でポーマンが僕に問いかけてきた。

「一人で行って何が出来るんです？」

「え、と。アニスを見つけて帰ってくるように説得しようかなと」

「説得できるんですか？　というより、説得出来る状況に持ち込めるんですか？」

「そ、それは……頑張るとしか」

「馬鹿ですね？　ええ、姫様は馬鹿ですよね？」

「ちょ！　た、確かに自分でも考えなしたとは思っけど！　逃げ足だけはちょっと自信あるし、やばいと思ったら即逃げるし！」

「そんな自分にだけ都合のいい状況になるわけじゃないじゃないですか」

僕だってどうしたらいいか位は考えたさ、ただいい案が思いつかなかっただけで。

でもフェイ兄たちに頼ったらアニスに死亡フラグが立つし、ポーマンや身近な人に個人的にお願いしたらその人達に危害が加わる可能性もある。

僕の知っている人達がお互いを傷つけあうのが我慢できないからの苦渋の選択だったのに、そんな僕の気持ちを分かりもしないでほんぽんと馬鹿を連発するポーマンに、僕はちょっとだけムツとした。

「それは自分でも分かってるけど……」

「分かっついて尚、殿下や近衛の皆はおるか僕の助力まで拒むって、それは自殺願望と一緒です！　だからあなたは馬鹿で決定です！」

「ば、馬鹿馬鹿いうなっ！　そんなの分かってるって言ってるじゃ

ん！ でもアニスもフェイ兄もスヴィータやライラ達も、もちろん
ボーマンやニーナだってミーシャみたいに成って欲しくないから一
人でやるうって思ったんだよ」

鼻息荒く睨み合う僕らの間に、にゅうつとごつい手が割って入っ
てきた。

手の主を見るとこの店の大将だった。

氣勢を殺がれた僕とボーマンは、ちよつと気まづげに大将と相手
を交互に見る。

無然とした表情の大将が、一言ぼつりつつぶやく。

「煩せえ、商売の邪魔だ。喧嘩するなら余所へ行きな」

「大将！ 今は大事な話をしてるところなんです。邪魔しないでく
ださい」

「だから煩せえつつてんだろうが」

問答無用で拳骨を落とされて、物理的に黙らされるボーマン。

両手で頭を押さえて蹲っているボーマンを無視して、大将が僕の
目の前までやって来た。

片手に凄い切れ味のよさそうな包丁を持っているから、凄い怖い
んですけど。

「悪いが話はある程度聞かせてもらったぜ。あんた、本当に噂の蛮
行姫様なのか？」

「まあ、一応そういうことになっています」

「はつきりしねえ返事だな。まあ、いいや。人を探しているなら、

無暗やたらに街を彷徨つても解決しねえぜ？」

「それは、確かにそうかもしれませんが」

「お嬢ちゃん、人探しに必要なものって何か知ってるか？」

包丁で肩をリズミカルに叩きながら、凄みのある顔で嗤う大将。

大将はどこかの悪役ボスキャラですか？

と、くだらない事は頭の隅に追いやって、大将の質問の答えを考
えてみる。

日本で人探しといえば、街頭ビラまき、警察、TVで搜索依頼、
あと有名占い師や超能力者、元FBI捜査官といった単語が浮かん
でくる。

そこから導き出される答えは、

「情報ですか？」

「そうだ。無暗やたらに動いたところで、一人で出来ることはたか
が知れている。なら自分は動かずに人を動かして情報を集めるのが、
大正解だと俺は考えるがな」

「そうはいいいますが、ボクにはそんな情報を集める力なんてありま
せん。それにフェイ兄たちには頼れないし……」

確かに大将のいう通りなんだけど、僕に情報収集の手段があるな
らば最初からこんな無謀な行動など起こさない。

頼れる人が居るのに頼れない、今の自分の状況を改めて思い知ら
されるだけである。

暗い顔をして俯きそうになる僕に、大将はにやりと笑って顎を振
った。

彼が示すその先にはカウンターがあり、さらにその向こう側には

まばらだけれどもまだ客の居るホールが見える。
意味が分からずに、大将を振り返った。

「わかんねえか？」

「えと、チラシを店に貼る、とかですか？」

「はっ、そんなんじゃ人は動かねえよ。あんたが本気でそのアニス
って侍女を探したいなら、あんた自らが頭を下げた聞いて回ればい
い」

「た、大将！ 姫様にそんなことさせられる訳ないでしょうがっ！
！」

「そ、そ、そうです！ そんな無茶なこととして万が一王宮にばれた
ら、大変なことになっちゃいますよう！」

大将の提案を聞いていたボーマンとニーナが、二人同時に泡を食
って反対意見を叫び出す。

まあ、普通一国のお姫様にそんなことをさせられる筈もないから、
ボーマンたちの反応は至極当然と言っている。

だがここにいるのは普通のお姫様じゃあないんだよね。
外の人だったらこんなことは出来なかったかもしれないけれど、
それ位の話であれば僕にとっては全然問題のない話だ。

僕の目の色が変わったのを見た大将は、満足げに一人頷いている。
激しく大将に文句を言っている二人を押しつけて、僕は大将に詰
め寄って尋ねた。

「頭を下げるくらい問題ありません。アニスがそれで見つかるなら、
僕は何度だって頭を下げて見せます」

「そうかい。姫様がそこまでいうなら、うちで働きな。うちに来る

客は行商人やら冒険者やが多い。中にはかたぎじゃねえ奴らだっているんだから、情報を集める場所としては最適だ」

「大将！ そんなこと言って姫様を狙う奴らが押し寄せてきたらどうするんですか!？」

「ああん？ お前姫様を守りきる自信がねえのかよ？ あんだけ馬鹿だの屁だのといつてたお前が」

食って掛かったボーマンが、大将のその一言でぐっと唸って黙り込む。

まあ、ボーマンはそこで自信が無いなんて言うようなタイプではないから、ああ切り返されたら黙るか大将の案に乗るしかなくなってしまうよね。

そんな二人のやり取りを余所に、僕はおなかの底から湧き上がってくる何かに密かに背中を振るわせる。

自分にもちゃんとやれることがあって、それでアリスを救えるかもしれない。

多分これが武者震いって奴なんだろうと僕は思った。

「あれ？ ところであの黒メイドさん、何処行っただらう?」

いつのまにやら居なくなつた黒メイドさんを探したけれど、彼女はすでに店の何処にも居なかった。

ちゃんと名前も聞いてなかったけれど、まあ帰りにあの教会に行けば会えるかもしれないし問題ないよね。

暗闇の街の中、屋根の上に2体のメイド服を着た人形が安置されていた。

ひとつは緑の髪で小柄で幼い少女の人形。

その姿は教会の物置にあったあのビスクドールと同じである。

もうひとつは東洋系で少し大人びた顔立ちをした少女の人形だ。

どこか飄々とした風で、眠たそうな目が印象的である。

二つの人形は寄り添うようにひっそりと屋根の端に腰を掛けて、鳥の冠亭を見下ろしている。

「あれが、今のスワジクか」

「はい、そのようです」

窓際で言い争っているスワジク姫とポーマンをポーッと眺めていたら、裏口から黒い髪の侍女が現れた。

「どつやらこつそりとこの場を離れるようだ。」

きよろきよろと辺りを見回して、誰にも見つからないように闇に紛れようとしている彼女を、人形達は感情の無いガラスの瞳でじっと見守る。

それは何かを記録するように、あるいは深く埋もれた記憶と照らし合わせているかのようだ。

「未だ迷路の中を迷っているのか……ルナ」

「もしそうであれば、きつとまた姫様のお命を狙いにくるのでしょうね、あの娘は」

「ハハハ、死んだものはもう殺せぬよ、誰にもな」

「そうですね、死んだものを生き返らせることが誰にも出来ないように、それは当然の事。そんな当たり前の事すら、気づけずにいる」
「なるほど、人間というものは愚かに出来ているのだな」

「ええ、生きている限り彼らはきつと愚かであり続けるのでしょう」

闇の中に消えてゆく少女の背中に、哀れみの視線を向ける2人。
そこへ音も無くエプロンドレスを身に着けた3体目の人形が現れた。

くすんだ金色の髪を風に靡かせながら、手にした槍の石突をそつと屋根に下ろす。

突然現れた3体目に驚く風も無く視線を向ける2体の人形と、2体の前で跪き頭を垂れる3体目。

「もう調整は終わったのか？」

「はい。苦労しましたが、なんとか動けるようには」

「そうか。ではもう行くのだな？」

「はい。私が守りたいのは、姫様だけです」

「そうか。別に私に断りを入れにくる必要もなかったのだがな。ま

あ、気をつけていくがいい。魔力の補充を忘れずにな」

「はい。ご配慮ありがとうございます。それでは」

「敬語などいらんというのに律儀な奴だな、ミーシャ」

そんな呟きに、ミーシャは苦笑を漏らして屋根の上から姿を消した。

どうやら下の方でも話は纏まったようで、ボーマンとスワジク姫が連れ立って街の中へと消えてゆくのが見える。

恐らくは遅くならないうちにスワジク姫を城へ送ってゆくのだろ

う。

「さて、私もさっきの物置に戻ろうかと思う。首尾よく王宮に戻れたなら、今のスワジクの影武者くらいは出来るであろうしの」

「申し訳ございません」

「かまわんよ。所詮は自分の尻拭いなのだから、お前が謝る必要などない」

「……」

そういつて緑の髪の人形は立ち上がって、据わったまま自分を上げる黒髪の人形を無表情に見下ろす。

ずっと変わらなかつた二つの人形の表情が、月の光の加減であるうか、微笑んでいるように見える。

お互いを慈しみ合い労わり合うようなその表情は、とても人形が出せるようなものではないはずなのに、2体の人形はどこまでも自分達が人形であることを信じて疑う事はしなかつた。

44話「舞台裏の少女達」

暗闇の街の中を、私はあの古ぼけた教会へ向かって歩いていった。もう少し蛮行姫の傍に居て情報を集めていても良かったのだが、多分これ以上一緒に居ても意味がない。

何故なら、あの蛮行姫は自分が知る蛮行姫とは似ても似つかぬ別人だったから。

とても気立てのいい、可愛らしいお姫様のよう。

私の顔を覚えても居ないところを見ると、記憶喪失という話はあながちデマではなかったらしい。

湖に突き落とされて溺れたくらいで、人の人格が変わってしまうほど記憶に変化が起こるものなのだろうか？

いったい何が彼女をそこまで変えたのか。

魔術や医術に通じていない私にはいくら考えても原因辿り着けないし、それを追求したところで私のやることには変わりはない。

「そうよね、姉さん。こんな事で迷っていたら、駄目だよ。大丈夫。今度こそ、ちゃんと仇を討つからね」

私は自分の記憶の中で微笑む姉、レイチエル・ホランにそう誓う。幸い相手は私の事を覚えていないし、警戒心すら抱いていない。そう、チャンスはいくらでもあるのだから。

お腹の辺りに隠し持っている毒付のダガーを、私は震える手でぎゅっと握り締めた。

これなら、掠っただけで相手は苦しみ悶えて死ぬ。

ラムザスのスパイが使う暗殺用の毒で解毒剤など流通していないから、助かる見込みもないはず。

前は失敗したけど、今度こそちゃんと……殺さなきゃ。
光を失った瞳で、私はじっと目の前にある教会を見つめていた。

(迷うな、お前は悪くない)

記憶の中に埋もれている筈のその言葉が、突然理由もなく幻聴として蘇る。

耳に囁かれたその言葉は、いったい誰が発したものだっだろうか。思い出せないし、分からない……。いやもしかしたら、分かっているのだけど私がそれを理解出来ないでいるだけなのか。

(お前はお前の正義を成すがいい)

「はい……、分かりました、……様」

過去からの囁きに、私はゆっくりと肯き了承の言葉を呟く。
覚悟は決めた。

あとはいつ行つか、どうやれば蛮行姫を絶望の淵に叩き落せるのか。

……まあ、まだ時間はあるのだからゆっくりと考えよう。
そして絶対に逃げられない、蟻地獄のような罠を張ろう。
私は薄い笑みを浮かべて、目の前の教会の中へと入っていった。

王都の郊外にあるカストール邸。

ちよつとした出城のような外観を持つこの館の主は、自分の寢室のバーカウンターで一人グラスを傾けていた。

唐突に静かではあるが、ゆっくりとドアがノックされる。

こんな夜遅くにこの部屋を訪れることが許されるのはただ一人しかいない。

執事が頭を垂れながら扉を開け、中に入ってきた。

「なんだ？」

「お寛ぎのところ、失礼いたします。『名無し』が戻ってまいりました。ご報告をお受けなさいますか？」

「そうだな、通せ」

「はい、畏まりました」

暫くして、『名無し』と呼ばれる何処にでもいそうな雰囲気の方が部屋に入ってきた。

『名無し』はまるで王に接する騎士が如く、片膝を付いて頭を垂れる。

彼の様子はまるで絵本の中にあるような忠義の騎士のようにも見え
えた。

そんな彼の様子に、主であるカストールは微塵も興味を示さない。

「首尾はどうだ？」

「はい。王宮から連れてきた女ですが、あまり使い物にならなさそうでございます。どうやら人死にを目の当たりにして怖気づいたようです」

「まあ、もとより期待はしておらぬよ。蛮行姫がなんらかの反応をしめせばと思っただけだ。それより、あの黒いのはどうだ？」

「はっ、蛮行姫との接触到に成功しております。隠し通路の在処を教え、彼女の出入りを常に監視させています」

カランとグラスの中の氷が音を立てて揺れる。

カストールは楽しそうにグラスの中で揺れる氷と灯りの反射を眺めながら、目の前の獰猛な忠犬に命令を下す。

「怖気づいてはいないだろうな？」

「それは大丈夫でございます。最初は蛮行姫の変貌に戸惑っていた様子ですが、ようやく相手が自分の憎むべき敵だと認識できたようです」

「ならばそれでいい。頃合を見計らって蛮行姫を始末しろ。それで一步、お前の夢に近づけるのだ」

「はっ！ 必ずや任務を全うしてご覧に入れます」

「よし、ゆけ。この国の貴族共の目を覚まさせてやるのだ。蛮行姫という呪縛を解き放つことで、な」

一つ大きく頭を下げて、『名無し』は部屋を後にした。

そのまま執事も下がるものと思っていたら、珍しく部屋に残ったままカストールの方を見つめている。

彼の視線に気づいたカストールが、訝しげに執事に振り返った。

「なんだ？ まだ何かあるのか？」

「いえ、……はい。ご主人様はあの者を信用なされておいででしょ

うか？ 私はどうもあの者を好きにはなれませぬ」

「好きになる必要などない。所詮は没落した騎士の子孫。王侯の礼儀の何たるかも知らぬ、下賤の輩。あやつは死ぬその瞬間まで私に感謝するだろう。自分がただの使い捨ての駒だとも気づかずにな」

「では最初から騎士に取り立てるといってお話は……」

「いや、本気だとも」

「？」

執事の問い掛けに、彼が期待した正反対の答えを返すカストール。

カストールの答えに困惑顔になった執事は、じつとその後が続くカストールの言葉を待った。

「なに、生きて帰ってこられたら、という条件が付くだけだ。蛮行姫といえど、王家の身内だ。この暗殺劇が成功しても失敗しても、害そうとした下手人が無事に済む訳が無かるう？ クラウの小僧あたりが鼻息荒く、あやつや黒い小娘もついでに始末してくれるだろう。こちらが頼みもせぬのにな、くっくっく」

「なるほど。納得いたしました」

「まあ、一応保険も掛けてある。事が成れば、私は更に多くの盟友を手に入れるだろう。してその力を育てていけば、いずれゴードイン王をも凌ぐやもしれぬ。そうしてこの国を正しき方向へと導くのだ。ああ、その途中で私がこの国を手に入れてしまいかもしれぬがな、ははは」

自分の壮大な夢に、楽しげに嗤うカストール。

彼の頭の中では、広大な謁見の間に傅く家臣達が居て、自身を称

える音楽が鳴り響いていた。

掲げた琥珀色の液体を、カストールは満足げに飲み干すのだった。

今にも潰れてしまいそうな安普請の宿の一室で、私は一人ベッドの上で震えていた。

地下牢から連れ出される際に見かけた騎士たちの死に様が、目の裏に焼きついて離れないのだ。

王宮で出会えば笑いながら挨拶をしてくれた騎士の顔もあった。いつも勇ましげに見回りをしていた若い騎士が、血溜まりのなか悶えているのに何も出来なかった。

手当てをすれば助けられた命があつたかもしれないのに、自分は『名無し』と名乗った男が怖くて視て見ぬ振りをするしかなかったのだ。

それが今になって自分の良心をこれでもかというくらいに苛む。

もし、あの血溜まりに居たのがライラやスウィータだったら、私はどうしたのだろう？

もし、あの血溜まりの中で悶えていたのがスワジク姫だったら、私の気は晴れたのだろうか？

地下牢の中では怒りと悲しみの矛先が姫様に向かっていたから、私はおかしく為らずに済んでいたのかもしれない。

あの血臭の中を歩き、私は正気に戻れた気がする。

「どつしよう、私、姫様になんて酷い事を言っちゃったんだろう」

どうして死んでくれなかったのですか？

死んじやえば良かったのに！

現実の人死に接した後で、その言葉の持つ意味がどれほど重いものだったのかようやく理解できた。

自分でも分かっていたと思う。

姫様がミーシャちゃんを殺したわけではない事を。

姫様がミーシャちゃんの事を聞いて泣きそうな顔をしていたのだから、ちゃんとこの目で見てたはずなのに。

ミーシャちゃんを取られたという嫉妬から、すべての責任を姫様に押し付けたんだ。

「うううう。わ、私、どうやって姫様に謝れば……」

姫様を殺そうとしている人達に連れてこられて、手渡された毒の瓶。

これを短剣に塗って相手を傷つければ必ず死に至る、という劇薬が入っているらしい。

でも、こんなもの使いたくない。

今の改心なされた姫様に、こんな怖いものは使えない。

手にしていた瓶を汚いものでも振り払うかのように放り投げる。

「……いけませんね、貴重な品をそんなに手荒に扱われては」

いつの間にか部屋の中に入ってきた侍女風の少女が、腰を屈めて床に転がった瓶をそっと拾いあげる。

私は目の前に現れたその侍女風の少女に釘付けになった。

何故なら本来ならこんな場所に居るはずのない、既にレオ様の手配によって故郷へ帰ったはずの少女が居たから。

「久しぶりね、アニス」

「……ル・ナ・ちゃん？」

ラムザス人に良くいる褐色の肌の少女は、私の漏らした呟きに暗い笑みで答えてくれた。

拾い上げた瓶をベッドの横にあるサイドテーブルの上に置くと、膝を抱えて丸まっている私の横に腰を掛ける。

まるで怯える私を気遣う親友のような仕草で、私の背中を撫でてくれるルナちゃん。

警戒心を抱きながらも、見知った人の温もりに少しだけ張り詰めていた緊張が緩む。

「ルナちゃん、貴女どうしてここに？」

「遣り残したことがあるから、かしら？」

「……姫様を、殺すの？」

「……ええ。姉さんが寂しくないように、ちゃんと送り届けなきゃいけないと思うし」

「そ、そんな事して、レイチエルさんが喜ぶの？」

「ええ、だって姉さんは姫様の事、大好きだったじゃない。それに姫様も寂しいって思ってる。私には分かるの」

光の無い瞳で何処でもない何処かを見つめるルナの横顔に、地下牢の床に転がっていた騎士さん達の死に顔が重なる。

ルナちゃんはきつと死に魅入られているんだと、私は直感で理解した。

「で、でも、人殺しは、どんな理由でも良くないよ？ だからさ、もうこんなこと止めよう？」

「アニス、貴女はミーシャの事、許すの？」

「そ、それは、許せないけど。でもミーシャちゃんを襲ったのは、姫様じゃない。それは分かる」

「そうかしら？ 蛮行姫だもの、彼女の命に従う無頼漢なんて掃いて捨てるほどいるんじゃないかしら？」

「それは違う。今の姫様は本当にお優しく、ドジな私にだって嫌な顔ひとつしないで笑いかけてくれて……」

私は最後まで言葉を言い切れなかった。

自分の発した言葉で、優しくなったここ最近の姫様やミーシャちゃんの笑顔を思い出してしまって、涙が止まらなくなっちゃったから。そんな私の様子を冷ややかに見つめるルナちゃんが、ため息をついて立ち上がった。

「同じ姫様を憎む者同志で仲良くやっていけるかなと思っただけど、そっかやっぱアニスはまだこっちには来ていないんだね」

「……こっち側？」

ルナちゃん言葉に思わず泣き顔を上げて、傍に立つ彼女を見上げる。

私の視線に気づいて、ルナちゃんが振り向いて寂しそうな笑みを

浮かべた。

彼女の瞳はさっきの光の無いようなものではなく、どこか理性を
思わせる光が浮かんでいる。

「そう、こつち側。人を殺めた者が棲む世界」

「る、ルナだって誰も殺してないじゃない！ 姫様だって元気だし、
それに性格だって変わったし。あれって多分ルナがそうしたお陰か
もしれないんだよ？ ルナってもしかしたら姫様を救ってあげた一
番の功労者かもしれないんだよ？」

「ふふ、そんな夢を無邪気に信じられたらどれほど素敵なのかなあ」

「……ルナちゃん」

「結果がどうであれ、私は人を殺そうとして一線を越えたの。越え
てしまった者は、あとは突き進むしかないの。」

「そ、そんな事ないよ！ 何度でもやり直せるよ？ だから、ね？
私も一緒に姫様に謝るから。今の姫様なら、きつと笑って迎えて
くれるから！」

破滅に向かおうとしているかのような雰囲気
のルナちゃんに、私は
縋り付いて思いとどまるように説得をする。

ついこの間までさんざんに姫様の事を悪し様に罵っていたのに、
こんな時だけ姫様の助力を願うなんて、私ってなんて浅ましくて都
合のいい女なのだろう。

でも今の私には、姫様の温情に縋るしかルナちゃんを思いとどま
らせる方法が思いつかないのだ。

「あの姫様なら笑って許してくれそう。本当、なんか妹みたいな娘
だったわ。だからアニス。貴女は戻れるし、戻ったらいい。私みた

いになる前にね」

「……え？ ルナ、ちゃん？ 姫様と会ったの？」

「ええ。姫様は私の事ぜんぜん覚えてないみたいだったけど。隙だらけで、お馬鹿さんで、それでいて他人を巻き込まないように頑張ってるあの姿をみたら、とても以前の蛮行姫と同一人物とは思えないわね」

「でしょ？ 姫様は変わられたの。だから、きっとルナの事も……」

「ええ、姫様は変わられたわね。でもね、もう姉さんは返って来ないの。どんなに姫様が改心なされても、どんなに私達が願っても、姉さんは返って来ないの。なら、姉さんが寂しくないように、あの姫様に逝ってもらわないと。あの姫様なら、きっと姉さんを大事にしてくれると思うから」

「そんなの駄目だよ、ルナちゃん……」

ルナちゃんは話は其処までとばかりに、手で私の言葉を遮る。

明らかな拒絶に、私はそれ以上言葉を紡ぐことが出来なくなった。

「姫様ね、いま一生懸命貴女を探しているの。絶対助け出すんだって息巻いてね。だから、少しでも貴女にも手伝って欲しいの。姫様をおびき出す役でね」

「ルナちゃん、そんなのイヤだよ……」

「ごめんね、アニス。その時が来るまでは、ここに居てね？」

そういつてルナちゃんは私の部屋を後にする。

扉が閉まり際、あの『名無し』さんの横顔がちらりと見えた。

彼は歩み去るルナちゃんの背中を、悪魔のような笑みで見ているように思う。

こんな所でじっとしているわけにはいかない。

そう思って逃げ道を探すけれど、鉄格子が嵌った窓すら壊せない
私に逃げ道など無かった。

45話「鳥の冠亭の看板娘」

日が落ちて薄暗くなってきた寝室の中、僕は最近の日課となった『入室禁止』の札をライラに頼んでドアに掛けてもらった。

これで朝までこの部屋には誰も入ってこない。扉を閉めて出て行ったライラを追うようにして、僕は扉の内側に張り付いて外の様子を音で探る。軽い足音が遠ざかっていくのが聞こえた。

「よし、大丈夫そうだ」

僕はそう呟いて、急いでクローゼットの中から一着のメイド服を引きずり出した。

鳥の冠亭のウエイトレス用の制服らしい。

慣れた手つきでその制服を着て、髪も動きやすいようにポニーテールに纏める。

それでも十二分に長いんだけどね。

暖炉の横にある隠されたスイッチを引っ張ると、ゆっくりと鍵の抜ける音がして隠し通路の扉が開くようになった。

壁を手で押すと音もなく後ろにずれ込んで、ぽっかりと地下へと下りる梯子が現れる。

だが、今はその梯子を使って地下に降りるのではない。

梯子の手前のスペースに置かれている緑の髪の毛のビスクドールに用があるのだ。

「今夜もお願いするね、スワジク2号さん」

そう声を掛けて、お姫様抱っこで人形をベッドへと連れてゆく。
僕の寝間着を着せ、町で買ってきた銀色のウィッグを被せて体裁を整える。

で、このスワジク2号をベッドに寝かせて、頭まで布団を被せて偽装工作の完了だ。

最後に部屋の窓のドレープをしっかりと閉め、遮光を完璧に近い形にしておく。

いつものようにレースのカーテンだけでは、月明かりではれないとも限らないからだ。

そこまで出来たら僕は椅子に掛けておいた外套を羽織り、開け放たれていた秘密の入り口へと向かう。

「じゃ、いってきます」

返事を返すものがない部屋に声を掛けて、僕は通路の中へと入っていった。

通路の出口に辿り着くと、僕は手にした石で壁を3回叩く。

そうしたら秘密の扉が開きだし、月光に照らされたポーマンが現れた。

「ごめん、待った？」

「いえ、俺もいま来たばかりです」

頬を少し赤く染め、ポーマンは笑ってそう答えた。

僕は差し出された彼の手を握って地下道から表に出る。

何度来ても変わらないガラクタの山が置かれた納屋を見て、なんだかほっと開放されたような気分を味わう。

そんな僕の表情を見て、ポーマンが訝しげに問いかけてくる。

「姫様？　どうかなさいましたか？」

「うっん、なんでもない。ちょっと開放感に浸っていただけ」

「開放感？」

「そ、王族や貴族の仕来りとか礼儀とか、そんなものから開放されたって感じがするんだ。肩が楽になった気分」

「それは良かったです、と言うべきですか？」

「別に気にしなくていいよ。ボクの気分の問題だから」

リアクションに困っているポーマンを見て、クスリと笑いながら彼の前を横切る。

ここ数日、王宮外でのアルバイトが楽しくて仕方が無い。

もちろんアニスを探さなきゃいけないっていう目的は忘れていないけど、少しだけ自由を満喫させてもらっても罰は当たらないよね？

「さ、行こっか！」

「10番テーブル、料理あがったよ！」

「はいー！」

カウンターに置かれた3人分の料理を、事も無げに両手に乗せて運んでゆく銀髪の少女。

頭は三角巾をしているからある程度隠れてはいるものの、背中に垂れている白銀の髪は丸見えである。

銀色の髪を持つ者は貴人の血を引いているとは巷の噂にもあるものだが、何故だかここに来る客はあまりそんな事を気にしているようには見えない。

「オーダー入りまーす！ エール3杯、焙りチキン1丁、お願いしまーす」

「あいよー！ フロアーに戻る時に、これ8番さんに持っていつてくれ」

「はいはい！ 了解です。っと、ごめんボーマン、足踏んだ？」

「あ、いえ。大丈夫です」

「そか。ごめんね」

俺の足に躓きかけて慌てて体勢を整える銀髪の少女は、満面の笑みを浮かべてホールへと戻ってゆく。

なんで姫様はこんなに場慣れしてるんだ？

労働をするってことすら生まれて始めての筈が、3日もしない内に店の流れを把握し、5日目にはウエイトレスのシフトから注文の取り方、裁き方にまで口を出す始末。

それが蛮行姫の名の通り無茶苦茶な要求かと、口にはしなかったが大将や女将さんは最初警戒してたみたいだ。

が、彼女の言うとおりにやってみると、これが案外スムーズに仕事がかどった。

寧ろ今までのやり方のほうがロスが多くて、何故今まで姫様のよ
うな発想で仕事をしてこなかったのかと大将以下店員たちが落ち込
むほどである。

「二ーナ！ あっちのお客さん、注文取ってきてー」

「はい！ 分かりました、チーフ」

「あ、女将さん、そっちはボクが片付けますんで、お客さんの案内
をお願いします！」

「あ、ああ、分かったよ」

「っていうか、チーフってなんだ？」

「なんで女将さんまで使われてるんだ？」

「ヤクザな客が現れるまでは開店休業状態の俺は、店の片隅で喧し
く飲み食いする客と姫様たちの働き振りを眺めるだけ。」

「だからこそ、姫様の異常なまでの順応振りが目に付いてしまう。」

「いろんな意味で本当に底が知れない姫様だ。」

「あ、そうだそうだ、スウちゃん！ こないだ言ってた探し人の件
な、北町の会長さんが協力してもいいって言ってくれてるんだ！」

「え？ 本当にですか！！」

「ああ、本当だとも。だから今度会長さんがここに来たら、相手し
てやってくれないか？」

「えー？ うちはそのいう店じゃないんだけどなあ」

「分かってるけどさ、会長さん、偉くスウちゃんのこと気に入って
るんだよ。隣に座るだけで泣いて喜ぶからさ、頼むよ」

そういつて姫様に頭を下げているのは、この界限でも顔が売れるマフィアの幹部だ。

ちなみに北町の会長というのは、マフィアのボス。いつの世も男は女に弱いということなのだろうか、などももによりながらそのやり取りを眺める。

ちなみにスウちゃんといのは、姫様のこの店での「源名」だそう
だ。

もちろん俺に「源名」がどういう意味のものかなんて分かるわけ
もない。

ニツクネームみたいなもんなんだろうと思ってて、誰もあえて突
っ込んで聞いていない。

「よお、嬢ちゃん、こつちも注文聞きに来いよ！」

「あつ、ちよつと」

「うひょー、こいつあ、上玉ですが、兄貴！」

「ちよ、何処触ってんの！」

姫様の慌てる声が聞こえたので慌ててそつちを見ると、どこかで見た記憶のあるような男達が姫様の手や腰を撫でているのが見えた。瞬間に頭に血が上るのが分かったし、それを抑えるつもりもない。周りの客を蹴散らしてでも、すぐに姫様の下へ駆け寄ろうと腰を上げて固まってしまう。

「よお、兄さん達、スウちゃんに何か用か？」

「キタネエ手でスウちゃんに触れてんじゃねえぞ、ゴルア？」

「今日は非番だったんだが、ちよとそこの衛士詰め所で事情を聞こ
うか？」

姫様に無作法を働こうとしていた男達は、あっというまに周りにいた男性客に囲まれていた。

「っていつか非番の衛士まで現れるって、姫様の素性的にやばく無いのか？」

「あ、あの皆さん、お、穩便に……」

「大丈夫です、スウちゃん。ちよっと世の中の道理ってもんを分からせるだけですから」

「そうですね。我々が守る王都の平和を乱す者が、どのような末路を辿るかじっくりと話して聞かせるだけですから」

「紳士は愛でてでも触らねえもんなんだ。それをちよっと教え込んできまさあ」

10人からの人間達に囲まれて、姫様に狼藉を働いた男達は外へと連れ出されていった。

今度は肩の骨だけでは収まりそうに無いなど、微妙な視線で見送る俺。

万事がこんな感じだから俺の仕事も上がったりなんだけど。

「あらあらあら、大人気ですねえ」

「あー、あんた来てたのか」

いつぞやのラムザス人ばい風体の黒髪の侍女が、いつの間にか俺の傍らに佇んでいた。

名前を呼ぼうとして、そしてこの侍女の名前を知らないことに今更ながら気が付く。

店の外で起こってる場外乱闘を見て右往左往している姫様を、頬を上気させながら眺めている侍女に俺は声を掛ける。

「そついやさ、あんた名前なんていうんだっけ？」

「名前、ですか？」

「ああ、もう何回も会っているのに名前も知らないなんて、流石にあんたに失礼だろ？」

「そうですか。それでは私の事はホランとお呼びください」

「ホランさんだな。了解だ」

俺が彼女の名前を確認して頷いていると、ホランさんが俺の隣に腰を下ろしてこっちを見ている。

何か少し思いつめたような表情に見えたから、俺もなんとなく彼女の瞳を見返していた。

「あの、まだよく分からないのですが、アニスさんかも知れない人がとある廃屋に隠れ住んでいるかもしれない、という話を耳にしたのですが……」

「！ それは本当ですか？」

「よくは分からない、と言っています。そこで姫様のお耳に入れる前に、一緒に来てはいただけないでしょうか？ 流石に女の身一つでは怖くて」

「そっか。そつだよな。ぬか喜びさせちゃ駄目だし、先に事実確認はしておいたほうがいいな。で、俺はどうしたらいい？」

「詳しい話は明後日の正午に分かります。その時、姫様が良く使わ

れているあの教会へお一人で来ていただいでよろしいでしょうか？
あまりいろんな人に集まってもらうと、情報提供者さんが嫌がる
ものでして」

「ええ、分かりました！ 明後日の正午ですね」

「くれぐれも姫様には内密に」

「分かっています。悪戯に心配を掛けさせてもいけませんしね」

俺がそういってどこか寂しげな陰のある笑みを浮かべ、ホランさんは店を後にした。

店内で忙しげに立ち働く姫様の姿を眺めながら、この情報が彼女の心配を取り除いてくれるものである事を祈らずにはいられなかった。

ちなみに留守中のスワジク姫の寝室での出来事

深夜ライラが見回りでスワジク姫の部屋の前を通りかかったとき、部屋の中でなにやら話し声が聞こえてきた。

あまり深く考えもせず、ライラはスワジク姫が起きているのだと思っ
て部屋の中を覗いてみる。

部屋の中は遮光カーテンがびつちりと閉められていて、手元の蝋燭の
明かりだけが唯一の光源だ。

つとつと燭台を前に出し部屋の中を覗こうとすると、ライラの視線を妨げるようにすつと目の間に人影が現れる。

「ひっ！」

突然の事にびっくりしすぎて、逆に声が出なくなってしまうライラ。

そんなライラに向かって、その人影はおどろおどろしい声で語りかける。

「姫様はお休み中です。用があるなら、明日太陽がしっかり上がってからにしたほうがいいかと」

「っ！ み、ミーシャ!？」

聞き覚えのあるミーシャの声に、ライラは内心ほっとしつつ上を見上げた。

果たしてそこにあっしたのは、頭から真っ赤な血をダラダラと流して佇んでいるミーシャ。

悔しそうな、それでいて悲壮な表情で、じっとライラを見つめている。

「姫様の眠りの妨げをするのは、何人であろうと私が許さない……」

地獄の底から響くようなその宣言に、ライラはカクンと腰を抜かして尻餅をつく。

もう一度開け放たれた扉の向こうにミーシャの姿を探してみたが、今度はベッドの上で丸まって眠っているスワジク姫以外誰もいなか

った。

ふとライラの視線が床の上を見てみると、ミーシャが立っていた辺りが何故か水で湿ったかのように絨毯の色が変わっていた。

次の瞬間、ライラはあまりの恐怖に意識を失って廊下に倒れこんでしまう。

持っていた燭台も一緒に廊下に転がってしまったが、運よく蠟燭の火は消えてしまっていた。

まあ、注意深く蠟燭の芯を見れば、何か鋭利なもので断ち切られたと分かるのだが、気絶したライラにそれを言うのは酷というものが。

その後巡回中の衛士が倒れているライラを発見して一騒動に発展する。

スワジク姫自身は、そんなこともお構いなく健やかな寢息を立てていた。

結局、この件はライラの見間違いということと片付けられたのだが、この日を境に夜な夜なミーシャの霊が王宮を徘徊して、夜、スワジク姫の部屋へと近づくものを怖がらせたという。

「あの、いい加減頭からトマトジュースを被るのはイヤなんですけど……」

「何を言うか、ミーシャ。これも今のスワジク姫のためじゃぞ？」

あの姫のためなら何でも出来るといったではないか、お前は」

「確かに言いましたけど……。服も体もトマト臭くって堪らないのですが」

「我慢、我慢」

「妙に嬉しそうですね？　もしかしてこの状況を楽しんでるんじゃないでしょうか？」

「失敬な！ 私がそのような浮ついた心でこんなことをしていると
いうのか！」

（そのにやけ顔みたら、そうとしか見えないんですけどね……）

嬉しそうに買ってきたトマトをペースト状に磨り潰している2体
の人形を横目に見つつ、ミーシャは盛大にため息をついて任務を続
行するのであった。

46話「再会、そして闇は動く」

分厚いカーテンの隙間から、朝の光が部屋の中に射しているのが見えた。

昨日も結局ずいぶん遅くまでお客が帰ってくれなかったから、お城に戻ってくる頃には空が少し白じみ始めていたような気がする。それから寝たものだから、いつもの時間に起きようと思ってもなかなか瞼が上がらない。

ベッドの中でもぞもぞと睡魔と格闘していたら、控えめなのノックと共にフェイ兄が入ってきた。

「おはよう、スワジク。体の加減はどうだい？」

「あ……、まだ少しだるいかな」

慌てて顔を半分だけ布団の中から出して、近寄ってくるフェイ兄のほうに顔を向けた。

フェイ兄は僕のベッドを素通りして、窓のカーテンを一つだけ開ける。

お陰でモノトーンだった部屋が、一気にその色彩を取り戻す。

僕といえば疲れていることもあって、朝の光に目を瞬かせてうーと唸ってしまっ。

「ほら、顔を出してごらん。少し見てあげよう」

「いいですよ、みっともない顔してると思うし」

「駄目だ。健康管理も王女の仕事の一つなんだ。あきらめて布団から顔を出しなさい」

「うっう」

フェイ兄の正論に抗えず、僕はしぶしぶと布団から亀のように突き出した。

「ここ最近、病気を装って部屋に引きこもっていたので、あんまり調べられて仮病がばれても困るんだけどな。」

フェイ兄はベッドの縁に腰をかけて、そっと僕の顔を両手で挟み込む。

瞬間、先日のキスを反射的に思い出してしまい、顔が一気に赤くなり青くなった。

「ふむ。大分疲れているようだし、熱も少しあるみたいだな。それに血の気も引いている様子。貧血気味なのかもしれないな」

「あ、あはは。そうですね。そうかもしれません。もう1日寝たらましになるかも、です」

内心ドキドキさせながら、僕の顔をあれこれ調べるフェイ兄のされるがままになっていた。

うん、この胸の高鳴りは決して恋愛的なものはないと僕は主張する。

むしろ危機感というか吊橋効果というか。
いや待て、吊橋効果はまずい。

それではまるで僕がフェイ兄に恋しているみたいな話になってしまっ。

色即是空、空即是色、煩惱退散、色欲退散！

「やっぱりまだ調子は良くなさそうだね。朝ごはんは食べられそうかい？」

「あ、はい。お野菜中心でなら食べられそうです」

「そうか。では持ってこさせよう……と言いたい所だが、何故か最近誰もこの部屋に近づきたがらないんだ」

「風邪がうつるからでしょうか？」

フェイ兄が困った顔をしながら、僕の頭を優しく撫でてくれる。くそう、なんか気持ちいいんだよ、これ。

僕の一人百面相を面白そうに見下ろしながら、フェイ兄がゆっくりと首を横に振る。

「いや、どうもミーシャの霊が出るという噂があつてね。夜、この部屋に近づこうとする人間の前に現れては脅かして追っ払っているらしいんだ」

「ふえ？ ミーシャの霊？ っていうか、ミーシャって死んでないじゃないですか」

「ああ、私や君を含め一部の人間は知っているからそんな筈は無いと言いつけるんだが。こつても目撃証言が多いとね。もしかしていつのまにか帰ってきているのかと思って」

「だったらボクが知らないはずはないと思うのですが……」

僕の表情をじっと見つめて、それから深いため息をつくフェイ兄。そしておもむろに立ち上がり、部屋の中をゆっくりと見回り始めた。

まるで、どこかに潜んでいるミーシャを探しているかのようだ。

「フェイ兄？　もしかしてミーシャがこの部屋に今もいると？」

「可能性は低くは無いと思う。厳戒態勢を引いている我々の目を逃れて、毎夜ここへ忍び込めるとも思えないしね」

「あー、そうかもしれませんねー」

フェイ兄の言葉に、毎夜その目を掻い潜って町に行っている僕には、棒読みで返事を返すことしか出来ない。

うん、ごめんよ、フェイ兄。

フェイ兄達が無能とか、雑魚っぽいとかぜんっぜん思っていないからね！

秘密の地下道を作っていた前スワジク姫が、フェイ兄達よりも一枚上手だったというだけだから！

「ん？　妙だな……」

「はえ？」

暖炉の辺りで急にフェイ兄がしゃがみ込み、なにやら絨毯を観察し始めた。

秘密の扉の前辺りを丹念に調べてから、その他の壁と床を見比べている。

まずい、気付かれたのかな。

僕は思わず焦ってベッドから這い出ようとフェイ兄から視線を外した瞬間、何か蛙を踏み潰したような悲鳴が聞こえた。

「フェイ兄！　どうしたの？」

僕は慌ててフェイ兄のほうを振り返ると、そこには床に見つけない格好で伸びているフェイ兄と、どこから現れたのか鈍器を片手に持ったミーシャが立っていた。

あまりの光景に唾然としている僕を尻目に伸びているフェイ兄を片手でつまみ上げると、そのまま扉の外へ放り出す。

ちょっと部屋にあったゴミを捨ててきましたといわんばかりな涼しげなミーシャに、僕はなんと突っ込んでいいのか分からずただ呆れるしかない。

「ミーシャ……」

「……」

「フェイ兄は生ゴミじゃないんだよ？」

「なんとなくそうしなければいけない様な気がしたもので。ご気分を害したのであれば申し訳ございません」

「いや、そこは嘘でもフェイ兄に謝っておこうよ」

そういつて嗜める僕の言葉を、多分ミーシャは聞いていないんだろうなと思う。

だって思いっきり明後日の方向に顔を向けているし。

でもやっぱりフェイ兄へのあの仕打ちはあんまりだったので、じつと睨み続ける僕。

僕の無言の抗議に流石にバツの悪そうな顔をしながら、ミーシャは無言でベッドサイドに佇む。

5分くらいずっと睨み続けていたら流石のミーシャも諦めたのか、ほんつとくに嫌そうにしぶしぶ頭を下げた。

「分かりました。事態が落ち着いた頃を見計らって、殿下には謝罪
いたしたいと思います」

「なんでそんなにフェイ兄にだけ意地悪するのかな、ミーシャは」
「……」

再び明後日の方向を見るミーシャ。

まるで悪戯を怒られている子供みたいだ。

僕はそんな彼女の手を引いて手繰り寄せ、ぎゅっとミーシャを抱
きしめた。

「とにかく今はお帰りなさい、だね。ミーシャ」

「……はい、ご心配をお掛けいたしました申し訳ございません、姫
様」

「ううん、ボクのせいと怖い目に合わせちゃったね」

「もったいないお言葉です」

「んー、ミーシャってなんか体硬くなった？」

何かがちがちに体を固めているかのような感触に、思わず怪訝な
顔をしてしまう僕。

ミーシャは慌てて飛びのくと、引きつった笑みを浮かべながら弁
解を始める。

「いえ、コルセットなどで体を締めているものですから、硬くお感
じになられたのです」

「そう？　なんかそうというのは別物のような感じがしたのだけれ

ど……」

「そ、それよりもです、姫様。もしかしたら近くアニスの潜伏先が分かるかもしれません」

何やら無理やり話題を変えられた気がするけど、それよりもアニスの事のほうが大それたから気にしないでおこつて。

そんな僕の気持ちを知ってか、ミーシャは満足げに話を続ける。

「ドクター・グエロが協力してくださっていて、2、3日中には確実な情報が入るのではないかとおっしゃっていましたが」

「僕の方も北町の会長さんとか町の人達が皆協力してくれてるんだ。この調子ならアニスを見つけるのも時間の問題かな」

「ええ、必ず見つけてみせます。ですので、姫様はあまり出歩かないほうが良いかと」

「ボクだけ何もしないっていうのは、我慢出来ないよ」

ミーシャが驚いた顔をして僕を見ている。

僕はミーシャの手を取って、強く握り締めて自分の思いを吐露する。

「もう、ボクのために誰かが傷つくのはイヤなんだ」

「姫様……」

「原因を作ったのはボクじゃないんだけどね。でもこの体でいる限りは付いて回ってくる事でしょ？ 今まではどこか傍観者っぽく考えていたけど、もう他人事じゃないんだよね」

僕の想いに声を無くしてしまったかのように押し黙るミーシャ。
なんだか熱いことを語ってしまったって気恥ずかしくなってきた。
あまりの恥かしさに、僕は真つ赤な顔して早口で話を続ける。

「ま、まあ兎に角、今はアニスを悪い奴らから助け出すのが最優先
だと思っ。第1軍の人達より先に見つけないと、大変なことになっ
てしまうような気がするし」

「分かりました。何か情報が入れば必ず姫様にお知らせいたします」
「うん、お願いするね。ボクはまた今晚酒場に行つて情報収集に勤
しむから」

話も纏まったところで、そろそろフェイ兄を何とかしてあげよう
と僕は廊下へと向かう。

もちろん嫌がるミーシャの手を引いて、である。

だって今のこの体では男の人を担ぐなんて事、出来るはずも無い
のだから。

扉を開けると、依然気を失ったまま倒れこんでいるフェイ兄。
うん、こんな格好誰かに見られたら大問題だよ。

「さ、フェイ兄をベッドまで運んでもらおうかな？」

「え？」

もの凄く嫌そうな顔をするミーシャ。

なんでそんなこの世の終わりみたいな顔をするのかな、この人は
そんなミーシャの背中を押して、フェイ兄を抱えてもらう。

最初こそ嫌がっていたようだけど、僕が本気だと分かるとしげし

ぶお願いを聞いてくれた。

「そんなに不貞腐れない！ フェイ兄があのまま起きて困るのはミ
ーシャなんだよ？ いいの？ ボク付のメイドを首になって」

「それはイヤです！」

「なら、ちゃんとフェイ兄をベッドに連れて行ってあげて！」

「し、しかし、姫様のベッドに男性を寝かせるのは……。せ、せめ
て侍女の控え室にある仮眠用ベッドでは駄目なのですか？」

「今外に出てミーシャの姿を見られるのは、いろいろと不味いんじ
やないの？」

「ぐくく」

「ほら、さっさとしないとフェイ兄の眼が覚めてしまうよ。たかが
ベッドに寝かせるだけじゃない」

「ぐくぐく……」

まるで血涙を流すかのような葛藤をしつつ、ミーシャはフェイ兄
をベッドの上に寝かせる。

意識の無い男の人を苦も無く抱えるミーシャはやっぱり力持ちな
んだなあ、と変なことに感心する。

これでようやく落ち着けるかと思っただけ、急に眠気が襲ってきた。
そりゃそりゃ、まだ数時間しか寝ていないもんね。

「それじゃあボクはもうひと寝入りするから、ミーシャもあまり無
理をしないように……。ってなんでそんな驚いた顔をしているの？」

「寝るのですか？ 殿下が寝ておられるそのベッドで？」

「そうだけど、何か不味い？ ……そりゃ男と女じゃ不味いだろう
けど、兄妹だし、問題ないんじゃないの？」

「……い、いえ、姫様がそれでいいなら。ですが！ 絶対に過ちを犯してはいけませんよ？」

「むしろそれはミーシャ相手にこそ、気をつけなければいけない事なのじゃないかな」

僕の一言で、凄く泣きそうな顔になるミーシャ。

だけどそれは普段の行いってヤツだから、同情はしてやらない。何かを負けたミーシャは、背中を煤けさせながら秘密の通路を開ける。

僕は泣く泣く部屋を後にするミーシャを見送った後、フェイ兄が眠るベッドへと向かう。

ミーシャがいらん事を吹き込むから少しだけ意識してしまう。

けど、兄妹つてのもあるし中身が元男つてこともあるので、まあ一緒に寝るのにはあまり抵抗感はない。

むしろ今は睡魔に抗えない感じだ。

僕は、少しだけフェイ兄から距離をとって布団に入る（キングザイズはこういうとき有難いよね）と、すぐに深い眠りに落ちた。

帝都の富裕層が住む町の一角に、ごくごく平凡な戸建ての家がある。

20年ほど前に帝都から移民してきた老夫婦の家だ。

近所付き合いも良く、かといって何か特筆するようなものがあるという訳でもない、ごくごく平凡な夫婦である。

ただこの1カ月くらいは、ラムザスにいたと言う親戚が遊びに来て賑やかではあるのだが。

もちろんそれは巧妙な偽装であり、ラムザスが長い年月をかけて作った諜報網の一つである。

老夫婦もその親戚も、全てが偽りであった。その年老いた諜報活動員の頭を悩ます問題が一つある。

裏繋がりで抱え込んだ、蛮行姫の元侍女という赤毛の女だ。

話では蛮行姫の暗殺に協力してくれるだろうという触れ込みだったのに、家に入れてみればそれは全くのデマ。

当の本人には寝返る素振りも無く、ただ自分達に怯えて泣いているだけ。

今は地下の隠し部屋に閉じ込めているが、いずれ処分せねばならない。

この20年間無難に諜報活動を行ってきたというのに、こんなところで妙なケチが付いてしまった。

ケチと言う物は一旦付き始めると、ドミノ倒しのようにになって襲い掛かってくるという。

長い年月の経験からそれを理解している老夫婦は、いつも以上に神経を尖らせて周囲を警戒していた。

そして程なくして家の周囲を探るようにしてうろついている男が数人。

仕草や目つきから言って、全うな商売についている者とは思えない。

王国の諜報関係者か、ただのならず者か。

老夫婦を狙った強盗という線もあるかもしれないが、どちらにせよ歓迎していい状況ではない。

「おい、この家を見ている男達が数人いる。どうするんだ？」

「……」

居間で寛いでいる「ラムザスから戻ってきたという親戚」に向かつて、老紳士が苛立ちを含んだ声で尋ねる。
「が、どこにでも居そうな顔の男『名無し』は、聞こえているのかわからないのか、ただ目の前の紅茶をゆっくりと楽しんでいる。
その余裕に余計に苛立ちを募らせる老紳士。」

「おい、聞こえているのか！」

「……あまり、声を荒げるのは得策じゃありませんね。ご近所さんが不振がります」

「今の状況がすでに危機的状況だといっているんだ！ まったく余計なお荷物を背負い込ませおって」

「では一芝居打つとしましようか？」

「一芝居、だと？」

にやりと不気味に笑う男に、老紳士は背筋を凍らせるしかなかった。

老紳士の家を監視している男達は、根気強くあの老夫婦達の動きを探っていた。

北町の会長からの指示で不振な家の洗い出しをしていたら、この家に辿り着いたのだ。

浮浪者の一人が、夜遅くに赤毛の女が数人の男達に囲まれてこの家に連れ込まれるのを目撃したという。

お高く留まった衛士や騎士団では、彼らからの情報など得られはしない。

万一耳に入ったとしても、一顧だにしないだろう。

まさにこの町の暗部を司る自分達だから、誰よりも早くこの場所に辿り着けたのだ。

だが、相手もこちらに気付いているのかなか隙を見せてくれない。

まあ、懐に危険物を抱え込んで暢気に外出するなど、有り得ないとは思っていたが。

その内痺れを切らした会長に、ならず者を装ってあの家に踏み込めという指示が来るのは目に見えている。

自分達はただ、その命令を待っているだけ。

荒ぶる感情を宥め賺しつつ、じっとチャンスを伺う。

すると、凄い形相で窓枠にしがみ付く老人の顔が見えた。

恐怖に染まったその顔は血にまみれ、一瞬で異常事態が発生したのだと理解する。

男は傍に控えるもう一人の顔を見る。

相棒であるその男もその様子を食い入るように観察し、男に頷いて見せた。

「行こう。今なら押し入ったこともなんとでも言い訳が出来る」

「だな。会長は短気だからな。早いとこいい結果を持って帰るか」

二人は肯き合って、すばやく問題の家へと突入した。

もちろん何かあったとき用に武器を手に持って、である。

暫くして家の中から出てきたのは、彼らではなく服を着替えた『名無し』だった。

青空を仰いで、晴れやかな表情で彼は呟く。

「全く予定外の事ばかりですね、困ったものだ。本当はもう少しあの姫を精神的に揺さぶって、以前のように自殺に追い込めればと思っただけです。少し計画を変更して、強引に行かざるを得ませんか」

まるで天候の話をするかのように物騒な独り言を呟く『名無し』。彼が後にした家の中は、不気味な沈黙と血の臭いで充満していた

47話「死を運ぶモノ。死に魅入られる者」

古びた教会の中庭に面した場所で、私は椅子に腰をかけて戯れる子猫達を眺めていた。

周りを気にしてオドオドしている真っ白な子猫を、安心させるかのように寄り添う黒猫。

黒猫に構って欲しいのか灰色の子猫がじゃれ付くが、黒い彼女は眠たげに尻尾を揺らすだけ。

灰色の猫にとっては、それでも満足なのか必死になって黒猫の尻尾を相手に猫パンチを繰り返しているのをぼんやりと眺めていた。

猫達の姿を見ていると、何故か胸の辺りがもやもやする。

何か大切な事を忘れてしまっているかのような、そんな焦燥感。

いつの頃からこんな風に感じるようになったのか。

まるで自分が取り返しをつかない何か悪いことをしてしまった後のような、そんな後味の悪さを常に感じてしまう。

「……私は悪くない。私は私の正義を成しただけ」

訳の分からない焦燥感に心が耐えられないほど苦しくなったら、私は必ずこの言葉を呟く。

そうすると信じられないくらいに心が軽くなるのだ。

私にとっては本当に魔法のような言葉である。

猫達の戯れを眺めながらぼうつと時間を潰していたら、中庭の木戸の軋む音が聞こえた気がして振り返ってみる。

木戸から外套を頭からすっぽり被った人影が一つ、表通りを警戒しながら中庭に入ってくるのが見えた。

こんな昼間から外套を頭から被るなんて、少し風変わりな人だな

と思いつつ警戒を怠らない。

今私の居る位置を考えたら、あまり悠長に考えている訳にもいかないようだ。

私は外套をまとっている人物からは見えない位置で、ポケットから取り出したナイフを構えた。

もちろん刺す気なんてないが、万が一の用心といったところか。

用意が出来たところで、私はお尻から中庭に入ってくる不審人物に声を掛ける。

「どちら様でしょうか？　こんな裏寂れた教会に何か御用でしょうか？」

「ひいひい！」

外套をまとった人影は背後からかけられた私の声に魂消たように声にならない悲鳴を上げて尻餅をついてうろたえている。

その聞き覚えのある悲鳴に、私はおやつと思ってナイフをしまい近づいてみた。

「大丈夫ですか？」

「……ル、ルナ！」

怯えるように尻餅をついていた人影が、私の顔を見て一転、嬉しそうな声で立ち上がる。

もどかしげに跳ね上げたフードの下から現れたのは、思ったとおりスヴィータの勝気な笑顔だった。

「やっと会えたわ!」

「ス、スヴィータ? そんなに勢い良く抱きつかれたら、二人とも倒れてしまいますよ?」

「あ、あら、ごめんなさい。私としたことがはしたなかつたですわね」

慌てて私から離れたスヴィータは、照れ隠しの為かお尻についた砂埃をぱんぱんと打ち払う。

本当に昔から意地っ張りなところは変わっていない。

私はくすくすと忍び笑いを漏らしながら、さっきまで座っていた軒先に戻る。

「わ、笑わないで! 誰だってあんな後から突然声を掛けられたらびっくりするに決まっていますわ」

「ふふふ。相変わらずで安心しました。それにしてもよく此処に私が居るって分かりましたね?」

「ええ。無理を言ってお父様に教えてもらったのです」

「お父様? 確か侯爵様だったかしら?」

「ええ。お父様が手を回してあなたを助けたって聞いていたので、何度か手紙も出したのだけれども」

軒先に腰をかけた私に寄り添うように腰を掛けるスヴィータ。

以前に聞いたスヴィータの身の上話。

妾腹の娘とはいえ侯爵様の実の娘だというスヴィータに、私は本当にびっくりしたのを覚えている。

最初の頃は本当にプライドが高いだけで、触れるものすべてに怯

えて唸る子犬のようだった。

紆余曲折があつて仲良くはなつたけれど、今思えばよく平民出の私なんかこんな風に隔意なく接してくれるようになったものだと思う。

姉さんがいなかったらきつとここまで親しくは成れなかつただろうな。

「ねえ、聞いてますの？」

「え？ あ、ごめんなさい。少しボーっとしてしまいました」

「はあ。本当にいつまで経っても貴女は変わりませんわね。危なっかしいというか、なんというか」

苦笑交じりの大きなため息をつくスウィータ。

こうやってお姉さんぶる彼女を見るのも久し振りだなとぼんやりと考える。

彼女はそんな私にお構いなしに、どんとんと話を進めてゆく。

「だから、敵討ちに私も加えてくださいと言っているのですが、聞いていますか？」

「あらあら、ちゃんと聞いていますわよ。ですが加えるといつても、もう私の一存でどうのという話では無くなってきているようですよ……」

「でしたら、あの壻行姫に仕返しを計画している人に会わせてください。もう、王宮内の情報をそちらに渡すだけでは……納得出来ませんの！」

そういつて悔しそうに俯くスヴィータを見て、私は違和感を覚えた。

てっきりアニスのように、今の姫様は大丈夫だから復讐は諦めろ、と言われるものとはかり思っていた。

もちろん蛮行姫のしてきた事や姉の事を思えば、何度殺しても殺したり無いくらい憎い相手なのは間違いない。

でもあのスワジク姫は、私が殺したいと思つた蛮行姫その人なのだろうか？

もっと根本的な所で、スワジク姫は『本当に殺すべき仇』だったのだろうか？

「ルナ！ あなたまたぼうつとして！ 私の言っていることちゃんと聞いてくれますの！？」

「……ええ、もちろんよ、スヴィータ」

私の調子のいい返事に、おもいつきり疑わしげな視線をよこすスヴィータ。

あははと笑いながら彼女の視線の糾弾を交わしつつ、どうしたものかと思案する。

仲間に入れるのは簡単だ。

でもスヴィータに何かあれば、困るのは侯爵様に違いない。

そうなった時に、スヴィータはどうなるのか？

……考えるまでも無い、『切り捨てられる』のだろう。

もしかしたら、街道で襲ってきたのはあの蛮行姫の仕業ではなく、レオ閣下の差し金ではないかと勘ぐっていたりもしてる。

万一そうだとしたら暗殺に関わる以上スヴィータの未来は、侯爵様かレオ閣下、もしくはフェイタル殿下から切り捨てられるだけ。その事をスヴィータは分かっているのだろうか？

いや、多分分かっているから行動したのか……。

「裏切り者のミーシャに鉄槌を下したのも、アニスの事で蛮行姫を精神的に追い詰めようとした時も、私は常に情報を伝えるだけだった」

「……………」

「私だってちゃんと出来るって、お父様に教えて差し上げたいのもっと私を信用していただきたいの！」

「……………スヴィータ……………」

王宮の外と中では、蛮行姫に対する評価はどうしても温度が違うのだろうか？

いや、蛮行姫自体の評価は総じてよくないのは確かだ。

だけど今のスワジク姫の姿を見たら、王宮内で言われていたほど暴虐無人な人物だったのだろうか？

姉の事が無かったら、私はあの裏通りで膝を抱えて泣いていた姫様をどう感じどう思ったのだろうか？

もしかして何か大きな勘違いをしているのではないか、私は最近はそのような風に思えてならない。

「とはいうものの、今更後戻りなど出来はしませんけれど」

「何を突然言っているのです？ ルナ、お願いですから私にも何か手伝わせてください！！ もう、私を仲間はずれにはしないでちょうだい！」

スヴィータが焦れたように私に詰め寄ってくる。

彼女の碧い眼の奥に揺らめく決意に、私は心の中でどうしたものかと困り果ててしまった。

「貴女に人が殺せるのですか？」

背後から唐突に男の声がして、私もスウィータも泡を食って立ち上がり振り返った。

そこに佇んでいたのは、『名無し』と呼ばれる騎士の称号を剥奪された元騎士。

どこにでも居そうな平凡そうな顔と雰囲気、まるで茶飲み話のように人の生き死にを語れる男だ。

私達はともかく猫にすら気付かせずに、わずか3歩か4歩の距離に名無しはいる。

その事実服の下の肌が粟立つ。

スウィータはその意味に気がついていないようで、警戒はしつつも不機嫌な声を名無しに掛ける。

「あ、あなたは確か……」

「幾度かすれ違ったことがございましたか？」

「そうですね。……それはそうと、さっきの質問は私に向かって言われたのですか？」

「ええ、そのつもりでお聞きしたのですが」

何を考えているのか分からない顔で、いつもの如く飄々と会話を進める名無し。

いつ見てもこの男は空恐ろしく感じる。

虚無感というか、生きている人間を相手にしているという実感が湧かないのだ。

「ええ、必要とあれば出来ると思いますわ」

「なるほど……それでは」

「あらあら、私の意見は聞いてくださらないのですか？　なんとなくか反対なのですけれども」

「ちよっ！　ルナ！　貴女はっ」

血相を変えて詰め寄ろうとするスウィータを片手で制しながら、名無しは私の方を睨みつけてきた。

表情も目つきも全く変わっていないのだが、彼が纏う空気が変わったことで不機嫌になっていることが分かる。

「何故ですか、ルナさん。人手は多いほうがいいんじゃないですか。あの赤毛の娘が仲間にならない以上、ここは侯爵様のお嬢様にお手を拝借するのもありではないでしょうか？」

「そ、そうです！　ルナ、先ほども言いましたけれど、私も貴女と共に仇討ちをしたいのです」

名無しの一言で、私の腹は決まった。

私はことさら厳しい表情を作り、二人に相對する。

見も知らぬ誰かの都合で、私の友達を危険に晒すわけには行かない。

「ここで騎士見習いを確保して、アニスと共に蛮行姫をおびき寄せ
る餌にする。その手はずはほぼ整っていて、今更なんの手助けを必
要とするのです?」

「いやはや、何事にもイレギュラーというモノが存在するのですよ、
ルナ」

名無しが、にやりと笑った。

背筋が凍りそうなその笑みの意味を、直感的に私は理解する。

どつりで、この男から生臭い臭いがしていたわけだ。

「人を……殺したのですね? 協力者の方ですか?」

「いやいやいや、幾ら私でも仲間を手に掛けるほど落ちぶれてはい
ませんよ。どうも王都のならず者達がアニスの居場所を探っている
ようでした。先ほど隠れ家が襲われてしまったのです」

大げさに悲しむような格好をしつつも、彼の眼の奥は冷え冷えと
しているのが分かる。

そう、この眼を私は見たことがある。

しかもつい最近のことだ。

「アニスは無事なのですか?」

「ええ、彼女だけはなんとか。ただ決行の日まであの娘の世話をす
る人物が居なくなってしまうてねえ。それに場所を変えないと、
衛士たちに見つかる可能性も高くなる」

「あなた、それで私はアニスの世話と監視をすればいいのですか?」

スヴィータが会話に割り込んできて、自分の役割を確認しようとする。

私は焦ってスヴィータを睨むけれども、彼女は私の視線を意図的に無視して名無しと話を進めた。

「いいでしょう。役としては不満もありますが、とりあえずは人手が足りないのであれば手伝います。お父様にもちゃんと私が役に立っていることを報告してくださいね」

「ええ、もちろんですとも。事後の事もご心配なく。しばらくは王都から離れねばなりません。居心地のいい場所を用意しておりますので」

恭しく首を垂れる名無しに、満足そうに頷くスヴィータ。

スヴィータの愚かな決断を止める事が出来ず、私は苦い思いで二人を見つめることしか出来ない。

蛮行姫も敵だが、この名無しも敵だという事を確信する。

結局は私達は権力者の間で翻弄される小さな存在でしかないのだ。自分の非力さに、悔しい思いを噛み殺すしかない。

今はまだ、挽回のチャンスがあると信じたい。

敵も討ち、権力者の口封じからも逃れられる道が、きっと何処かにあるはずなのだ。

「私一人なら、どこで死んでもよかったですのに……」

私の呟きは、教会を去っていく名無しとスヴィータにはもう届か

な
か
っ
た。

48話「うん。番外編だな」

なにやら後頭部に鈍い痛みを感じる。

さつきまでスワジクの部屋の床を調べていたのだが、それ以降の記憶がぶつとりと途絶えて思い出せない。

一体私はどうしたのだろうか。

寝起きの眼を瞬かせながら、私は自分の現状を確認する。

天井の装飾やインテリアから、ここがスワジクの部屋であることが分かった。

それに何故かスワジクのベッドで寝かせられているようだ。

意識を失っている間に、彼女が私を寝かせてくれたのだろうか？
身体を起こそうと思っけて身をよじると、また後頭部に鋭い痛みが走る。

かなり手加減なしで殴られたようだ。

私は小さく呻きながら、後頭部に手をやろうとして失敗した。

右腕が動かないのだ。

「な、なんだ？」

右腕の感覚の無さに私は慌てて掛かっていた上布団を跳ね上げて、そして凍りついた。

私の右腕は……私の右腕の上には……、なんとも幸せそうな顔をして眠るスワジクが居たのだ。

急に私が動いたからだろうか、少し眉をしかめつつ私の腕に頬を擦り付けて幸せそうに眠り続けるスワジク。

「な、なんだんだ、一体これは？」

「うにゆう……すう、すう」

「こ、これでは動けないか……」

自分の傍で無防備に眠る美少女の寝顔を見つつ、さてどうしたものかと思案する。

このまま行ってしまうと、部屋に入ってきた侍女達にあらぬ噂を立てられてしまう。

いや、ついこの間まではこのような状況になるように努力してきたのだから、それはそれで目的は果たされたと喜ぶべきもの。

もちろん、それはスワジクの中身が別人でなければという前提つき。

この状況はヴィヴィオやレオに知れたら、非常に不味いのではないだろうか。

そうでなくともこの間のトイレの一件もある。

あの時はうまく誤魔化せたが、同衾していたとなればかなり言い訳に苦しくなる。

なんとかスワジクを起こすことなく、すみやかにこの場を離脱する方法はないかと周囲を見回す。

そしてベッドサイドのある一点に私の視線は釘付けとなる。

「ば、馬鹿な……。あ、ありえない！ そんなことはありえない！
！」

思わず声を荒げてしまい、ハツとなって自分の腕を枕に眠る少女を見る。

なにやら不機嫌そうな表情になっているが、しかしまだ夢の中に

まどろんでいる様子。

ふうと冷や汗を左手で拭いながら、私はもう一度ベッドサイドに置かれた椅子の上にある自分の履いていたであろうズボンを覗み付けた。

皺にならないようにご丁寧にきちんと畳んであり、しかもその上にちょこんと乗っているのは私の下穿きだ。

「どうも下半身が涼しげだと思ったら……」

上はきちんと着たままなのに、下半身だけ何も身に着けていない状況。

しかも脱がされたズボンは、あるうことかスワジクの向こう側にあった。

これは一体誰の仕業なのか……。

「くそつ。ここからでは手が届かないか」

仕方が無いのでなんとか起こさないように、腕をスワジクの頭の下から抜こうと試みる。

ゆっくりと腕を引き抜き始めると、何故か不機嫌になって私の腕にしがみついてくるスワジク。

しかも布団が少しずれて彼女の肩があらわになった。

瞬間、私の心臓は止まりかける。

どうみても彼女の肩には布一枚、紐一本纏わりついていない。

すらりと伸びたしなやかな腕は艶かしく私の腕にまとわりつき、上腕から肩へ、肩から脇へと降りてゆく少女の瑞々しい曲線が嫌で

も眼に入った。

「な、な、な、な、なんで寝間着を羽織っていないんだ？」

「ううん……、五月蠅いよお、みくしゃ……」

不味い。大分眠りが浅くなって来ているかもしれない。

早く何とかしなければ！

私は意を決し、彼女に覆いかぶさるようにしてスワジクの頭を左手でそつと持ち上げる。

細心の注意を払いながら、私は右腕を抜いてゆく。

上腕さえ抜けてしまえばあとは楽に抜けるはず。

「ううん……、なんだよお……」

下半身裸で全裸のスワジクに跨り、両手で彼女の頭を支えているという構図。

ここで眼を覚まされたら社会的な意味も含めて、多分私は生きてはいられないだろう。

しかも彼女に馬乗りになって気がついたことがある。

見えてはいないが、紛うかたなくスワジクは全裸だ。

私の内腿に摺れる彼女の決め細やかな肌の感触で、嫌でも分かっ
てしまったのだ。

私は脂汗をダラダラと垂れ流しながら、抜いた右腕の変わりにそ
つと左腕を差し込む。

さっきまで不機嫌そうだった顔が途端に穏やかなものになり、
軽い寝息をさせ始めた。

「ふう。なんとか位置の入れ替えまでは出来た。ここにある下穿きとズボンを履けば、あとはスワジクが起きようが何をしようが言い訳は立つ」

が、ここにきて新たな問題が発生した。

右腕が痺れてきて、言うことを利いてくれないのだ。

しかも何処かに触れるたびに、ジンという痺れに思わず声を上げそうになる。

これではズボン一つ満足に掴めないだろう。

私に背を向けて寝るような形になっているスワジクの寝顔を覗き込んで、眠りの深さを確認する。

「うん、当分は大丈夫そうか。仕方が無い、少し痺れが治まるのを待ってから行動するか」

私は仕方なしにベッドに再び横たわる。

こつやって誰かと一緒のベッドに寝るのは、一体いつ振りになるのだろうか？

昔はたまに母上が添い寝をしてくれたように記憶しているが、それもはるか昔の事で思い出すのも難しくなりつつある。

その時は、あたたかい何かに抱擁されるような気持ちよさがあったが、今は緊張のためかそうだったものは感じない。

義理の妹相手に抱擁されたいなどという変な趣味も無いけれど。

妙な安らぎに身を包まれながら、私は目の前に横たわっている美しい銀色の髪を眺める。

母親が違つというのに、この銀色の髪だけは双子のように似ているな。

帝国皇族の血を引いているのだから、当たり前といえば当たり前なのかもしれないが。

「うん。大分腕の痺れも取れてきたようだ」

私はベッドの横に置かれている自分の下穿きをまず手に取り、布団の中でなんとか履く。

あまり身体を動かさないと注意を払いながらの作業なので、凄く時間が掛かってしまうがバレルよりはいい。

しかし私の体の動きを敏感に感じ取ったのか、またスワジクがぐずりながら寝返りを打ってきた。

しかも私のお腹にしがみ付いてくる様な感じである。

「うほっ、いい抱き枕……」

「……何か背筋が寒くなるような一言だったな」

脂汗を流しながら、私はスワジクが再び眠りに落ちるのを待つ。

だが今の状況だと、手を伸ばしてスポンを取るのにも一苦労しそつである。

なにせ体幹に抱き付かれているのだからな。

さらに困ったことに、私の右足にスワジクの足がのっかかって来たのだ。

(何か別の事を考えるんだ！　そ、そう、足に当たっているのは絹の肌触りをした何か動物めいたモノだ。腰の付近に当たっているのは、マシユマロか何かなんだ)

唯一の救いは下穿きを履けたのと、わき腹にしがみついているだけなので、誤解されるような状況にはまだない、と信じていたい。

この状況を切りぬけさえすれば、問題など何処にも無いのだから私は復活した右手を伸ばして、なんとか椅子の上のズボンを取ることに成功した。

その動きに反応したスワジクが、わき腹に回していた手を五月蠅そうに跳ね上げ、そしてぱたりと落とした。

「はうっ！」

あまりの容赦の無い痛みにも、私は思わず身体を捻って唸り声を上げてしまう。

私が瞬間的に身体を激しく捻らしてしまったので、お腹に乗せていたスワジクの頭も跳ね上がってしまった。

「うみゅっ！　な、なに？　何事？」

本格的に覚醒を始めてしまったスワジクに、私は焦ってズボンを履こうと強引に動く。

その動きも相まって、完全にスワジクは眼を覚まし始めてしまった。

唯一の救いは、いまだ寝ぼけていることか。

「うー、懐中電灯、懐中電灯つと……、あ、あった！」
「っ！！！！！！」

「ん？ あれ？ スイッチは何処かな？ こっちか？ いや、こっちかな？」

「！！！！！！！！」

声にならない声を上げつつ、私はスワジクの攻撃に耐えた。
もちろんスワジクの手を離そうと彼女の手首を掴んだ。

「あ、もしかして頭を回すタイプのやつかなあ？」
「や、やめないか、スワジクっ！」

私の怒鳴り声でようやく寝ぼけた頭がクリアになったのか、ぱちくりと瞬きを繰り返しながら私の顔と自分の手を交互に見やる。
ようやく状況を把握したのか、その瞬間スワジクの顔から一気に血の気が引けた。

「のああああっ！！！！」

姫とは思えないような叫び声を上げながら、器用に尻餅をついた状態で後ろへと這い下がるスワジク。

もちろん全裸なので直視しようものなら、いろんなモノが見えて

しまつ。

私はとっさに視線を逸らしながら慌てて弁解しつつ、シーツを彼女に投げてやった。

ほどなくしてスワジクのいいよという声が聞こえたので、私は逸らしていた視線を戻す。

「ご、誤解はしないで欲しい！ 私も目覚めたらこのような状況にあつて戸惑つていたのだ」

「な、な、な、なんで、ズボンを脱いでるの？ それに、ボク寝る前はちゃんと寝間着で寝たのに！」

「それは私のほうが聞きたいくらいだ」

「そ、そ、それに……」

「いっつなっ！！！！ それ以上は言うんじゃない！」

おぞましいものでも見るような眼で、スワジクは自分の右手を凝視しながら震えている。

それはそれで色々と傷つくのだが、まあ今は気にしては駄目だ。

「ま、まずは落ち着こう、スワジク」

「う、うん。分かったよ、フェイ兄」

状況を一から説明するとスワジクは納得してくれたようで、ようやく笑みにも硬さが消えたように思える。

もちろん内心はどう思っているのかは分からないが、それでもここ最近で培ってきた信頼関係が台無しになるような事態にはなっていないはず。

結局スワジクに聞いても、こんな悪戯をした犯人には心当たりが

無いという一点張り。

不可解な事件ではあったが、スワジクもこの話はおおっぴらにしたいくないとの事で二人の秘密とすることになった。

どうにも腑に落ちないがレディに恥をかかすわけにも行かず、この件はうやむやにするしかなかったのが残念だったが。

その夜、「ミイイイイヤアアアツ!!!」という少女の怒号が夜の街に響き渡ったのと、凄惨な形相で町を徘徊する白鬼がいたという噂がまことしやかに囁かれることになるのは、また別の話。

49話「もう終わりにしよう」

ベッドの上に置いてある細かい目のチエインメイル。

針状の武器による刺突や打撃については防御効果はないけれど、刃がついた武器の斬撃にはある程度有効な防具である。

目が細かい分通常のチエインメイルよりかは弱いけれど、動きを阻害しないのと金属の擦れる音が殆どしないのが利点。

次に腕には鋼の棒を巻きつけ、手甲の代わりとする。

それを下着の上に着込んで、厚手の長袖貫頭衣で鎧や手甲を隠す。足元に関してはズボンの下になめし革の脛当てを巻きつけてある。重装備という訳ではないけれど、やはり荒事が想定される以上最低限の準備はしていくべきだ。

ミーシャさんの受けた傷から考えて相手の得物は鋭利な刃物。

不意を疲れたとしても、初撃さえ凌げば反撃のチャンスは幾らでも作れる。

屈伸したり身体を捻ったりして、着衣の下につけた防具が邪魔にならないことを確認。

重さも気になる程ではないから、スピードで見劣りするようなくとも無いだろう。

最後に腰帯を巻きつけ、鍛冶屋で買ってきた片手剣を装着させた。あまり重装甲されていたら敵わないけれど、今の俺程度の防具ならこの剣で問題なく叩き伏せられる。

もっともこの剣で叩き伏せられないほどの重装備をしていたら、間違いなく衛士たちに見つかってしまうから、武器の選択はこれでもいい。

後は予備にナイフを懐に忍ばせておけば、まあ完璧だな。

「さて、そろそろ行くか……」

部屋の扉を颯爽と開けて出ようとしたら、開けた扉の向こうに心配そうな表情のニーナが立っていた。

俺の格好を見て少しだけ驚いた顔をしたかと思うと、どこか寂しそうな笑みを浮かべる。

「行くの？」

「ああ」

「……あ、危くない？」

「さあ、どうだろう。15人も殺せる奴らだからな。安全っていう訳には行かないと思う」

その言葉でさらに不安そうな顔をするニーナ。

俺は彼女のそんな表情を見て、なんだか頬がむず痒くなってしまった。

成り行きで行動を共にしているニーナだけど、それでも打算なく心配してくれる人がいるというのは嬉しい。

誰かに心配してもらおう事など実家を出てからこっち一度も無かったので、余計に新鮮な気持ちになれたのだろう。

「心配すんなって。情報提供者に会うだけだし、今回は危ないことなんて何も無いと思うぜ」

「ううん、それならいいんだけど……」

「それに、俺が剣で遅れを取る相手なんて、近衛の連中以外にはそうそう居ないとおもうけどな」

「もう、すぐに調子に乗る！ ポーマンの悪い癖だよっ！」

「はいはい。それじゃ、俺もう行くぜ？」

「あ、う、うん。気をつけてね？」

「ああ、それと帰ってきたらパジィサラダでも作ってくれないか？あれ美味しかったんでまた食べたいな」

「もう！ちゃんと時間通りに帰ってこなかったら作ってあげないからねっ！」

「分かってるって」

心配そうな顔をして見送るニーナに、俺は精一杯いい顔で笑って見せてやる。

ついでに帰ってきてからの晩御飯のリクエストを出しておいたのは、居ない間変なことを考える余裕なんて無くなると思ったからだ。ま、ちよつとハードワークになるだろうけど、帰ってきてからご機嫌取りすればいい。

ニーナをそこに残して俺は階段を駆け下りる。

勝手口に戻ると扉を開き、黒髪のメイド、ホランさんとの約束の場所へ一歩を踏み出した。

アニスさんの有力な情報が手に入ればいいのだが……。

その日の夕方、僕はいつものように地下通路を使って教会の物置へと向かった。

扉を開ける前にトントンと壁を叩いて、外で待っている筈のボーマンへと合図を送る。

けれど、暫く待ってみても合図は帰ってこない。

「あれ？ ちょっと早かったかなあ。もうちょっとゆっくりしていても良かったかなあ……」

僕はもう一度外へと合図を控えめに送るが、やはり返答は無いようだ。

少しだけ迷ったけれど、スイッチを入れて秘密の扉を開けて外に出る。

夜の帳も下りて、物置小屋の中は薄暗かった。

「ボーマン？ いないの？」

目が慣れるまで小屋の中でじっとしていたけれど、近くに誰がいる気配も近づいてくる様子も無い。

どうしたものかと思案したけれど、鳥の冠亭までの道は完璧に覚えていたので一人で歩いていっても問題はないと思う。

「うーん、ここで待っていても仕方ないしなあ。こっちに向かっている途中だったら、どっか途中で鉢合わせになるよね？ 時間の節約にもなるか……」

誰に言うともなしに、僕はそう呟くと小屋を出て鳥の冠亭に向けて歩き出した。

教会の庭から裏通りに入ったところで、後ろから誰かに肩を叩かれた。

「ひいっ！」

「姫様、お一人なのですか？」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには半眼で僕を見つめるミーシャがいた。

なんか不機嫌そうなんだけれども、気付かない振りをする。

理由を聞いたら凄い勢いで説教されそうな雰囲気だしね。

「ミーシャかあ、驚かさないでよお」

「あのポーマンとかいう騎士見習いはどうしたのです？」

「まだ来ていないみたいだよ」

「では姫様は何故こんなところを一人で歩かれていますのです？」

「あ、いや、ほら、なんていうかさ、慣れた道っていうか、時間の節約っていうか……」

「ま・さ・か、お命を狙われているかも知れないと分かっているが、一人でこんな人気の無い裏道を暢気に歩いていたとか……仰りませんよね!？」

「い、いやあ、あ、あはははは」

笑って誤魔化そうとしたけれど、ミーシャは呆れたような顔をしてわざとらしいため息をつく。

なんだよ、駄目な子を見るような顔しないで欲しいんだけどな。

とは何となく言い辛かったので、心の中で言うしておく。

「姫様、もう少しお立場を自覚してください。でなければ外出自体禁止させていただきますよ?」

「いや、それはちよつと……」

「それにあのヒヨッコも駄目ですね。姫様の護衛をサボるなんて、騎士を名乗る資格すらありません。やはり姫様の味方は私一人で十分ですね!」

「いやあ、それはそれで色々と問題があるような気がするんだけどね。」

でも、ミーシャに関してはもう迷惑掛けてるし、今更何を言っても聞いてくれそうにも無いしなあ。

まあポーマン達についてはアニスが見つかるまでの間の話だし、あの料理屋さんで情報を集めるだけだし、あんまり危なくなったりしないとは思ってるんだけどね。

さすがにあんだけ人が居るところに殴りこみ掛けたりはしないだろうし。

「ま、まあ、とにかくミーシャが来てくれて心強いよ。さすがに暗い夜道は怖いよねえ」

「そう思われるのでしたら、北の塔舎からお出にならなければいいのです」

「……チツ、藪蛇だったか」

「何か?」

「いいえ、なんにも」

まあ、とにかく今晚は鳥の冠亭にいつて北町の会長さんに会わなきゃいけないんだ。

アニスの居所判明していたらいいのになあと淡い期待を抱きつつ、僕はミーシャを連れて街の中を進んだ。

「ボーマンが行方不明!？」

鳥の冠亭に到着した僕の第一声が、厨房を越えてホールにまで響いた。

食事をしていた何組かの人達が何事かとこちらを気にしていたようだけれど、今の僕はそんなこと気にしている余裕が無い。

「えっぐ……ばい。夕方までには、がえつてくるっでいったのに」「
「どうも、あの黒髪の侍女さんとどこかで待ち合わせをするみたいな事を言っていたんだけどねえ……」
「ザラダぶぐつでまつでろっでいったのに……」

泣きじゃくるニーナと彼女を宥める女将さんを前に、僕は唇を噛んで湧き上がる感情を押し殺す。

そんな僕の肩をミーシャが包み込むように抱いてくれた。
相変わらずコルセットを締めているのか、いつものような柔らかさは感じない。

だけど今はそんなミーシャの気遣いすらも僕の心を掻き乱す。

「あの侍女さん、確かホランさんっていったかな。昼過ぎに町のことかで落ち合っつて話らしかつたんだけど……」
「「ホラン!?!」」

僕とミーシャの叫び声が綺麗に重なった。

ホランという名前に心当たりがあつたからだ。

「女将さん、ポーマンは確かにホランに会いに行くといつたのですね?」

「あ、ああ。あのラムサス人ばい侍女さんの名前がホランさんだつて、ポーマンが言つてたからねえ。間違いないよ」

「そつか……あのメイドさんが……ルナ・ホランだつたんだ……」

泣きじゃくつていたニーナと女将さんは、青い顔をしている僕たち2人を見て怪訝そうにしている。

ルナ・ホラン。

レイチエル・ホランの実の妹で、この身体の本来の持ち主であるスワジク姫を湖に突き落とすとされる侍女。

あの日記にルナの名前は何度と無く出ていたから知っていたのに、名前を聞くことしたら上手くはぐらかされていたのは、今の僕に悟られないためだったのか。

「間違いないよね、ミーシャ」

僕は震える声で隣に佇むミーシャに問いかけた。

その瞬間も、あの路地裏での出会いや今までの彼女との会話が脳裏に蘇る。

信じたくは無かったし、否定して欲しかった。

なんだかよく分からない不思議な娘だったけれど、誰かを陥れると出来るような娘には見えなかった。

それだけは確かだと自信を持って言える。

「私自身、彼女の姿を目にしていなかったのでなんとも言えませんが、ルナ・ホランは確かにラムザス系移民の娘です」

「そつあ……あの娘がルナだったんだ……」

「ただ私が腑に落ちないのは、ルナが恨んでいたのは姫様ただ一人。他の誰かを巻き込むようなことをする娘じゃないのですが……」

「あの黒い娘からは姫様を恨んでいるというような雰囲気は感じなかったけどねえ、あたしじゃ」

「むしろ手にかかる妹のような感じに見えたな。人違いじゃねえのか？」

女将の感想に鍋を振りながら大将も同意する。

ニーナも顔をタオルで覆いながら、こくこくと頷いて2人の意見に同意した。

「もちろん、人違いかもしれませんが、ラムザス系のホランという侍女風の娘が姫様に正体をばかして接近してきた。ヒヨッコ騎士がその人物に会いにいつて消息を絶つ。疑うには十分な状況でしょう」

そういつて顎に手を置いて眉間に皺を寄せるミーシャ。

「でもそうだとして、どうして姫様を直接害さないのか。多分ルナには姫様を殺す機会など山ほどあったはず……。そんな回りくどいやり方を選ぶ必要なんてないのに」

「それはボクに絶望して欲しかったから……。じゃないのかな？」

ぼつりと呟いた僕の言葉に厨房が凍りつく。

ミーシャやニーナ、女将さん達の誰もが既に分かっている、それでいても口に出れなかつた言葉。

「姫様、一体何を」

「良いんだ、ミーシャ。これ以上、ボクは周りの人に迷惑を掛けたくないんだ。……本当はね、なんとかなるんじゃないかなって淡い期待を抱いていたんだけど」

そういつてはにかみつつ、頬を人差し指で搔く。

これ以上僕の我儘で誰かを傷つけるのは耐えられないよ。

「前から分かってたんだよね、実は。だってね、不幸な事って全部ボクがらみな訳だし。ミーシャの事だってそうだし、アニスの事もそう。今回のポーマンもその延長線上なわけだよね。実はレイチエルさんの話もそうらしいんだよね。お姫様の日記に書いてあったよ。事件を裏で仕組んでいる人は……。ボクに自殺して欲しいらしい」

ニーナや女将さん達には唐突な話に思えたかもしれないだろうけど、多分ミーシャはある程度は気付いていたんじゃないかと思う。だって僕の言葉に動揺してない。

姫様の日記には、彼女がどう感じ何を思っただけを毎日過ごしていたのかも全部書いてあった。

どんな最後を彼女が望んだのかも……。

僕がそれを受け入れられなかっただけ。

だから僕は足掻いた。

生き延びたいと思っただし……。

死んじゃった姫様に、世界はそんな悲しいことばかりじゃないって教えてあげたかったしね。

でも結局は周りの皆を傷つけただけ。

もうそろそろ潮時かもしれない。

「多分、ボク宛にメッセージが届くんじゃないのかな。ボクが大人しく彼らのいう通りにすれば、ポーマンもアニスも無事に帰ってこられる筈」

震える手を必死に隠しながら、僕は悲壮にならないように勤めて明るく振舞う。

今の僕には、これくらいしか出来ないから。

「だから、もう終わりにしようよ」

50話「姫様の本心」

「姫様、終わりにするとは一体……」

ミーシャが俯き加減のまま、僕に問いかけてくる。

多分怒っているんだろうなと思いつつ、彼女の問いに勤めて平静を装って答えた。

それでも少しだけ声は震えていたけども、今の状況でそれを指摘する人もいない。

「うん。ボクの死に意味があるなら、それと引き換えにアニスやボーマンを助けることが出来るんじゃないかな。助け出した後で命を狙われる危険性もあるのかもしれないけれど、ボクが死んだ後ではリスクを犯してまで皆の命を狙うとも思えないんだ」

死ぬという単語に、ニーナがびくつと肩を揺らす。

ボーマンを心配している彼女の気持ちも痛いほど分かるつもりだし、ミーシャの気持ちを踏みにじって自分を粗末にしているのも分かっている。

でもどう考えても、僕に残された選択肢はこれくらいしか思い浮かばないんだ。

「だから、もうボクには係わらないようにして欲しいんだ」

「バカッ!」

パンという乾いた音がした。

最初何が起こったのかわからなかったけど、頬が熱くなって痛みを感じたことで自分が叩かれたということに気がつく。

目の前で大粒の涙を流しながら、悔しそうに唇を噛み締めているニーナ。

彼女の行動を驚いた様子で見回しているミーシャや店の人達。

「そんな風に助けられたって、ポーマンは喜ばないですっ！！」

「え……？」

「大体何ですか！ 自分ばかり悲劇の舞台役者みたいにつ！ ボクに係わるな？ もう終わりにしよう？ ふざけないで！ ポーマンの気持ちも分かってあげない傲慢女っ！」

正直目の前でニーナが喚いているのを見てはいるのだが、状況に頭が追いついていない。

っていつかなんでこの場面で僕が叩かれてなじられてるの？

「だいたいポーマンのヤツ、いつつも姫様ばかり見てて私を見てくれないし、実物の姫様って噂と正反対で守ってあげたくなるような人だしっ！ 本当は姫様の顔を見たら罵ってやるうって思っていたのに、ポーマンの話を聞いたら今にも死にそうな顔して罵れなくなっちゃうし！ ホントになんなんですか、あなたはっ！」

「二、ニーナ……落ち着け？ 姫様が吃驚されているから」

「これが落ちていられますかっ！ 大体ミーシャ様もミーシャ様です！ もっと」

ボロボロと涙を流しながら怒り狂っているニーナを、あっけに取られていたミーシャが宥めに入る。

「だけどニーナはそんなミーシャにも何か言っただけで噛み付いているよ。うだが、その言葉は今の僕の耳には入ってこない。」

「……んだよ」

「からちゃんと落ち着いて……って、姫様？」

僕が肩を震わせてぶつぶつと呟いている姿を見て、ミーシャが恐る恐る声を掛けてくる。

「五月蠅いっていつてるんだよ!!」

お腹の底から湧き上がってくる怒りを、両手で調理台を叩くことで発散する。

そうしないと色々弾け飛びそうになったから仕方が無い。

僕に怒鳴られたミーシャは顔を引きたらせて仰け反っている。

心の片隅で八つ当たりしてるなあと思いつつも、感情がぐちゃぐちゃになってもう止まらない。

「というか今は周りの人の視線とか他人への気遣いとか、そんなの気にしている余裕も無いし。」

「ボクだって何も好き好んでこんなことしてるんじゃない！でもしょうがないじゃん！悪いヤツラがボクを嵌めようと皆に危害を加えてくるんだから！ボクだって静かに平穏な日々を過ごしたか

ったよ！　こんな訳のわかんない世界に放り出されてさっ！　なんだよ、異世界とかお姫様とか！　全くもって訳が分からないよっ！　なんでボクだけこんな目に遭わなきゃいけないのさ！！　それでもなんとか皆を助けようと思ってるのに、なんでニーナに叩かれなきゃいけないんだよ！　もう、さんざんだよ！」

僕の怒声に目を丸くするミーシャを押しつけて、ニーナが頭突きをするほどの勢いで顔を近づけてきた。

もちろん僕も逃げずに応じる。

ミーシャや女将さん達は仲裁に入るのも忘れたのか、口をあぐりとあけてヒートアップする僕たちを傍観していた。

「なんですか！　逆切れですか？　逆切れしたら私が黙るとでも？　自分だけが酷い目にあってるなんて思わないでくださいよねっ！　私とポーマンなんかあなたのせいで職を失ったんですよ！　月当り銀貨3枚のお仕事ですよ！？　私のような孤児で後ろ盾も無い人間にはこれ以上ないくらい好条件な職場だったんですよ！！　それなのに姫様とお茶を飲んだくらいでクビとか、有り得ない！」

「そんなのボクに言われても困るよ！　君のクビ切ったのヴィヴィオさんとコワルスキーさんだしっ！　クビですんだからいいじやんかつ！　ボクなんか殺されるんだよ！？　なあんにもしてないのにさっ！　メイドのみんなや王宮の人達は冷たいし！　あのクラウとかいう筋肉馬鹿にも殴られて苛められたし。事情もわかんないんだったら首突っ込んでくんなっていうんだよ！　大体女の子を殴るのも最低だ！」

「それこそ私には関係ありません！　知りませんよ、姫様の都合や王宮での関係なんて！　大体止めて欲しいんですよ、その気もないのにポーマンに色目を使うの」

ニーナがジト目で僕を睨んでくる。
「っていうか僕は中身男だっていうんだ。
何が悲しくて男を好きにならなきゃならんのか。」

「はあ？ 何それ！ ボクがなんでポーマンに色目を使わなきゃならないの？ マジ勘弁。大体ポーマンの事が好きなら、ちゃんと自分の口で言えばいいだろ？ 別にボクとポーマンが付き合ってるわけでもなし！ それに今はそんな話してないし」

「あー、そうでした、そうでした。今は姫様がどれくらいお可哀想な境遇にあるかの不幸自慢のお話でしたっけ？ ざけんなって感じですよー、ミーシャ様」

「あ、いや、なぜそこで私に同意を求めてくるのですか？」

焦りながら首を左右に振るミーシャ。

いつもの人を食ったようなミーシャがここまでうるたえているのも珍しいのだが、今はそんな事も気にならない。

何より今は挑戦的な目で僕を睨みつけてくるニーナに意識が集中しているのだ。

「ミーシャは関係ないだろ！ 今はニーナと話してるんだからさっ！」

「関係ないわけじゃないですか。不幸自慢して勝手に突っ走る姫様のお守り、誰がしてくれていると思ってるんです？ 大体ミーシャさんだって被害者ですしねえ」

「そんなのボクのせいじゃないだろ？ なんでボクが加害者みたい

な扱い受けなきゃいけないのさ！ それにポーマンだってボクが頼んで動いてもらってた訳じゃないし！ 自己責任の範疇で出来ないなら、最初からするなよ！ それで怪我したりしてボクのせいだといわれても、ハア？ って感じなんだよ！」

「そーですよ？ 皆自己責任でやってるんですよ！ ミーシャさんが姫様に何か愚痴でもいいましたか？ ポーマンが姫様に自分の境遇について文句をいったことがありますか？ ありませんよね？ ないですよね？」

ニーナの人差し指が彼女の指摘するタイミングに合わせて、ドンと僕の胸を突いて来る。

確かにニーナの言うとおり一連の事件で実質的な被害を被った人達から、僕は面と向かって何か文句を言われた事はない。

だから彼女の指摘に反論できずに、押されるままに壁際に追い込まれる。

「そ、そりゃないけど！」

「だったら、なんで勝手に自分は不幸だってオーラ撒き散らして周りを不愉快にさせてるんです？」

「だってそれはボクが居たから、騒動に巻き込まれたわけで……。ボクが皆と係わりを持たなければ、そんな事は無くて……」

「ポーマンも私も、多分ミーシャさんも、自分達から姫様と係わりを持つと思うたんです！ それを勝手に貴女のせいだなんてすり替えて欲しくありません！ そんなの、ポーマンは喜びません！」

そこまでいったニーナは鬼のような形相から一転、とても優しい表情になる。

彼女のその変化に僕は付いていけず、ただ混乱するばかり。
とまどっている僕のと頭にニーナの手が回される。
えっと思う間もなく、僕は優しくニーナの胸に抱き寄せられた。

「だから、何もかも自分のせいだなんて背負い込まないでください。
死ぬなんて言わないでください。ボーマンが聞いたらきっと悲しみます」

「……」

「貴女は悪くありません。だから自棄にならないで。彼の志を無駄にしないであげてください」

ニーナの温もりが、微かに聞こえてくる心臓の音が、徐々に僕に冷静さを取り戻させてくれる。

いままで溜め込んでいたいろんなものを吐き出して、見っともないくらいな泣き顔でニーナと言い争って、それでようやく自分の本当の気持ちにたどり着いた。

死にたくない。

一人ぼっちは嫌だ。

僕を見捨てないで。

なんて情けない本心なんだろう。

転生とか憑依するオリ主って、もっと芯が強くて何にでも立ち向かっていける人達なのになあ。

なんで僕はこんなに情けないんだろう。

ニーナのこと、なんか小動物みたいな弱々しい娘だなんて思ってた。

でもこんなに懐が大きい人だったんだあつて、今は素直に感心している。

彼女の胸に抱かれてなんかささくれ立っていた心が落ち着いていくような気がした。

これが母性っていうやつなのかなあ？

中身男の僕には到底真似の出来ない芸当だ。

「……ごめん。皆の気持ち、全然考えてなかった。自分の事で精一杯だったよ。ほんと、ごめん」

「私のほうこそ申し訳ありませんでした。姫様を打つわ、暴言を吐くわ。あれですかね？ 不敬罪つてやつですかねえ、あはは」

「あはは、クラウっていうあの筋肉馬鹿がいたら追求したかも知れないけれどね。ボクはそんな酷いことは言つつもりもするつもりもないよ」

あはははと二人で笑っていると、柱をノックする音が背後から聞こえた。

何の気なしに振り返ると、そこに立っていたのは北町の会長さんだった。

会長さんは僕と眼があうと、トレードマークの茶色の帽子を脱いで深々と首を垂れる。

後にいるお付の人達も一緒に最敬礼の姿勢をとった。

「姫殿下とは露知らず、数々のご無礼を致して参りました。部下達の非礼も合わせて、謝罪をさせていただきます」

「あ、いえ、そんな……」

会長さんは僕よりも小柄なお爺さんだから、そんな風に畏まられたら余計に小さく見えてしまう。

僕は慌てて会長さんのところへ駆け寄って頭を上げてもらう。

「こんな下賤な身分の者にまでお気遣いいただけるとは……」

「そ、そんなに畏まらないください。この間みに孫娘と思っ
てくれていいですから。今までどおりに接してくれた方が嬉しいで
す」

「そうですか。噂とはまるで当てにならぬものですなあ。姫殿下の
ような方に蛮行姫などという蔑称をつけるなどと。王宮とはほんに
魔窟ですなあ」

まぶしいものでも見るような目で僕を見ないください。

死ぬほど居心地が悪いです。

そういいながら、傷だらけのスキンヘッドに帽子を再び乗せる会
長さん。

以前のような好々爺然とした笑みを浮かべてハグしてくれる。

うん、これが人の温かみというものなのかな。

「色々とお辛かったでしょうになあ……」

「……あの……会長さん？ 前も言いましたけどここはそういうお
店じゃありませんからね？」

うん、この人これさえなければほんといい人なんだけどねえ。

そう心の中で思いつつ、お尻を掴んでいる会長さんの手を抓り上

げた。

「ほっほっほっほ、孫娘に対するすきんしつぷ？　というヤツです
じゃ」

「いや、触り方がイヤらしいですから」

苦笑しながらそう突っ込んでいると、背後から木が潰される不気味な音が聞こえた。

僕と会長さんは何事かと思つて音のした方を見ると、そこには般若のような顔をしたミーシャが立っていて、握っていた柱を握りつぶしていた。

「みつ！　ミーシャ！？　は、柱！　柱が！」

「姫様、ご命令さえあればその干物の始末、すぐにでもさせていただきますが？」

「し、始末つて何！？　ミーシャ、目がマジ怖いんですけどー！」

「ふおっふおっふお。爺いと孫娘のただのすきんしつぷに目くじらを立てるとは。なんと心の狭い侍女かのお？」

「……殺すっ！」

「ぎゃあああ！　ミーシャ、おち、落ち着いてえええええ！」

握りつぶした柱を、メキョツツっていう異音と共に引っこ抜くミーシャ。

いや、もうそれって人間技じゃないよね？

僕を間に挟んで、しゃーと威嚇するミーシャとそんなミーシャをおちよくる会長さん。

何、このカオス。

さっきまでのシリアスな空気は何処へ行ったの？

「おおつ、そうじゃ、そうじゃ。姫殿下、貴女がお探しの赤毛の侍女の居場所が分かりましたぞ？」

「え！？ 本当ですか！！」

ミーシャに襟首を掴まれて猫の子のようにぶらぶらと宙に揺れる会長さんが、思い出したように重大な情報を告げる。

瞬間にその場の空気が真剣なものに変わり、皆会長さんの次の言葉をじっと待つ。

「どうやらラムザスの間諜が居た屋敷に監禁されているようですじや。先程、ボロボロになった若造も一緒に担ぎ込まれたとの報告も受けておりますなあ」

「も、もしかしてそれってボーマンですか！？」

会長さんの言葉に勢いよく食いつくニーナ。

自己責任だのなんだのいって、やっぱりニーナはボーマンの事誰よりも心配してあげているんだなと分かった。

ボーマンもこんな良い娘に好かれてよかったなと思うその反面、だからこそ無事に救出しないといけないんだと気を引き締める。

「相手もどうやらわし等に隠れ家にいることを隠すつもりもない様子。恐らくはわしらが姫殿下に直接話を持っていくことも理解して

いるのでしょうか」

「それって……」

「はい。相手は姫殿下を誘っていると考えて間違いないでしょうな」

「ごくりと唾を飲み込む僕。

虎穴に入らずんば、虎兇を得ず。

自分の身を差し出して、アニスとポーマンを救い出す。
その解決方法が、改めて僕の頭の中に浮かんでくる。

「姫様、お一人では行かせませんよ？」

僕の考えを察したのか、ミーシャやニーナが鋭い目で僕をけん制してくる。

苦笑いでミーシャに頷きながら、僕たちはどうするべきか作戦を練る為に2階にあるポーマンの部屋へと向かった。

「どうでもいいがよ、店を壊された分の請求って何処にだせばいいんだろうなあ？」

「姫様宛てでいいんじゃないかしら？」

僕たちの背中をぼんやり眺めながら交わされた大将と女将さんの会話は、残念ながら僕たちの耳にまでは届かなかった。

「筋肉馬鹿か……」

「まあ、そういわれても仕方ありませんなあ」

勝手口の間隙から話を聞いていたクラウとセンドリックの2人。たまたま街角で蛮行姫を見かけたので、その後をずっと着けてきていた。

一連の蛮行姫と元侍女の会話や、彼女から見れば取るに足らない身分の者達への接し方を見て、クラウは苦虫を噛み潰したような顔をして終始無言であった。

センドリックは最近の姫の変化を知っていたのでさほど驚きでもなかったが、スワジク姫の我侷ぶりを見てきたクラウとしては衝撃的な一幕であっただろう。

蛮行姫たちが居なくなつて出た最初の言葉が、かの姫がいった筋肉馬鹿というワンフレーズであった事にもクラウの心情が滲み出ているといつても過言ではない。

「どうします、クラウ団長？」

「一旦引き上げる。ただし監視は付けておいてくれ、近衛のほうだな。俺の部隊のヤツラじゃ、俺の時みたいに暴力で解決とか姫様の足を引つ張る可能性もあるからな」

「……なるほど。一旦引き上げて体勢を整える、というわけですかな？」

「それもある。が、一番はフェイタルのヤツをぶん殴らないと気がすまねえ。なんで俺に情報を寄こしやがらなかったのか聞かなきゃならんしな」

大股で去っていくクラウの背中を、苦笑いをしつつ見送るセンドリック。

その頭の上から微かに漏れてくるスワジク姫達の話し声を聞き流しながら、彼もまた自分の役目を果たすべく街の方へと歩き始める。一度だけ彼は鳥の冠亭の2階を振り返り、ぼそつと独り言を呟いた。

「なるほど、あの姫殿下であれば確かに剣を捧げる価値はあるか……」

コワルスキー隊長と激しく言い合ったポーマンの姿を思い出し、己の忠誠を捧げる美姫あめじを得た彼を羨ましく思うセンドリックであった。

まあ、彼は彼でちゃんと国王に剣を捧げているので羨む必要もないはずなのであるが、やはり美姫に捧げる剣というのは羨望に値するものなのだろう。

51話「世界は僕を中心に回ってはいない」

いつものように残務処理を深夜に片付けていた私は、静かなはずの深夜の王宮がにわか騒々しくなったのを感じた。

「どうやらこちらに向かつて誰かがやってくるようだ。」

程なくして荒々しく部屋のドアが開け放たれたかと思うと、その向こうに鼻息荒く憤怒の形相をしたクラウが立っていた。

私はそれまで書き進めていた書類の手を止め、何事かと思ってクラウに声を掛ける。

「……………」

「あれは一体どういう事だ！」

私の声を大声で遮るクラウ。

大股でデスクの前までやってくると、ヤツは力いっぱい拳骨で机の上を殴りつけた。

その衝撃で机の上においてあった羽ペンやインクのボトルがひっくり返り、書類の山はなだれ落ちる。

少し考えてから、クラウの怒りの原因に辿りつく。

「……………」

「それ以外に俺がお前に怒鳴らないといけない事があるのか？」

「さあな。だがスワジクの件にしても、正直、君は部外者だ。何を知って怒っているのかは知らんが情報漏えいの危険を考えたら、その秘匿は無難な選択だとは思っただが……………」

「くだらねえ言い訳なんか聞きたくねえ！ 単刀直入に聞け、あ

れは誰だ？」

今にも頭突きをせんとばかりにずいっと身体を乗り出してくるクラウ。

私はヤツの頭を押し返しながら逆に問いかける。

「一体何を」

「俺はこの目で、耳で、直にあの蛮行姫の言葉を聞いてきた。あれは俺の知ってる蛮行姫なんかじゃねえ。あれは一体誰だ!？」

「……こんな夜中に、スワジクの部屋に押しかけたのか？」

何故が一瞬ざわりと心が乱れたような気がしたが、私は何事もなかったかのようにいつもの冷静な仮面を顔に貼り付ける。

貴族や王宮内の人間と渡り合っていていく間に身に着けた、果てしなくくだらない特技の一つだ。

それが今はありがたく感じるのは何故だろうか。

「馬鹿を言え、蛮行姫は今城下町の鳥の冠亭という宿屋に入り込んで、町の顔役と密会中だ」

「……なんだと？ 侍女達の報告では、彼女はベッドで眠っているとあったが……」

「身代わりでも置いてるんじゃないのか？ もしくは侍女もグルとか」

今日宿直のライラや臨時の侍女達との間に、スワジクとの信頼関

係があるとは思えない。

「なら外部の手引きか何か？」

「瞬時にいるんな可能性が浮かんでは消える。」

「だが今もつとも確かめなければいけないのは、彼女の部屋で寝ている人物は何者なのかという事だ。」

「部屋を出て彼女の寝室へと向かおうと立ち上がったところを、クラウに椅子へと押し戻される。」

「何を」

「何処かへ行く前に、きちんと俺に説明していけ」

「いくら従兄弟である君といえど、迂闊に話せないこともある」

「なるほど。ということはあの壘行姫は偽者ってことでいいんだな？」

「スワジクはスワジクだ。それ以上でも、以下でもない」

「私がそう冷たく言い放つと、クラウはふんと鼻で笑って私を見下ろす。」

「その顔は嘲笑というよりは、どこか哀れみを含んでいるような気がした。」

「鼻白んだような顔をしたクラウが、机より一步下がって顔を背ける。」

「お前のいうスワジクというのは一体どっちだ。傲慢で不遜で貴族とみれば敵意を剥き出しにしていた壘行姫のことか？ それともあのぬるくて甘い理想を夢見る小娘のことか？」

「その問いに答える義務が、私にあるのか？」

「何も知らされずに部下に働けとは言えん。満足に働いて欲しけれ

ば情報は隠すな」

「王の剣ともあるう騎士団長の言うこととも思えないな。剣はただその主のために尽くすのみ、じゃあないのか？」

「フエイ、お前は陛下から言われたからという理由だけであの姫を守っているのか？」

「……当然だ」

「なら、スワジク姫の命を守る必要がなくなったら、お前はどつするんだ？」

「なんだその頭の悪そうな仮定は……」

「例えばの話だつ。あの壘行姫の後ろ盾が無くなったら、この国における存在価値が無くなったら、第3王子様はいかがなさるのかつて聞いてるんだ」

多分、これが少し前なら迷い無く「守らない」と言い切つただろう。

何故なら壘行姫はこの国の貴族の敵であり、癌であり、命綱だったのだから。

その存在価値が無くなれば、好きでもなかった相手を籠絡する必要もなくなるのだ。

だが今は事情が違う。

あのスワジクには別の人格が宿っており、生前の彼女が行つてきた罪を理不尽に負わされているだけ。

ならば今のスワジクを守るのは、その真実を知る私の役目だ。

「どつした？ なぜそこで黙る、フエイタール」

「馬鹿らしい。そんな子供じみた議論に付き合う必要を感じない。

私はただ課せられた義務を遂行するだけだ」

だがクラウが言うような王命が下ったら、私は一体どうするのだろうか。

彼女を守る術が、私に残されるのだろうか。

私は内心の動揺を隠して、スワジクの部屋に向かって歩き出す。

無然としているクラウの横を通り過ぎようとしたとき、この部屋の扉が唐突に開かれた。

私とクラウは突然の闖入者に驚いてそちらを凝視する。

2人分の視線を受けながらもひるむ事無く、突然の闖入者であるレオは口早に喋りだした。

「フエイタール殿下……大変です、帝国で大規模な政変が……」

「政変だと？ おい、一体何があった！」

「えっ？ ク、クラウ団長!？」

私が声を出す前に、隣にいたクラウが必要以上に大きな声でレオに聞いたです。

レオはその怒鳴り声でようやく我を取り戻し、見せ掛けだけでも普段の落ち着きを取り戻した。

「そ、その帝国で政変が起こり、ヴォルフ家が選帝公の地位を剥奪されました。また、その領地には皇帝直属の部隊が駐留をして、実質統治権も剥奪されたとの噂が……」

「落ち着くんだ、レオ。事実確認は？」

「現在は商人経由の情報ですが、恐らく近日中には駐留武官からも報告が届くはず。それを待って詳細はきめることですが、陛下は現在王都に展開中の第1軍と近衛の撤収を支持されました」

今我々が動いているのは、蛮行姫に害する存在を駆逐するためである。

それを撤収させるということは、王は彼女の存在を守る必要がないものだと判断したということだ。

「レオ……、王は……、父上は他になんと……」

「はい。今日は遅いので、明日以降の閣議で北の塔舎の閉鎖、および前王妃の別荘の取り壊しを検討したいとおっしゃっていました」

「父上は、……スワジクの廃姫をお考えなのか？」

「はい。恐らくは……」

レオが苦々しい顔で私の考えを肯定する。

部屋の中が重々しい空気に押し潰されたように静かになる。

この事実を知れば、きつと被害を受けていた貴族連中が嬉々として王に進言してくるだろう。

スワジク・ヴォルフ・ゴードインが行ってきた蛮行に正しき鉄槌を、と。

私はレオの報告によって一旦止めた足を再び踏み出した。

今度はスワジクの部屋ではなく、彼女の養父であり私の父上であるこの国の王の元へと。

闇に包まれた王都の中、僕はニーナと二人で目的の場所へと向かっていった。

「ごつやって歩いていている僕達を、ミーシャと北町の会長さん達が見守ってくれている。」

「そう思うだけで恐怖にすぐみそうになる足も、なんとか前へと動かせている。」

「出来れば話し合いで片が付けばいいのになあ」

「それはそうですけど、いろんな人を傷つけてきた人たちですから、ちよつと無理っぽくないですか？」

「まあ、そりゃあ、そうなんだけどね。ところで話は全然変わるんだけどさ、今晚妙に静かじゃない？」

僕は辺りを見回しながら、ニーナに同意を求める。

彼女も自分たちが歩いてきた道を振り返ったり耳を済ませたりしてから、僕の意見に賛成した。

「そういえば変ですね。いつもなら警邏の人たちが居たりするんですけど。いわれてみれば来る途中も会いませんでしたね」

「今日はお休みなのかな？」

「何をいつてるんですか。軍や近衛の人たちの仕事に全員お休みの日なんてあるわけないじゃないですか」

「そりゃそうか……」

いつもより静かな夜の町並みを歩きながら、得体の知れない不安感に襲われる。

もしかしたら何か僕の想像を超える何かが起こっているような、そんな根拠のない不安。

今は分からないことに対して怯えていても仕方が無いので、僕は
敢えてその不安を無視することにした。

「姫様、やっぱり真正面から話し合いって不味くないですか？」

「んー、まあ、そうなんだろうけど……。一応相手の言い分も聞いてみて、無事にポーマンやアニスを開放してくれるっていうなら、それに越したことは無いかなって」

「話を通じる相手なら、牢破りなんてしないとと思うんですが……」

ニーナの言うことはもっともなんだけれど、だからといって初手から暴力で解決っていうのはなんか相手に負けた気がする。

平和ボケしているって散々言われたけど、でもやっぱり暴力は最終手段だと思うんだ。

話せば分かる、と言うつもりは無いけれど、どこかで妥協点が見出せるまで交渉するののも一つの方法。

どこかの国の警察には交渉人っていう役目をする人たちが居るって聞いたこともあるし。

程なくして僕達は会長さんが教えてくれた屋敷の前にまでたどり着いた。

王都の中でも閑静な住宅街の一角。

周りの家は既に灯も落とされて真っ暗なのに、目標の家だけは木戸の隙間から光が零れ落ちていた。

どうやら家の中の人は起きている様子。

高まる緊張に、知らず知らずの内に僕の膝は無様に震えている。それは横に居るニーナも一緒に、お互い顔を見合わせて苦笑しあう。

「じ、じゃあ、私行ってきますね？」

「……や、やっぱりボクが行くよ。なんか危なそうだし」

「何言ってるんですか。姫様が相手に掴まったらお終いだって会長さんも言ってたじゃないですか。大丈夫です。直ぐに掴まるようなへまはしません。逃げ足にはちょっと自信あるんですから」

「あはは、ボクと一緒にだね」

「ふふふ。逃げ足の速い姫様と侍女だなんて、笑えませんねえ」

笑いあいながらも、お互いの顔は緊張で引きつっているし足も震えっぱなしだ。

少し離れたところでミーシャが見守ってくれているとは言うものの、僕達には彼女の姿はまるで見えない。

まあ、簡単に分かるようだったら相手にも悟られてしまうわけだが。

僕は目標の家から少しだけ離れた路地の真ん中で、ゆっくりと扉へと向かってゆくニーナを見守る。

ニーナは扉の前まで行くとノックを3回して、素早く5歩ほどそこから退いた。

それだけの距離があれば、相手が何かをしようとしても対応する時間は稼げるはず。

不気味な間があつてから、ゆっくりと玄関の扉が開かれる。

部屋の中から溢れ出す光のせいで顔が良く分からないけれど、どうやら女性のメイドさんのようだった。

「お待ちしておりました、姫様」

どこかで聞いた声にハツとして、僕はよく目を凝らしてそのメイドさんを見る。

勝気そうな目に金色のツインテール。

僕付きの侍女であるスウィータに間違いなかった。

「す、スウィータ……、どうして……」

「お待ちしていたのですわ、貴女を。中でアニスと貴方のナイトが待っています。さあ、こちらへどうぞ」

そういつて僕に中に入るように促すスウィータ。

家の中には絶対に入るな、とはミーシャと会長さんからきつく言い渡されていた。

だけど、2人をダシにされては抗いようもない。

少しだけ迷ってから、僕はスウィータの招きに応じることにした。ニーナが慌てて僕の前に立ちふさがってそれを阻止しようとする。が、僕は彼女の肩をやりわりと掴んで、彼女を安心させるように微笑みかけた。

「大丈夫。ちゃんと2人は返してもらおうようにするから。ニーナは安心して外で待っていて？」

「相手を外に誘き出さないとミーシャさん達が動けませんよっ」

「ボクにもしもの時があったら、その時は遠慮なくやっちゃっていいから。そうミーシャと会長さんに伝えておいて」

「そ、そんな！ 姫様、打合せと違うっ！」

スヴィータに聞こえないよう小声で抗議してくるニーナは、不安そうな顔のまま僕の手を掴んで離さない。

僕はニーナの頭に手を置いてゆっくりと撫でてあげる。

そんな僕たちを無言で見守っていたスヴィータが、目で早くしろと僕に催促してきた。

僕はニーナの手を優しく振りほどいて、ゆっくりと屋敷の中へと足を踏み入れた。

そう、ここから先はスワジク・ヴォルフ・ゴードインである僕の戦場なんだ。

52話「奇跡の力」

僕はスウィータの横を通って、ゆっくりとその家の中に入ってゆく。

家の中は案外こざっぱりとした趣味の家具でコーディネートされていて、家主の趣味のよさが伺えた。

ただ、壁といわず家具といわず飛び散って黒く変色している血痕を除けば、という話だが。

部屋の中央の置かれているダイニングテーブルの上に行儀悪く腰を掛ける一人の男が、まず目に入る。

次に男の目の前に縛られて座らされているアニス、床に寝そべるように横たわっているポーマンが見えた。

アニスは目を真っ赤に腫らしているだけで特に問題はなさそうだけど、ポーマンは違う。

遠めだから良く分からないけれど、少なくとも一目見てポーマンと分かりづらいほど顔が腫れ上がっているし、手は変なところから曲がっているような気がする。

「っ！ ポーマンッ！」

「迂闊には動かないほうがよろしいかと思えますよ、姫殿下」

「あうっ……」

アニスの首にぴたりと当てられているレイピアを見て、悔しいけれど僕は駆け出そうとした足を止める。

傍目に見ても分かるほどアニスの顔は青ざめていて、身体も分かるほどに震えていた。

目の前の男がシャレや冗談で言っているのではないことは、部屋

の黒ずんだ血痕で理解できる。
悔しいけれど、相手の言われるがままにしなければならない。

「ひ、姫様……す、すいません。わ、私……姫様に……酷い事を言
つてしまつて」

「え？ あ、ああ、あの日の事？ ううん、別に気にしていないか
ら、変に気に病まないで。それとね、ミーシャ、元気になって帰っ
てきているよ。お医者さんが助けてくれたんだって」

「あ……ああ……」

「脱獄つて話もあつたけど、ちゃんとフェイ兄に言つて誘拐された
んだつて話にしてもらつてるんだ。だからこれが終わつたら、アニ
スはちゃんと胸を張つて帰れるから。心配しないで」
「う、ううううううう」

僕の話を黙つて聞いていたアニスが、ボロボロと大粒の涙を止め
どなく流れ落とす。

アニスの様を見て僕は少し安心した。
本当は恨まれてて罵倒されたりするんじゃないかなとか覚悟して
いたんだけど。

静かな室内でアニスの泣く声だけが響く中、テーブルに腰をかけ
ていた男がおもむろにはちばちはちと乾いた拍手を鳴らした。

「いやあ、中々面白いお涙頂戴物語ですね。そうやって恩を売つて
身近な人間から落としていつたんですか？」

「……なにが言いたいんだよ」

「あの壘行姫が自分より目下のものに慈悲を掛けるなんて、あまり
に驚きすぎて心臓が止まるかと思つてしまいましたよ」

男はアニスに向けていたレイピアを降ろすと、今度は倒れて動かないポーマンに向ける。

刃先は人体の急所の上を滑りながら、最終的には投げ出された掌の上で留まった。

僕はいやな想像を止めることが出来なくて、思わず上ずった声で問います。

「な、何してるんだよ。ポーマンは抵抗出来る状態じゃないじゃないか！ や、止めるっ！」

「くくくくくつ、それが今のあなたの地ですか。いやはや何とも不思議なものですね。人間はこんな短期間で人格を変えられるものなんでしょうかねえ」

笑いながら男はゆっくりとレイピアの切っ先をポーマンの掌に押し込んでゆく。

皮に食い込み、少しだけ血が滲み出す。

「お願いだ……、いや、お願いします。ポーマンにそれ以上酷い事をしないでください」

「ん……そうですね。分かりました。ですがあれですね、姫殿下の騎士を自認する者が、臣下の礼を取ることもなく大の字で寝ているというのも、非常に無礼な話ですな。一つ私が起こしてあげましょ
う」

「っ！ 止めるっ……！」

「ぎゃあああっ……！」

死んだように横になっていたボーマンが、掌に突き刺されたレイピアの痛みで身体を跳ね上げた。

それが余計に傷を大きくすることになり、さらにボーマンの悲鳴が響く。

僕は考えるよりも先に駆け出して、これ以上ボーマンが暴れないようにと彼の腕と身体を押さえ込もうと試みた。

だが、鍛えたボーマンの力は弱っているとはいえ僕の手で抑え込めるはずもなく、ただ悪戯にあがくだけ。

「ボーマン！　じつとしてっ。　駄目だよ、暴れたら手が裂けちゃう！」

「あああああ」

「ボーマン！　ボーマン！！　その剣どけるよっ！　ボーマンが痛がってるじゃないか！　ボーマン、動くなっ！」

「くはははははっ」

男は僕とボーマンを見下しながら狂ったように高笑いを続け、レイピアを引いてくれる様子は無い。

僕は暴れるボーマンを押さえ込めようとしたのを諦めて、元凶のレイピアに縋り付いて刀身を引き抜こうと両手で握り締めた。

上へ引き上げようとするよりも早く、男がレイピアを引き抜く。

引き抜くついでと言わんばかりに、レイピアは僕の胸から肩口に掛けての服を切り裂いていった。

「っ！」

「いくら刺突用で刃が無いとは言え、スピードに乗せればその程度の服や肉でもある程度は切れるんですよ？」

僕は破られた服の下からじわりと滲み出る血を感じながら、目の前の男から視線を外さない。

アニスは今の混乱に乗じてポーマンの足元、僕の背中側に逃げてきている。

この状況なら僕を無視して二人に危害を加えるってことは出来ないはず。

「なんでこんな酷いことを……」

「酷い事？ 国賊に媚びへつらう人間など、今のこの王国には必要ないんですよ。ましてやこんな状況、あなたがしてきたことに比べたら可愛いものだと思うのですがね？」

男は座っていたテーブルから立ち上がり、レイピアの切っ先で僕の胸の間、心臓の上に狙いを定める。

刃物を突きつけられるという行為に、僕の身体が恐怖で固くなるのが分かった。

まるで見えない大きな手で締め付けられているかのよう。

「以前にどんな酷い事をあなたにしたのか、今のボクには分からない。でも、それでもアニスやポーマンは関係ないだろ？ このまま開放してあげて欲しい。もし、ボクの願いを聞いてくれるなら、あなたの言う通りなんだってしてみせるから」

「なんでも……ですか。ではお言葉に甘えて、私の主君であった力

又プルト・ドルマン男爵の地位と名誉の回復と、男爵様の失われた命をお返し願えますか？」

「っ！ い、命……。そ、それは……」

「ふふふ、無理でしょう？ あらぬ罪を着せられ刑死した男爵様を生き返らせることなど。だからこそ、あなたには絶望と後悔と恐怖をことんまで味わってもらいたいと思っています。後の2人にもご協力をお願いしたいと思っていますくらいですから」

まるで悪魔のような邪悪な笑みを浮かべて僕達3人を見下ろす男。だけど、まだこれくらいは想定内。

日記にもミーシャから聞いた話でも、これくらいに恨んでいる人がいるのは分かっていたこと。

だから怯まない。

「お願いします。2人をどうか助けてください」

「っ！ ひ、姫様！」

僕は2人を背に、目の前の男の足元に額をつける。

所謂土下座だ。

後でアニスが焦っているのが良く分かるけど、今はそんな些細なことにはかまっていられない。

この男の気分次第で僕達の命の行方が決められてしまうのだから。少しでも時間を稼ぐことが僕がしなくちゃいけないこと。

あと少し。

あともう少しで、きっとフェイ兄が助けに乗り込んできてくれるはず。

なぜなら北町の会長さんに頼んでフェイ兄に助けに来て欲しいっ

て手紙を届けに行ってもらったのだ。

だからフェイ兄が来るそれまでの間に2人を何とか逃がさないと……。

「なんだか拍子抜けですね……。まるでそこいらの街娘をいたぶっているような気になってしまいます」

男は複雑な表情で僕を見下ろしながら、レイピアを鞘に収めた。

どうやら一つ難関をクリアしたようだ。

この分だと僕さえこいつのいう通りにしていれば2人は逃がせそう。

僕はそう確信して、ただじつと男の次の言葉を土下座したまま待つ。

男は僕の前に片膝を付くと、血の匂いが染み付いたグローブを付けた手で僕の顎を掴み顔を上げさせる。

「たかが地方領主の息子と伯爵家のどうでもよさそうな娘相手に、あなたが首を垂れるなどにわかには信じられませんねえ。まあ、嘘にしろ本心にしろどっちにしても私にとってやることは変わりませんけど」

「お願いします。2人を開放してください」

じつと男の細目を見つめて嘆願する。

この非道な男の情に縋るしかないのが業腹だけど、それでも僕に出来る戦い方はこれくらい。

だから躊躇わないし、迷わない。

「いいでしょう」

「え？」

「いい、と言ったんです。2人は助けましょう」

男はそういうと壁際でじっと佇んでいたスヴィータに合図を送った。

スヴィータはその指示にしぶしぶといった感じで動き出し、アニスの縄をナイフで切り落とす。

僕は振り返ってアニスにポーマンを介抱するように目でお願する。

その意を汲み取ったアニスは、黙ってひとつ頷くとポーマンの元に寄り添って傷の具合を確認始めた。

「その自称あなたの騎士ですがね、我々に投降した振りをして内部に潜入してその侍女を助け出すつもりだったようですね。暴れようとしたから、少し遊んであげたんですよ。まあ、もつとも生きて帰ったとしても、二度と剣は持てない体でしょうけどねえ、ククク」

「きつさまあつ！」

カツとなって掴みかかろうとしたところを、逆に抱きしめられて動きを封じられてしまう。

男の視線が、息が、こんなに気持ち悪いものだとは知らなかった。

僕は闇雲に男の腕の中から逃げ出そうともがくが、いかんせん非力な僕が敵う相手でもない。

「やはり、間近でみても美しい。男爵様が貴様を求めたのも頷けるな」

「ひつ、姫様から離れて！」

アニスが男に飛びかかろうとして、逆に後にいたスヴェータに羽交い絞めにされてもがく羽目になっている。

その間も、男の手はいやらしく僕の身体の上を撫で回していた。

「……んっ！　くう……っ！　ボクをどうにかする前に、早く2人を解放させて欲しい。せめて扉の外にまで、そこまででいいから」
「ふん、いいでしょう。あなたとその侍女の2人で運べばいいでしょう？」

「あ、ありがとう！」

思わず破顔してお礼を述べてしまっり、日本人の習性って怖いなって思った。

……僕のそれをそのまま全日本人に当てはめて良いかどうかは良く分からないけれども。

男は僕の謝意に面食らったようで、少し苦笑しながら僕を解放してくれる。

もしかしたら、ちゃんと誠心誠意話し合えば分かり合えるんじゃないだろうか？

淡い期待を胸に、僕はアニスと共にボーマンに肩を貸しながら扉を指す。

あと10歩、……あと5歩。

気絶している人を運ぶのがこんなに重労働だとは知らなかった。だけどあと少し、もう少しで扉だ。

その先にはミーシャが、会長さん達が待っていてくれる。

そんな気の緩みが、後の男の動きに気付くタイミングを遅くさせてしまう。

耳元で突然響く絶叫。

顔に降りかかる血潮。

全てがスローモーションで、でも目の前の全ての出来事が僕には理解できなくて、ただ痛みを上げるボーマンを眺めることしか出来ない。

「うがあああああああああああ！！」

「あつ、ちよつ！ きゃああつ！！」

痛みに暴れだしたボーマンに、アニスが弾き飛ばされ僕も振り払われてしまう。

床に仰向けに倒れこんだボーマンの胸からじわりじわりと流れ出す赤色。

そして狂ったように僕を見て笑い続ける悪魔のような男。

スヴィータは、壁際にたつて全ての出来事を傍観している。

「ふはははは、そうだ！ その顔だ！ 私はお前のそんな絶望に染まった顔が見たかつたんだっ！」

「ボーマンっ！！！」

僕は慌ててボーマンの身体に覆いかぶさり、傷口を塞ぐように手

を押し当てて流れ出てくる血を止めようとする。

何も聞こえないし、視界にある全ては意味が無い。

ただボーマンを助けたい。

身体の芯から放射される熱に浮かされたように、僕はただボーマンの傷をどうにかしなければともがく。

その直ぐ後に扉が蹴破られてミーシャが乱入してきたことも、僕の首にスヴィータがナイフを当てて誰かを威嚇していることも、まるで別世界の出来事のように感じていた。

ただ僕は願った。

ひたすらに願った。

瞬間、身体の中にくすぶっていた熱が大きくうねって爆発したように感じた。

その何かの奔流が僕の腕の中を流れ掌に集まり白く光り出す。

「死んじや駄目だ！ ボーマンっ！」

その瞬間、光が爆ぜた。

53話「一難さつて、また一難」

自分の中の何かが、一斉に目の前に横たわっているボーマンへと注ぎ込まれてゆくのが分かる。

土気色のボーマンの顔にほんのりと赤みが差してきた。

一体何が起こっているのかよく分からないが、それでもボーマンの命が繋ぎ止められたということだけは実感できる。

だって傷口に当たっていた手に、さつきまでほとんど感じなかった心臓の鼓動が感じられたし、出血も止まったから。

ただ、それでも胸の傷が塞がったという訳でもなく、なんとも中途半端な感じが否めない。

そのあたりが僕の魔法ちからの限界なんだろうか。

「と、とりあえず助かった……のかな？」

「それ以上動かないで」

鋭い制止の声と共に首筋に当る鋭利なナイフ。

いつの間にか僕はスヴィータに後ろから抱きつかれて、こんな状況になっていた。

顔を恐怖で引きつらせながらも、言われた通りに身体を凍りつかせる。

視線だけで周りを見渡すと、ミーシャが短槍の切っ先をあの男の喉下に突きつけているのが見えた。

僕が人質にとられているからミーシャは動けない。

でもスヴィータも迂闊に僕を傷つけると、仲間もろともミーシャに蹂躪されてしまう。

で、ボーマンを刺したあの男は、喉元に突きつけられた切っ先と

壁に挟まれて動くに動けない。

これは所謂三竦みの状態といわれるものではないだろうか。

誰一人として動けないこの状況、じりじりと時間だけが過ぎてゆく。

「スヴィータさん、後です！」

男がスヴィータに向かって叫ぶ。

スヴィータは彼の言葉に敏感に反応して、僕の身体をホールドしたまま勢い良く振り返った。

急に身体を振り回されて僕は一瞬目を回しかけたけれども、なんとか気合で持ちこたえた。

そして見上げた視線の先には、

「わっ！ わわわっ！ ニーナ、ちょっとタンマあ！！」

「っ！！」

僕の目の前、ニーナが太い麺棒を振りかぶって今にも振り下ろしそうな体勢でいた。

あと少しタイミングがずれていたら、あの麺棒は僕の頭にめり込んでいたのか。

味方に撲殺される一歩手前の状況に、僕の額から一気に冷や汗が噴出す。

「土壁を背にしなさい。そうすれば背後の心配はいらなくなります」

「それ以上喋らないで貰いましょうか？ 思わず手元が狂って槍を突き刺してしまいそうです」

「ミーシャ、あなたこそもうちょっと状況をよく理解したほうが良いわ。姫様の命は、今私の手の中にあるのよ？」

「貴女に姫様を、人を殺めるだけの覚悟があるとも思えません」

「あら、そうかしら。貴女と同じでうっかり手を滑らせてしまうかも、ですわよ？」

僕の頭を飛び越して交わされる殺伐とした会話。

しかもその内の2人は僕付のメイドさんである。

でも正直僕の関心事は殺伐とした会話をする3人ではなく、目の前に横たわっているポーマンだ。

手が離れてしまったので、さっきまで流し込んでいた気のパワーっぱいのが送れていない。

このまま成すがままに壁際にまで引き摺られていくと、さらにポーマンとの距離が開いてしまう。

とってポーマンに近づこうとしたら、首にナイフが刺さってしまっし……。

ふと見上げると、未だ麵棒を振り上げたまま固まっているニーナ。僕はぽんと手を一つ打つと、ニーナをお願いをすることにした。

「ニーナ！ ごめん、ポーマンをさ、僕の目の前まで引き摺ってきてくれないかな？ 手の届くところ迄で良いから」

「ちよつと！ 貴女自分の置かれている状況理解していらっしやるの！？」

「あ、えつと、割と理解しているつもりだけど……。でも、ポーマンから手を離しちゃうとなんか不味いばいから、悪いけどこれだけは譲れないかな」

ほっぺたを掻き苦笑をしながら、後のスヴィータにそう言い切る。そして僕に頼みごとをされたニーナはその場に居合わせた皆を見回してから、恐る恐る麵棒を下ろしてポーマンを引き摺り始めた。もちろんその間も男とミーシャの間ではお互いを牽制し合っていたし、僕の後ろにいるスヴィータも凄く緊張しているのが分かる。だってスヴィータの手、小刻みだけどぶるぶると震えている。人の命を握っているというプレッシャー、多分それが彼女を必要以上に怯えさせているのだろう。ニーナの一挙手一投足に過敏に反応しているせいもあるのかもしれない。その震える手に何となく僕は自分の手を重ねた。

「大丈夫だよ……」

「え？」

「怖がらなくて大丈夫だから」

スヴィータは、最初僕が何を言っているのか分からなかったみたい。い。

だからもう一度、同じ言葉を繰り返した。

捕らわれている人質が犯人に対して掛ける言葉じゃないような気はするけどね。

でもなんだろう？

怯えているスヴィータを肌越しに感じてしまって、逆に安心してしまったのだろうか。

ああ、スヴィータだって怖いんだって。

「ふ、ふふふ、恐怖のあまり気が狂ったのかしら」

「んー、多分そんな事は無いと思うけど。あ、でも怖いのは怖いけどね」

「だったら素直に怯えていなさいなっ！」

「うん、そうしたいけど今は無理かな。だって、僕には今しなくちゃいけないことがあるから」

そういつて目の前に横たえられたボーマンの手を右手で握る。

左手ははまだスヴィータの手に重ねられたまま。

僕はその状態で、もう一度体の中で渦巻いている力を解放させた。

「え！？ な、何？ 手が……暖かい？」

僕の両手を伝って流れてゆく僕の力。

意識しているつもりは無いのに、1対9の割合でボーマンに多くの力が流れているようだ。

その割りに傷口が劇的に塞がったりしないみたいなのが、しょぼーんな感じではあるが。

でも確実にボーマンの状態は良くなっている、……ように思う。

苦しそうな顔をしないしちゃんと息もしているから、そこは間違いないはずだ。

大して後のスヴィータは最初こそ吃驚して警戒いたようだが、時間と共に大人しく僕の力を受け入れてくれている様子。

どうやら相手が僕の力を拒絶したら、力が流れにくくなる傾向にあるようだ。

「……綺麗」

「え？ 何かいったスヴィータ？」

「っ！ 何も言いませんわっ！！」

「だって今何か」

「か、髪の毛が光ってて不気味だっていったんですわっ！！」

「ほえ？」

そういわれて初めて、僕は自分の髪の毛が淡く光っていることに気が付く。

ああ、力を使っている間は僕はこんな状況になるのか。

……蛭みたいだな。

「馴れ合いはそこまですよ、スヴィータ」

壁と槍先の間挟まっている男は、苦々しげに声を荒げる。

順調だった力の送り込みが一気に停滞し始めた。

せつかく良い雰囲気になりかけていた僕とスヴィータの間に、また目に見えない壁が出来てしまったみたいだ。

心の中で鋭く舌打ちをすると、僕は慌ててスヴィータに問いかける。

「スヴィータはさ、なんで僕に死んで欲しいの？」

「っ！！」

吃驚したからだろうか、閉じられた見えない壁が少しだけ綻んだ。少しだけ迷うような素振りがあったから、スヴィータは搾り出すように僕の問いに答える。

「レイチエルの仇ですわ」

「……そっか」

「ええ！ 自分の罪をレイチエルに押し着せて死なせたくせに、貴女だけのうのと生きているなんて、私は許さないっ！」

怒りが体を支配し始めているのか、ナイフを持つ手がぶるぶると小刻みに震えている。

でもスヴィータのその怒りが大きいから、僕は少しだけ嬉しくなった。

ああ、やっぱり……

「やっぱりスヴィータは優しい娘なんだね。よかった……」

「っ！ はあ？ や、やっぱり貴女気が狂い始めて……」

「いやいやいや、それは無いって！ スヴィータがここにいる理由ってどうか、僕に死んで欲しい理由って、僕のせいで無実のレイチエルさんが死んだからその敵討ちってことでしょ？ なら方法は横においておいて、その気持ちの出発点は確かに優しい気持ちからなんだって思えるんだ」

「今更命乞いをしたって私は……」

「違うって。命乞いとかがじゃなくて……、上手く言えないけど、なんていうのかな？ んー、悪人じゃなくて良かった？ ほら、快樂の為に人を陥れるとか、殺すとか、そういう人も世の中にはいるんだよね。そんな人に殺されるのはもう二度と御免だけど……ん？

あれ？ 今、ボクなにか変なこと言わなかった？」
「徹頭徹尾、おかしい事しか言ってますが？」

なんだろう、凄く嫌なイメージが頭の中に沸いてきたんだけど。
吐き気を催すような陰惨なイメージ。

でも、それが何だったのか、いくら頭を捻ってみても思い出せない。
い。

「んー、なんかやな事を思い出しかけたんだけど……、まあいいや。
でも、スヴィータはそうじゃなくてちゃんと理由があったんだって、
ちよっとホツとしたっていうか……」

「なるほど、じゃあレイチエルのため、私の為に死んでくれるので
すね？」

ぐいつと言葉と共に突き出されるナイフの切っ先。

少し喉に食い込んだようで鋭い痛みを感じた。

あ、やばいつ、と思った瞬間、顔の横を凄いい勢いで何かが掠める。
直後、ぐももったスヴィータの悲鳴が聞こえた。

「い、今です、姫様！ 早くこちらへっ！！」

「いいぞ、アニス！ よくやった！」

槍を突き出したままミーシャが惜しみない賞賛をアニスに送る。

得意満面なアニスは嬉しそうに立ち上がって、手にした即席のス
リングショットを構えながらスヴィータを威嚇。

僕はボーマンの手を掴んで、ニーナと共にアニスの後まで引き摺ってゆく。

ゴメンよ、ボーマン。

多分君の背中、擦過傷で酷い事になってそう。

「よ、よくもやってくれたわね、アニスウ！」

「う、動かないでっ！ 今度は痛いだけじゃすまないからっ！」

額から少量の血を流しながら、スヴィータがナイフを片手にアニスを睨みつける。

自分に向けられる憎悪に涙目になりつつも、アニスは構えたスリングをこれ見よがしに見せ付けた。

鉄製のY字型の金具に括り付けられた何重にも折り返されたゴムひも。

即席感漂う武器ではあったが、それでも威力は実証済み。

だからスヴィータも動けずにいた。

ただ誰も指摘しないけど、床の上に脱ぎ捨てられた下着が一枚。うん、見なかったことにしよう、主にアニスの名誉の為に。

「あっ！ 窓の外に人が！」

ニーナのその叫びに、部屋の中にいた全員が一斉に窓の外に目をやった。

確かに何十人という衛士っぽい人たちが、この家を取り囲んでいるようです。

どうやらフェイ兄の援軍が間に合ったのだろう。

僕を始めミーシャやアニスの間に安堵の空気が漂い始め、逆にスウィータは悔しそうに顔をしかめた。

「遅いよ、フェイ兄！ 本当にもうどうなることかと」

「まあいいじゃありませんか、終わりよければ全てよし、です。」

家の外にいらるであろう陣頭指揮を執っているフェイ兄に文句をつけていたら、ミーシャが笑いながら槍を引く。

こうなつてはどうかとも男やスウィータに勝ち目は無い。

それが分かっているのか男の方も感情こそ露にしないが、不貞腐れたように壁に背を預けて佇んだままだ。

「姫様、ボーマンは大丈夫でしょうか？」

場が収まったということ、途端にニーナが床に横たわるボーマンの心配をする。

「ただ僕自身、僕の力がどの程度のものなのか分かっていないから、安請け合いをするのも躊躇われる。」

「うーん、よく分からないけれど、危ない状態ではなくなったと思うんだけど……」

「ニーナ、心配いりません。ドクター・ゲエロに任せれば数段パワーアップして帰って来れますよ」

「あー、パワーアップはいりませんので、せめて無事にさえ帰ってきてくれたら……」

緩んだ空気の中、笑いあいながら外に出ようと玄関の扉を開け放つ。

真っ先に外に出たアニスに続いて、ニーナと僕と抱えられたボーマン、殿にミーシャが続く。

引き摺っているボーマンを気にしていたら、ポフンと誰かの背中にぶち当たってしまう。

「んあ！？ あれ、何？ どうしたのアニス？ 何立ち止まっているの？」

「ひ、姫様……」

アニスの声が震えている。

意味が分からず、僕は立ち尽くしているアニスの肩越しに前をみた。

「……え？ 何？ なんで????」

目の前の光景の意味が分からず、僕はただ立ち尽くすしかなかった。

家の周囲を取り囲んでいた衛士たちをかき分けて、一人の男が前へ進み出てくる。

ゆっくりと時間を掛けてやってきた男は、僕を見下ろしながら微笑みかけてきた。

「お久しぶりです、姫殿下。……ああ、いやこの呼び方は正しくありませんね。今は姫殿下とお呼びするより相應しい呼び名があるのです。そう、廃棄姫という素敵な呼び名がねえ、くふっ、くはははははっ！」

54話「戻れぬ道と戻らぬ道」

暗闇の中、後ろの衛士たちが持つ松明で照らされるガタイの良い貴族風の人。

服装こそ地味っぽく見えるが、よく見れば細かなところの仕上がりが凄く丁寧だ。

こんな上等そうな服装、王宮の中でもあまり見かけたことはない。後ろへ綺麗に撫で付けられた髪が松明の灯に照らされて鈍い銅色に輝き、四角く張ったエラと鋭い目がこの人の意志の強さを表わしているようだった。

どこをどう見ても友好的な雰囲気など微塵も感じられない。

加えて、僕達を囲んでいる兵隊さんたちから漂う気配もなにかギスギスしている。

鎧が近衛のものとは違っているので王宮に詰めている衛士さんたちじゃないことも分かった。

きっと貴族の人の私兵というところだろうか。

僕はぐるりと周りを見回した後、恐る恐る目の前の男に視線を合わせた。

「あの……フエイ兄様からのお迎えとかじゃ……」

「いえ、残念ながら。これらは私、ファルゴレ・ルブラント・トスカーナの私兵にございます」

「……兄様は？」

「残念ながら殿下に置かれましては唯今自室にて謹慎中だとお聞きしております」

「謹慎？ 何故？」

「さあ、そこまでは我々の与り知るところでは有りませぬゆえ」

寒々しい笑みを深めつつ男は一步僕へと歩み寄る。

この笑みはあれだね、理由を知っているけど教えてやらないってやつか。

もうこの短いやり取りだけでこの人が外の人にとって敵なのだと理解した。

「ハイキ姫とか仰っていたようですが……」

「はい。先ほど王宮内で非公式ではありますが、姫殿下の地位の剥奪が仮決定されました」

「……それって、ボクはもうお姫様ではないってこと？」

「左様、貴方を守る権力はもはや消え去りました。貴方に残されたのは莫大な負債と貴族達の恨みでしょうな」

「そ、それじゃ、貴方がここに来た理由って……」

「もはや秘密裏に貴方を処理する必要もなくなった今、貴方の死体を確認しに寄っただけなのですが……」

そういつてトスカーナと名乗った男が、僕の淡く光っている髪に手を伸ばし一房掬い取る。

彼の嬉しそうな表情を見て、寒気が背筋を走り足の力が抜けそうになる。

「まさか魔導の力に目覚めていようとは……。このような小娘相手に貴族ともあるうものが何を盛っているのかと思っていたのだが、こうなってみれば彼奴らには先見の明があつたと言えるのか。まあ、もっとも返り討ちにあっている時点で度し難いほどの間抜けではあるのだがな」

ああ、なるほど。

外の人が寄ってくる貴族達を毛嫌いしていたのはそれでなのか。なんとなく予想は出来ていたけれど、9歳や10歳から性的対象と見られて迫られれば人間不信にもなるよね。

ましてや力になってくれる人なんて誰もいなかったんだろう。そして目の前のこの男も外の人にとって、いや、今の僕にとっても心を許していい存在ではない。

「あの、ここにいる私の侍女やこの怪我人は……」

「私には必要のない人間かと」

「ど、どうするつもり？」

「脱獄囚に死掛けの小僧、それに、ああ、後ろの家の住人が殺されていたのでしたかな。運よく犯人2人も捕まえられて、ほっとしますなあ」

「横暴だっ！ アニスは脱獄囚なんかじゃないし、ミーシャやニーナが誰を殺したって」

「なに、証人ならここに掃いて捨てるほどいますからな。いまさら貴女の言葉に誰が耳を貸すのでしょうか」

後ろに控えていた騎士達がトスカーナの合図で数名動き出す。

手には荒縄を携えているのが見えた。

まずい。非常にまずい。

トスカーナはここにいる僕以外の人間をきつと殺す気だ。

どうしたら皆を逃がせるか。

慌てて周囲を見回すも周囲は完全に包囲されていて猫一匹逃げ出せそうにない。

藁にも縋る思いでミーシャ達を振り返る。

青い顔で抱き合うニーナとアニス、そして二人を庇うように槍を構えて立ち塞がっているミーシャ。

いつもなら頼もしいと感じる姿だけど、青ざめている彼女達の顔を見て状況の圧倒的不利を悟る。

「待つて！ お願いします！ 皆に酷いことしないでっ」

「そうは言われても邪魔なものは邪魔ですらかなあ……」

「何でもします！ 何でも言う事を聞きますから！ だからこの4人には酷い事をしないでくださいっ」

僕は恥も外聞も捨ててトスカの足元に土下座をして頼み込む。

土下座という行為が相手に分かるかどうかなんてこれっぽっちも考える余裕なんてない。

ただ今僕に出来ることって彼の慈悲に縋るしかないのだ。

「……ほう、なんでも？ どんな理不尽な命令にも従えと？」

「この4人の安全を約束してもらえるのであれば、ボクに出来ることならっ！……」

額を地面に擦りつけながら必死になって命乞いをする。

息を呑む音、鼻で笑う音、唾を吐き出す音。

色んな音が一度に聞こえてくる。

地面につづくまった僕の小さな体に突き刺さる侮蔑の視線、哀れみ、憎悪。

蹴り殺される恐怖、あるいは女なのだからレイプもありえるかも

しれない。

なんでもするといったから当然そんな最悪な未来も頭の中を過ぎる。

惨めだ、嫌だと思うけど、ミーシャ達の命が守れるのなら安いものだ。

外の人には悪いけど、綺麗な体では返せないかもだけど、そこは許して欲しい。

「目をつー!!」

突然鋭い声が掛けられたかと思うと、爆音と共に一瞬にして周囲が真昼のように明るく照らされた。

僕自身は土下座していたので直視することはなかったけど、まるで映画で見たスタングレネードみたい。

光を直視してしまったのか騎士達の悲鳴や怒号が飛び交う。

そんな中荒々しく誰かに踏みつけられたかと思うと、すぐにその圧力が悲鳴と共に消えてなくなる。

「立て、逃げるぞ」

むりやり引き上げられた視線の先にいたのは、僕が納屋で見つけたあの緑の髪の毛のビスクドールだった。

何故人形が動いているのか、どうして人形が助けにきているのかとか。

僕の脳みそが事態に追いつけず呆然としていたら、ミーシャの叫び声が聞こえた。

「姫様っ！ 早く！ 今のうちにっ」

その声に振り返ってみると東洋系の顔をした女の子にお姫さま抱っこされたニーナと、ミーシャに抱えあげられたアニスが見えた。

次の瞬間、黒い方の少女が人ではありえない跳躍力を見せて屋根の上へと消えてゆく。

「早くしろ、このウスノロッ！」

「ちょ、ちょっと待って、ボーマンもっ！！」

「二人は無理だ。貴様だけだ！」

「ならボーマンを先に」

そういつて地面に横たわるボーマンを振り返ろうとして、誰かが僕に凄い勢いでぶつかって来た。

「逃がさんっ！！」

「ぶぐうっ！」

横から突き飛ばされるようなタックルを受けて僕は地面に押し倒される。

一瞬意識も一緒に刈り取られそうになったけど、気合でそれをなんとか耐えた。

「お、お願い！ ボーマンを！！」

「その賊を捕まえろっ」

「姫以外は殺しても構わんっ！ 逃がすなっ！！」

僕の叫び声は視力を取り戻した騎士達のがなり声によってかき消される。

緑の髪の毛のビスクトールは一瞬迷う素振りを見せた。

その躊躇いが、僕たちの救出のチャンスを不意にってしまった。

ボーマンの前に立ち塞がる2人の騎士に、緑の彼女に剣で切りつける騎士。

その攻撃を紙一重でかわしながらも、僕を助けようと抗う彼女。

「逃げて！ ボクはいいから！ ミーシャを、皆をよろしくお願いします！！」

「このお人よしがっ！！」

苦々しげにそう吐き捨てると、緑の髪の毛の人形さんは糸で吊り上げられるかのように闇夜の空へと消えていく。

僕は消えてゆく人形さんを見ながら内心ほつと息をつく。

誰も逃げられない状況からミーシャたち3人は逃げられた。

どこの誰の指示かは分からないけれど心の底から感謝したい。

「追え、逃がすな！」

「蛮行姫の周りを固めろ！ 新手が近くに潜んでいるかもしれん」

「周りにいた騎士達が泡を食ったように動き出す。そんな中、僕を取り押さえていた男が身を起こし、僕の手を掴んで引きずり上げて無理やり立たせた。」

「目の前の男は屋敷の中にいたあの狐顔の男。どうやら屋敷の中にいたから閃光弾に目をやられなかったのだろ
う。」

「余計なことに気を取られていたからか、気が抜けたからか、僕は引き上げられた勢いに負けてよろけてしまう。」

「倒れそうになったところを狐顔の男に抱きとめられた。」

「無意識に男の腰に回した手に何やら無骨で固そうなものに当たる。どうやら腰に挿していた短剣かナイフといったところか。」

「冷たい金属の感触に、僕はハツとしてその柄を握って引き抜いた。」

「しまっ」

「ナイフを奪われたことにすぐに気づいた狐顔の男は、慌てて僕を突き飛ばすと安全な距離をとった。」

「彼を刺す心算じゃなかったなので、突き放されたのは僥倖だ。」

「近づかないで！」

「僕は自分自身の喉にナイフを当てて周囲の騎士達を牽制する。明確な勝算があったわけではない。」

「ただ何でもするといったときのトスカーナの反応から、もしかしたらと思っただけである。」

が、効果はてきめんだった。

騎士達はもどかしげに僕を睨み付けるだけで、手を出そうとか切り付けてこようとかしなかった。

僕はゆっくりと慎重にボーマンへとじり寄り、彼の安全も一緒に確保する。

そんな中トスカーナは笑みを浮かべながら言い切った。

「刺せるなら刺してみるといい。そうならば足元の男も一緒に死ぬだけだ」

「……取引……しようよ」

緊張のあまり立っているのが辛くなってボーマンの横にへたり込むも、手にしたナイフは自分の首に当てたまま。

多分トスカーナは僕に何らかの価値を見出している。

なんでもしますと僕が言った時のあの勝ち誇った顔や、さっきの混乱の中での指示を聞いてそれは確信出来た。

一か八かの賭けだけどボーマンの安全を確保するためには避けては通れないデール。

「守ってもらいたいことは2つ。ボーマンの身の安全と彼の傷が治るまでボクの傍から離さない。これを守ってくれるなら、ボクはあなたに従います」

「ふむ。抗う子猫を組み敷くのも一興かと思っていたが、まあ手間がかからぬというのであればそれもいいだろう」

鷹揚に頷くとトスカーナは満足げな笑みを浮かべて僕に背を向け

た。

周りにいた騎士達が僕の手にあったナイフを取り上げると、僕とボーマンを鉄格子がついた馬車へと押し込む。

とりあえず今はトスカーナの言うとおりに振舞って、いつか逃げ出すチャンスを待つしかない。

運がよければさっきの凄いい人形さんが助けに来てくれるかもしれないし。

ガタガタと揺れる馬車の中、不安と恐怖に押し潰されそうな僕はそっとボーマンの頭を抱きしめた。

「不手際、申し訳ありませんでした、侯爵様」

「構わぬ。むしろあの小娘を殺さずにいてくれたことに感謝しておくくらいだ」

走り去ってゆく馬車を見つめながら、トスカーナは名無しの謝罪を軽く受け流す。

本当を言えばスワジク姫には死んでもらう予定であったのだ。

此処へ来たのも緊急登城ついでに姫の死を確認しに寄つたまでだったのだがタイミングがよかった。

あと少し遅かったら、夜間の緊急招集がなかったら、きっと今頃蛮行姫には逃げられていたに違いない。

が、それもたらればの話。

全てはトスカーナの意図する方向へと転がり始めているのだ。

「帝国の影響力が弱まりヴォルフ家の内政干渉ももはやあるまい。未だ国力は十分とはいえぬが、あの魔道の力を我が血筋に入れることが出来れば……わが国からも魔導師を生み出せれば……ラムザスや帝国など恐れる必要などなくなる」

トスカーナ専用の馬車が滑り込んできて目の前で静かに止まる。御者が降り、すばやく扉を開けてステップを引き出した。

「名無し。貴様もいつまでも名無しでは格好もつくまい。近いうちに貴様の主家の名誉は挽回させて置こう。これからも変わらぬ忠誠を私に尽くせ。それとスヴィータ、お前にはこの件に関して関わるように言ったわけではないはずだが……」

「あ……も、申し訳ございません」

冷やかなトスカーナの視線に貫かれて顔を青くするスヴィータ。怯え恐縮するスヴィータをみてトスカーナは苦い笑みを浮かべた。

「いや、構わぬ。お前の気持ちは理解した。だがこのような汚れ仕事には今後直接首を突っ込むな。お前は淑女たればそれでいい」

「は、はい」

言いたいことは言い切ったとばかりに馬車の中へ向かうトスカーナの背中に名無しが慌てて声をかける。

「侯爵様。あの娘はいかがいたしましたしょう？」
「ん？ あの娘？」
「はい。蛮行姫の侍女だったラムザス女です」
「ああ、あれか。もう要らん。始末しておけ」
「はっ、仰せのままに」

トスカーナは今度こそ馬車の中に消え扉が閉められる。
名無しとスヴィータ、それに数名の騎士達の見送る中、彼が乗った馬車は闇夜の中へと消えて行く。
その様を屋根の上から苦々しげに見送る姿が二つ。
彼らはトスカーナやスワジクが乗せられた馬車が見えなくなり、
眼下の私兵達が姿を消してようやく立ち上がった。

「スワジク……」
「殿下、いかがなさるおつもりで？」
「……あの娘を見捨てるわけにはいかないだろう？ あの娘は本当のスワジクじゃないんだ。こんな目に遭わせていいはずはない」
「ですが侯爵家に匿われた以上、我々に手出しはできません」
「我々とばれなければいいのだろう？」
「はぁ……国王を殴るわ、こんな夜中に夜盗の真似事をされたり侯爵家に喧嘩を売りに行くことか……正気ですか？」

銀色の髪を夜風に靡かせるフェイタールは、横でぼやくレオを意図的に無視して地上に飛び降りる。
そして屋根の上で呆れ顔のレオを見上げ、なんでもないことのようにフェイタールは言い切った。

「どうやら私は義妹のことがどうにも心配らしい。一国の王子とかではなくあの娘の兄として、私は彼女を助けに行かねばならない。レオ、お前はルナの方を頼む」

「はあ……、分かりました。でも無茶は厳禁ですからね！ 顔ばれも駄目ですからー！」

「分かっている」

それだけ言い残してフェイタールも闇夜の中へと消えていく。

一人取り残されたレオは夜空を仰ぎ一人ぼやく。

「はあああ……、残業手当つくんでしょうかね？」

55話「真実の欠片」

「うーん……、どうしよう」

質素な造りの部屋の中、僕は固いベッドの上に胡座をかいて唸っていた。

なんか凄い勢いで状況が変わっていくものだから、実際問題自分がどう動けばいいのか分からなくなってしまうている。

じゃあ以前はちゃんと分かっていたのかと問われると、あんまり理解していませんとしか言いようがないんだけど……。

いや、周囲の人達から嫌われているのも分かってたから、刺客とかそんなのは割りと覚悟してたんだよ？

でも実際街に出て見たらそれほど外の人って嫌われている感じしなかったなあ。

むしろお城に居る人達の方が嫌われ度は高かったよ。

ま、日常の接点がない人たちといつも顔を合わせる人たちでは反応が違って当然なんだけど。

「しかし、いきなりの超展開。どこでエロゲフラグでも立ててしまったのか？」

自分の身長の2倍の高さはあるのかという窓から入ってくる月の光を眺めながら大きなため息をついてしまう。

兎に角、今はポーマンの傷を直すのが最優先。

それ以外のことは命に関わることに意外は無視。

とりあえずその方向で善処するしかないと腹をくくる僕。

「実際凄いやね魔法って。ボーマンの傷、もう殆ど塞がってる……」

治療の進み具合を見るために胸元を大きく肌蹴させて横たわるボーマン。

その厚い胸板にある傷口の跡を人差し指でなぞってみる。

まだちゃんと肉が盛り上がりきっていないので妙にでこぼこした感触に、ちよつとだけ寒気を覚えて背中を震わせる。

「傷は塞がったけど、まだ顔色は青いままかあ。血が足りないのかな。魔法で造血もしてくれているのかなあ？ ううむ、よくわかんないや」

僕の膝の上ですうすうと安らかな寝息を立てるボーマン。

胸を剣で貫かれたときはホントどうなるかと思ったけど、この状況なら明日には目を覚ますかもしれない。

僕はボーマンの髪を優しく撫でつけながら、昔聞いた覚えのある子守唄を歌っていた。

ボーマンの受けた痛みが少しでも和らぎますようにと祈りをこめて。

さっきの住宅からかなり離れた森の中にある猟師小屋。

私とミーシャちゃんとニーナちゃん、それに私達を助けてくれた

2体のお人形さん達がその狭い小屋の中に居た。
ようやく落ち着いた私達を横目に、緑の髪のお人形さんがミーシヤちゃんに問いかける。

「で、どうするんだ？」

「分かりきった事。姫様を奪い返しに行きます！」

鼻息荒く槍を片手に今にも飛び出しそうになるミーシヤちゃんを捕まえながら、私は緑の髪のお人形さんを盗み見る。

お人形さんが動いていること自体びっくりなんですけど、それよりもあの物腰、どこかで見た記憶があるんです。

どこで見たのかまでは思い出せないんですけども。

「一人で侯爵家へ殴りこみか？ そんな事をすればあつというまに捕まって殺されるのがオチだな」

「このままでは姫様はきつと酷い目に遭わされてしまうんです」

「だから、一人で行つては無駄死にだと言っているのがわからんか？」

「しかし姫様っ！」

「え？ お人形さんが姫様？」

ミーシヤちゃんのその言葉に？マークを浮かべる私。
どこかの国のお姫様なのかな、このお人形さん。

「私はもう姫などではないと何度も言っただであらう？ 私はただの

自動人形。死んだスワジク姫の記憶を写したただの器だ」

お人形さんのその言葉にさらに？マークが増えてしまう。

え？ 姫様が死んだ？ いつ？ っていうか、今姫様は浚われたばかりだし今から助けに行こうっていつてたばかりだし。

「……それは、そうなのかもしれませんが。いや、今はそんな事を議論している場合ではなく一刻も早く姫様を助けに！」

「ってミーシャちゃん！ 言ってる意味わかんない！ なんで姫様が死んだって話になってるの？ 目の前のお人形さんが姫様の記憶を持っているってどういうこと!？」

「あつ、そういえば居たんだったな、アニス……」

凄い勢いでうるたえるミーシャちゃん。

こんなミーシャちゃんを見るのは初めてで凄い新鮮だけど、今はそれどころじゃない。

私は両手でミーシャちゃんの顔を掴んで無理やり視線を合わせた。

「どづいつことか説明してっ！」

「あ、その……いや……」

焦っているのがありありと分かる表情で、ミーシャちゃんは何か言い訳を探している。

むぎゅーってミーシャちゃんのほっぺたを力いっぱい握ると、涙

目になりつつ弱々しく抵抗する。

「駄目だよ、変な言い訳しようとしても。ちゃんとミーシャちゃんが本当のこと言うまでこの手は離さないからねっ！」

「それについてはワシから説明しよう」

「ふえ！？ ど、ドクターグエロ！？ どうしてこんな所に？」

小屋の扉の前に佇む小柄な老人にその場に居た皆が驚いた、と思う。

もしかしたら私とニーナちゃんだけかもしれないけど。

「そこに居る2体の魔導人形はワシが作ったものじゃ。とある人物の魂の緊急避難的な措置として……の」

「魂の緊急避難？」

「そうじゃ。人の魂とは死んでから幾ばくかの時間はその時空間に留まるんじゃよ。それを魔石に移して仮の体を与え保存する」

ドクターは喋りながら小屋の中に入ってきて、黒髪のお人形さんの傍へと歩み寄る。

黒髪のお人形さんはドクターに椅子代わりに樽を用意した。

ドクターはそこに腰をかけてさらに話を続ける。

「本来この手法は大掛かりな手術をする際に魂を傷つけないようにと考案された手法。だがこの娘についてはあまりに突発的な事態であつたため体を保護することも、完全な魂の情報を保存するにも失敗したんじゃよ」

「え？ ……あの……おっしゃっている意味がよく分からないんですが」

「アニス、もう気付いているんだろっ？ あの黒髪の人形が誰かに似ているってことを」

「あ……でも、そんな……まさか……レイ……チエル？」

恐る恐る声に出したその名前を聞いて、黒髪のお人形さんは悲しそうに微笑みながら頷く。

「お久しぶりね、アニス。相変わらずで安心したわ」

「レイ……チエル？」

「正しくはレイチエルだったもの、なんだけれども」

「レイチエルっ!!」

いろんな感情が私の中で一気に爆発した。

気が付いたら私は彼女に縋って大泣きをしていたけれど、レイチエルはそんな私の髪を優しく撫でてくれる。

「レイチエル！ レイチエル！ レイチエル！」

「本当に泣き虫さんなんだから……」

私が落ち着くまでの間、ドクターは何も喋らずにじっと待っていてくれた。

それに気が付いて私はバツの悪い思いをしながら姿勢を正す。

話はまだ終わっていないのだ。

「同じ手法で、ワシはもう一人の娘の魂を拾い上げることに成功した。今度も突発的な事態ではあったが準備をしていたお陰で何とか上手く処置が出来た」

「その結果が私というわけじゃ。あの城壁から落ちて溺れて助かるわけなどない」

「まあ、その通りではあった訳だが。魂を保存さえ出来れば、後は体を修復さえすれば元に戻せる……筈だったんじゃないの」

「そこでイレギュラーが起こったというわけですね？」

ミーシャちゃんの問いかけに苦々しく頷くドクターゲエロ。

緑の髪のお人形さん、えと本当のスワジク姫、は苦笑いをしながらその場で話に聞き入っている。

ああ、そう言えばあの腕の組み方とか重心の取り方とか姫様っぽい。

「そうじゃ。棧橋で引き上げられた姫様の遺体に救命処置をするセンドリック殿を横目に、ワシは姫様の魂をまず魔石に集めた。その次にその体を治療すべく近寄った所、あろう事か雑霊が姫様の体に入り込んでしまったのじゃ」

「雑霊……ですか。今の姫様は……」

「そう雑霊。本来であれば早々に弾き飛ばすべきものだったのじゃが……いかんせん魂と体の融合率が高すぎた。上に本来の持ち主は体に帰りがつておらぬしな」

「それっていわゆる憑かれたっていう状態ですよね？」

ニーナが分からない成りに話に加わってきた。
何やら凄く興味津々といった顔で。
ドクターは彼女の発言に静かに首肯して話を続ける。

「そうじゃ。だが本来雑霊とはその土地で死んだ位階の低い動物達の霊のことなんじゃ。だから理性的な受け答えや思考能力など持ち合わせてはおらぬ……答じゃった」

「だけど、当の姫様は異世界から来たと私にはおっしゃっております」

「その上魔法適正の無かった本来の姫様とは違い、なぜか魔法の力にまで目覚めてしまった」

眉をしかめながら腕組をするドクターグエロ。

そんなドクターの横でスワジク姫様が苦笑しながら呟いた。

「性格も私よりは優しいし、人への配慮も出来る。何より他人の庇護欲を引き出すあの娘なら私以上に良いスワジク姫を演じられるであろう。いや、本来はあのような姫を皆望んでいたのであるうな」

「私は昔のままの姫様のほうが好きですけども」

「……あまり面と向かって言うな。恥ずかしいではないか、レイチエル」

「フェイタール殿下もきつと私と同意見だと思っております……」

「それはもういい。私は死んでしまったのだよ、レイチエル。生きている人間の人生にこれ以上関わるつもりはない」

「まあ、本物のスワジク姫の発言はともかく、いま捕らわれている雑霊が入ったスワジク姫の本体なのじゃが……、お主たちが危険を犯してまで救いに行く必要があるのか？ あれは今説明した通りた

だの雑霊じゃ。本来ならそのまま天に召されておるべき哀れな魂。ならば無理をして助けに行く価値等ないのでは？」

氷のような表情でドクターグエロはその場に居合わせた私達を見回す。

いわゆるあの姫様はリビングデッド。

生きているけど死んでいる、あるいは生きてはいけない存在。

「今の姫様の魂の出自がどうであれ、私はあの姫様を助けに行きます。それが私とあの姫様との約束ですから」

「あの……私も一緒に行きたい……です。ポーマンが捕まっただまだし……それに私多分あのお姫様のこと、好きなんだと思います。だから……」

「アニス、あなたはどうするの？」

「レイチエル……」

「怖がりのあなただもの。ここでじっとしていても誰もあなたを責めたりしないわ」

「……うん、そうかもしれない。むしろ邪魔する分、ここで皆を待っていたほうがいいのかもしれない……」

私はレイチエルから身を離すとゆっくりと立ち上がる。

その場に居合わせる皆の視線が私に集まるのが分かった。

怖い。暴力が怖い。争いが怖い。

出来ることならここでじっとしていたい。

でも、それでは駄目なんだと思う。

「私、思っています。もし過去に戻れるなら、もっとちゃんと姫様と向き合って居ればよかったって。そうしたら、レイチエルや他の皆が笑っていられたのかもって……」

「気にすることなど無い。私も大人気なかったのだ。いろんな人を不幸にした。それは償って償いきれるものではない。だから私は死ぬべきなのだよ」

「だから私に殺されたと、あなたはそう言うの？ スワジク・ヴォルフ・ゴードイン？」

がたんという音を立てて戸が開け放たれたそこには、顔を真っ赤な血で染めた黒髪の少女が立っていた。

レイチエルの妹、ルナ・ホランが血まみれのレイピアを片手に啞っていたのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1323p/>

スワジク姫物語 善意の行方

2011年9月28日21時21分発行